一般国道210号線

浮羽バイパス関係
埋蔵文化財調査報告
第7集

福岡県浮羽郡浮羽町所在遺跡の調査

日永遺跡 II

1994

福岡県教育委員会

一般国道210号線

浮羽バイパス関係
埋蔵文化財調査報告
第7集

福岡県浮羽郡浮羽町所在遺跡の調査

日永遺跡 II

日永遺跡出土広形銅矛

日永遺跡出土広形銅戈

序

福岡県教育委員会は、建設省の委託を受けて、一般国道210号線浮羽バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和53年度以降実施してきました。そして、平成５年度までに全体の26.9％の工事が終了し、部分的な一般供用が行われています。今後、筑後川沿岸地域活性化にとりましても、さらに発掘調査、工事が進捗して早期全面開通が望まれるところであります。

本書は、昭和61年度に発掘調査を実施した浮羽町所在の日永遺跡の調査結果を、昨年度報告した遺構編に続き、遺物編として「浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第７集に取りまとめたものです。

発掘調査の報告として、満足いくものではありませんが、本書が開発に伴う埋蔵文化財への正しい認識と理解、文化財愛護思想の普及、さらには生涯学習時代を迎えての地域史研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々の御協力をいただいた建設省福岡国道工事事務所、福岡県甘木農林事務所、沖出地区土地改良区、浮羽町教育委員会をはじめ地元関係各位に対して、心から感謝申しあげます。

平成６年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　光安　常喜

例　言

1　福岡県教育委員会は、昭和53年度より現在に至るまで、建設省から委託を受けて、一般国道210号線浮羽バイパス建設で破壊される埋蔵文化財を発掘調査している。

2　本書は、昭和61年度に実施した福岡県浮羽郡浮羽町所在の日永（ＨＩＮＡＧＡ）遺跡の発掘調査報告書であり、「一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第７集目、「日永遺跡Ⅱ」にあたる。なお、本書においては、諸般の事情により遺物のみ取り上げ、遺構については、昨年度発刊した「日永遺跡Ⅰ」で紹介している。

3　遺物の実測図は、調査担当者の緒方泉の他、福島衣具子氏が、図面整理、作成には緒方の他、豊福弥生、原カヨ子、森山シズ子、岩熊真実の各氏が従事した。なお、土器番号は実測番号を示す。

4　遺構・遺物写真は緒方、岩熊が撮影したが、気球写真は稲富興産に委託した。

5　本書の執筆、編集は、緒方が担当した。

本　文　目　次

第１章　はじめに

第１節　調査経過と調査組織

１．昭和61年度の日永遺跡の調査経過と調査組織

２．平成５年度の報告書作成の経過と関係組織

第２節　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

２．周辺の遺跡

第２章　日永遺跡０区の調査

第１節　はじめに

第２節　各遺構出土遺物

１．竪穴住居出土土器

２．各遺構出土のその他の遺物

第３節　小結

第３章　日永遺跡２区の調査

第１節　はじめに

第２節　各遺構出土遺物

１．竪穴住居出土土器

２．各遺構出土のその他の遺物

第３節　小結

第４章　日永遺跡３区の調査

第１節　はじめに

第２節　各遺構出土遺物

１．竪穴住居出土土器

２．各遺構出土のその他の遺物

第３節　小結

第５章　日永遺跡４区の調査

第１節　はじめに

第２節　各遺構出土遺物

１．竪穴住居出土土器

２．各遺構出土のその他の遺物

第３節　小結

第６章　日永遺跡東部地区の調査

第１節　はじめに

第２節　各遺構出土遺物

１．竪穴住居出土土器

２．各遺構出土のその他の遺物

第３節　小結

第７章　おわりに

第１節　集落の変遷について

第２節　日永遺跡出土土器について

第３節　広形銅矛・広形銅戈について

挿　図　目　次

第１章　はじめに

第１図　国道210号線浮羽バイパス路線図（1／25,000）……3

第２章　０区の調査

第２図　１号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……13
第３図　３号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……14
第４図　２号、４号、８号、９号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……15
第５図　５号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……17
第６図　５号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……18
第７図　６号竪穴住居、２号土坑出土土器実測図（1／4）……20
第８図　各遺構出土石器実測図（1／2）……21
第９図　各遺構出土石器実測図（1／2）……23
第10図　各遺構出土鉄器実測図（1／2）……24

第３章　２区の調査

第11図　12号、14号、21号、22号、竪穴住居出土土器実測図（1／4）……26
第12図　16号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……28
第13図　24号、29号、33号、36号竪穴住居、４号～６号、８号土坑出土土器
実測図（1／4）……31
第14図　32号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……32
第15図　32号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……34
第16図　32号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……36
第17図　32号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……37
第18図　32号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……39
第19図　32号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……40
第20図　32号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……41
第21図　32号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……44
第22図　34号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……46
第23図　34号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……48

第24図　34号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……50
第25図　各遺構出土石器実測図（1／2）……54
第26図　各遺構出土石器実測図（1／2）……55
第27図　22号竪穴住居出土支脚実測図（1／2）……56
第28図　25号、36号竪穴住居出土紡錘車実測図（1／2）……57
第29図　22号竪穴住居出土鉄器実測図（1／2）……57

第４章　３区の調査

第30図　37号、38号竪穴住居、６号土坑出土土器実測図（1／4）……61
第31図　各遺構出土石器実測図（1／2）……62
第32図　広形銅矛実測図（1／5）……64
第33図　広形銅戈実測図（1／3）……65

第５章　４区の調査

第34図　40号、41号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……70
第35図　42号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……71
第36図　各遺構出土石器実測図（1／2）……72
第37図　42号竪穴住居出土鉄器実測図（1／2）……72

第６章　東部地区の調査

第38図　43号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……75
第39図　44号、49号、50号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……77
第40図　48号、54号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……79
第41図　52号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……80
第42図　52号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……81
第43図　53号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……83
第44図　58号、61号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……83
第45図　59号、60号、69号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……84
第46図　62号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……86
第47図　63号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……88
第48図　63号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……90
第49図　63号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……91
第50図　63号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……93

第51図　67号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……94
第52図　67号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……95
第53図　67号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……97
第54図　68号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……101
第55図　71号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……104
第56図　71号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……106
第57図　72号、73号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……108
第58図　74号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……109
第59図　74号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……111
第60図　74号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……113
第61図　74号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……115
第62図　75号竪穴住居出土土器実測図（1／4）……117
第63図　各遺構出土石器実測図（1／2）……119
第64図　各遺構出土石器実測図（1／2）……121
第65図　各遺構出土石器実測図（1／2）……122
第66図　各遺構出土石器実測図（1／2）……123
第67図　57号竪穴住居出土鉄器実測図（1／2）……123

第７章　おわりに

第68図　日永遺跡集落変遷図（1／600）……128
第69図　日永遺跡集落変遷図（1／600）……129
第70図　日永遺跡出土一括土器（1／8）……135
第71図　日永遺跡出土一括土器（1／8）……136
第72図　広形銅戈実測図（Ｓ＝1／4）……139
第73図　広形銅戈鋳型実測図（Ｓ＝1／4）……140
第74図　広形銅戈鋳型実測図（Ｓ＝1／4）……141

表　目　次

第１表　広形銅矛及び鋳型地名表 ……138
第２表　日永遺跡出土広形銅戈と鋳型の比較表 ……138

付　図　目　次

付図１　日永遺跡０区遺構配置図　（Ｓ＝1／200）
付図２　日永遺跡２区遺構配置図　（Ｓ＝1／200）
付図３　日永遺跡３区遺構配置図　（Ｓ＝1／200）
付図４　日永遺跡４区遺構配置図　（Ｓ＝1／200）
付図５　日永遺跡東部地区遺構配置図（Ｓ＝1／200）

図　版　目　次

巻頭図版１・２		日永遺跡出土広形銅矛、広形銅戈
図版１		２区から４区を見る
図版２		４区から東部を見る
図版３		０区全景（気球写真）
図版４	１）	２区北半部全景（気球写真）
	２）	２区南半部全景（気球写真）
図版５		３区全景（気球写真）
図版６		４区全景（気球写真）
図版７	１）	東部地区全景（気球写真）
	２）	東部地区全景（気球写真）
図版８	１）	５号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Ａタイプ）
	２）	６、７号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Ａタイプ）
図版９	１）	32号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Ａタイプ）
	２）	32号竪穴住居（土器、礫石除去後）
図版10	１）	34号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Ａタイプ）
	２）	34号竪穴住居（土器、礫石除去後）
図版11	１）	36号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Ａタイプ）
	２）	36号竪穴住居（土器、礫石除去後）
図版12	１）	40号竪穴住居（古墳時代初頭）
	２）	40号竪穴住居（土器、礫石除去後）
図版13	１）	51号竪穴住居（古墳時代初頭）
	２）	52号竪穴住居（古墳時代初頭、Ｃタイプ）
図版14	１）	53号竪穴住居（古墳時代後期、Ｅタイプ）
	２）	53号竪穴住居（カマド突出型タイプ）
図版15	１）	59号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Ａタイプ）
	２）	60号竪穴住居（古墳時代前期）
図版16	１）	73号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Ａタイプ）
	２）	74号竪穴住居（古墳時代初頭、Ａタイプ）
図版17	１）	75号竪穴住居（古墳時代前期、Ｅタイプ）
	２）	75号竪穴住居（カマド突出型タイプ）

図版18　広形銅矛細部撮影
図版19　広形銅矛細部撮影
図版20　広形銅戈細部撮影
図版21　0区出土石器①
図版22　0区出土石器②
図版23　0区出土石器③
図版24　2区出土石器①
図版25　2区出土石器②
図版26　2区出土石器③・3区出土石器①
図版27　3区出土石器②・4区出土石器①
図版28　東部出土石器①
図版29　東部出土石器②
図版30　東部出土石器③・各地区出土鉄器

第１章

はじめに

第１節　調査経過と調査組織

１　昭和61年度の日永遺跡の調査経過と調査組織

２　平成5年度の報告書作成の経過と関係組織

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置

２　周辺の遺跡

第１章　　はじめに

第１節　調査の経過と調査組織

１　昭和61年度の日永遺跡の調査経過と調査組織

一般国道210号線は、福岡県久留米市を起点とし大分県日田市を経由し大分市に至る道路で、産業、経済、観光道路として東・西九州を結ぶ重要な幹線道路である。しかし、現在国道は道路幅員が狭隘のうえ市街地には家屋が沿道に連続し、交通量の増加と共に、交通事故が多発して道路環境の悪化を招いている。また、幹線道路としての機能低下は地域間の交通を阻害し、ひいては地域産業経済の発展の障害になるという見地から、建設省がそうした現状を打開するために「浮羽バイパス」建設を計画したのである。

浮羽バイパスは浮羽郡田主丸町上町を起点にして、筑後川左岸に広がる平野部の田園地帯を地域内の生活道路と平面交差しながら東へ伸び、浮羽郡浮羽町山北で現国道に取り付く延長14km程のバイパスである。

福岡県教育委員会（以下　県教委とする）はこの浮羽バイパス建設に関係する埋蔵文化財調査を建設省から委託された。その調査は、昭和55年度より開始した浮羽町吉井町所在の塚堂遺跡に始まり、現在も継続中で、その発掘調査は17箇所にも及び、調査予定面積は200,000㎡を上回る推測される。

さて、昭和61年度、県教委は建設省福岡国道工事事務所（以下　福国とする）から「埋蔵文化財の分布調査について（依頼）（４月２日付　建九福調第40号）」の文書を受け、早速浮羽バイパス全線（昭和55年度から昭和62年度まで発掘調査した塚堂遺跡を除く）の分布調査を実施し、16地点の調査必要箇所を回答した。

その後、４月24日に県教委、福国との間で「昭和61年度埋蔵文化財発掘調査打合せ会議」が開催され、その中で、福国側は、昭和61年度調査箇所について、バイパス周辺地域の県営ほ場整備と連動して浮羽バイパス建設が進められる浮羽町沖出地区（第９工区１地点）を挙げた。そこで、県教委は、この地点について、６月初旬の試掘調査、稲刈り後の11月から発掘調査という見解を示した。

こうした会議を受けて、県教委は、麦作つけ時（この地域は当時二期作を実施していた）の６月２日から３日にかけて沖出地区の文化財の有無と範囲確認の調査を実施した。このため、最小限度の試掘調査となり、バイパス路線外の分布調査、地元民からの聞き取り調査を加えることで、「一般国道210号線浮羽バイパス関係沖出地区埋蔵文化財試掘調査概要」をまとめた。

その報告では、沖出地区は大きく微高地状を呈する西部、東部の２カ所に区分し、さらに試掘調査が実施できた沖出西部は、道路及び水路その間にはいることから、０区から４区の５調査区に分けた、試掘調査の結果、各区から遺構、遺物包含層が検出されたため、その調査予定面積を13500㎡としている。また、試掘調査ができなかった沖出東部もその地形から判断して調査予定面積を5500ｍと推定した。その結果、沖出地区の調査予定面積は19000㎡（４月の分布調査では調査予定面積を7000㎡としている）と福国に回答した。

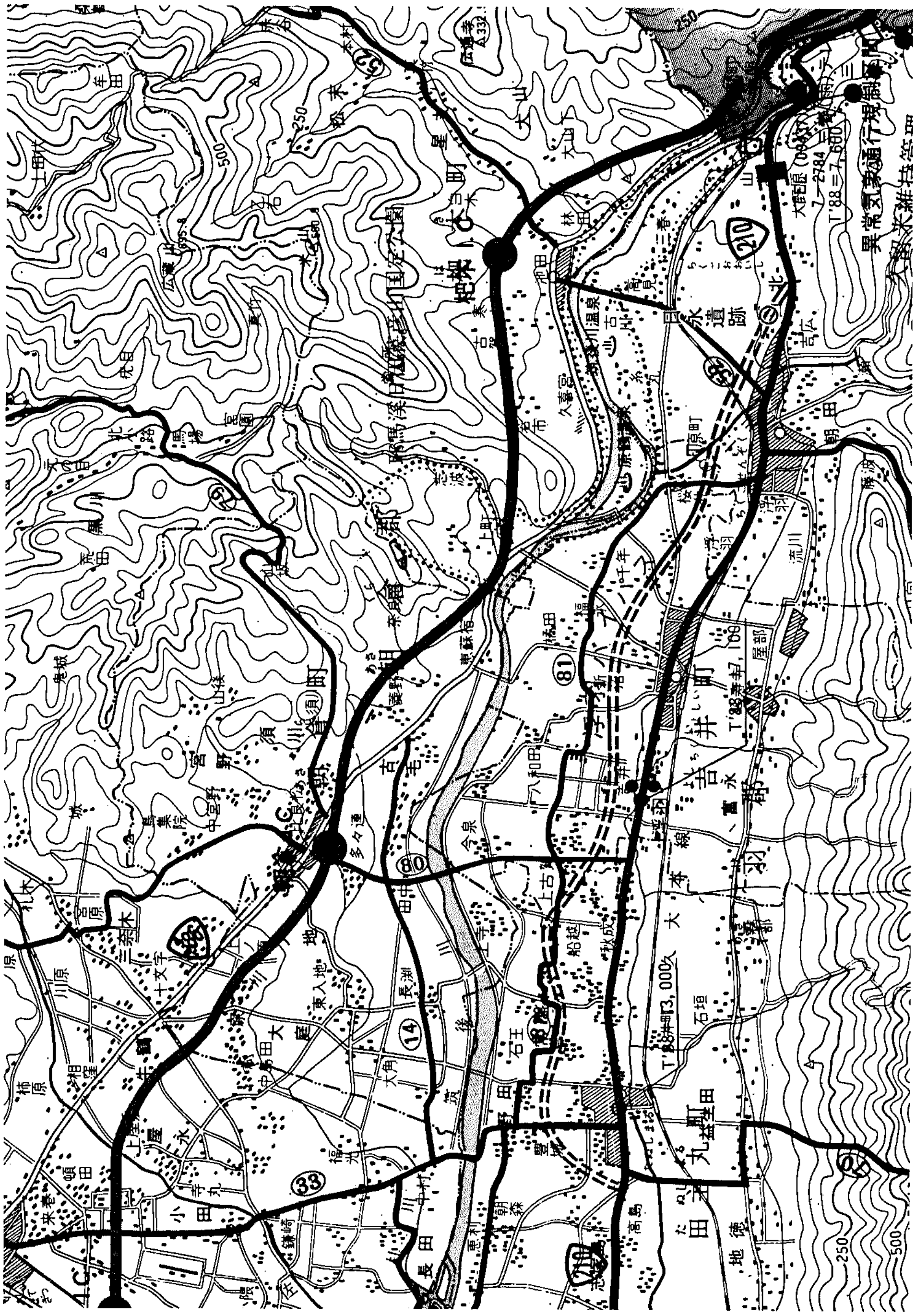
８月に入り、福国から「浮羽バイパス沖出地区埋蔵文化財発掘調査について（依頼）（建九福第75号　８月８日付）」で調査所要経費、工程表の提出が求められた。さらに福国側は、県営ほ場整備事業との関連から、工事着工を11月末にしたい旨の要望を県教委に打診した。

県教委は、８月21日開催された福国、福岡県甘木農林事務所、浮羽町教育委員会、浮羽町役場産業課農地計画係沖出土地改良区との会合で、県教委に係る大規模調査が九州横断自動車道及び一般国道10号線椎田バイパスで進行していて、文化財専門職員がほとんど投入されている現状から、１名しか浮羽バイパスの発掘調査に割けないことを説明した。また、11月中に工事に入るには、９月当初から発掘調査に入らなければならないが、それによる青田刈りが可能なのか見解を求めた。福国側は一日も早い発掘調査の開始を希望し、地権者に対する青田刈りの承認を取り付けることを約束し、県教委も調査体制を整えて、９月中旬以降に調査を開始する方向で検討すると答えた。

そして、県教委は「一般国道210号線浮羽バイパス建設に係る埋蔵文化財発掘計画書の提出について「８月25日付　教文庶第103号）」で回答し、これを受けて、福国は正式に「一般国道210号線浮羽バイパス沖出地区埋蔵文化財発掘調査の実施について（依頼）（９月19日付　建九福調第93号）」を出し、９月20日より県教委は本調査を開始することになった。

発掘調査は、工事着工をにらみながら９月20日から開始し、12月13日までの約３カ月に及んだ。その結果、竪穴住居跡75軒、掘立柱建物22棟、土坑10基、溝７条、ピット多数を検出した。

当初分布調査では、さほど密度の高い遺構分布は予想されていなかったが、表土を剝いでいくうちに、切り合いの著しい遺構が上記のように多数検出されたため、急遽調査体制の強化がなされ、九州横断自動車道関係の発掘調査メンバーが投入され、また調査作業員も50人を数え、短期間の調査を完遂することとなった。したがってかなり手荒い調査になってしまったことは否めない事実である。



第 1 図　国道210号線浮羽バイパス路線図（1/25,000）
（○印が日永遺跡）

以下、その調査結果を各区ごとにまとめると、

1）0区の調査

0区の調査面積は、約4000㎡で、竪穴住居跡10軒、土坑3基、ピット等を検出した。竪穴住居跡は弥生時代後期を中心としたもので、長方形プランを呈し、ベット状遺構を備えている。

出土遺物には、弥生土器、石包丁等がある。

2）1区の調査

1区の調査面積は、約2000㎡であったが、戦後の土地改良により、削平が著しく遺構の検出はなかった。

3）2区の調査

2区の調査面積は、約2400㎡で、竪穴住居跡25軒、掘立柱建物10棟、土坑5基、溝1条、馬蹄形周溝1基、土墓2基、落とし穴状遺構1基、ピット等を検出した。

竪穴住居跡は、弥生時代後期と古墳時代後期を中心とするもので、古墳時代のものは、カマドを有するものがある。

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、滑石製紡錘車、石包丁、石斧、叩き石、磨皿等がある。

4）3区の調査

3区の調査面積は、約1200ｍで、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物10棟、土坑1基、溝5条、銅矛・銅戈埋納遺構1基、ピット等を検出した。

竪穴住居跡は弥生時代後期を中心としたもので、ベットを有した10×7ｍの大型長方形プランのものもある。

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器等があった。

また、銅矛・銅戈埋納遺構は、110×25cmの長楕円形土坑で、2本は共に鋒先を北東に向け、刃部を立てており、土層観察から長90×幅10×深さ15cm以上の木箱に入れられていたと思われる。

銅矛・銅戈は共に広形の武器形青銅器で、2本セットで、出土状況が明確な遺構から検出できたのは全国初めてであった。こうしたことから、県教委は、10月12日に報道各機関への記者発表を実施した。

5）4区の調査

4区の調査面積は、約1700ｍで、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物2棟、土坑1基、溝1条、ピット等を検出した。

竪穴住居跡は、弥生時代後期と古墳時代初期を中心としたものである。

出土遺物には、弥生土器、土師器等があった。

6）東部地区の調査

東部地区の調査面積は、約5500㎡で、竪穴住居跡32軒、ピット等を検出した。

竪穴住居跡は、弥生時代後期、古墳時代初期、奈良時代を中心としたものであった。

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、石包丁等があった。

という状況になる。

当該年度の整理・報告書作成作業は、調査担当者がその後すぐに、日本道路公団から委託を受けて実施していた「一般国道10号線椎田バイパス」建設にともなう発掘調査に配置され、年度末までその調査が継続されたため、次年度以降へ見送りとなった。

なお、発掘調査に当たっては、建設省、福岡県甘木農林事務所、浮羽町沖出土地改良区、浮羽町教育委員会から多大な協力を得た。さらに調査作業員として参加頂いた地元関係者各位の御協力により、発掘調査面積19000㎡を、9月から3カ月という短期間の中で実施し、事故もなく無事に終了することができた。ここに記して感謝の意を表します。

昭和61年度の調査関係者は下記の通りである。

建設省九州建設局福岡国道工事事務所

	所　　長	朝倉　肇
	副 所 長	森　　久
	建設監督官	尾中　正臣
	建設監督官	中馬　正昭
	建設監督官	下川　　勲
	建設監督官	西原　広寿
	建設監督官	井上　　喬
	工務課長	谷本　誠一
	第1係長	河野　良行
	第2係長	石橋　彦実
	第3係長	緒方　郁夫
	調査課長	岩屋　信一郎

福岡県教育委員会

総　括	教育長	竹井　　宏
	教育次長	大鶴　英雄
	指導第二部長	大平　岩男
	文化課長	窪田　康徳

	課長補佐	平　聖峰
	課長技術補佐	宮小路賀宏
	参事補佐	栗原　和彦
	参事補佐	柳田　康雄
	参事補佐	加藤　俊一
庶　務	文化課庶務係長（兼）	加藤　俊一
調　査	文化課調査班総括（兼）	柳田　康雄
	主任技師	馬田　弘稔
	主任技師	佐々木隆彦
	技　師	緒方　泉
	技　師	小田　和利
調査補助		佐土原逸男、向田雅彦、吉武憲章。

発掘調査に当たっては、以下の方々の協力を得た。記して感謝の意を表します。

矢富ヤチ子、高山勢津子、佐藤フクミ、櫛川スミ子、佐藤勝子、小ケ内小夜子、手島雅子、小林英子、桂木千恵子、秦知子、山崎くにえ、堤チヨ子、泉操子、堤カツ子、樋口リツ子、善キユエ、江藤ヒトエ、舎川照子、諫山美智子、佐藤スエカ、堤富子、矢富よし子、白石フミ枝、橋本フクミ、星野たかえ、河内チヅ子、河内伸子、小河美津子、河内ゆきえ、野上知子、熊懐玉枝、樋口ヒサカ、善アサエ、野上ミチ子、坂本照子、出利葉シゲ子、小林アイ子、佐藤艶子、佐藤トミ子、佐藤悦子、佐々木チエ子、佐藤ツヤ子、高木チエ、岩橋カナエ、白石美佐子、佐々木綾子、矢野朝子、堤忠男、堤利夫、善隆義、井上隆昇、櫛川栄治、橋本勝利、佐藤信介、野鶴修、山本幸一。

発掘調査期間中、小田富士雄（福岡大学）、下条信行（愛媛大学）、佐藤力（福岡県文化財保護指導委員）の諸先生より有益な御指導、御助言を頂いた。

また、3カ月という短期間の調査のため、図面作成等で、文化課から井上裕弘技術主査、木下修技術主査、中間研志主任技師、伊崎俊秋主任技師、木村幾多郎文化財専門員、日高正幸文化財専門員の来援を頂いた。

さらに、銅矛・銅戈取り上げ、写真撮影にあっては、九州歴史資料館横田義章技術主査、石丸洋技術主査にお願いした。

ここに記して、皆様に感謝の意を表します。ありがとうございました。

2　平成５年度の報告書の作成の経過と関係組織

一般国道浮羽バイパス関係の報告書作成作業は、発掘調査最優先のため、先送りになっていたが、平成4年度には、第6集「日永遺跡Ⅰ」が刊行された。

そして、平成４年度は諸般の事情から遺構のみの報告としていたため。遺物について、平成５年度に、「日永遺跡２」として報告、刊行した。

平成５年度の報告書作成にあたっての関係者は、下記の通りである。

建設省九州建設局福岡国道工事事務所

	所　　長	清水　英治
	副　所　長（事務）	中富　　清
	副　所　長（技術）	宮崎　鴨隆
	副　所　長（技術）	高場　正富
	建設監督官（工務課）	池田　勝美
	建設監督官（調査課）	岡山　一側
	工務課長	久原　義宣
	調査課長	尾林　一字

福岡県教育委員会

総　括	教　育　長	光安　常喜
	教育次長	月森精三郎
	指導第二部長	松枝　　功
	文化課長	森山　良一
	文化課参事	松尾　正俊（兼九州国立博物館誘致促進対策室長）
	参　　事	柳田　康雄（兼文化財保護室長）
	課長補佐	清水　圭輔
	参事補佐	井上　裕弘
	参事補佐	石山　　勲
	参事補佐	橋口　達也
	参事補佐	木下　　修
	参事補佐	川述　昭人
	参事補佐	高橋　　章
	参事補佐	磯村　幸男
	参事補佐	毛屋　　信
	参事補佐	児玉　真一
庶　務	文化課庶務係長	毛屋　　信
	主任主事	安丸　重喜

整　　理　筑豊教育事務所主任技師　緒方　泉
整理補助　岩瀬正信、岩熊真実、豊福弥生、原カヨ子、森山シズ子、福島衣具子、関和江。

最後に、報告書作成について、筑豊教育事務所の近藤義隆所長、黒見義正副所長、因憲三総務課長、また、所属課である正平辰男社会教育課長をはじめ課員の方々には格別のご配慮を頂いた。

また、資料整理・報告書作成に当たっては、その担当である文化課の水ノ江和同主任技師、秦憲二技師には、多大な迷惑をかけた。

ここに記して皆様に感謝の意を表します。ありがとうございました。

第２節　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置

日永遺跡は、福岡県浮羽郡浮羽町大字山北字日永にある。

浮羽町は、福岡県東南部、九州を代表する筑後川が貫流する筑後平野の東端に位置する。この平野は、北東を三郡山地、南を耳納山地、西を背振山地に画されており、当町は、現行政区の久留米市、筑紫野市を結んだ三角形状の東の頂点部、また筑後川が、当町で東の山地部から西の平野部へと地形、景観を一変させることもあり、まさに扇の要に陣取るところなのである。

こうして、当町からは西に向かってほぼ45度の視角で、筑後平野の全景が一望できるという、地理的特色を有している。

近世、筑後、豊後日田とを結ぶ重要な豊後街道や筑後川を利用した水運の要衝の地として栄えた当町は、古代においても国指定遺跡の装飾古墳「重定古墳」、「塚花塚古墳」などの遺跡が多数みられ、遺跡の宝庫として知られているところである。

浮羽町は、農林業を主な産業として発展してきた。現在の人口が19000人、総面積90.08㎢の62％を山林が占めるが、ほとんどが人口林で、杉、ヒノキの良質材を産出する林業地帯である。また、山腹から山麓にかけて、柿、ナシ、ブドウ、桃、リンゴ、キウイ、イチゴなどの果樹地帯が広がり、一年中フルーツのメッカとして、町には甘い香りがあふれている。

さて、日永遺跡は、ＪＲ九州九大本線筑後大石駅から南西1.5km、一般国道210号線山北信号から北東へ300ｍのところに位置し、耳納山麓に広がる沖積扇状地上の田園地帯の一角にある。

２　周辺の遺跡

日永遺跡周辺の遺跡には、装飾古墳の「重定古墳」、「塚花塚古墳」をはじめとして古墳時代の古墳が多数知られているが、それに伴う生活遺構の実態は未解明であった。しかし、昭和57年度からの「国営耳納山麓農業水利事業」、昭和58年度からの「沖出地区県営ほ場整備事業」に端を発する耳納山麓の扇状地の発掘調査が進み、当時の集落の様態が少しずつ知られるようになった。

当遺跡から東北へ500ｍほどの「沖出遺跡Ｉ」は昭和61年８月から国営耳納山麓農業水利事業に伴い発掘調査され、弥生時代後期後半、５世紀中葉前後の住居跡等を検出している。特に、古墳時代の住居跡から初期須恵器と共に滑石製臼玉が多数出土している。

また当遺跡から北へ300ｍほどの「沖出遺跡II」は、同年11月から沖出地区県営ほ場整備事業に伴い発掘調査され、弥生時代後期後半、古墳時代初期、５世紀前半～６世紀初の住居跡等を

検出している。

こうして、当遺跡をはじめとした扇状地上の集落は、弥生時代後期以降、一気に面的な広がりを持ちながら展開していくようである。

（参考文献）

浮羽町文化財調査報告

第１集　児玉真一編「西隈上古墳・楠名古墳」　1985年

第２集　児玉真一編「楠名古墳」　1987年

第３集　児玉真一編「沖出遺跡Ｉ」　1987年

第４集　寺嶋克史編「大口遺跡」　1989年

第５集　寺嶋克史編「岩野遺跡」

第６集　佐土原逸男編「田島北遺跡」概報　1991年

第７集　寺嶋克史編「北淀遺跡」　1992年

第８集　佐土原逸男編「柳瀬遺跡」概報　1992年

第９集　佐土原逸男編「田島北遺跡」　1993年

浮羽町史　上巻・下巻　1988年

第２章

日永遺跡０区の調査

第１節　はじめに
第２節　各遺構出土遺物
　１　竪穴住居出土土器
　２　各遺構出土のその他の遺物
第３節　小結

第２章　　日永遺跡０区の調査

第１節　はじめに

０区は、今回調査した「日永遺跡」の発掘調査区のほぼ中央部分にあたり、耳納連山から筑後川に向かう標高51ｍ前後の扇状地上に位置する。０区から東側は礫石が混じる土石層になり、やや低くなりながら、再び大野原大地下の東部地区へ至り微高地を形成する。また、西側は礫石が混じる土石層を挟んで１区と対する。調査面積は4000㎡である。

調査の結果、検出した遺構には、竪穴住居10軒、土坑３基、ピット等があった。

第２節　各遺構出土遺物

調査区内からは、ほぼ中央部に集中するように計10軒の竪穴住居を検出した。10軒のうち、１、２、５、８号竪穴住居は単独で集中し、他の６軒は２軒ずつ重複している。その先後関係は、（古）３号住居＞４号住居（新）、（古）７号住居＞６号住居（新）、（古）９号住居＞10号住居（新）となる。なお、３号住居においては１号土坑も重複している（図版３）。

中でも、７軒はそのプランが確認できる。それらは、長方形プランを有し、ベットを備えるものである。その時期は、出土した土器から弥生時代後期中葉に位置づけられる。

１　竪穴住居出土土器

１号竪穴住居（第２図）

126　鉢である。底部は欠失している。底部からゆるやかに内弯し、「く」の字状に屈曲して口縁部に達する。二次火熱による黒斑が見られる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在して、金雲母、マンガンが散見される。色調は茶褐色から赤褐色を呈する。復元口径は15cmを測る。

127　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。調整は内外面ともナデ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径9.5～10.5cm、器高5.6cmを測る。

128　「く」字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べやや大きい。底部は欠失している。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部外面には二次火熱により黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガン、金雲母が散見される。色調は暗灰褐色から茶褐色を呈する。復元口径15.9cm、胴最大径16.6cmを測る。

129　不整形な鉢である。底部は若干丸底になる。口縁部に二次火熱による黒斑が見られる。調整は口縁部がヨコなで、体部内外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を含み、金雲母、マンガンが散見される。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。復元口径20cm、底径7.9cm、器高11.5cmを測る。

130　甕底部片である。底部は若干丸みを帯びる。調整は胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径は8.1cmを測る。

131　丸底の底部片である。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径6.2cmを測る

132　脚台付きの鉢である。鉢部は底部から直線的に外反して口縁部に達する。脚部は「ハ」の字状に広がる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径10.6cm、底径5.4cm、器高6.3cmを測る。

133　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。調整は内外面とも指頭圧痕が残る。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径4.5cm、器高3.1cmを測る。

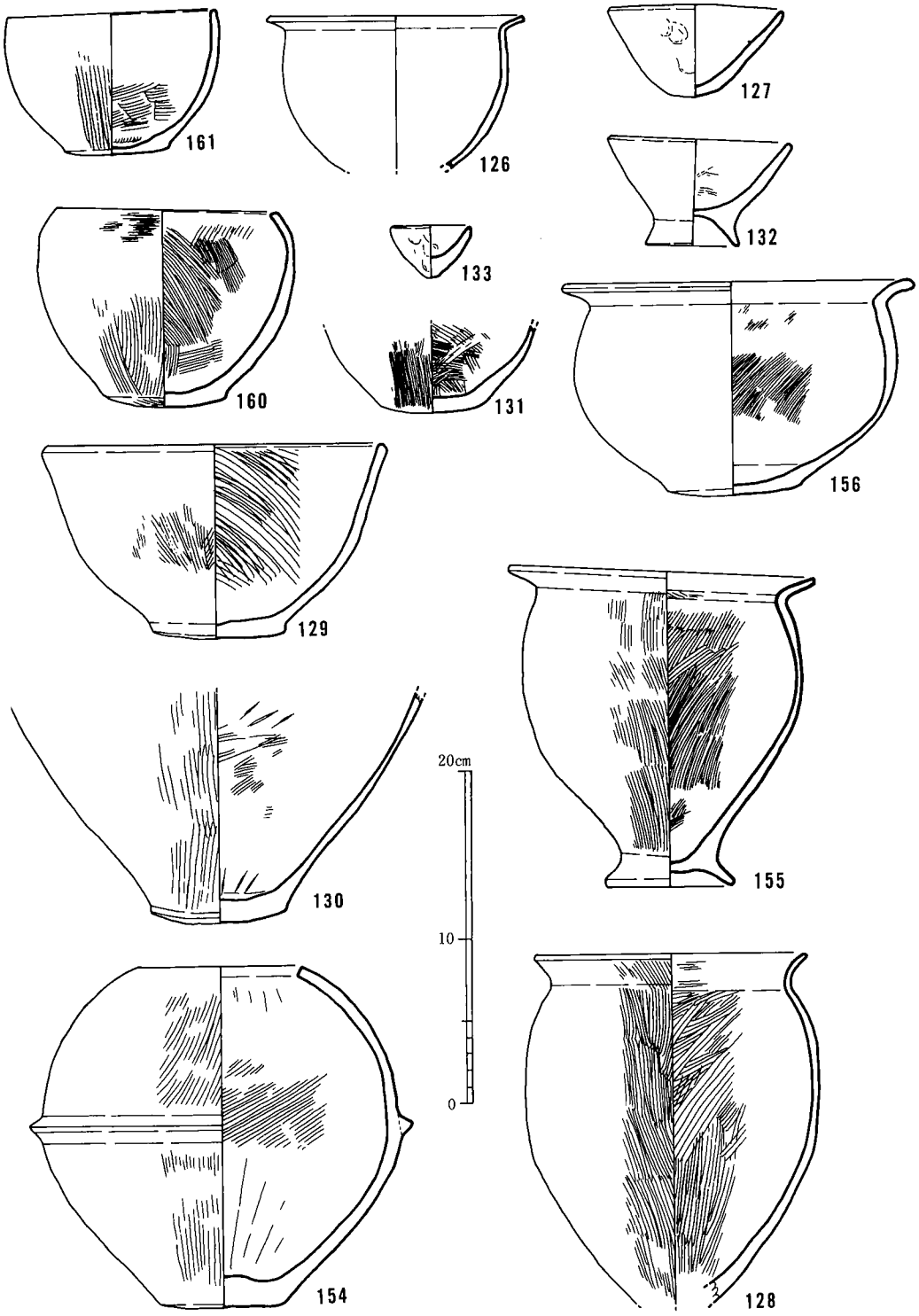
154　無頸壺である。球状に張り出す胴部中央には断面三角凸帯が貼付される。調整は内外面ともにハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径9.8cm、底径7.7cm、器高20.5cmを測る。

155　「く」の字状口縁を持つ脚台付き甕である。胴部最大径は口径に比べやや小さい。脚台は「ハ」の字に広がる。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部外面には二次火熱により黒変している。胎土は細砂粒を含み、マンガンが散見される。色調は外面が灰黄褐色から茶褐色、内面が黄褐色を呈する。口径18cm、胴最大径16.8cm、脚台底径7.6cm、器高19cmを測る。

156　不整形な鉢である。底部は若干丸底になる。底部から緩やかに内弯し、「く」の字状口縁部に達する。二次火熱による黒斑が見られる。調整は体部内面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在して、金雲母、マンガンが散見される。色調は黄茶褐色を呈する。口径20.5cm、底径８cm、器高12.7cmを測る。

160　鉢である。底部は若干丸底になる。底部から緩やかに内弯し、そのまま口縁部に達する。調整は口縁部ヨコナデ、体部内面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在して、マンガンが散見される。色調は黄褐色から淡赤褐色を呈する。口径13.2cm、底径7.2cm、器高11.7cmを測る。

161　鉢である。底部は若干丸底になる。底部から緩やかに内弯し、そのまま口縁部に達する。調整は体部内外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在して、



第 2 図　1号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

マンガンが散見される。色調は黄褐色から淡赤褐色を呈する。復元口径12.4cm底径6.3cm、器高8.5cmを測る。

２号竪穴住居（第４図）

146　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部中央から底部にかけて欠失している。胴部最大径は口径に比べ若干大きいようである。調整は内面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は外面灰紫色、内面黄褐色を呈する。胴最大径20.4cmを測る。

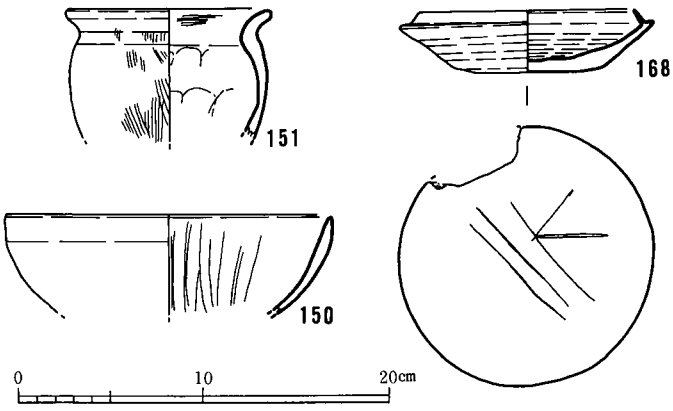
147　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部中央から底部にかけて欠失している。胴部最大径は口径に比べ若干大きいようである。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を含み、金雲母が散見される。色調は外面暗黄褐色、内面黄褐色を呈する。復元口径27.4cm、胴最大径30cmを測る。

３号竪穴住居（第３図）

150　底部を欠失する土師質の椀である。調整は内外面ともナデ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を含む。色調は外面が赤褐色、内面が茶色を呈する。復元口径17.2cmを測る。

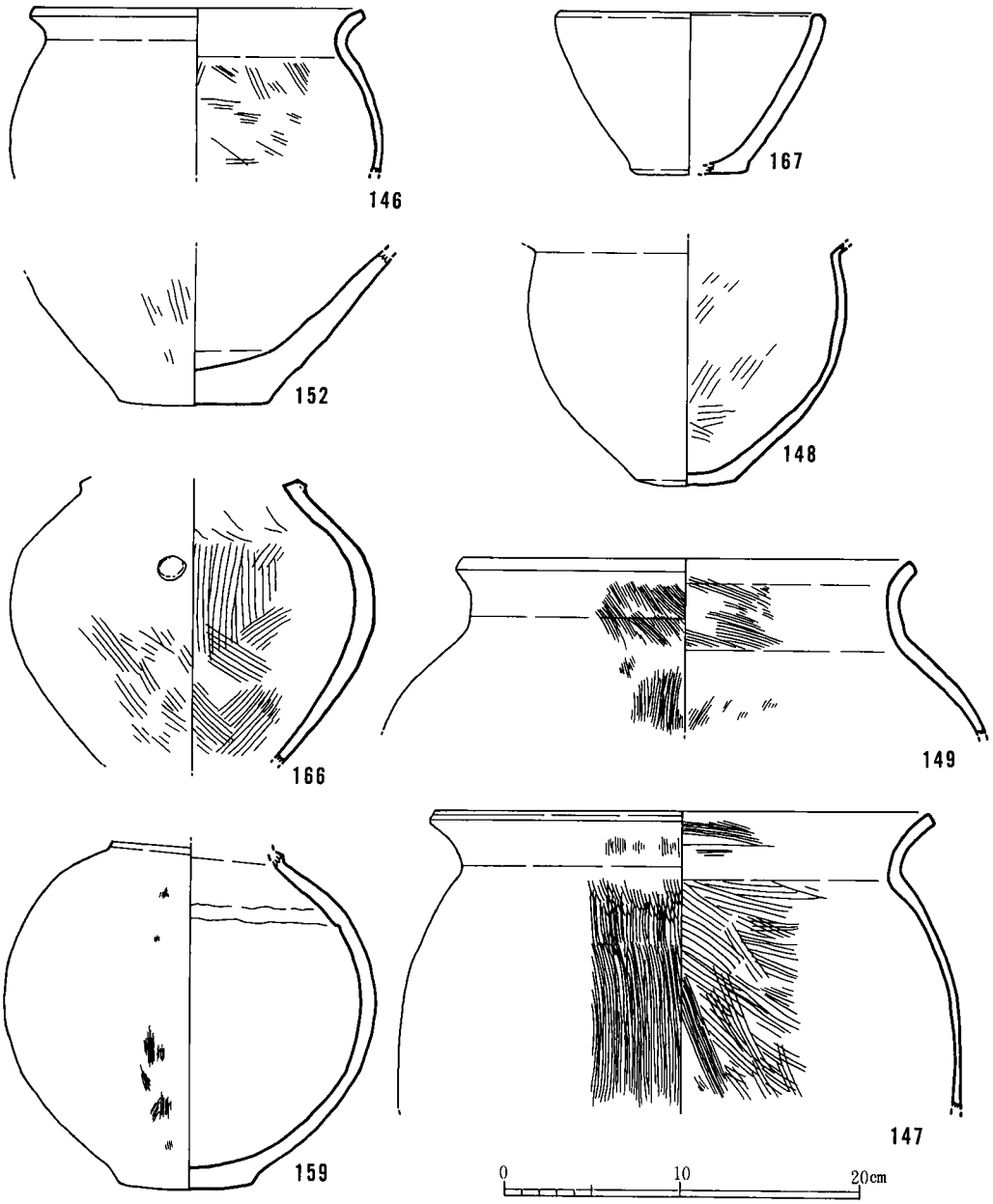
151　底部を欠失する土師質の小型甕である。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がハケ、内面がヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径10.6cmを測る。

168　須恵質の杯身である。立ち上がりは短く、やや内傾し、身受けは短くやや上方にのびる。底部は平底である。底面にはヘラ記号がある。調整は底部が回転ヘラ削り、内外面は回転ヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は灰色である。復元口径11.3cm、器高3.4cmを測る。



第 3 図　3号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

４号竪穴住居（第４図）



第 4 図　2号、4号、8号、9号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

149　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部上方から底部にかけて欠失している。胴部最大径は口径に比べ若干大きいようである。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。復元口径24.5cmを測る。

166　球状に張り出す壺である。頸部から口縁部にかけて、および底部を欠失している。頸部下端には断面三角凸帯を巡らす。胴部最大径よりやや上に円形浮文が貼付される。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在して、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。胴最大径は40cmを測る。

167　鉢である。底部は平坦である。底部から直線的に広がり、口縁部で若干立ち上がる。に達する。調整は体部内外面がナデ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は暗灰褐色を呈する。復元口径14cm、底径６cm、器高8cmを測る。

５号竪穴住居（図版８、第５、６図）

134　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。鉢状をなす。調整は内外面ともナデである。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径７cm、器高4.5cmを測る。

135　平底の底部片である。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径9.2cmを測る。

136　平底の底部片である。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、金雲母が散見される。色調は燈褐色を呈する。底径6.4cmを測る。

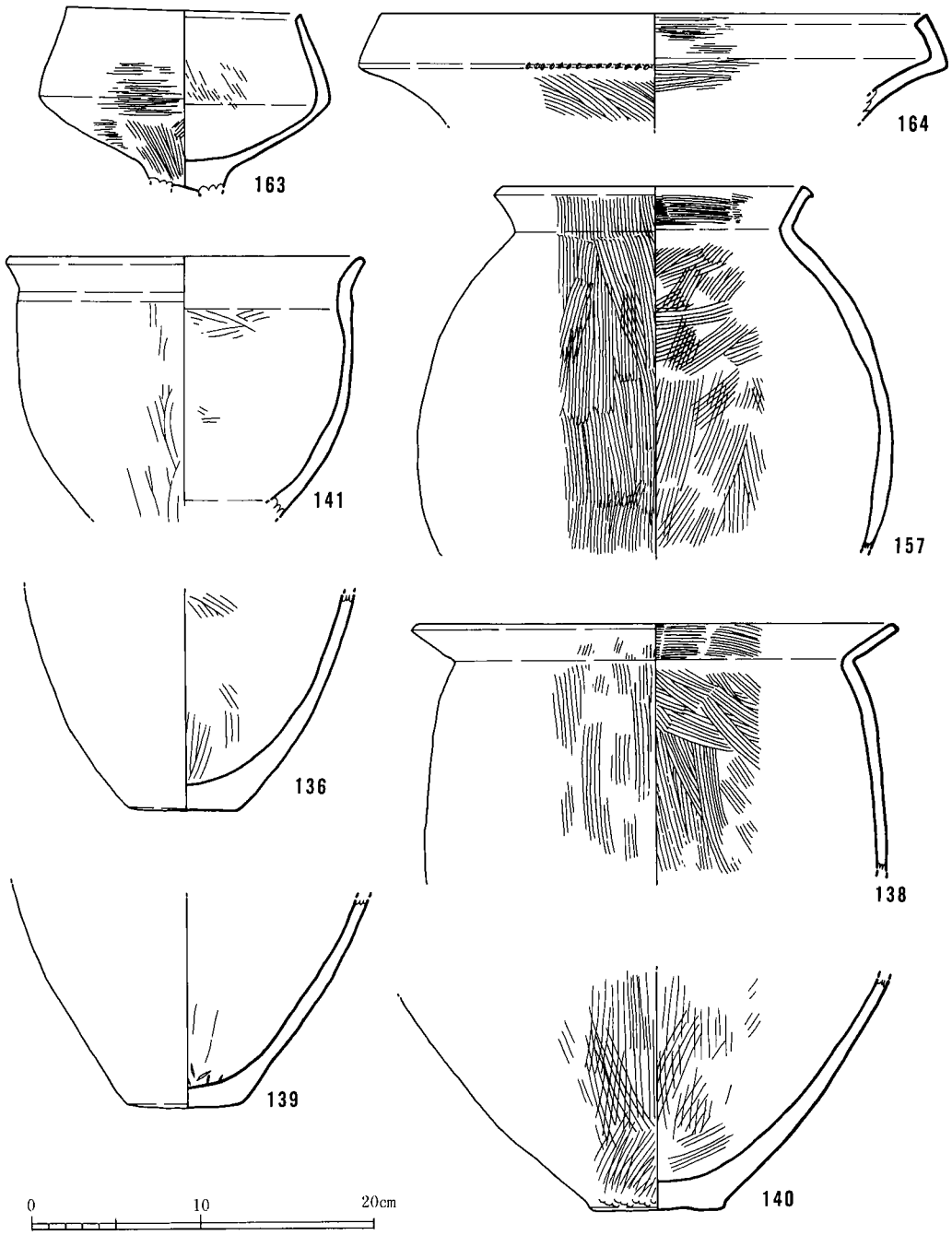
137　小型壺である。やや丸みを帯びる底部から胴部中央へ内弯気味に立ち上がり、胴部状上半では直線的に内傾し、その後緩やかに長く「く」の字状に外反して口縁部に達する。調整は口縁部内外面ともナデ、胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガン、金雲母が散見される。色調は黄褐色から灰褐色である。口径９cm、器高12.6cmである。

138　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ若干小さい。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部外面がヨコなで、口縁部内面・胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径27.4cm、胴最大径26.6cmを測る。

139　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガン、金雲母が散見される。色調は赤黄褐色を呈する。底径6.2cmを測る。

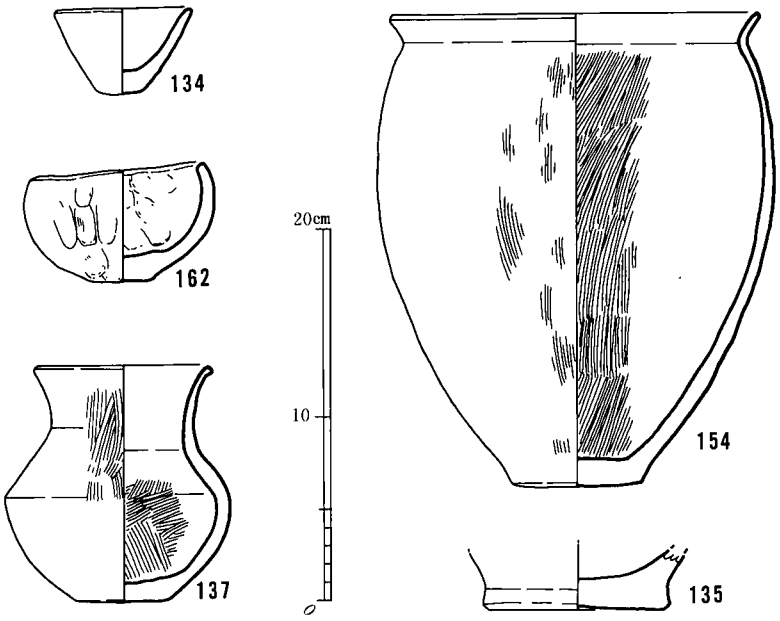
140　底部片である。底部は平坦である。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガン、金雲母が散見される。色調は燈～黄褐色を呈する。底径7.2cmを測る。

141　小型甕である。底部を欠失している。底部片から斜め上方に外反し、その後やや内弯気味になって、口縁部が緩やかに外反する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好であ



第 5 図　5号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

る。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は外面黄褐色、内面灰褐色を呈する。復元口径20.2cmを測る。



第 6 図　5号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

157　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部外面には二次火熱のため黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガン、金雲母が散見される。色調は内面黄褐色、外面黄褐色から燈褐色を呈する。復元口径17.3cm、胴最大径27.4cmを測る。

162　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。椀状をなす。調整は内外面とも指頭圧痕が残る。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は白黄褐色から燈褐色を呈する。口径8.5～9cm、器高6cmを測る。

163　グラス状の杯部を持つ高杯である。調整は内外面ともにハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガン、金雲母が散見される。色調は黄褐色から燈褐色を呈する。復元口径13.4cmを測る。

164　口縁部のみを残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもつ。稜線部には刻み目が巡る。調整は剝落が著しく不明であるが口縁部ナデ、外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガン、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。復元口径31.4cmを測る。

6号竪穴住居（図版8、第7図）

165　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ小さい。

胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。体部外面には二次火熱のため黒変が見られる。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は淡黄褐色を呈する。口径21.1cmを測る。

142　器台状のものである。脚端部は内側に折れ曲げる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。底径6cmを測る。

143　丸底の鉢である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。口径9.7cm、器高6.2cmを測る。

144　丸底の鉢である。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。口径13.6cm、器高10cmを測る。

145　脚台付きの鉢である。胴部から上方は欠失している。脚部は「ハ」の字状に広がる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径6.2cmを図る。

158　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。口縁部を欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明であるが、外面にハケ調整の痕跡が残る。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径5.2cmを測る。

８号竪穴住居（第４図）

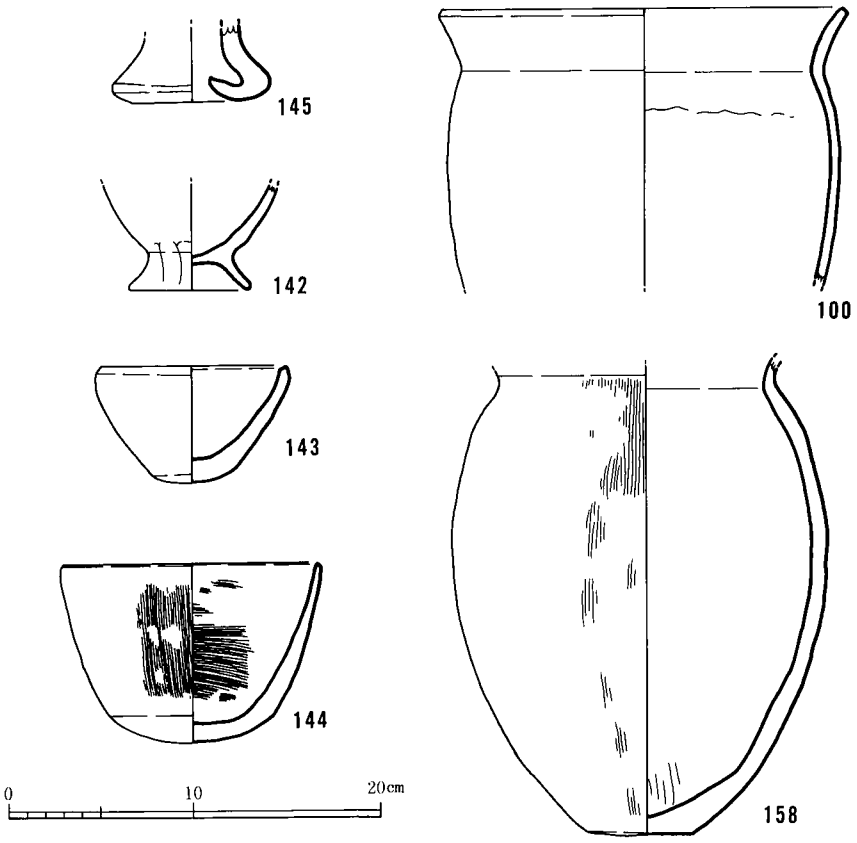
152　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。底部から胴部にかけて直線的に外反する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は外面が燈褐色、内面が黄褐色を呈する。復元底径16.4cmを測る。

９号竪穴住居（第４図）

159　球状に張り出す壺である。頸部から口縁部にかけて欠失している。底部はやや丸みを帯びる。頸部下端には断面三角凸帯を巡らす。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在して、マンガン、金雲母が散見される。色調は外面が黄灰褐色、内面が黄褐色から燈褐色を呈する。底径14.6cmを測る。

土坑２（第７図）

「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに長く屈折している。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は



第 7 図　6号 竪穴住居、2号土坑出土土器実測図（S＝1／4）

良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。口径20.1cmを測る。

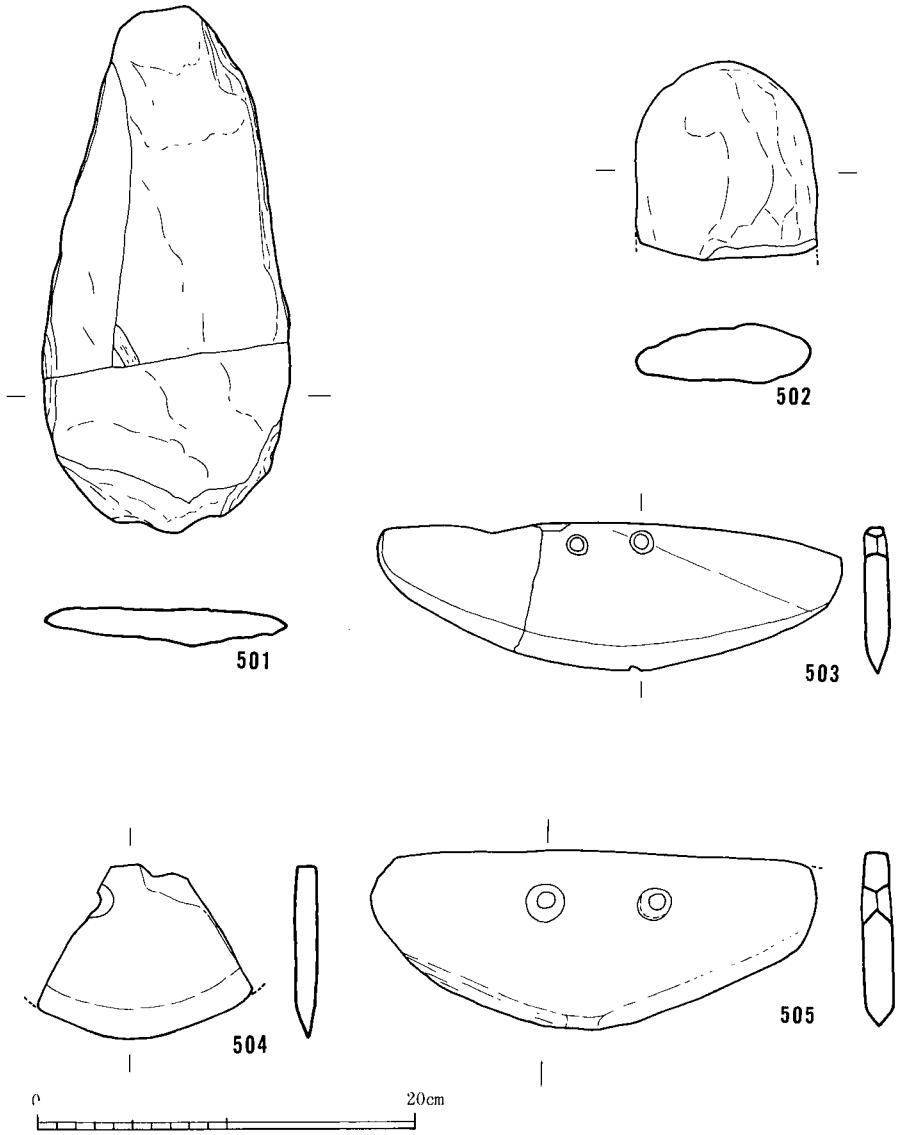
2　各遺構出土のその他の遺物

石器

501　打製石斧である。5号竪穴住居から出土しているが、住居に伴うものではない。細長い台形状を呈する。長さ14.1cm、最大幅6.6cm、厚さ0.5cmを測る。縄文時代後晩期に盛行する形態を示す。石材は片岩系である。現存重量95ｇを測る。

502　打製石斧である。3号竪穴住居から出土しているが、住居に伴うものではない。中央部から折れている。現存長5.3cm、幅5cm、厚さ1.4cmを測る。縄文時代後晩期に盛行する形態を示す。石材は片岩系である。現存重量は67ｇを測る。

503　完形の石包丁である。7号竪穴住居出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。長さ12.3cm、最大幅3.9cm、厚さ0.4cm、紐穴中央間距離1.8cmを測る。石材は安山岩系である。現存重量は45ｇを測る。



第 8 図 各遺構出土石器実測図（S＝1／2）

504　大半が欠失し、中央部のみ残す石包丁である。6号竪穴住居から出土している。最大幅4.7cm、厚さ0.4cm、紐穴中央間距離1.9cmを測る。石材は風化が著しい安山岩系である。現存重量は15ｇを測る。

505　完形の石包丁である。7号竪穴住居出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。長さ11.7cm、最大幅4.8cm、厚さ0.6cm、紐穴中央間距離2.4cm

を測る。石材は安山岩系で、現存重量は84.5ｇを測る。

506　砥石である。５号竪穴住居から出土している。断面不整三角形状を呈していて、長さ9.8cm、幅6.1cm、高さ3.6cmを測る。石材は砂岩で、粒子は細粒であることから中砥になると思われる。砥面は主として5面ある。それぞれの面は中央部が窪んでいる。現存重量は212.5ｇを測る。

507　砥石である。６号竪穴住居から出土している。表裏面とも破面となる。３面の側面が砥面となる。長さ8.1cm、幅9.3cm、厚さ2cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。現存重量は128ｇを測る。

508　砥石である。９号竪穴住居から出土している。不整５角形状を呈する。長さ10.4cm、最大幅6.3cm、厚さ２cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は主として４面あり、一番面積が広い砥面では、中央部分が窪み船底型を呈している。現存重量は149ｇを測る。

509　砥石である。６号竪穴住居から出土している。不整４角形状を呈する。長さ9.1cm、最大幅7.9cm、厚さ１cmを測る。石材は片岩系で、粒子は細粒であることから中砥になると思われる。砥面は主として３面あり、表裏面は、中央部分が窪み船底型を呈している。現存重量は103ｇを測る。

510　大型の叩き石片である。５号竪穴住居から出土している。石材は片岩系である。表裏側面共はなめらかに加工されている。先端部に敲打痕が見られる。重量は421ｇを測る。

511　小型の叩き石片である。５号竪穴住居出土。石材は玄武岩系である。半折するものの、表裏側面共はなめらかに加工され、手持ち部分がある。先端部に敲打痕が見られる。長さ10.2cm、重量421ｇを測る。

鉄器

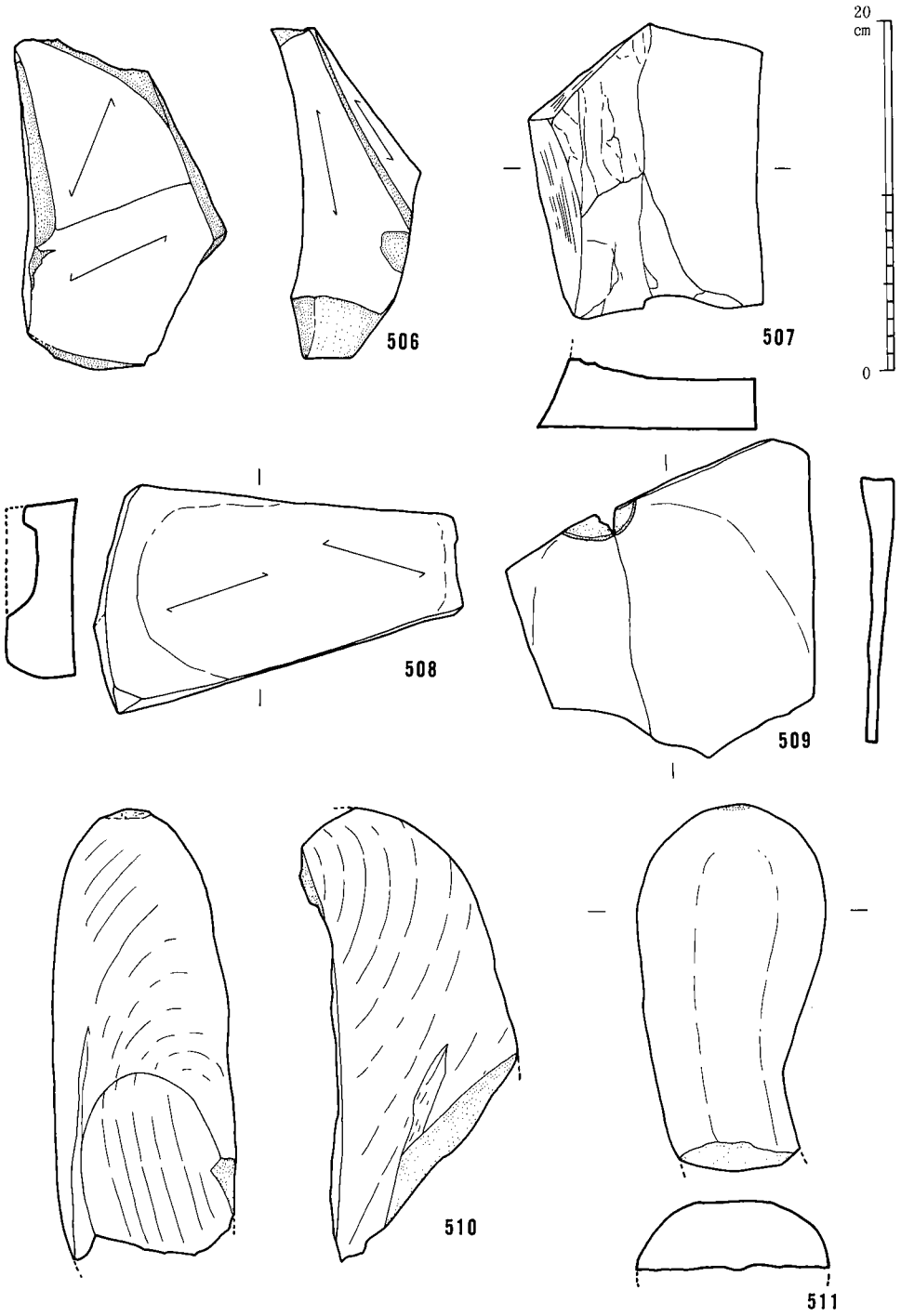
601　逆三角形、柳葉形の２タイプの鉄鏃片である。５号竪穴住居出土。

第３節　小結

０区の調査では、約4000ｍを発掘し、竪穴住居10軒、土坑３基、ピット等が検出され、上記のような出土遺物の検出をみた。

特に竪穴住居は、10軒の内、そのプランを確認し得るものが７軒あった。それらは、共に長方形プランを有し、ベット状遺構、屋内土坑を備えるものであった。また、主柱穴は、中央の炉跡を挟んで２本柱になるものであった。

そのプランの大きさは１号、５号～７号竪穴住居で確認し得た。長方形プランの大きさ、ベットの付設位置はどは以下のようである。



第 9 図　各遺構出土石器実測図（S＝1／2）

1号竪穴住居　長軸6,2M×短軸4,6M、西側短壁にベット状遺構、東側短壁に張り出し部

5号竪穴住居　長軸6,4M×短軸4,8M東側短壁にベット状遺構

6号竪穴住居　長軸5,4M、西側短壁ベット状遺構

7号竪穴住居　長軸5,2M×短軸4,2M、西側短壁にベット状遺構

検出された10軒の竪穴住居は、調査区内中央部に集中していた。それらのうち、1号、2号、5号、8号竪穴住居は単独で存在し、他の6軒は2軒ずつ重複して存在していた。その先後関係は以下のようになる。

（古）3号竪穴住居＞4号竪穴住居（新）

（古）7号竪穴住居＞6号竪穴住居（新）

（古）9号竪穴住居＞10号竪穴住居（新）

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、石包丁、砥石、鉄鏃、打製石斧等があり、弥生時代後期中葉、後半、古墳時代後期頃のものである。

まず、出土土器の器種構成をまとめてみると、以下のようになる。

1号竪穴住居；無頸壺、「く」の字状口縁を持つ甕、「く」の字状口縁を持つ脚台付き甕、鉢、脚台付き鉢、ミニチュア土器（鉢形）。底部はやや丸みを持つ。

2号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕。

3号竪穴住居；杯身（須恵器、ヘラ記号あり）、椀（土師器）、小型甕（土師器）

4号竪穴住居；球形壺、「く」の字状口縁を持つ甕、鉢。

5号竪穴住居；複合口縁壺、小型壺、「く」の字状口縁を持つ甕、小型甕、ワイングラス状の杯部をもつ高杯、ミニチュア土器(鉢形)。底部はほぼ平坦である。

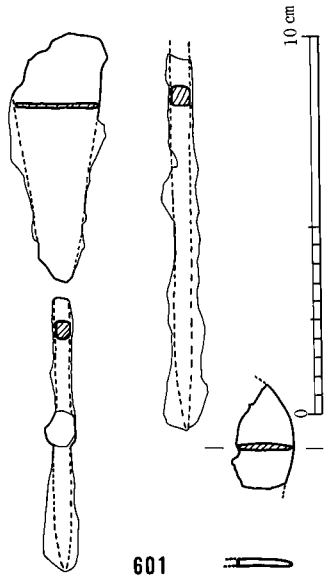
6号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、丸底鉢、脚台付き鉢、器台。

8号竪穴住居；やや丸みを持つ底部。

9号竪穴住居；球形壺。やや丸みを持つ底部。

なお、3号竪穴住居は、弥生時代後期のベット状遺構、屋内土坑を有するものであるが、出土土器が6世紀後葉の須恵器で、時期に異動をきたしている。そこで、(古)3号竪穴住居と1号土坑（新）という切り合い関係をもつことを考えるならば、出土遺物の取り上げ時に両者を混在させてしまったと推測される。

従ってこれら3号竪穴住居出土土器は1号土坑出土土器のものであると訂正する事にしたい。



第 10 図　各遺構出土鉄器実測図（S＝1／2）

第３章

日永遺跡２区の調査

第１節　はじめに
第２節　各遺構出土遺物
　１　竪穴住居出土土器
　２　各遺構出土のその他の遺物
第３節　小結

第３章　日永遺跡２区の調査

第１節　はじめに

２区の調査は、今回調査した「日永遺跡」の発掘調査区の中央部分より西側にあり、耳納連山から筑後川に向かう扇状地上に位置する。調査区は東側から西側へ、標高50.35ｍから49.503ｍへと低くなる。東西端付近に礫石が混じる土石層が見られ、その部分での遺構は密度が低い。西側は農道を挟んで３区と、東側も農道を挟んで１区と対する。また、調査区中央には農業用排水路が南北に貫流する。調査面積は2400㎡である。

調査の結果、検出した遺構には、竪穴住居25軒、土坑５基、溝１条、馬蹄形周溝１基、土壙墓２基、落とし穴状遺構１基、ピット等があった。

第２節　各遺構出土遺物

調査区内からは、東西端付近には竪穴住居が検出されないものの、中央部に重複関係が少なく、やや分散的に配置される。計25軒の竪穴住居を検出した。そのうち９軒は調査区域外に伸びて、全容を把握することができない（図版４）。

形状のわかる竪穴住居は、長方形プランで、ベット状遺構を備えるもの、長方形プランでカマドを備えるもの、正方形プランでカマドを備えるものの３種類に分けられる。

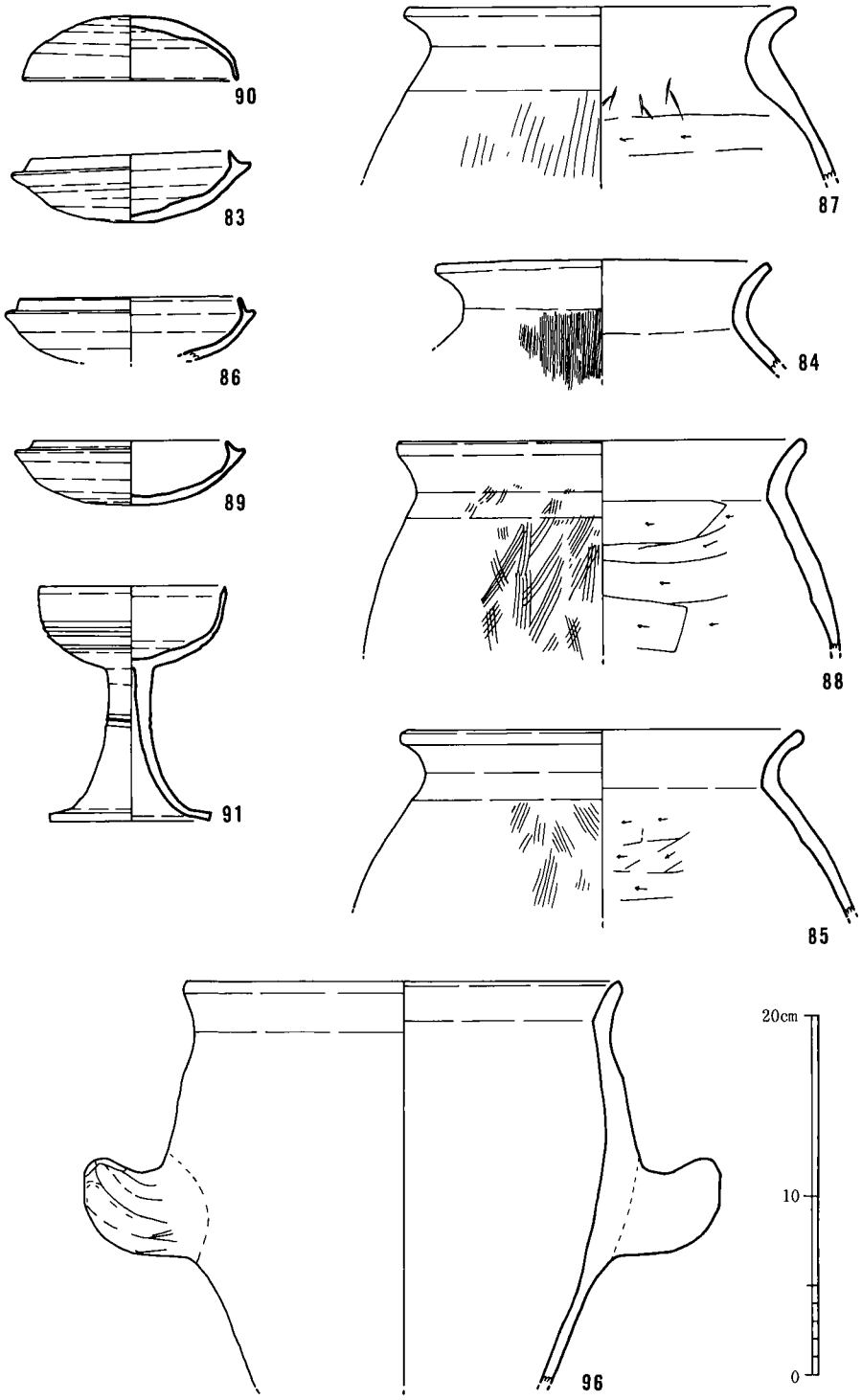
１　竪穴住居出土土器

12号竪穴住居（第11図）

87　「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに屈折している。胴部上方から底部にかけて欠失している。調整は胴部外面がハケ調整、内面がヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径21cmを測る。

90　須恵質の杯蓋である。天井部は丸みを帯び、口縁端は丸くおさまる。天井部にはヘラ記号がみられる。調整は天井部で回転ヘラ削り、内外面では回転ヨコナデである。焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は外面が灰黒色、内面が灰色を呈する。口径11.7cm、器高3.6cmを測る。

14号竪穴住居（第11図）



第 11 図　12号、14号、21号、22号、竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

83　須恵質の杯身である。立ち上がりは短く、やや内傾し、身受けは短くやや上方にのびる。底部にはヘラ記号がある。調整は底部が丸みをもたせながら回転ヘラ削り、内外面は回転ヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密である。口径10.9cm、器高3.8cmを測る。

84　「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに屈折している。胴部上方から底部にかけて欠失している。調整は胴部外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在している。色調は燈褐色を呈する。口径18.2cmを測る。

85　「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに屈折している。胴部上方から底部にかけて欠失している。調整は胴部外面がハケ調整、内面がヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径21cmを測る。

86　須恵質の杯身である。立ち上がりは短く、やや内傾し、身受けは短くやや上方にのびる。底部は欠失している。調整は内外面は回転ヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は灰色である。復元口径11.9cmを測る。

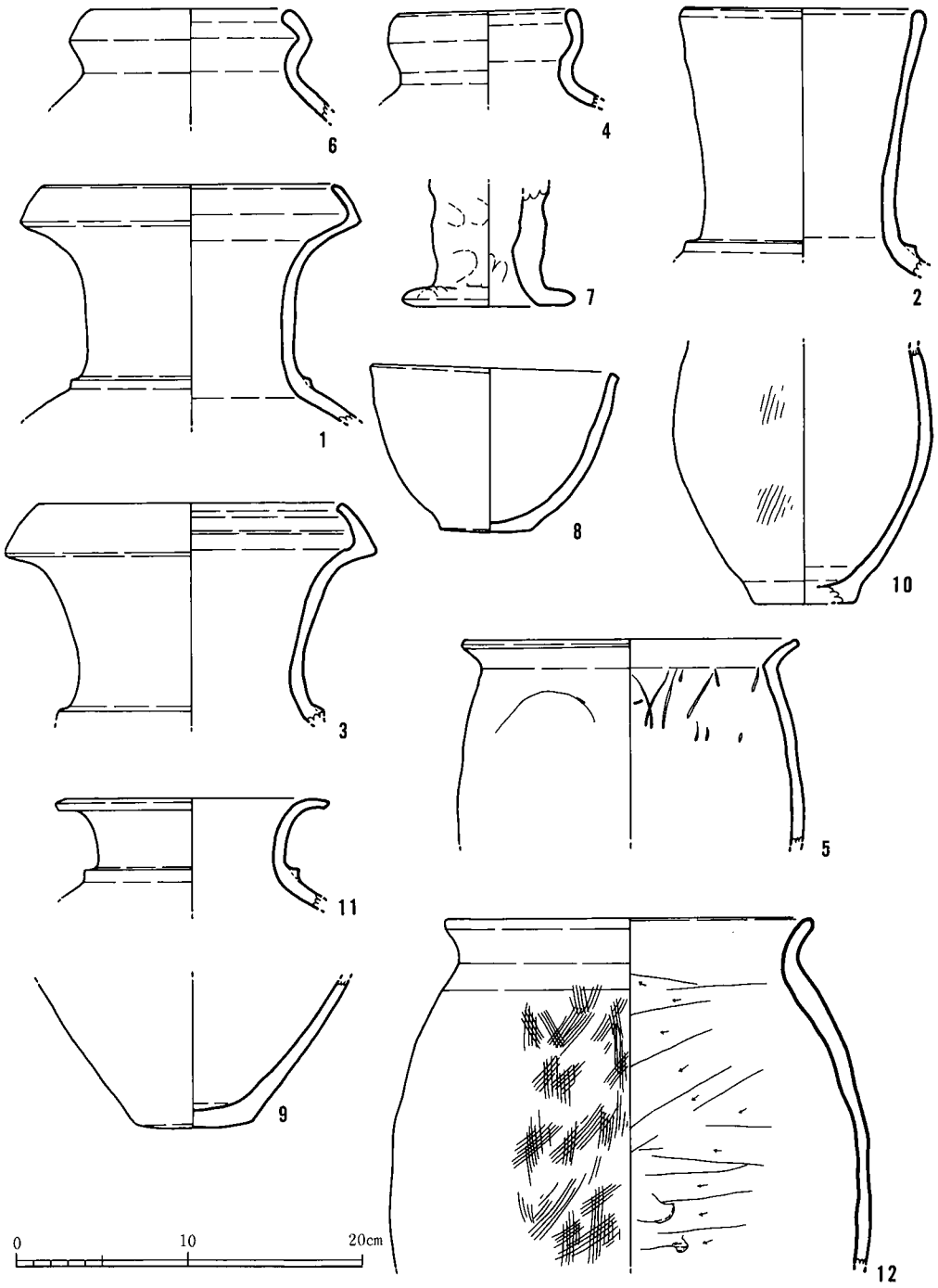
88　「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに屈折している。胴部上方から底部にかけて欠失している。調整は胴部外面がハケ調整、内面がヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径22cmを測る。

16号竪穴住居（第12図）

1　複合口縁を持つ壺である。口縁部から頸部、肩部上半が一部残存している。肩部には断面三角凸帯を貼付している。口縁部は、その拡張が若干直線的になる。頸部は肩部からやや立ち上がってから外反する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。口縁拡張部には黒斑が残る。胎土は、金雲母を含み、細、粗砂粒が混在している。色調は赤褐色を呈する。復元口径は16.4cmを測る。

2　長頸壺である。口縁部から肩部上半が一部残存している。肩部には断面三角凸帯が貼付されている。肩部から口縁部にかけては、斜め上方に直線的に外反している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。口縁内部から肩部内部にかけて次第に黒く焼けている。胎土は、金雲母、粗い砂粒を多く含む。色調は、外面が黄褐色、内面は灰黄褐色を呈する。口径は13.2cmを測る。

3　1とほぼ同様な器形になる複合口縁を持つ壺である。口縁部から頸部、肩部上半が一部残存している。肩部には断面三角凸帯を貼付している。口縁部は、1に比べてやや内傾し、若干丸みを帯びている。頸部は肩部から斜め上方に外反している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は、金雲母、粗い砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元



第 12 図　16号 竪穴住居出土土器実測図（1／4）

口径は17.4cmを測る。

4　複合口縁を持つ小型壺である。口縁部は明瞭な稜線を持たず、丸みを帯び袋状口縁の退化形態を示す。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は、細砂粒を多く含み、金雲母、マンガン粒が散見される。色調は二次加熱を受け黒変する部分があるが、灰黄色を呈する。口径は9.9cmを測る。

5　「く」の字状に外反する口縁部を持つ甕である。口縁部から胴中央部までの一部が残存している。口径より胴最大径が広くなる。調整は剝落が著しく不明であるが、内面胴上半部にはヘラ痕が縦方向に多数見られる。また焼成は良好である。胎土は粗、細砂粒を含み、マンガンが散見される。色調は外面が黄褐色、内面が白黄褐色を呈する。復原口径19cmを測る。

6　4と同様に複合口縁を持つ小型壺である。4に比べて口縁部の稜線は明瞭である。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は、緻密であるが、粗砂粒も散見される。色調は燈褐色を呈する。口径は11.4cmを測る。

7　手捏ねの支脚である。下半部のみ残存している。器壁は厚く作られ、脚部はL字状に外反し、端部は面を持つ。調整は指頭圧痕が見られ、外面L字状に曲がる部分には板圧痕が残る。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細、粗砂粒が混在し、マンガンを含む。色調は白黄褐色を呈する。底径は8.6cmを測る。

8　鉢である。底部からやや内弯しながら立ち上がる。底部は若干丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多量に含み、マンガンが散見される。色調は外面が白黄褐色、内面が灰色を呈する。復元口径13.2cm、復元器高9.5cmを測る。

9　壺底部である。胴中央部より上は欠けている。底部は若干丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。内面は二次加熱を受けて黒変している。胎土は粗砂粒を多量に含み、マンガンが散見される。色調は外面が黄燈褐色、内面が黒色を呈する。復元口径は7cmを測る。

10　壺底部から胴上半部までの一部が残存している。底部は若干丸みを帯びる。胴最大径部はあまり張らずに立ち上がる。調整は剝落が著しく不明なところが多いが、一部に縦方向のハケ目が残る。また焼成は良好である。胎土は粗砂粒を多量に含み、マンガンが散見される。色調は外面胴部が灰色、底部が黄褐色、内面が灰茶褐色である。復元胴最大径は14cm、復元底径は6cmを測る。

11　朝顔型に広がる壺である。口縁部から肩部上半部までが残存している。肩部には断面三角凸帯を貼付している。肩部から斜め上方に朝顔型に広がり、口縁端部は若干外弯している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、マンガン粒を含む。色調は外面が白燈褐色、内面が黄灰褐色を呈する。復元口径は13.4cmを測る。

12　甕である。胴部中央から口縁部にかけて残存している。緩やかに「く」の字に外反する口

縁部口径に比べ、胴最大径が大きい。調整は口縁部がヨコなで、胴部外面がハケ調整、胴部内面がヘラ調整である。また焼成は良好である。胎土は粗砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄燈褐色を呈する。復元口径は21cm、復元胴最大径は27.6cmを測る。

21号竪穴住居（第11図）

96　土師質の甑である。胴下半が欠失している。把手はシャープさに欠ける。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は燈褐色を呈する。復元口径23.9cmを測る。

22号竪穴住居（第11図）

89　須恵質の杯身である。立ち上がりは短く、やや内傾し、身受けは短くやや上方にのびる。底部にはヘラ記号がある。調整は底部が丸みをもたせながら回転ヘラ削り、内外面は回転ヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は灰色である。口径10.6cm、器高3.6cmを測る。

91　須恵質の高杯である。杯身底部は丸みを持ち、脚部はやや細長く、裾部は短く外反する。杯部には3条の沈線、脚部には2条の沈線が巡る。調整は杯底部が回転ヘラ削り、内外面が回転ヨコナデ、脚部がナデである。また脚内部には絞り痕がある。脚裾部にヘラ記号がみられる。また焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は淡紫灰色である。復元口径10.2cm、裾部底径8.6cm、器高13cmを測る。

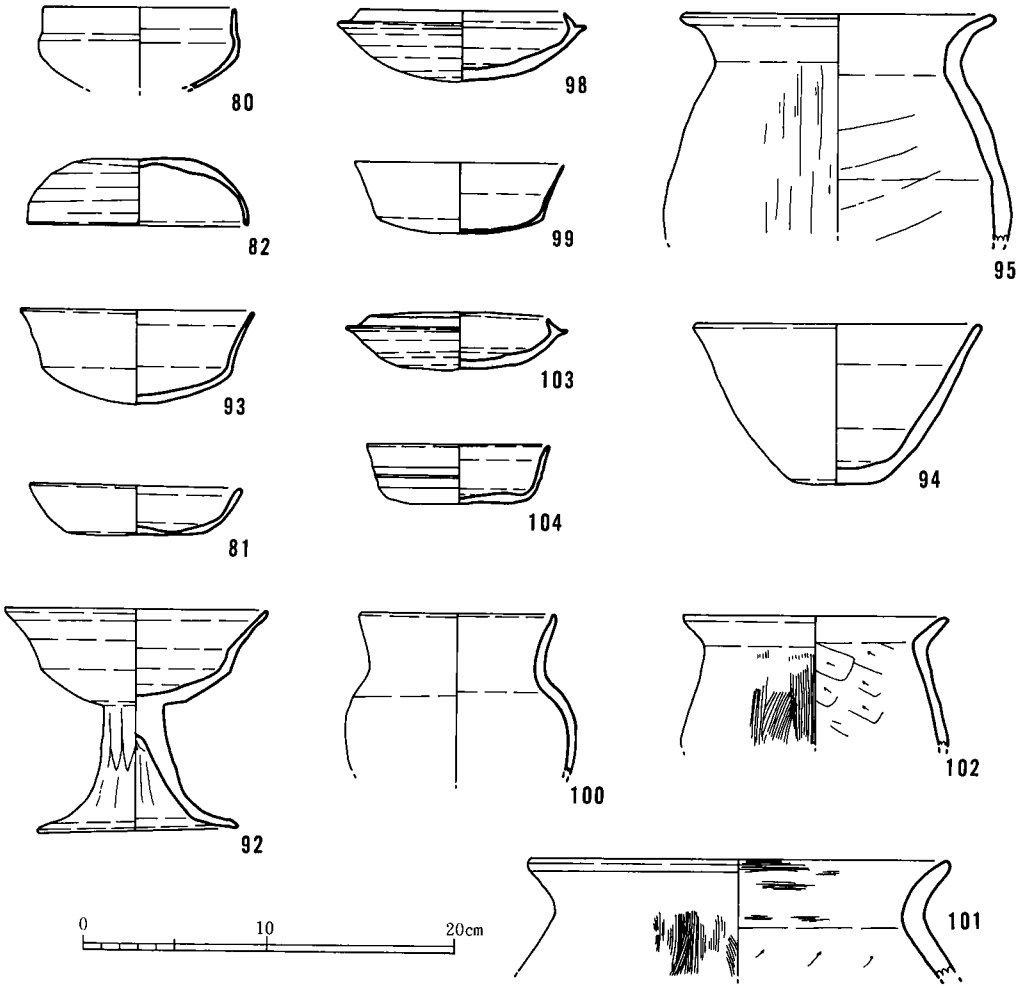
24号竪穴住居（第13図）

92　土師質の高杯である。杯部底面が直線的に伸び、中ほどで屈曲しやや外反して口縁部に達する。脚部は緩やかに開き、裾部で屈曲して下外方に伸びる。調整は杯部、脚部とも内外面の剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は燈褐色を呈する。復元口径13.9cm、裾部底径10.6cm、器高11.7cmを測る。

29号竪穴住居（第13図）

94　底部が丸みを持つ土師質の鉢である。カマド内から出土している。底部から口縁部へ直線的に伸びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は灰色を呈する。復元口径14.6cm、底径5cm、器高8.6cmを測る。

95　「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに屈折している。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元



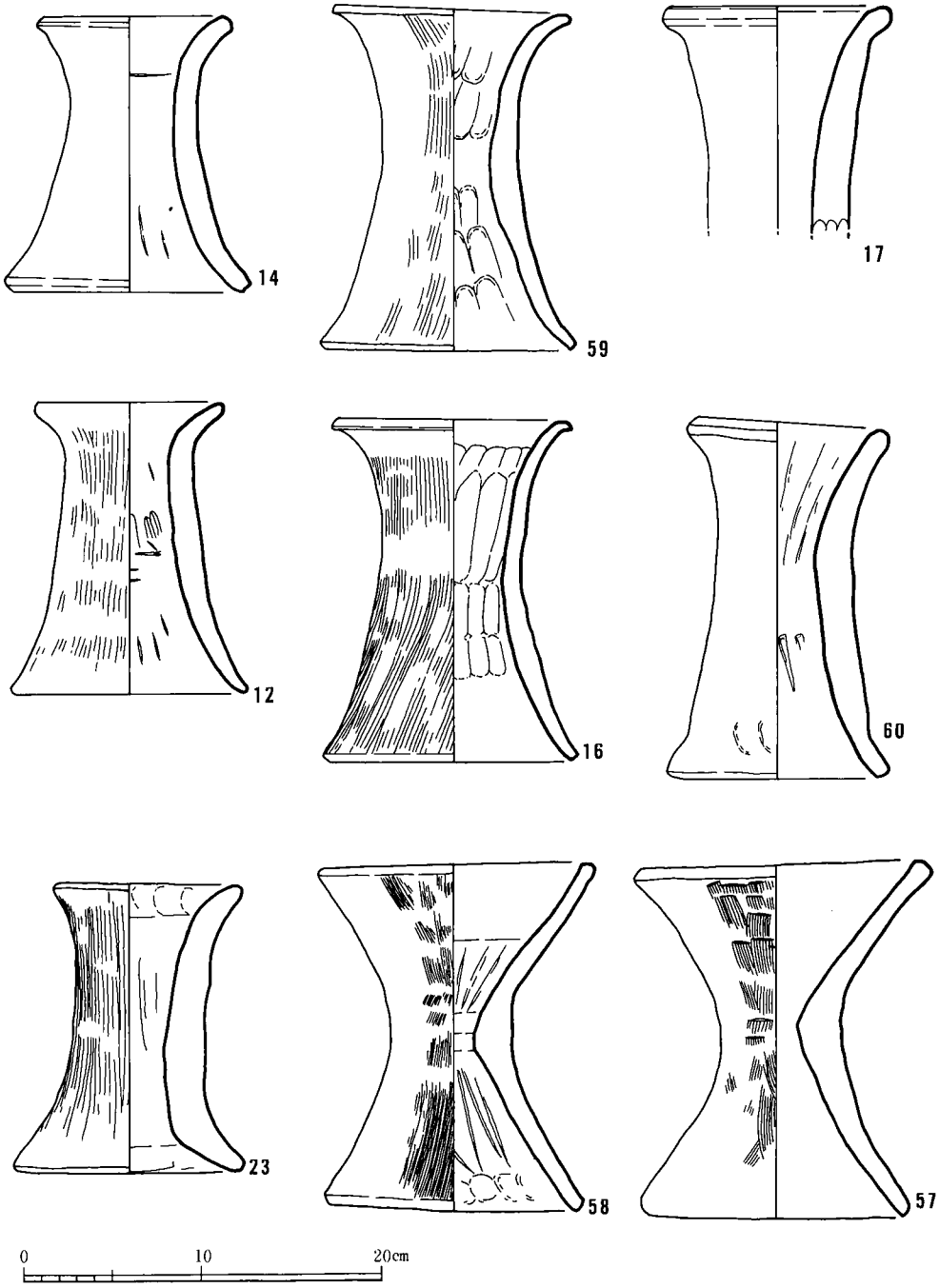
第 13 図　24号、29号、33号、36号竪穴住居、４号～６号、８号土坑出土土器実測図（S＝1／4）

口径15.8cmを測る。

32号竪穴住居（図版９、第14～21図）

12　鼓状の器台である。胴最小径は胴部上半にある。調整は外面がハケ調整で、内面には絞り痕が残る。また焼成は良好である。胎土は緻密で、マンガン、金雲母を含む。色調は外面が白黄褐色から燈褐色、内面が白黄褐色である。口径10cm、底径12.6cm、器高16.3cmを測る。

13　複合口縁を持つ壺である。口縁部から肩部上半が一部残存している。肩部には断面三角凸帯を貼付している。口縁部は、その拡張が内弯内傾になる。肩部から直接口縁部へ立ち上がる。調整は口縁部がヨコなで、口縁部下方から肩部にかけて縦方向のハケ調整、断面三角凸帯では



第 14 図　32号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

凸帯貼付後ヨコなでをしている。また焼成は良好である。胎土は、緻密でマンガンを含む。色調は白黄褐色を呈する。復元口径は17.7cmを測る。

14　鼓状の器台である。胴最小径は胴部上半にある。調整は剝落が著しく不明であるが、内面には絞り痕が残る。また焼成は良好である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は黄褐色から燈褐色を呈する。口径10.6cm、底径12.6cm、器高15.2cmを測る。

15　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べやや大きい。底部は小さく若干丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。体部外面は二次加熱により黒斑がみられる。胎土は細・粗砂粒が混在している。色調は灰黄褐色から灰黄燈色を呈する。口径29.6cm、胴最大径32.2cm、底径7.4cm、器高39.9cmを測る。

16　鼓状の器台である。胴最小径は胴部上半にある。調整は外面が口縁部がヨコなで、胴部は中央部にヨコなでがみられるが、その他は縦方向のハケ調整である。内面にはなで調整がみられる。また焼成は良好である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は黄褐色から燈褐色を呈する。口径12.8cm、底径13.2cm、器高19.1cmを測る。

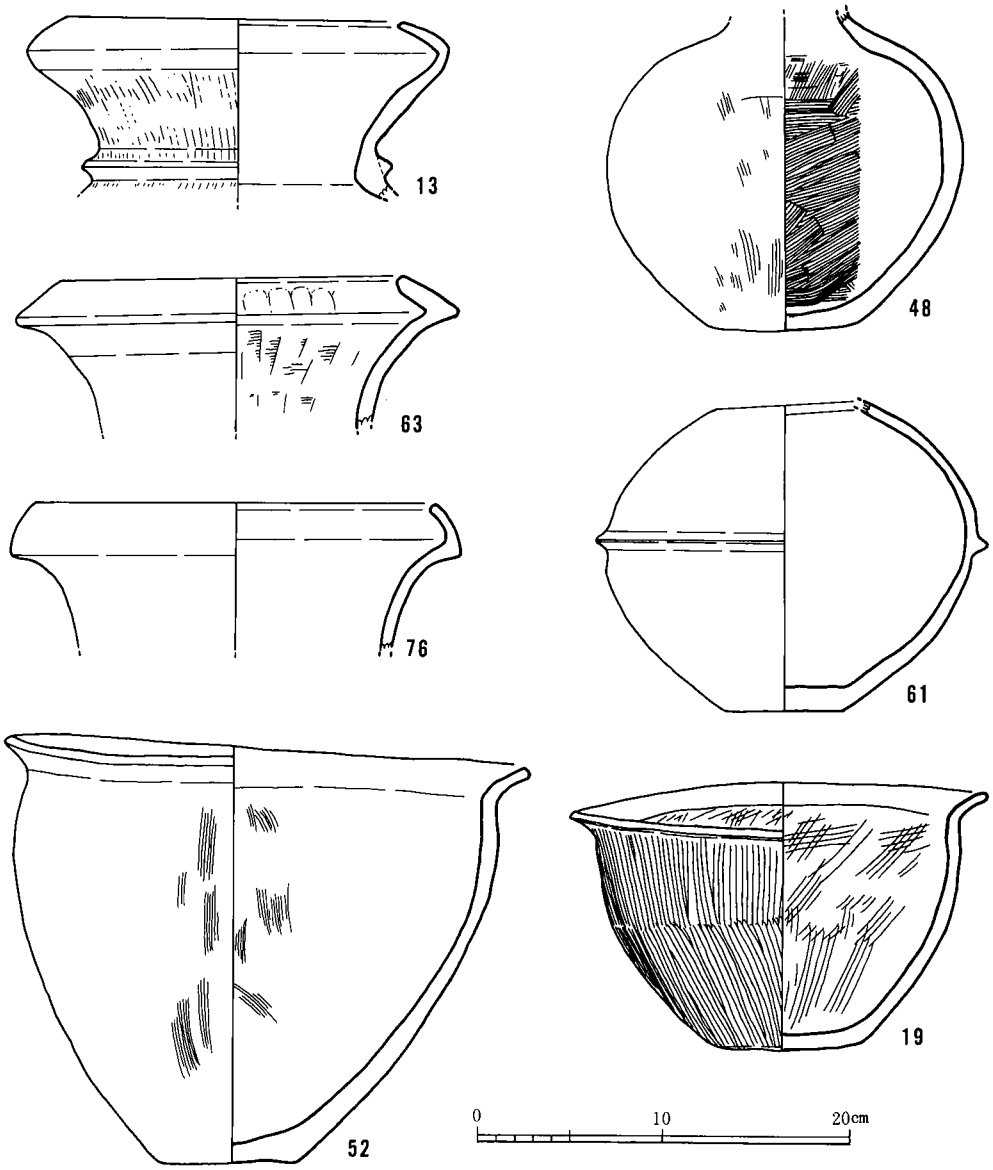
17　器台である。上半部のみを残している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在させ、マンガンを含む。色調は灰黄褐色を呈する。口径11.6cmを測る。

18　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。底部は若干丸みを帯びる。調整は口縁部がヨコなで、胴部内外面ともにハケ調整である。また焼成は良好である。体部外面は二次加熱により黒変している。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は黄褐色から灰黄褐色を呈する。口径17.6cm、胴最大径19.8cm、底径７cm、器高19.1cmを測る。

19　不整形な鉢である。短く「く」の字に外反する口縁部を持つ。底部は若干丸みを帯びる。口縁部から胴部下半にかけて二次加熱による黒斑が見られる。調整は口縁部がヨコなで、体部内外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在している。色調は黄褐色を呈する。口径21.9cm、底径7.7cm、器高12.7cmを測る。

20　鉢である。胴部からやや内弯気味に立ち上がり、口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細粗砂粒が混在し、マンガンを含む。色調は黄褐色から灰色であるが、内外面ともに二次加熱のため黒変している。口径14.2cm、底径６cm、器高10.5cmを測る。

21　口縁部を欠く壺である。胴部は丸く張り出し、肩部から口縁部に向かい、「く」の字状に外反する。欠失した端部は擬口縁状を呈しているため、元来複合口縁であったと思われる。胴中央部よりやや下には断面三角凸帯が貼付される。胴上半部には上方に向け「矢印」状のヘラ描きが見られる。底部は若干丸みを帯びる。調整は、外頸部がヨコなで胴部が剝落が著しく不明である。内面は上半部がヨコなで、下半部がハケ調整である。また焼成は良好である。胴部下



第 15 図　32号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

半、中央部には所々に黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒を混在して、マンガンが散見される。色調は黄燈褐色を呈する。胴最大径26.2cm、底径８cmを測る。

22　肩張りの壺である。平底の底部から緩やかに立ち上がり胴最大径部を上半にもつ。胴部と頸部に突帯をめぐらす。頸部はやや内方に直立してから「ハ」の字に外反して端部に達する。調整は、外面ハケ調整、内面ヘラケズリで、とても丁寧に仕上げる。胎土は細砂粒で、焼成は

良好である。色調は褐色を呈する。口径14.8cm、底径8.2cm、胴最大径25.1cm、33.2cmを測る。

23　鼓状の器台である。胴最小径は胴部上半にある。調整は外面が口縁部がヨコなで、胴部は縦方向のハケ調整である。内面には中央部に絞り痕がみられる。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在していて、マンガン、金雲母を含む。色調は白黄褐色から燈褐色を呈する。口径10cm、底径12.6cm、器高16.1cmを測る。

24　「く」の字状口縁を持つ甕である。15よりやや底部が大きい。胴部最大径は口径に比べやや大きい。底部は小さく若干丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。体部外面上半には二次加熱により黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は外面が白黄色から燈褐色、内面が灰黄色から燈褐色を呈する。口径27.2cm、胴最大径29.6cm、底径８cm、器高38.3cmを測る。

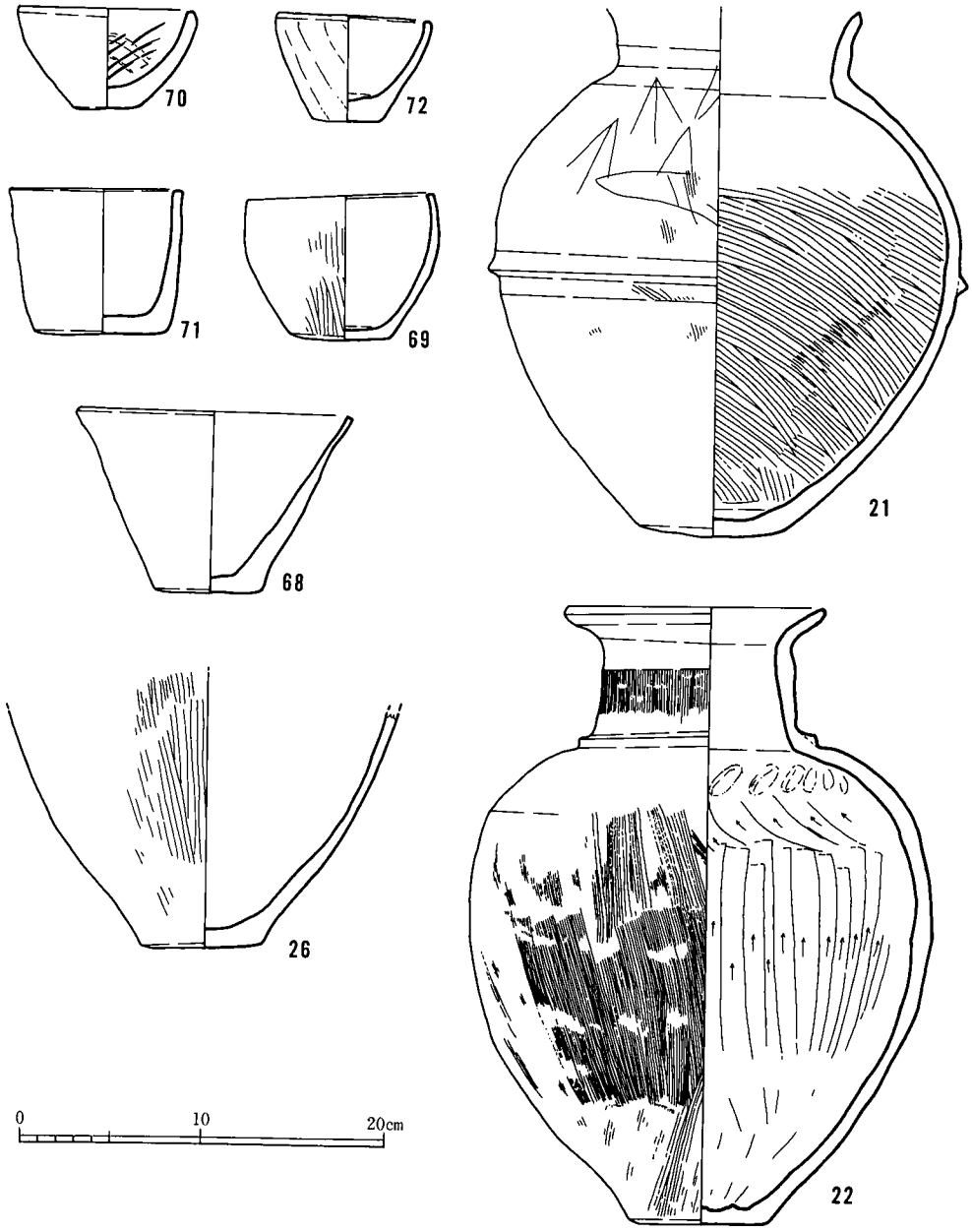
25　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べやや大きい。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部内外面ともに二次加熱により黒斑が見られ、一部に煤が付着する。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は白黄褐色から茶褐色を呈する。口径24.7cm、胴最大径28.2cmを測る。

26　甕の底部である。底部はやや丸みを帯びる。調整は外面がハケ調整である。また焼成は良好である。体部内外面ともに二次加熱により黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は外面が黄燈褐色、内面が灰褐色を呈する。底径6.4cmを測る。

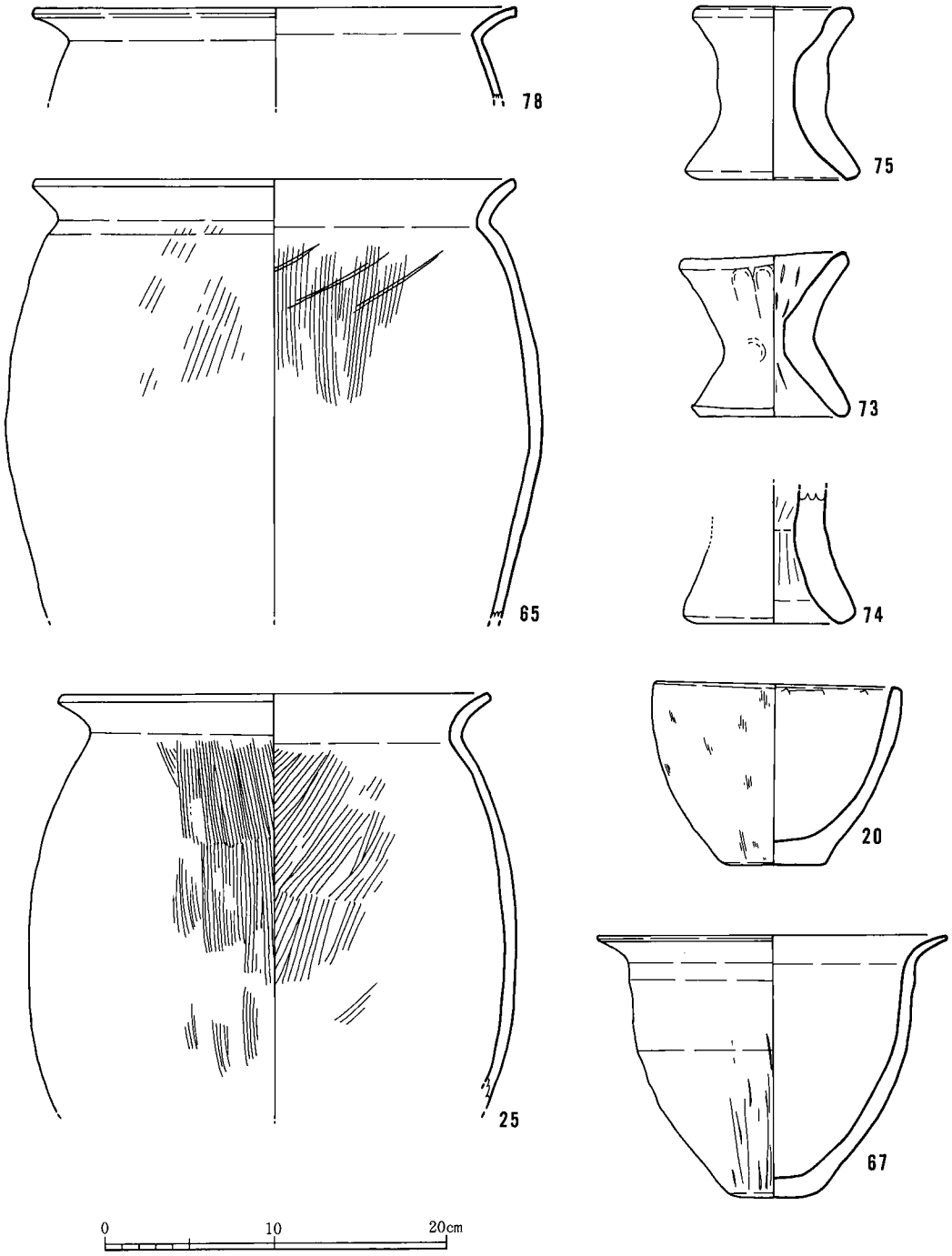
47　「く」の字状口縁を持つ大型甕である。胴部最大径は口径に比べやや小さく、その位置は胴部上半部にある。底部は小さく若干丸みを帯びる。頸部及び胴部中央には断面三角凸帯が貼付される。調整は内外面とも剝落が著しく不明なところが多いが、内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胴部外面中央には二次加熱により黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は黄燈褐色を呈する。復元口径38.9cm、胴最大径43.5cm、底径8.7cm、器高43.5cmを測る。

48　胴部が球状に張り出す壺である。底部は若干丸みを持つ。調整は外面が剝落が著しく不明なところが多いが、概ねハケ調整、内面はハケ調整である。また焼成は良好である。外面には二次加熱による黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は外面が黄褐色、内面が灰褐色を呈する。胴最大径18.9cm、底径８cmを測る。

49　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べやや大きい。底部は小さく若干丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明なところが多いが、ハケ調整である。また焼成は良好である。体部外面には二次加熱により黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径13.6cm、胴最大径14.8cm、底径7.5cm、器高16.4cmを測る。



第 16 図　32号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）



第 17 図　32号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

50　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べやや小さい。底部は小さく若干丸みを帯びる。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部内面には二次加熱により黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径18.4cm、胴最大径19.3cm、底径7.8cm、器高19.3cmを測る。

51　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べやや小さい。底部は他のものに比べあまり丸みを帯びない。調整は外面が剝落が著しく不明であるが、内面がハケ調整である。また焼成は良好である。体部外面には二次加熱により黒斑が見られる。頸部には煤が付着する。胎土は細・粗砂粒が混在し、金雲母が散見される。色調は外面が茶褐色、内面が燈褐色を呈する。口径17.8cm、胴最大径18.1cm、底径７cm、器高20.2cmを測る。

52　不整形な鉢である。短く「く」の字に外反する口縁部を持つ。底部は若干上げ底になる。口縁部から胴部下半にかけて二次加熱による黒斑が見られる。調整は口縁部がヨコなで、体部内外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母を含む。色調は黄褐色を呈する。口径27.3cm、底径7.4cm、器高22cmを測る。

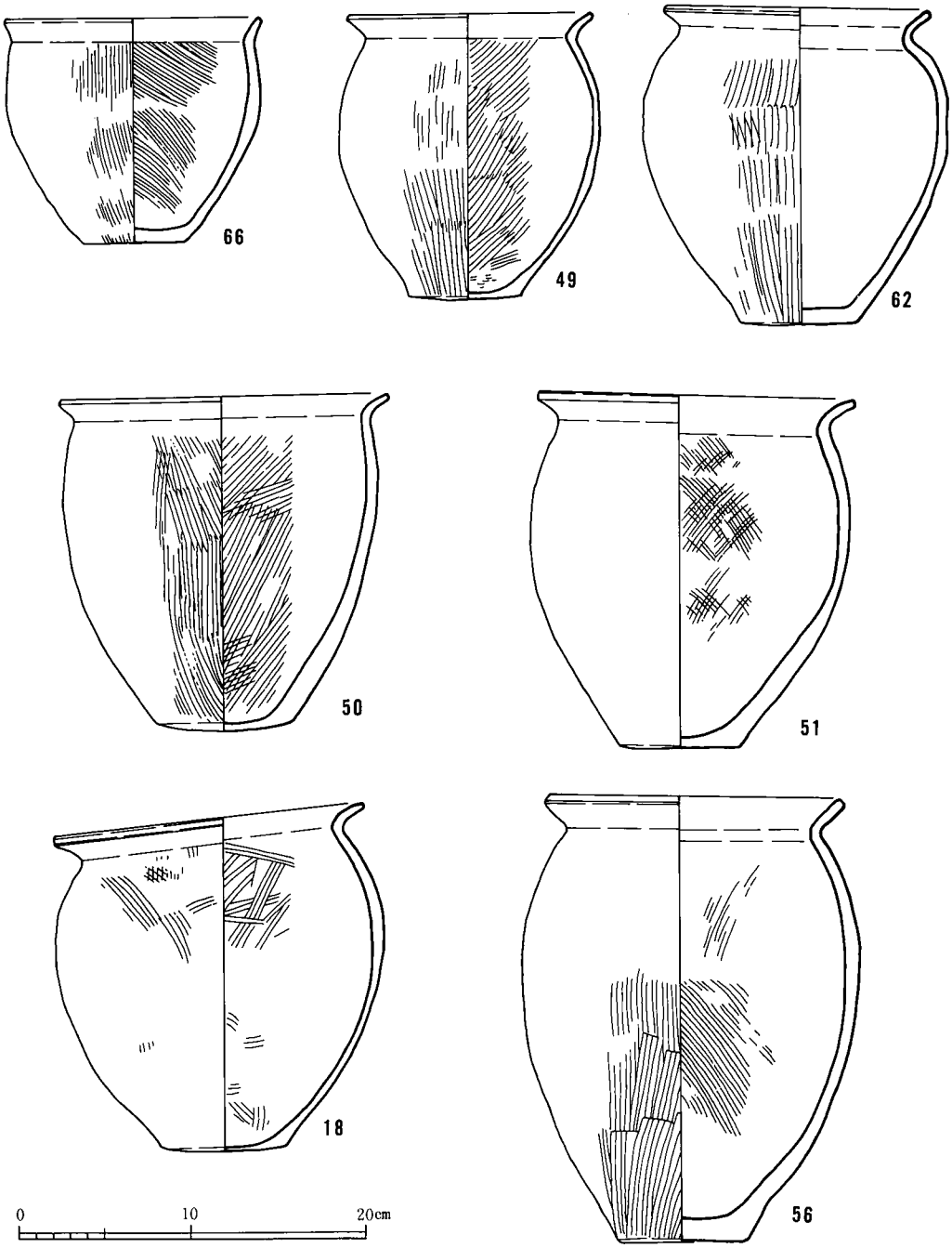
53　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べやや小さい。底部は若干丸みを帯びる。調整は口縁部がヨコなで、胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部外面には二次加熱により黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は外面が茶褐色、内面が黄褐色を呈する。口径22cm、胴最大径23.4cm、底径7.6cm、器高25.3cmを測る。

54　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ若干大きい。底部は若干上げ底になる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。体部外面には二次加熱により黒変している。胎土は細粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径23.3cm、胴最大径26.4cm、底径8.9cm、器高36.5cmを測る。

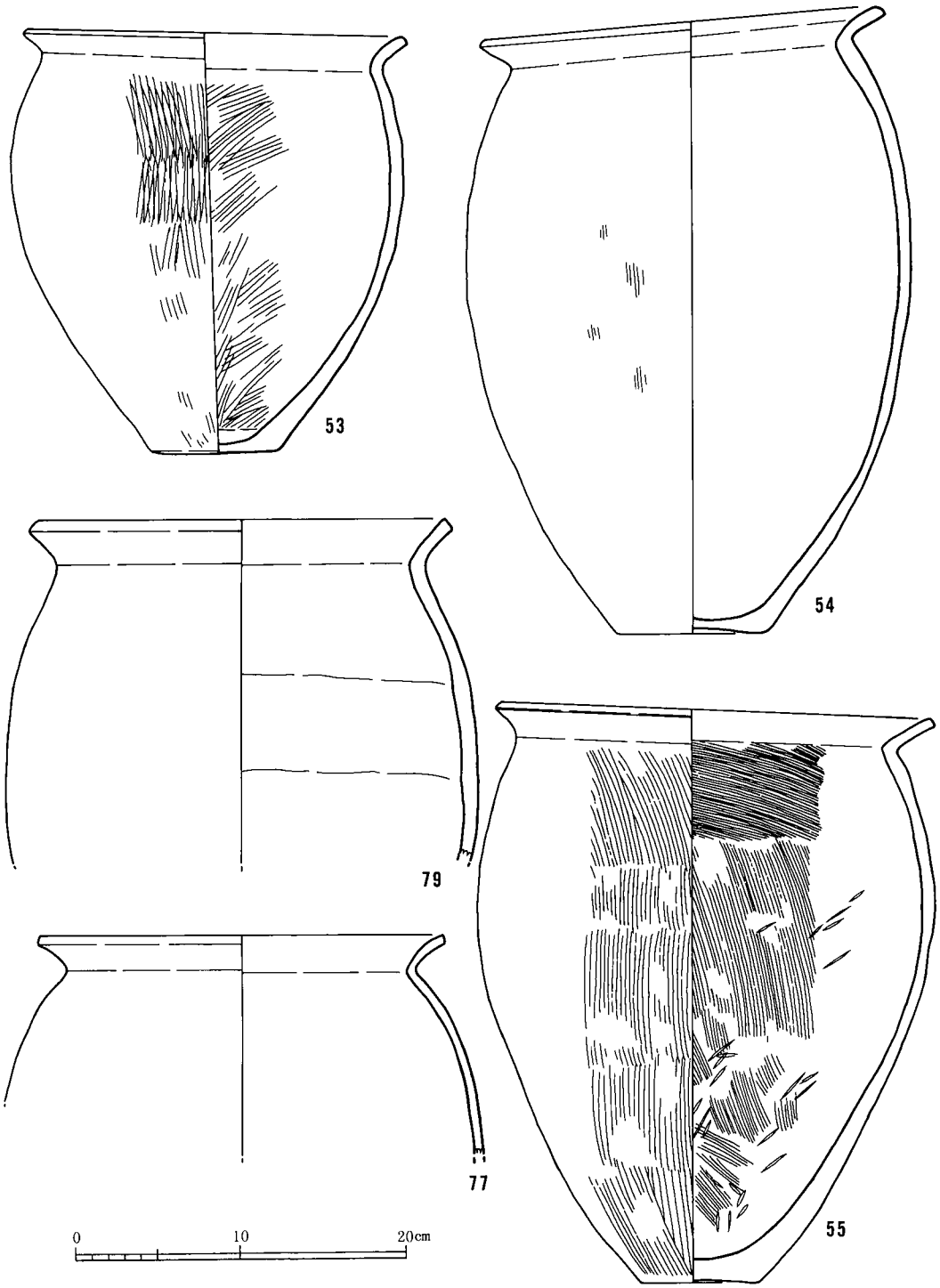
55　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ若干大きい。底部は若干上げ底になる。調整は口縁部がヨコなで、胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径25.2cm、胴最大径27.2cm、底径７cm、器高34.3cmを測る。

56　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べ若干大きい。底部は若干上げ底になる。調整は胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部外面には二次加熱のため黒斑が見られる。胎土は細粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径16.3cm、胴最大径19.2cm、底径7.2cm、器高25.6cmを測る。

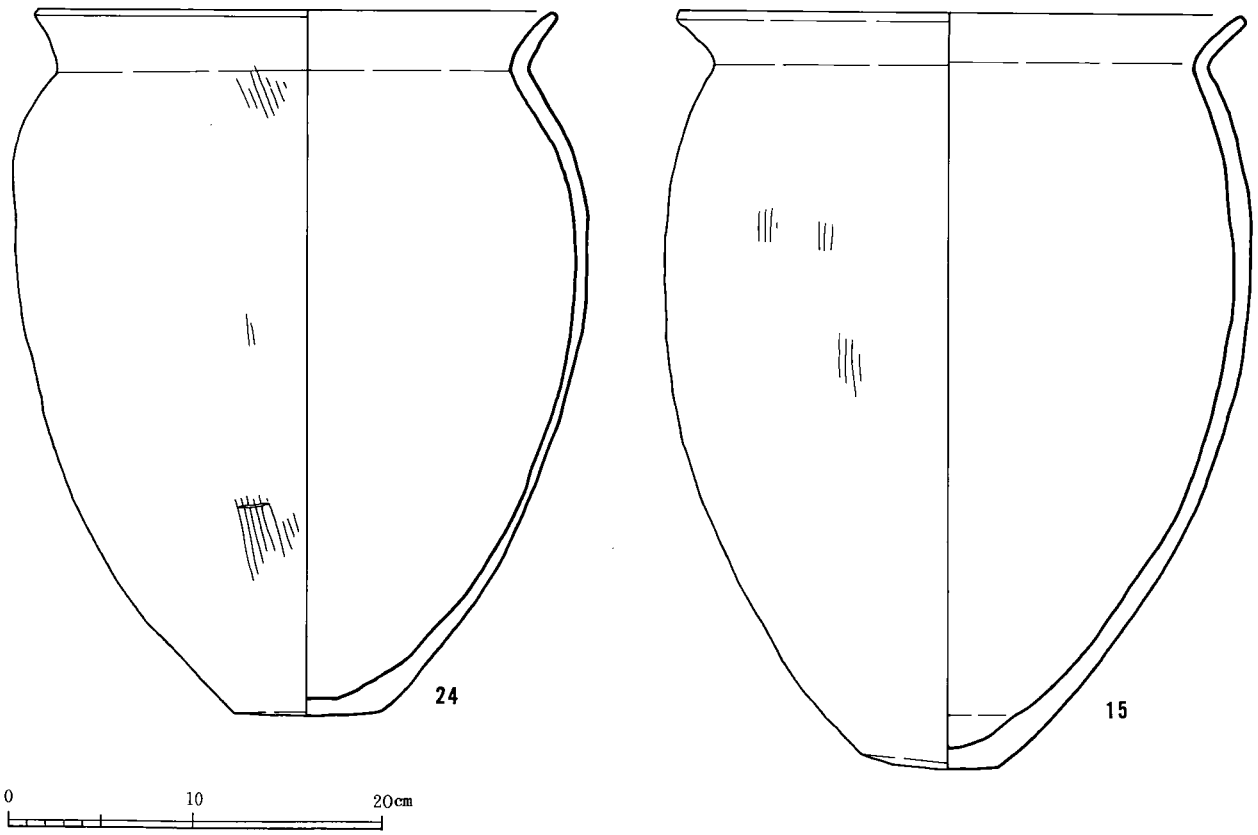
57　鼓状の器台である。胴最小径は胴部中央にある。調整は外面が縦方向のハケ調整である。内面には中央部に絞り痕がみられる。また焼成は良好である。胴部上半内外面には煤が付着している。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径15.8cm、



第 18 図　32号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）



第 19 図　32号 竪穴住居出土土器（S＝1／4）



第 20 図　32号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

底径14.1cm、器高19.5cmを測る。

58　57とほぼ同様な鼓状の器台である。胴最小径は胴部中央にある。調整は外面が縦方向のハケ調整である。内面には中央部に絞り痕がみられる。また焼成は良好である。胴部上半内外面には煤が付着している。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径15cm、底径13.8cm、器高19.3cmを測る。

59　16とほぼ同様な鼓状の器台である。胴最小径は胴部上半にある。調整は外面が縦方向のハケ調整である。内面にはヨコなでがみられる。また焼成は良好である。胴部上半内外面には煤が付着している。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は白黄褐色から燈褐色を呈する。口径13.3cm、底径13.7cm、器高19cmを測る。

60　17とほぼ同様な鼓状の器台であるが、ややシャープさに欠ける。胴最小径は胴部中央にある。調整は外面が剝落が著しく不明である。内面には中央部に絞り痕がみられる。また焼成は良好である。胴部上半内外面には煤が付着している。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄褐色を呈する。口径10.2cm、底径11.4cm、器高19.8cmを測る。

61　無頸壺である。胴部は球状に丸みを帯びている。胴中央部には断面三角凸帯を貼付している。底部は平坦である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径は7.7cm、胴最大径は20.7cm、底径は6.3cm、器高は16.3cmを測る。

62　小型甕である。短く「く」の字に外反する口縁部を持つ。底部は若干丸みを帯びる。胴部は上半に二次加熱による黒斑が見られる。調整は体部外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色から燈褐色を呈する。口径14.7cm、底径6.6cm、器高18cmを測る。

63　頸部上半より口縁部にかけて残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭な稜線を持つ。調整は剝落が著しく不明である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は燈褐色を呈する。口径18.1cmを測る。

65　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ若干大きい。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は口縁部がヨコなで、胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在していて、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径28cm、胴最大径31.2cmを測る。

66　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べ若干大きい。底部は平坦である。調整は胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在していて、マンガンが散見される。色調は黄白色を呈する。復元口径14.1cm、胴最大径14.4cm、底径5.8cm、器高12.8cmを測る。

67　緩やかな「く」の字状口縁を持つ小型甕である。小さな底部から斜め上方に立ち上がり、

口縁部で緩やかに外反する。底部は若干丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄灰色を呈する。復元口径20cm、底径5.2cm、器高15.5cmを測る。

68　底部から直線的に開き口縁部に達する鉢である。底部は平坦である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。口縁部下方には二次加熱による黒斑が見られる。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は白黄褐色を呈する。復元口径14.2cm、底径5.7cm、器高9.8cmを測る。

69　底部から内弯気味に立ち上がり口縁部に達する鉢である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明瞭であるが、口縁部がヨコなで、胴部外面がハケ調整、内面はなで調整である。また焼成は良好である。胴部外面には二次加熱による黒斑が見られる。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は白黄灰色を呈する。復元口径9.9cm、底径5.4cm、器高7.9cmを測る。

70　底部からやや内弯気味に立ち上がり口縁部に達する鉢である。底部は平坦である。調整は内外面とも剝落が著しく不明瞭である。また焼成は良好である。胴部外面には二次加熱による黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は外面が白黄色、内面が黄褐色を呈する。口径9.1cm、底径3.6cm、器高5.5cmを測る。

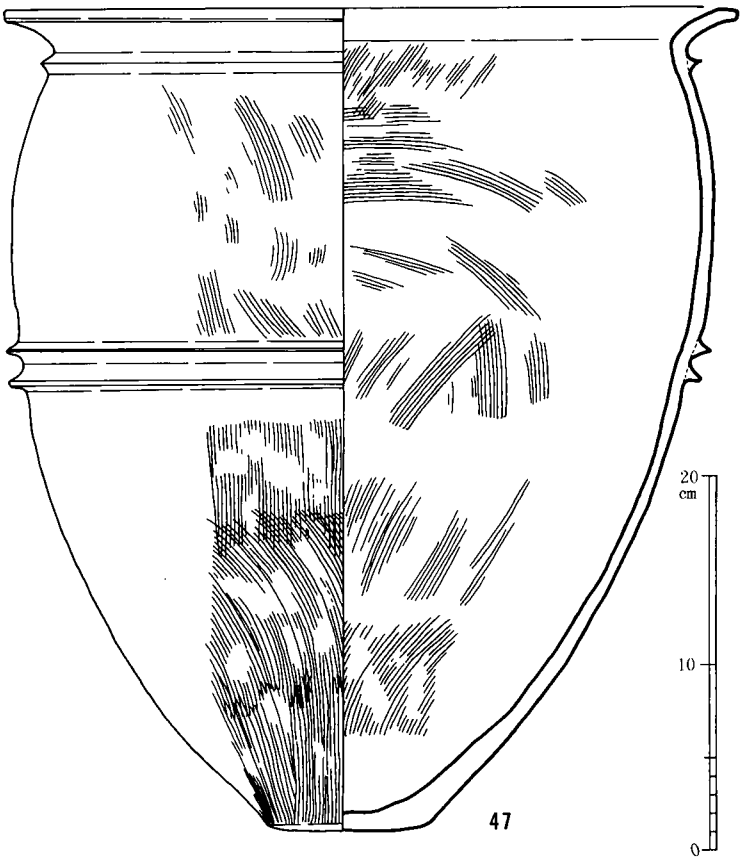
71　底部からコップ状に立ち上がる鉢である。底部は平坦である。調整は内外面とも剝落が著しく不明瞭である。また焼成は良好である。胴部外面には二次加熱による黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。復元口径９cm、底径7.2cm、器高7.9cmを測る。

72　底部からやや内弯気味に立ち上がり口縁部に達する鉢である。底部は平坦である。調整は内外面とも剝落が著しく不明瞭である。また焼成は良好である。胴部外面には顕著に煤が見られる。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径8.1cm、底径3.8cm、器高5.8cmを測る。

73　鼓状の器台であるが、ややシャープさに欠け、他のものに比べ小型である。胴最小径は胴部中央よりやや下にある。調整は外面が剝落が著しく不明である。内面には中央部に絞り痕がみられる。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄褐色を呈する。口径9.4cm、底径8.6cm、器高9.5cmを測る。

74　鼓状の器台であるが、ややシャープさに欠け、さらに上半部を欠失している。調整は外面が剝落が著しく不明である。内面には中央部に絞り痕がみられる。また焼成はやや脆さがある。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンも散見される。色調は黄褐色を呈する。底径8.3cmを測る。

75　鼓状の器台であるが、ややシャープさに欠け、他のものに比べ小型である。胴最小径は胴部中央よりやや下にある。調整は外面が剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎



第 21 図　32号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

土は緻密で、細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄燈褐色を呈する。復元口径8.2cm、復元底径8.6cm、復元器高10.1cmを測る。

76　頸部上半より口縁部にかけて残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭な稜線を持つ。調整は剝落が著しく不明である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母が散見される。色調は外面が黄褐色、内面が灰黄褐色を呈する。口径18.1cmを測る。

77　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は淡灰黄褐色を呈する。口径24cm、胴最大径28cmを測る。

78　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見され

る。色調は黄褐色を呈する。復元口径27.8cmを測る。

79　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は外面が灰黄褐色、淡黄燈褐色を呈する。口径24.2cm、胴最大径28cmを測る。

33号竪穴住居（第13図）

80　土師質の坩である。底部を欠失している。口縁部が若干外反している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含む。色調は燈褐色を呈する。復元口径10cmを測る。

34号竪穴住居（図版10、第22～24図）

26　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ小さい。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明であるが、内面はハケ調整のようである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は外面が灰茶褐色、茶褐色を呈する。復元口径20.6cm、胴最大径21cmを測る。

27　胴部が球状に張り出す甕のようである。頸部から口縁部にかけて、および胴部下半から底部にかけて欠失している。内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胴部下半には二次加熱による黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。復元胴最大径18.2cmを測る。

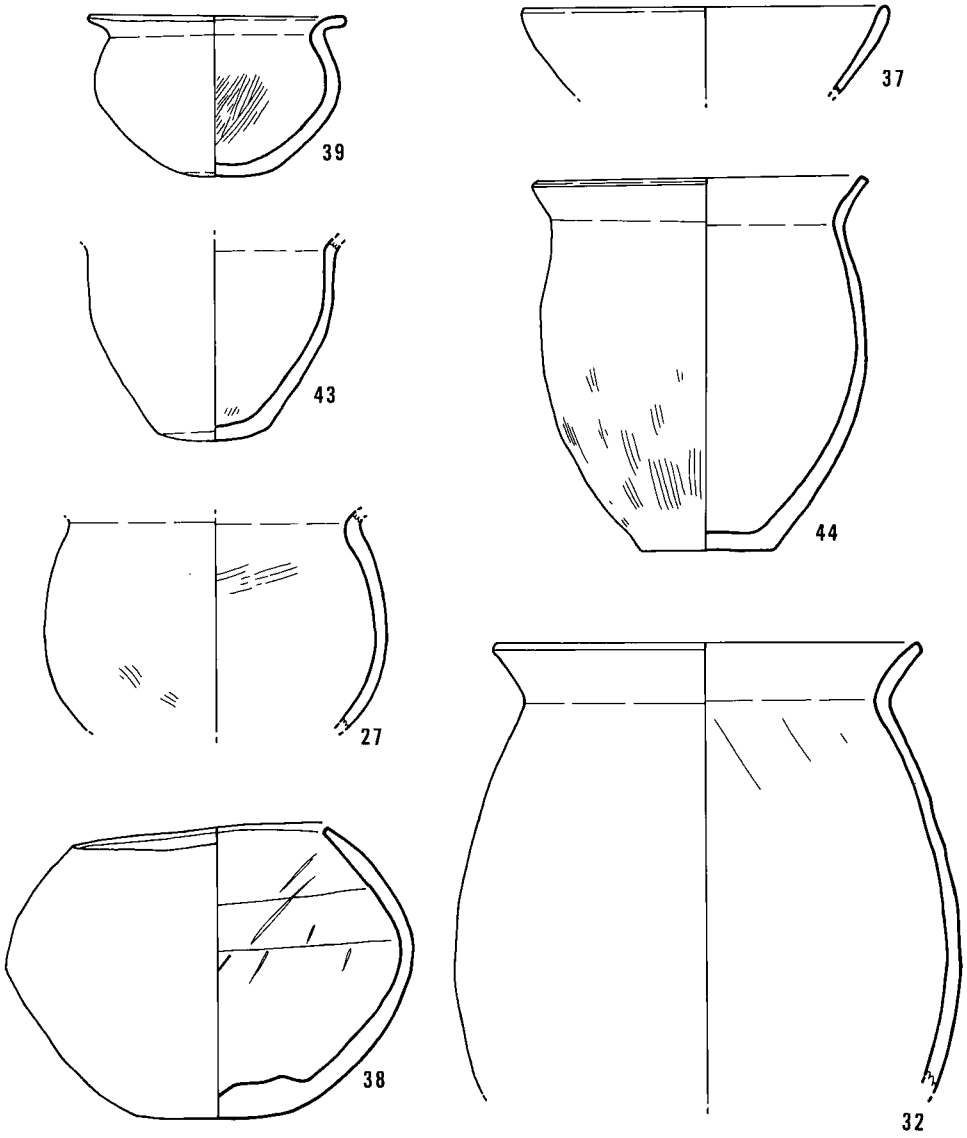
28　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。口縁部は短く「く」の字状に屈折している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胴部下半には煤が付着している。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は乳黄褐色を呈する。口径14.4cm、胴最大径20.8cm、器高21cmを測る。

29　器高の脚部片である。ややシャープさに欠け、胴部が肥厚している。調整は外面が剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は外面が黄燈褐色、内面が灰褐色を呈する。底径15.8cmを測る。

31　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部中半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。復元口径15.4cmを測る。32　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は外面が黄茶褐色から燈褐色、内面が乳黄褐色から灰褐色を呈

する。復元口径20.2cm、胴最大径26.8cmを測る。

33 「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。口縁部は短く「く」の字状に屈折している。底部は丸みを帯びる。調整は外面が剝落が著しく不明であるが、内面はハケ調整である。また焼成は良好である。胴部下半には黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガン、金雲母が散見される。色調は黄赤褐色を呈する。口径11.4cm、胴最大径



第 22 図 34号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

15.3cm、器高14.1cmを測る。

34　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べ小さい。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明であるが、口縁部がヨコなで、内面でハケ調整である。また焼成は良好である。内面には煤の付着がみられる。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は外面が黄茶褐色から灰褐色、内面が灰褐色を呈する。復元口径15、7cmを測る。

35　頸部より口縁部にかけて残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭な稜線を持つ。頸部下端には断面三角凸帯が貼付される。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母、マンガンが散見される。色調は燈褐色を呈する。復元口径16、2cmを測る。

36　頸部上半より口縁部にかけて残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部はあまり明瞭にならない。頸部上端には断面三角凸帯が貼付される。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母、マンガンが散見される。色調は燈褐色を呈する。復元口径20.3cmを測る。

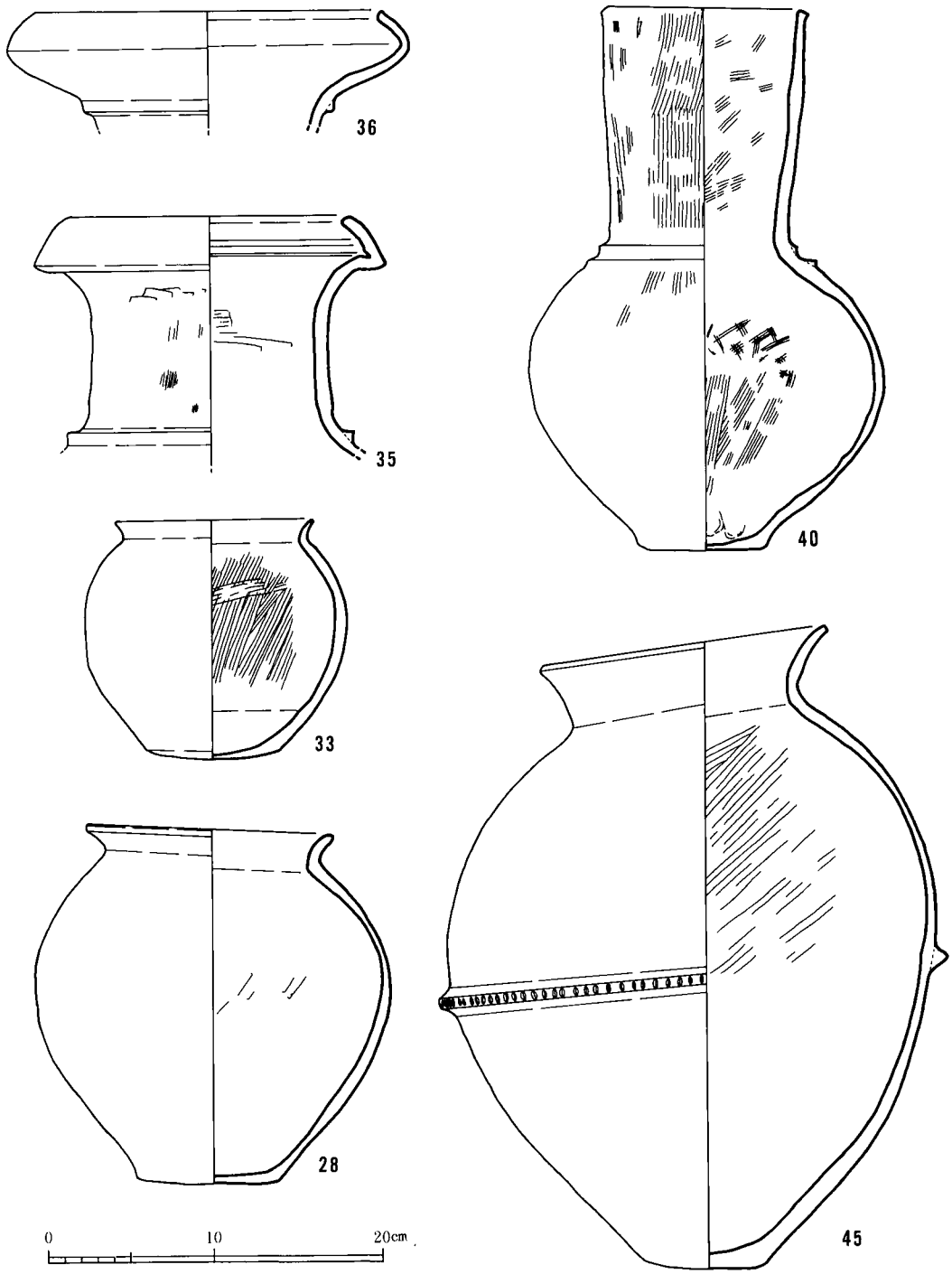
37　胴部上半のみ残す鉢である。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母、マンガンが散見される。色調は外面が燈褐色で内面が灰褐色を呈する。復元口径19.2cmを測る。

38　胴部が球状に張り出す偏平な無頸壺である。底部は丸みを持つ。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胴部上半には黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径19.5cm、胴最大径21.6cm、底径8.2cm、器高15.4cmを測る。

39　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べ小さい。口縁部は短く「く」の字状に屈折している。底部は丸みを帯びる。調整は外面が剝落が著しく不明であるが、内面がハケ調整である。また焼成は良好である。胴部下半には黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は灰黄褐色から明茶褐色を呈する。口径13.5cm、器高8.6cmを測る。

40　長頸壺である。頸部はやや斜め上方に立ち上がる。頸部と肩部の境界には２条の断面三角凸帯が貼付される。胴部は球状を呈する。底部は小さく、若干丸みを帯びる。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は燈褐色を呈する。口径11cm、底径6.7cm、器高32cmを測る。

41　脚部片である。脚端部は外方に張り出す。調整は外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は黄燈褐色を呈する。底径4.6cmを測る。



第 23 図　34号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

42　「く」の字状口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ小さい。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は外面が淡黄褐色、内面が灰黄褐色を呈する。復元口径25.6cmを測る。

43　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。底部は丸みを帯びる。口縁部が欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は灰褐色を呈する。復元口径5.9cmを測る。

44　「く」の字状口縁を持つ小型甕である。胴部最大径は口径に比べやや小さい。口縁部は「く」の字状にゆるやかに屈折している。底部は平坦である。調整は外面が剝落が著しく不明であるが、外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多くみられ、マンガンが散見される。色調は外面が燈褐色を呈する。口径17cm、胴最大径16.1cm、器高19.9cmを測る。

45　「く」の字状口縁を持つ大型甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。口縁部は「く」の字状にやや長めに、ゆるやかに屈折している。胴最大径部下には断面三角凸帯が貼付される。底部は小さく、丸みを帯びる。調整は外面が剝落が著しく不明であるが、内面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は茶黄褐色を呈する。復元口径16.7cm、器高36.7cmを測る。

46　「く」の字状口縁を持つ大型甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。口縁部は「く」の字状に屈折している。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は口縁部はヨコなで、胴部内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在している。色調は茶褐色から燈褐色を呈する。復元口径30.1cm、胴最大径33.4cmを測る。

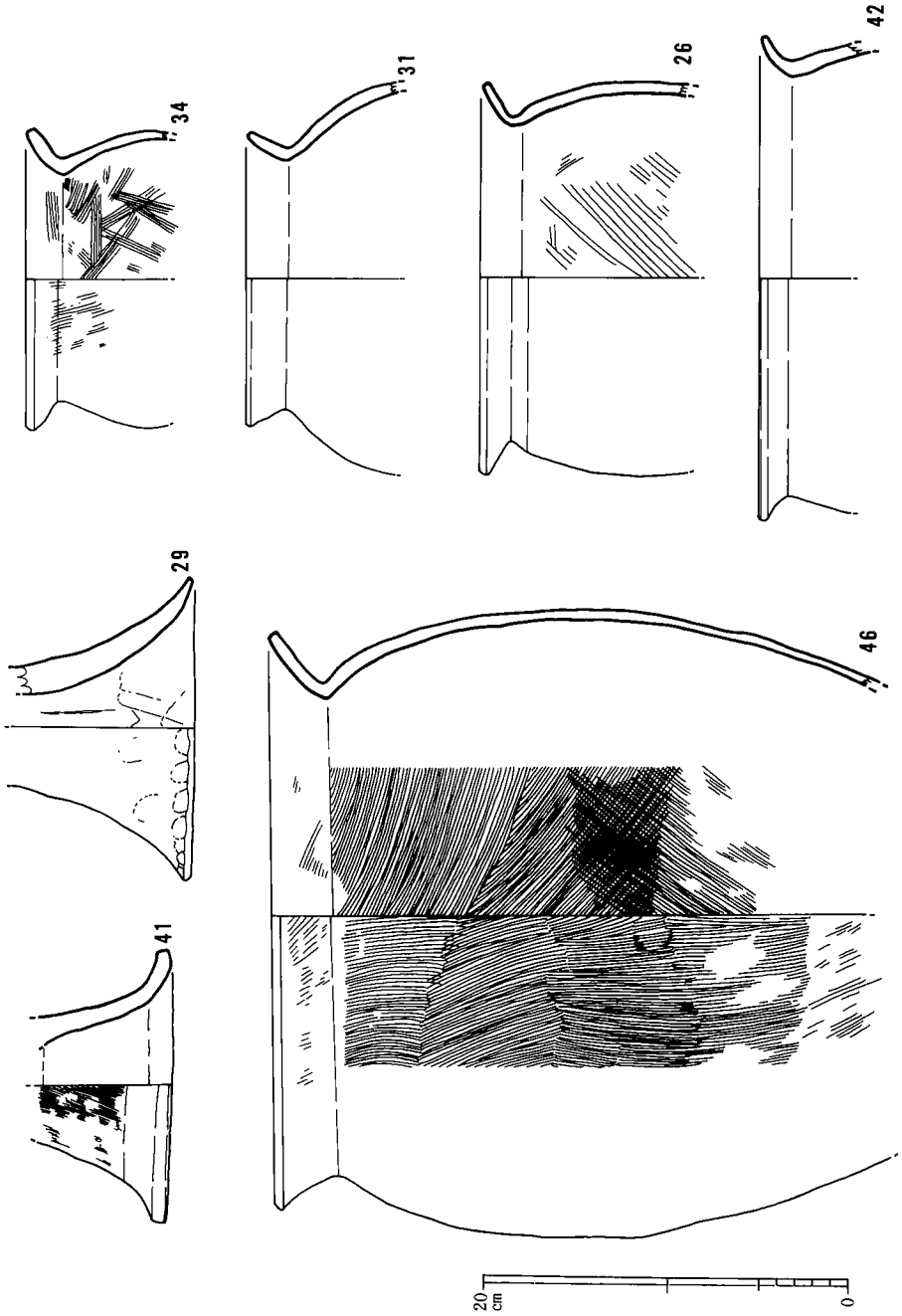
36号竪穴住居（図版11、第13図）

81　土師質の皿である。調整は内外面ナデ調整で、底部はヘラ切り離しである。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含み、金雲母が散見される。色調は黄燈褐色を呈する。口径11cm、器高2.7cmを測る。

82　須恵質の杯蓋ある。天井部は丸みを帯び、口縁端は丸くおさまる。天井部にはヘラ記号がみられる。調整は天井部で回転ヘラ削り、内外面では回転ヨコナデである。焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は外面が紫灰色、内面が青灰色を呈する。口径11.5cm、器高3.5cmを測る。

93　土師質の高杯である。脚部が欠失している。杯部底面が丸みを帯び、その後屈曲して外反して立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含む。色調は黄褐色から燈褐色を呈する。口径12.3cmを測る。

土坑4（第13図）



第 24 図　34号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

98　須恵質の杯身である。立ち上がりは短く内傾し、身受けは短くやや上方にのびる。底部にはヘラ記号がある。調整は底部が丸みをもたせながら回転ヘラ削り、内外面は回転ヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は灰色である。口径10.7cm、器高3.8cmを測る。

99　土師質の高杯である。脚部が欠失している。杯部底面が丸みを帯び、その後屈曲して外反して、直線的に立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含む。色調は燈褐色を呈する。口径11.1cmを測る。

土坑５（図版、第13図）

100　「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに長く屈折して、端部はややつまみ上げられる。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。口径10.2cmを測る。

土坑６（第13図）

101　「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに屈折している。胴部上方から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明であるが、外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径22cmを測る。

土坑８（第13図）

102　「く」の字状口縁を持つ土師質の小型甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに長く屈折している。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部がヨコナデ、外面がハケ調整、内面がヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は茶褐色を呈する。口径13.8cmを測る。

103　須恵質の杯身である。立ち上がりは短く内傾し、身受けは短くやや上方にのびる。底部にはヘラ記号がある。調整は底部が丸みをもたせながら回転ヘラ削り、内外面は回転ヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は茶灰色である。口径9.4cm、器高３cmを測る。

土坑９（第13図）

104　須恵質の杯身である。蓋受け部がなく椀形をなす。平底で口縁部へ斜めに立ち上がる。底部にはヘラ記号がある。調整は底部がヘラ削り後ナデ、内外面は回転ヨコナデである。また焼成は堅固である。胎土は緻密である。色調は外面灰色、内面灰黒色である。復元口径9.6cm、器

高3.2cmを測る。

2　各遺構出土のその他の遺物

石器（図版24～26、第25～27図）

512　半折の石包丁である。22号竪穴住居出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長5.1cm、最大幅2.9cm、厚さ0.5cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は17ｇを測る。

513　半折の石包丁である。14号竪穴住居出土。両面共に擦痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長5.9cm、最大幅3.1cm、厚さ0.5cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は14.5ｇを測る。

514　完形の石包丁である。北西側包含層出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。長さ11.5cm、最大幅5.1cm、厚さ0.5cm、紐穴中央間距離2.4cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は62ｇを測る。

515　完形の石包丁である。16号竪穴住居出土。両面共に磨研・擦痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。長さ12.7cm、最大幅4.7cm、厚さ0.7cm、紐穴中央間距離2.1cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は63ｇを測る。

516　半折の石包丁である。32号竪穴住居出土。両面共に擦痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長9.3cm、最大幅5cm、厚さ0.6cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は44ｇを測る。

517　半折の石包丁である。32号竪穴住居出土。両面共に擦痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長7.8cm、最大幅4.7cm、厚さ0.6cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は31ｇを測る。

518　両端が折れる石包丁である。(26) 号竪穴住居出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長5.5cm、最大幅3.6cm、厚さ0.3cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は17ｇを測る。

519　両端が折れる石包丁である。29号竪穴住居出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長5.2cm、最大幅5.1cm、厚さ0.4cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は22ｇを測る。

520　砥石である。29号竪穴住居出土。不整４角形状を呈していて、長さ3.5cm、高さ4.2cm、厚さ1.4cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は４面で、各面は中央部が窪んでいる。現存重量は38ｇを測る。

521　砥石である。16号竪穴住居出土。破片で１面のみ砥面を残す。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面はほぼ平坦である。現存重量は90ｇを測る。

522　砥石である。16号竪穴住居出土。不整４角形状を呈していて、長さ6.4cm、高さ4.8cm、厚さ1.6cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は４面で、各面は中央部が窪んでいる。現存重量は73ｇを測る。

523　砥石である。16号竪穴住居出土。不整４角形状を呈していて、長さ7.4cm、高さ8.4cm、最大厚2.1cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は４面で、各面は中央部が窪んでいる。現存重量は127.5ｇを測る。

524　大型の叩き石片である。13号竪穴住居から出土している。石材は玄武岩系である。表裏側面共はなめらかに加工されている。重量は97.5ｇを測る。

526　支脚である。13号竪穴住居内カマド出土。長さ16.8cm、最大幅6.2cm、現存重量948ｇを測る。太い方の先端部は、支脚としての機能を果たすため、面を持つように打ち欠かれている。

527　紡錘車である。25号竪穴住居出土。上端直径3.2cm、下端直径4.1cm、高さ1.4cm、孔径0.6cm、現存重量42.5ｇを測る。上面はなめらかである。石材は滑石である。

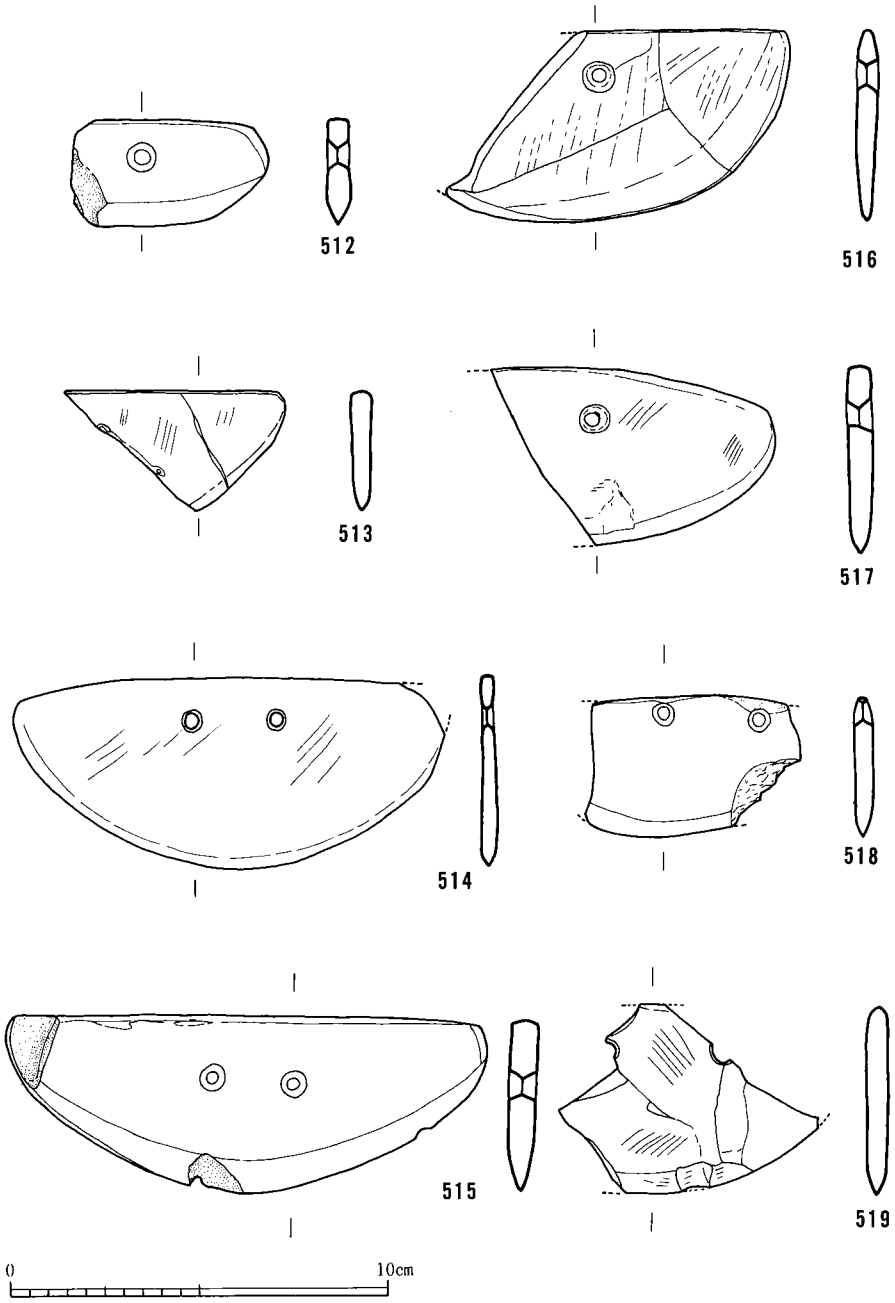
528　紡錘車である。36号竪穴住居内カマド出土。上端直径3.5cm、下端直径4.1cm、高さ0.9cm、孔径0.6cm、現存重量32.5ｇを測る。上面外周部から中央部の孔に向かって刻線が見られる。石材は滑石である。

土製品（図版25、第26図）

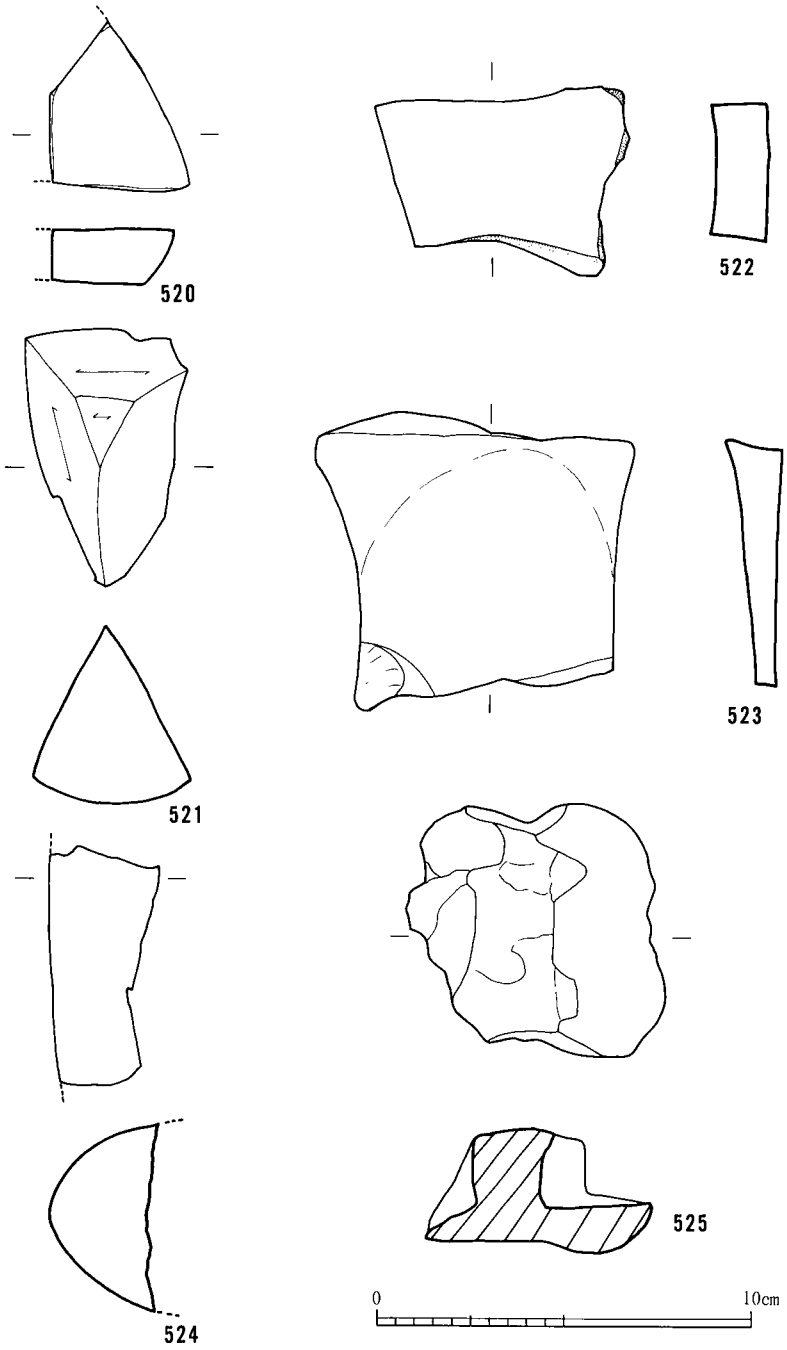
525　土製模造鏡状を呈する。22号竪穴住居内カマド出土。中央部に持ち手がある。しかし、鏡面は凹凸が著しい。現存長6.5cm、幅7.1cm、持ち手長5.5cm、幅3.6～2.5cm、現存重量82ｇを測る。

鉄器（図版30、第28図）

602　逆三角形式鉄鏃である。22号竪穴住居出土。基部を欠失している。現存長7.8cm、先端幅2.5cm、現存重量18ｇを測る。



第 25 図　各遺構出土石器実測図（S＝1／2）



第 26 図　各遺構出土石器・土製品実測図（S＝1／2）

第3節　小結

2区の調査では、約2400m²を発掘し、竪穴住居25軒、掘立柱建物10棟、土坑5基、溝1条、馬蹄形周溝1基、土壙墓2基、落とし穴状遺構1基、ピット等が検出され、先述のような遺物の出土をみた。

25軒の竪穴住居は、調査区の東西端では検出されず、また中央部でも重複関係が少なく、やや分散的に配置されている。25軒の内、そのプランを確認し得るものが16軒あるが、他のものもその様相は把握し得る。それらは、以下の4つのタイプに区分される。

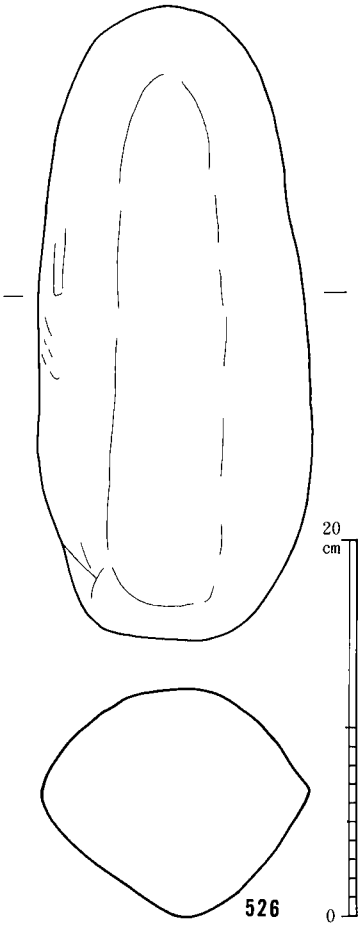
・Aタイプ；長方形プランを有し、ベット状遺構、屋内土坑、張り出し部を備えるもの。また、主柱穴は、中央の炉跡を挟んで2本柱になるもの。

例）16号、30号、32号竪穴住居。

長方形プランの大きさ、ベットの付設位置などは以下のようである。

16号竪穴住居　長軸6,82M×短軸4,47M、北側長壁及び東側短壁にベット状遺構、西側短壁に張り出し部。

30号竪穴住居　長軸4,28M×短軸3,26M、北側短壁にベット状遺構、東側長壁に張り出し部。



第 27 図　支脚実測図（S＝1／4）

32号竪穴住居　長軸5,88M×短軸3,92M、東西側短壁、北側に寄ってベット状遺構（共に張り出し部を持つ）。

・Bタイプ；正方形プランを有し、ベット状遺構、屋内土、張り出し部を備えるもの、また、主柱穴は、中央の炉跡を挟んで2本柱になるもの。

例）34号竪穴住居。

正方形プランの大きさ、ベットの付設位置などは以下のようである。

34号竪穴住居　長軸4,65M×短軸4,04M、西側短壁にベット状遺構(張り出し部でもある)、北側、東側壁に張り出し部、花弁状になる。

・Cタイプ；長方形プランでカマドを有する。主柱穴は4本柱である。

例）20号、21号竪穴住居。

長方形プランの大きさ、カマドの付設位置などは以下のようである。

20号竪穴住居　長軸4,27M×短軸３M、北側短軸にカマド（突出型）あり。

21号竪穴住居　長軸4,5M以上×短軸4,5M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

・Dタイプ；正方形プランでカマドを有する。主柱穴は４本柱である。

例）11号、12号、13号、14号、15号、17号、18号、19号、22号、23号、24号、25号、26号、27号、28号、29号、31号、33号、35号、36号竪穴住居。

正方形プランの大きさ、カマドの付設位置などは以下のようである。

11号竪穴住居　4,25M×3,85M以上、カマド不明。

12号竪穴住居　3,48M×3,3M、北側短壁にカマド(突出型）あり。

13号竪穴住居　3,85M×3,32M、北側短壁にカマド（突出型）あり。

14号竪穴住居　4,15M×4,42M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

15号竪穴住居　南壁4,3M、カマド不明。

17号竪穴住居　4,65M×4,24M、西側壁にカマド痕跡あり。

18号竪穴住居　3,2M×3,01M、北側短壁にカマド（突出型）あり。

19号竪穴住居　南壁3,3M、北側壁にカマド痕跡あり

22号竪穴住居　5,7M×6,01M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

23号竪穴住居　3,7M×3,98M、カマド不明。

24号竪穴住居　東壁4,63M、カマド不明。

25号竪穴住居　5,03M×4,99M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

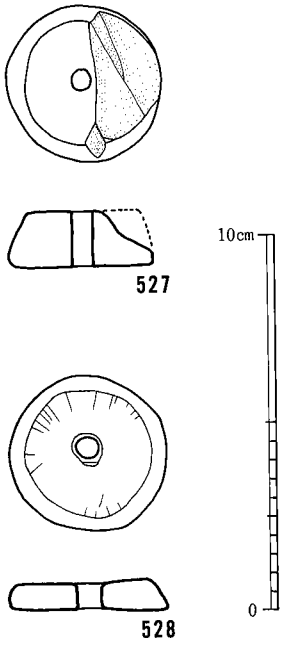
28号竪穴住居　北壁3,26M、北側短壁にカマド（突出型）あり。

29号竪穴住居　5,36M×4,86M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

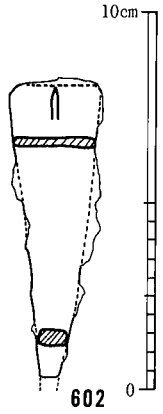
31号竪穴住居　3,42M×3,88M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

33号竪穴住居　4,52M×4,42M、カマド不明。

35号竪穴住居　3,75M×3,68M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。



第 28 図　25号、36号竪穴住居出土紡錘車実測図（S＝1／2）



第 29 図
22号竪穴住居出土鉄器実測図（S＝1／2）

36号竪穴住居　4,59M×4,45M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

また、10棟の掘立柱建物の柱の配置関係は、以下のようである。

（1間×1間）6号掘立柱建物；（1間×2間）2号、4号、5号、7号、8号掘立柱建物（2間×2間）1号、9号掘立柱建物；（3間×4間）3号、10号掘立柱建物

こうして検出された25軒の竪穴住居や10棟の掘立柱建物(以下、建物とする)、土坑、馬蹄形周溝（以下、周溝とする）等の先後関係は以下のようになる。

（古）4号土坑＞13号竪穴住居（新）；（古）14号竪穴住居＞9号建物（新）

（古）16号竪穴住居＞15号竪穴住居（新）；（古）17号竪穴住居＞18号竪穴住居（新）

（古）22号竪穴住居＞4号建物（新）；（古）27号竪穴住居＞26号竪穴住居（新）

（古）25号竪穴住居＞24号竪穴住居＞23号竪穴住居＞3号建物（新）

（古）31号竪穴住居＞29号竪穴住居（新）；（古）6号土坑＞1号建物（新）

（古）34号竪穴住居＞35号竪穴住居＞7号土坑（新）；（古）1号周溝＞2号建物（新）

（古）5号土坑＞5号建物（新）；（古）9号建物＞10号建物（新）

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、石包丁、砥石、鉄鏃、支脚、紡錘車等があり、弥生時代後期中葉～後半、古墳時代後期頃のものである。

まず、出土土器の器種構成をまとめてみると、以下のようになる。

10号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）、杯蓋（須恵器）

14号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）、杯身（須恵器）

16号竪穴住居；複合口縁壺、長頸壺、朝顔型口縁壺、「く」の字状口縁を持つ甕、鉢、手捏ねの支脚。底部はやや丸みを持つ。

21号竪穴住居；甑（土師器）　**23号竪穴住居**；杯身（須恵器）、高杯（須恵器）

24号竪穴住居；高杯、鉢、「く」の字状口縁を持つ甕（共に土師器）

32号竪穴住居；長頸壺、球形壺、無頸壺、複合口縁壺、「く」の字状口縁を持つ甕、鉢、器台。底部は平坦、やや丸みを持つ、上げ底の3タイプがある。

33号竪穴住居；坩（土師器）　**36号竪穴住居**；皿、高杯（共に土師器）、杯蓋（須恵器）

34号竪穴住居；長頸壺、複合口縁壺、無頸壺、「く」の字状口縁を持つ甕、鉢、器台、底部は小さく丸みを持つ、平坦の2タイプがある。

4号土坑；杯身（須恵器）、高杯（土師器）　**9号土坑**；杯身（須恵器）

5号土坑；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）

6号土坑；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）

8号土坑；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）、杯身（須恵器）

第４章

日永遺跡３区の調査

第１節　はじめに

第２節　各遺構出土遺物

　１　竪穴住居跡出土土器

　２　各遺構出土のその他の遺物

　３　広形銅矛、広形銅戈について

第３節　小結

第４章　日永遺跡３区の調査

第１節　はじめに

３区の調査は、今回調査した「日永遺跡」の発掘調査区の西側にあり、耳納連山から筑後川に向かう扇状地上に位置する。調査区は東側から西側へ標高49.4ｍ～48.8ｍへと低くなり、その間礫石が混じる土石層は他の調査区と異なり、ほとんど見られない。他の調査区と比較して遺構の密度はさほど高くない。西側は小さな谷を挟んで４区と、東側は農道を挟んで２区と対する。調査面積は約1700㎡である。

調査の結果、検出した遺構には、竪穴住居３軒、掘立柱建物10ｍ、土坑１基、溝５条、銅矛・銅戈埋納遺構、ピット等があった。特に、銅矛・銅戈埋納遺構は、検出当時、全国でも初見の広形青銅器のセット出土として話題を呼んだ。

第２節　各遺構出土遺物

調査区からは、分散的に計３軒の竪穴住居跡を検出した。そのうち２軒は調査区域外に伸びて、全容を把握することができない（図版５、付図３）。

形状のわかる37号竪穴住居には、長方形プランで、ベットを備えるもので、他の調査区検出の住居と比較して、最も規模の大きな竪穴住居である。

１　竪穴住居出土土器

37号竪穴住居（第30図）

105　平底の底部からやや内弯しながら立ち上がり、口縁部に達する鉢である。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。内外面とも二次加熱のため黒斑あり。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は黄灰色を呈する。復元口径11.7cm、器高9.1cmを測る。

106　丸底の底部から直線的に立ち上がり、口縁部に達する鉢である。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。内外面とも二次加熱のため黒斑あり。胎土は緻密で、マンガン、金雲母を含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径9.3cm、器高7.9cmを測る。

107　胴部下方から直線的に立ち上がり、口縁部に達する鉢である。底部を欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、マンガンを含む。色調は灰黄褐色を呈する。復元口径11.6cmを測る。

110　「く」の字状口縁を持つ大型甕である。口縁部径が胴最大径より小さい。口縁部が「く」

の字状に強く屈折している。底部はやや丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明であるが、外面ハケ調整である。また焼成は良好である。二次加熱のため黒斑が見える。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は外面が灰黄褐色から燈褐色、内面が黄褐色を呈する。口径20.6cm、胴最大径26.6cm、底径8.8cm、器高37.8cmを測る。

38号竪穴住居（第30図）

108　胴部が球状に張り出す手捏ねの小壺である。胴部からやや直線的に立ち上がる頸部を持ち、その後短く外反し口縁部に達する。調整は内外面ともナデ。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く混在し、金雲母を含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径4.1cm、器高5.3cmを測る。

土坑９（第30図）

109　「く」の字状口縁を持つ土師質の甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかに短く屈折している。底部は丸底である。調整は口縁部がヨコナデ、外面がハケ調整、内面がヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンを含む。色調は黄褐色を呈する。口径18cm、器高30.3cmを測る。

２　各遺構出土のその他の遺物

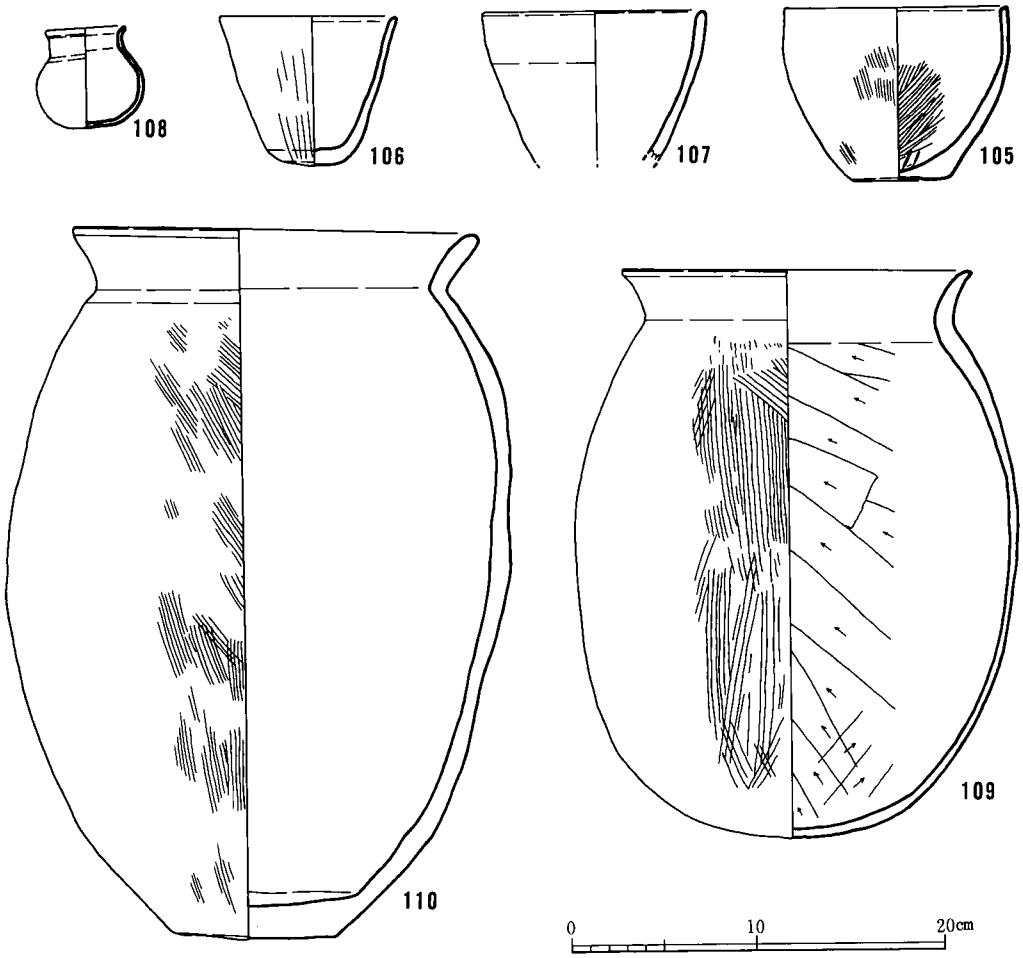
529　砥石である。全長20.1cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は主として５面あり、一番面積が広い部分の縦断面形態は船底状をなし、横断面形態は不整四角形をなしている。現存重量は730ｇを測る。26号竪穴住居から出土している。

530　砥石である。欠失しているためその全容は把握できない。板状のものが半折していて、一面のみ残存する。石材は、花崗岩系で、粒子は粗粒であるため、粗砥になると思われる。縦横断面は中央部分が若干くぼむが、ほぼ平坦である。現存重量は130ｇを測る。26号竪穴住居から出土している。

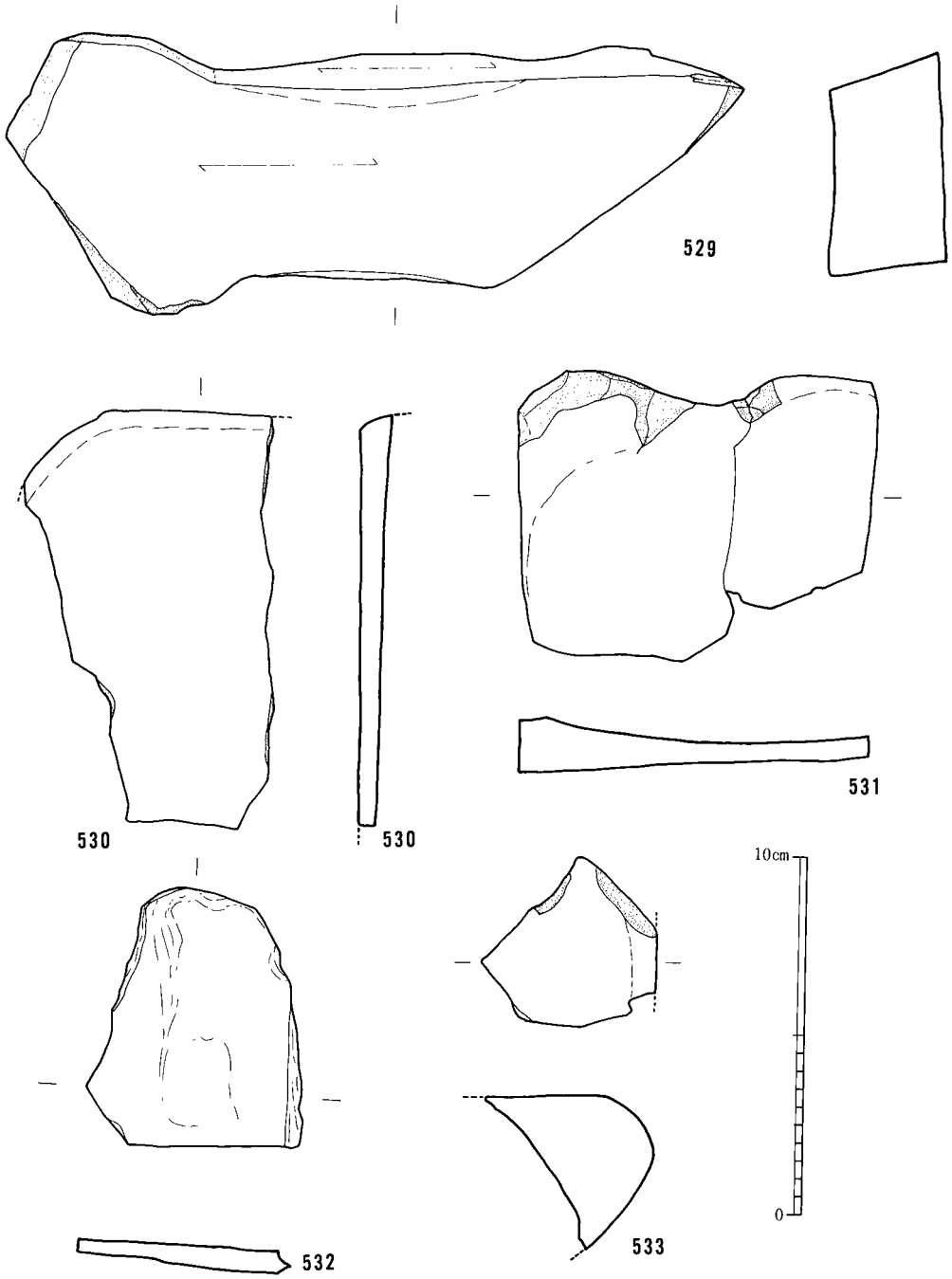
531　砥石である。残存長9.6cm、幅7.9cmを測る。かなり使い込んでいるため、板状から偏平状になっている。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は主として４面ある。１つの砥面では、刻線状のものが縦横に走る。現存重量は170ｇを測る。31号竪穴住居から出土している。

532　打製石斧である。26号住居跡から出土しているが、竪穴住居に伴うものではない。細長い台形状を呈する。中央部から欠失している。現存長7.2cm、幅６cm、厚さ３mm程度を測る。縄文時代後晩期に盛行する形態を示す。石材は片岩系である。現存重量は60ｇを測る。

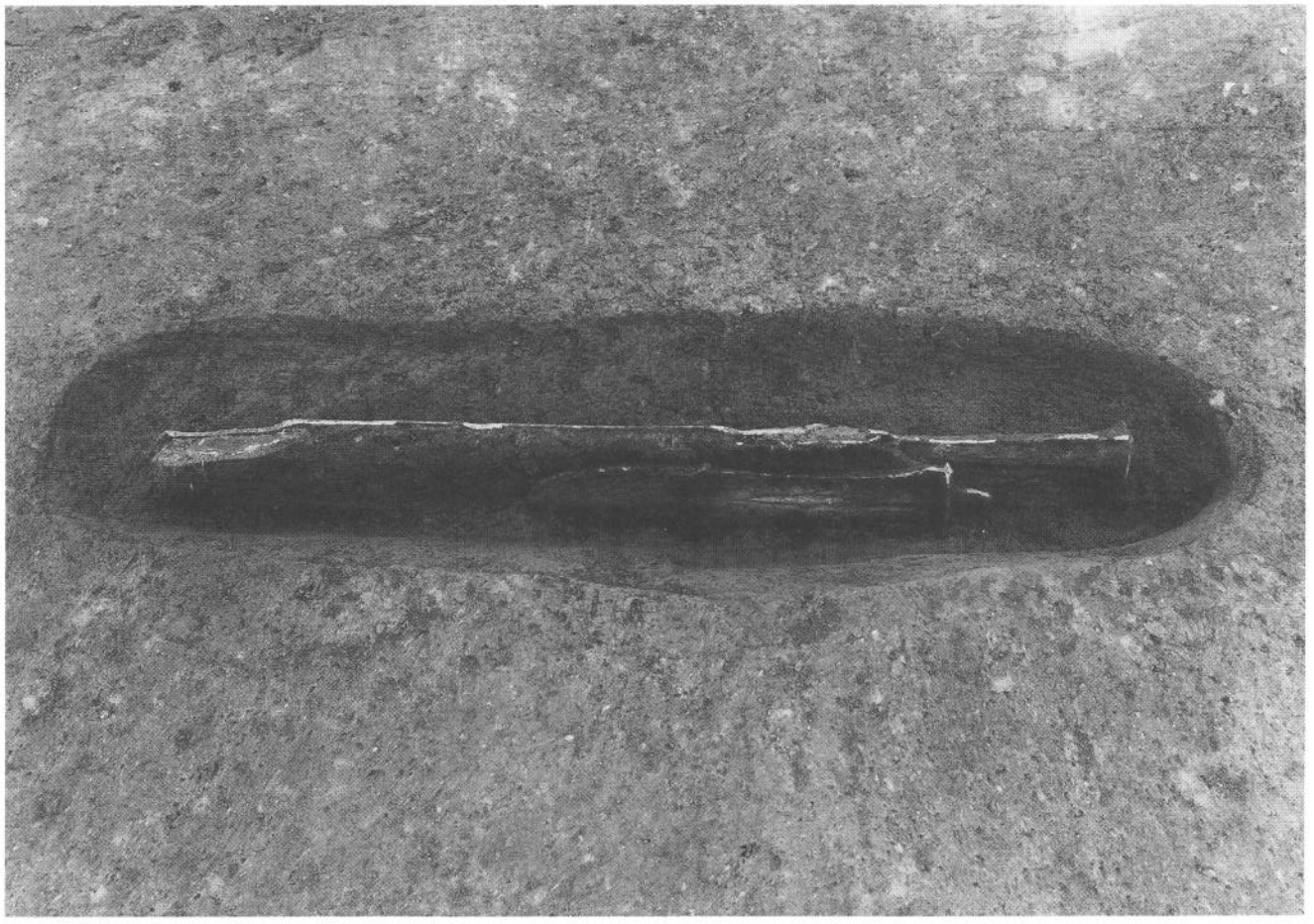
533　磨製石斧である。26号竪穴住居から出土している。石材は、玄武岩系である。大半を欠失している。現存重量は80ｇを測る。



第 30 図 37、38号 竪穴住居、6号土坑出土土器実測図（S＝1／4）



第 31 図　各遺構出土石器実測図（S＝1／2）



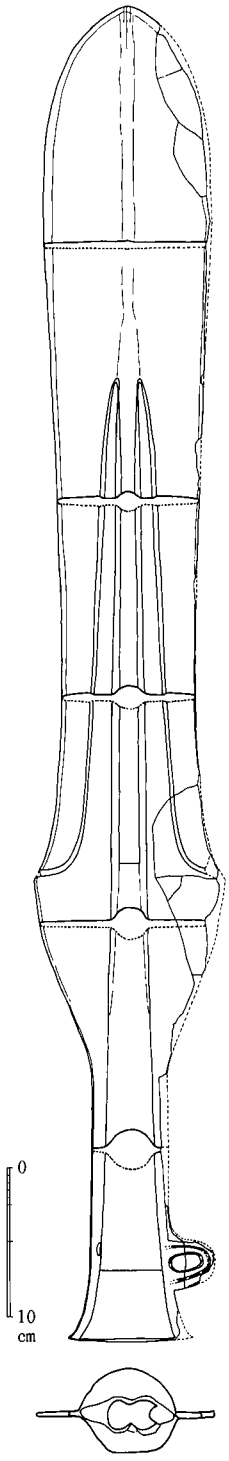
広形銅矛・広形銅戈出土状況

3　広形銅矛・広形銅戈について

出土状況

これらは、調査区北東隅で検出された。その検出状況を記してみると、まず従来どおり、バックフォーにより耕作土を少しずつ掘り下げていくと、表土から約30cmのところで、１本の青銅器が刃部を立てた状態で見つかった（この時、青銅器の形式については把握できていなかった。幸運にも刃部の一部を傷つけたにすぎなかった。現在の大規模発掘調査では耕作土の除去にはバックフォーが大いに活用されるわけだが、このような重要な遺構・遺物の検出にあたっては、オペレーターの高度な技術が必要とされる。この調査区のオペレーターを務めた山本幸一氏に心より感謝の意を表したい。)。そこで、その後はバックフォーの使用をやめ、人力で作業を進める事とした。移植ゴテで周辺をかきだしていくと青銅器はとても長く、それを囲むような長楕円形の遺構が確認できるようになってきた。さらに青銅器の横にも接するように他の青銅器の刃部が見られた。土層断面箇所を残して遺構内部を精査すると、長い方は広形銅矛であることが確認できたが、短い方は広形銅矛のちょうど中央よりやや上に鋒先部を置き、刃部を立てた状態にあり、関部や茎部の確認から銅戈になりそうであった。しかし、セット関係からいくと、広形銅戈になると推測できたが、従来この広形銅戈の鋳型のみが見つかっているだけであり、製品が見つかっていないので、全容を見るまでは確認し得なかった。

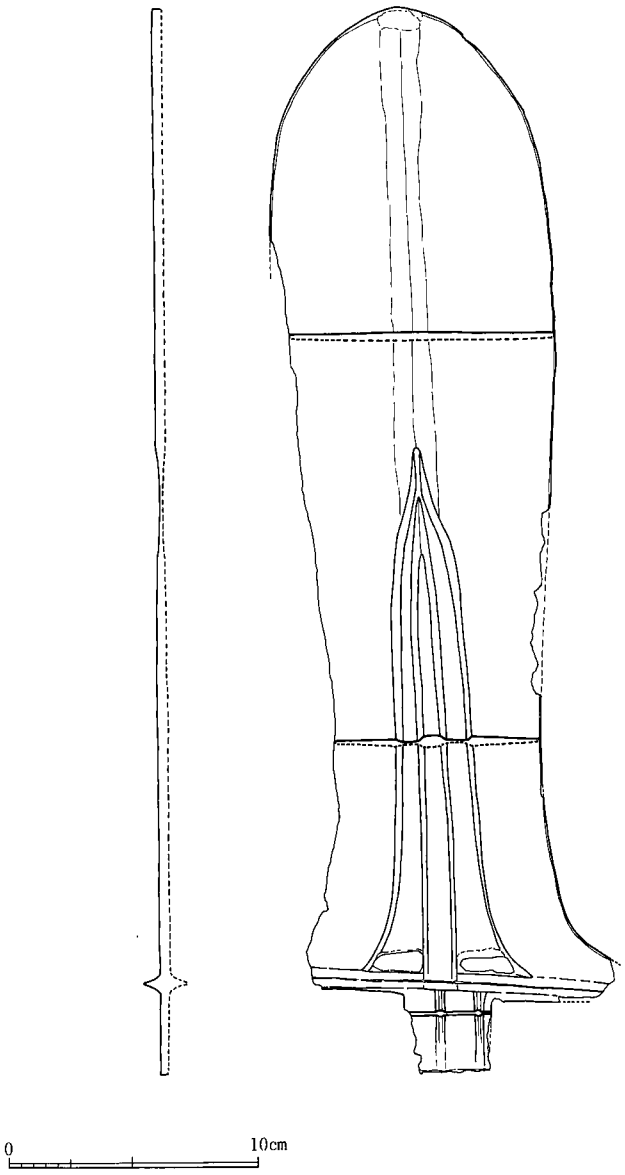
その遺構は長楕円形土坑で、長さ100cm、幅25cm、深さ15cmを測り、さらに広形銅矛・広形銅戈の２本は、鋒部を北東に向け、刃部を接するようにして立てて埋納されており、土層観察から、長さ90cm、幅10cm、深さ15cm程の木箱状の入れ物に入っていた可能性が高い事がわかった。



第 32 図
広形銅矛実測図（S＝1／5）

広形銅矛（第32図）

広形銅矛は、全長89cm、刃部最大幅11cm、関幅12cmを測る。脊上には縞がなく、節帯は刻線ではなく一条の突帯になる。ま



第 33 図　広形銅戈実測図（S＝1／3）

た、耳部は、節帯中央と対応する偏平板状化したもので、２条の突帯を巡らし、無孔である。また、袋部側面には、ヒレ状のものをつけ、部内の真土は全く抜かれていない。

広形銅戈（第33図）

広形銅は、全長42.8cm、最大身幅11.3cm、最小身幅8.3cm、援長39.4cm、茎長3.4cm、茎幅3.5cm、関部は一部欠失しているが、11.6cm以上を測る。樋には、鋸歯文などの文様はない。また、茎部には、一条の突線を鋳出している。

発砲ウレタンによる遺構切り取り作業は、九州歴史資料館の横田義章参事補佐の指導により実施された。

また、遺構写真は、九州歴史資料館の石丸洋参事補佐にお願いした。

なお実測図は、保存処理が表面のみであるため、裏面については計測不能であるので、波線で示している。

作業風景

第3節　小結

3区の調査では、約1200m²を発掘し、竪穴住居3軒、掘立柱建物10棟、土坑1基、溝5条、銅矛・銅戈埋納遺構1基、ピット等が検出され、上記のような出土遺物の出土をみた。

竪穴住居は、3軒の内、そのプランを確認し得るものが1軒あった。それは、長方形プランを有し、ベット状遺構、屋内土坑、屋内溝を備えるものであった。また、主柱穴は、中央の炉跡を挟んで2本柱になるものであった。

そのプランの大きさやベットの付設位置などは以下のようである。

37号竪穴住居；長軸8，65M×短軸6,9M、東側短壁にベット状遺構。

また、検出された3軒の竪穴住居は、調査区内に分散的に存在していた。

10棟掘立柱建物の柱の配置関係は、以下のようである。

1間×1間　15号、19号、20号掘立柱建物

1間×1間以上　16号掘立柱建物

1間×2間　11号、12号、13号、14号、18号掘立柱建物

4間×7間以上　17号掘立柱建物

各遺構の切り合いからその先後関係をみると、以下のようになる。

（古）37号竪穴住居＞9号土坑（新）

（古）37号竪穴住居＞11号建物（新）

（古）39号竪穴住居＞17号建物（新）

出土遺物には、弥生土器、土師器、砥石、打製石斧等があり、弥生時代後期中葉、古墳時代後期頃のものである。

ここで、出土土器の器種構成をまとめてみると、以下のようになる。

37号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、鉢。底部はやや丸みを持つ。

38号竪穴住居；ミニチュア土器（壺形）。

9号土坑；甕（土師器）。

つまり、上記でみたように遺構の切り合い関係、出土土器の先後関係からその時期差は追認できる事がわかった。

広報 うきは

編集　浮羽町役場・浮羽町公民館　　発行者　鎗水速太

町の人口
10月1日現在（前年同月比）
人口……19,356（＋30）
男……9,332（＋10）
女……10,024（＋20）
世帯数……4,593（＋20）

日永遺跡発掘現場（山北で）

銅矛（上）と銅戈（下）

'86 11 No 189

古代の人々の生活を探るカギに

――日永（ひなが）遺跡発掘調査――

山北の国道210号浮羽バイパス建設予定地内で、九月二十日から十一月末まで県教育委員会による埋蔵文化財発掘調査が進められています。

十月初め調査地区内の山北字日永の発掘現場から、広形銅矛（全長八十九㌢、幅十㌢以上）と広形銅戈（全長四十四㌢、幅九～十一㌢）が、全国で初めてセットで出土しました。

この銅矛、銅戈は弥生時代後期から古墳時代初頭のものとみられています。

日永遺跡では、弥生時代後期後半（約千八百年前）の住居跡三軒、土器、石包丁、砥石や、古墳時代後期（六世紀後半）の住居跡二十数軒、須恵器、土師器、鉄鏃（鉄のやじり）なども検出、出土しています。

青銅器は集落の祭祀（さい）品として穀物の豊作を祈るために使用されたと考えられ、古代の"祭り"を解明する貴重な手掛かりとなりそうです。

この発掘や古墳などから、浮羽の地が、遠い昔から栄えていたことをうかがうことができます。

第５章

日永遺跡４区の調査

第１節　はじめに

第２節　各遺構出土遺物

　１　竪穴住居出土土器

　２　各遺構出土のその他の遺物

第３節　小結

第５章　日永遺跡４区の調査

第１節　はじめに

４区の調査は、今回調査した「日永遺跡」発掘調査区の最西端にあり、耳納連山から筑後川に向かう扇状地上に位置する。調査区は東から西側へ標高49.4ｍ～48.6ｍへと低くなり、その間礫石が混じる土石層が数カ所見られる。各遺構は、なるべく礫石が少ないところを見つけるようにして作られている。他の調査区と比較して遺構の密度はきわめて低くなる。東側に小さな谷を挟んで３区と対峙する。調査面積は約5500㎡である。

調査の結果、検出した遺構には、竪穴式住居３軒、掘立柱建物２棟、土坑１基、溝１条、ピット等があった。

第２節　各遺構出土遺物

調査区域内からは、分散的に計３軒の竪穴住居跡を検出した。これは、先述したように調査区内には南北に土石層が交互に有るからと思われる（図版６、付図４）。

竪穴住居には、長方形プランを有し、ベットを備えるものとカマドを有するものの２種類がある。

１　竪穴住居出土土器

40号竪穴住居（図版12、第34図）

114　坩である。球形の胴部から長く「く」の字状に伸びる口縁部を持つ。底部は丸底である。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ調整、内面ヘラ削りである。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。口径7.9cm、胴最大径10.2cm、器高9.7cmを測る。

41号竪穴住居（第34図）

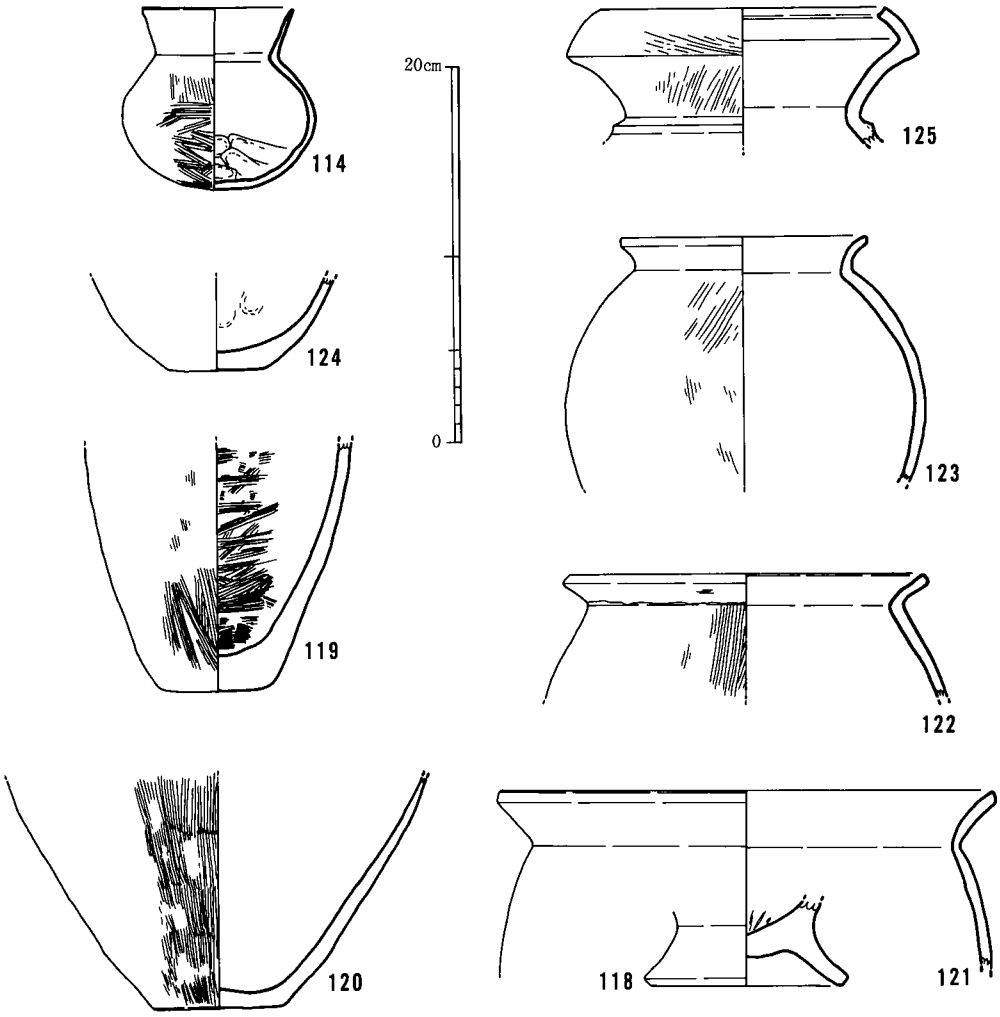
118　脚台片である。調整は剥落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンを含む。色調は黄褐色を呈する。底径10cmを測る。

119　底部片である。底部は肥厚している。底部より胴部にかけて内弯しながら立ち上がる。調整は内外面ともにハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンを含む。色調は黄褐色を呈する。底径5.2cmを測る。

120　底部片である。底部は平底である。底部より胴部にかけて斜め上方に立ち上がる。調整は

外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンを含む。色調は黄褐色を呈する。底径6、8cmを測る。

121　「く」の字状口縁を持つ甕である。口縁部は「く」の字状に緩やかにやや長く屈折している。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在し、金雲母を含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径26cmを測る。



第 34 図　40号、41号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

122　「く」の字状口縁を持つ甕である。口縁部は「く」の字状にやや短く屈折している。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明であるが、外面はハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径18.8cmを測る。

123　「く」の字状口縁を持つ短頸壺である。口縁部は「く」の字状にやや短く屈折している。胴部下方から底部にかけて欠失している。胴部は球形を呈する。調整は剝落が著しく不明であるが、外面はハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母が散見される。色調は燈褐色を呈する。口径13cm、胴最大径19cmを測る。

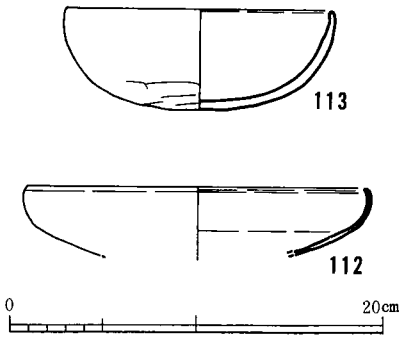
124　底部片である。底部は平底である。底部より胴部にかけて、斜め上方にやや丸みをもたせながら立ち上がる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在している。色調は黄褐色を呈する。底径5.2cmを測る。

125　肩部上半より口縁部にかけて残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部はあまり明瞭にならない。肩部上端には断面三角凸帯が貼付される。調整は剝落が著しく不明であるが、口縁部ナデ、外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径15cmを測る。

42号竪穴住居（第35図）

112　皿片である。底部を欠失している。口縁部をやや内弯気味におさめる。調整は内外面ナデ、底部辺がヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は黄褐色から燈褐色である。復元口径17.8cmである。

113　皿である。底部は丸みを持ち、丸く上方に立ち上がり口縁部に達する。調整は内外面ナデ、底部辺がヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は緻密である。色調は茶褐色である。復元口径13.7cm、器高5.4cmを測る。

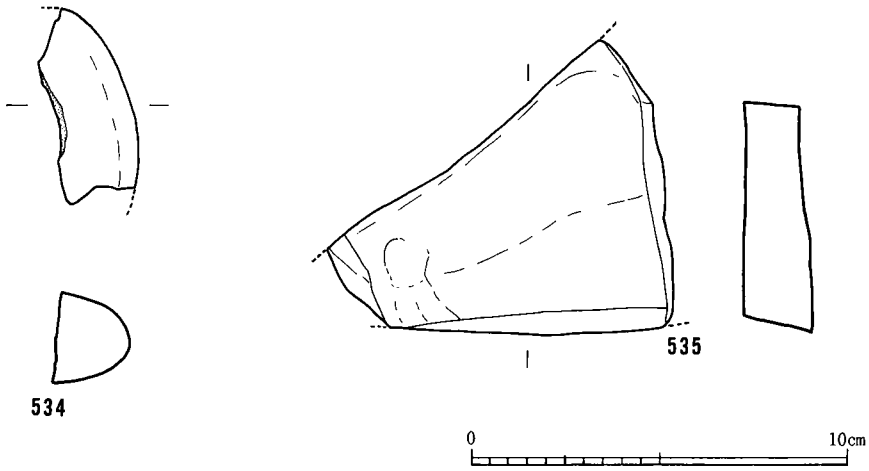


第 35 図　42号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

2　各遺構出土のその他の遺物

石器

534　叩き石片である。31号竪穴住居から出土している。全体の6分の1程残存していて、元来直径8.5cm程のものであったと推定される。石材は玄武岩系である。側面はなめらかに丸く、表裏面もなめらかに加工されている。現存する部分には敲打痕は見られない。重量は35ｇを測る。

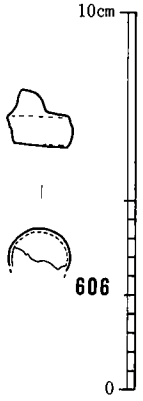


第 36 図　各遺構出土石器実測図（S＝1／2）

535　砥石である。31号竪穴住居から出土している。不整三角形状を呈していて、長辺9.7cm、高さ6.7cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は主として３面ある。表裏面は、砥面として利用される側面に近いほど、やや窪み薄くなる。側面はかなり湾曲するほど使い込んでいる。現存重量は204ｇを測る。

鉄器

606　用途不明の鉄器片である。42号竪穴住居から出土している。破片は４点あり、１点は半管形(直径３cm、長さ2.7cm、現存重量５ｇを測る)、他のものは棒状をなす。



第 37 図
42号竪穴住居出土鉄器
実測図（S＝1／2）

第3節　小結

４区の調査では、約1700㎡を発掘し、竪穴住居３軒、掘立柱建物２棟、土坑１基、溝１条、ピット等が検出され、上記のような出土遺物の出土をみた。

竪穴住居は、３軒共そのプランを異にしていた。それらは、以下のとおりである。

40号竪穴住居；2.3～2.5ｍ四方の正方形プラン、カマドなし、炭化材（焼失家屋）

41竪穴住居；長軸4.9M×短軸3.5M、長方形プラン、東側短壁にベット状遺構、屋内土広、北側長壁に張り出し部

42号竪穴住居；3.1～3.85ｍ四方の略正方形プラン、北側にカマドあり、４本柱。

また、検出された３軒の竪穴住居は、調査区内に分散的に存在していた。

２棟の掘立柱建物の柱の配置関係は、以下のようである。

１間×１間　21号掘立柱建物

１間×２間　22号掘立柱建物

各遺構の切り合いからその先後関係をみると、以下のようになる。

（古）10号土坑＞７号溝（新）

出土遺物には、弥生土器、古式土師器、砥石、叩き石、鉄器等があり、弥生時代後期中葉、古墳時代前期、古墳時代後期頃のものである。

ここで、出土土器の器種構成をまとめてみると、以下のようになる。

40号竪穴住居；坩。底部は丸みを持つ。

41号竪穴住居；複合口縁壺、「く」の字状口縁を持つ甕、脚台。底部は平底である。

42号竪穴住居；皿。

４区では東側から西側へ標高が49.4ｍ～48.6ｍへと低くなり、さらに西側に向けて礫石層が広がる事から集落の西端部になる事が推測される。

休憩風景

第６章

日永遺跡東部地区の調査

第１節　はじめに

第２節　各遺構出土遺物

　１　竪穴住居出土土器

　２　各遺構出土のその他の遺物

第３節　小結

第６章　日永遺跡東部地区の調査

第１節　はじめに

東部地区の調査は、今回調査した「日永遺跡」発掘調査区の最東端にあり、耳納連山から筑後川に向かう扇状地上、大野原台地下に位置する。調査区は西側から東側へ標高54.61ｍ～51.83ｍへと低くなる。西側の０区から東部地区へ向けて一つのピークを作り、大野原台地へ下がりながらぶつかるという地勢を取る。その間礫石が混じる土石層は他の調査区と異なり、ほとんど見られない。２区と同様、遺構の密度は高い。調査面積は約5500㎡である。

調査の結果、検出した遺構には、竪穴住居33軒、ピット等があった。

第２節　各遺構出土遺物

調査区域内からは、計33軒の竪穴住居を検出した。それらは、基本的にベット状遺構を有する弥生時代後期のもの、古墳時代初期のもの、カマドを有する古墳時代後期から奈良時代初期のものがある。これら住居は、上部がかなり削平されており、遺存状態は良くない。

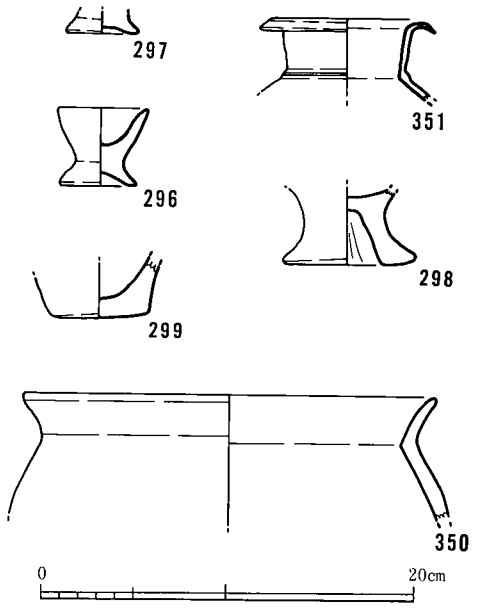
１　竪穴住居出土土器

43号竪穴住居（第38図）

350　「く」の字状に短く外反する口縁部である。調整は口縁部ヨコナデである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径21.9cmを測る。

351　ミニチュア土器である。頸部は斜め上方に立ち上がり、口縁端部は下方に垂下する。調整は剥落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は灰黄褐色から茶褐色を呈する。復元口径9.3cmを測る。

296　ミニチュア土器である。脚台付き鉢状をなす。調整は全体的にナデである。また



第 38 図　43号 竪穴住居出土土器実測図（Ｓ＝1／4）

焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、緻密である。色調は黄褐色を呈する。口径4.3cm、底径3.6cm、器高4.1cmを測る。

297　ミニチュア土器である。脚台片になる。調整は全体的にナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、緻密である。色調は黄褐色を呈する。底径3.8cmを測る。

298　ミニチュア土器である。脚台片になる。調整は全体的にナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、緻密である。色調は黄褐色を呈する。底径6cmを測る。

299　底部片である。やや丸底になる。調整は剝落が著しく不明である。調整は全体的にナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、緻密である。色調は黄褐色を呈する。底径5cmを測る。

44号竪穴住居（第39図）

381　椀である。丸底の底部から、内弯して立ち上がりそのまま口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母、角閃石を含む。色調は黄橙褐色を呈する。口径13.2cm、器高5.2cmを測る。

382　椀である。底部から、内弯して立ち上がりそのまま口縁部に達する。底部辺を欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石を含む。色調は橙褐色を呈する。口径13.2cmを測る。

383　椀である。丸底の底部から、内弯して立ち上がりそのまま口縁部に達する。底部辺を欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母を含む。色調は黄褐色を呈する。口径11.2cmを測る。

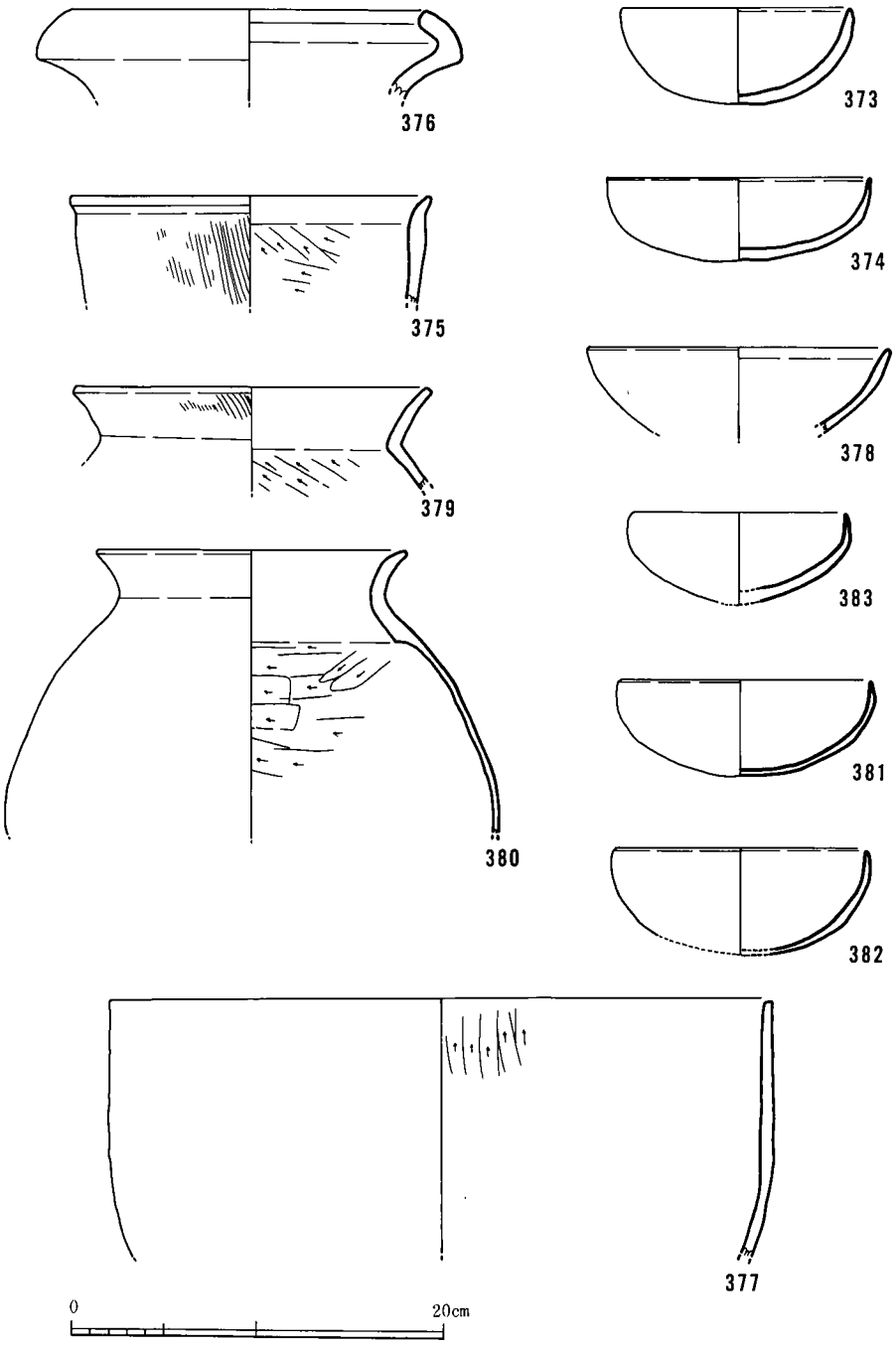
48号竪穴住居（第40図）

364　甑である。底部辺でやや内弯した後、そのまま直線的に外反する。調整は外面ハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。復元口径26cm、底径7cm、器高19.6cmを測る。

365　高杯片である。杯部のみ残存している。底部から外反して、逆「く」の字に屈曲して稜線をもち、さらに外弯しながら口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。口径16.1cmを測る。

366　高杯片である。杯部のみ残存している。底部から外に開き、緩やかに逆「く」の字に屈曲して、さらに直線的に口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は橙褐色を呈する。口径15.1cmを測る。

367　高杯片である。杯部のみ残存している。底部から外に開き逆「く」の字に屈曲して、さら



第 39 図　44号、49号、50号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

にやや外弯しながら口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は橙褐色を呈する。口径14.4cmを測る。

368　椀である。丸底の底部から、内弯してやや立ち上がり気味に口縁部に達する。底部辺を欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面上方ハケ調整、下方ヘラ削り、その他ナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母を含む。色調は黄褐色を呈する。口径14.8cm、器高4.3cmを測る。

369　椀である。丸底の底部から、内弯してやや直線的に口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母を含む。色調は橙褐色を呈する。口径17.2cm、器高5.7cmを測る。

370　「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕である。底部辺を欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ調整、内面ヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径15.6cmを呈する。

371　小型丸底壺である。調整は口縁部ハケ調整、その他不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、金雲母、角閃石を含む。色調は黄橙褐色である。口径9.8cm、器高6.4cmを測る。

372　高杯片である。脚部は「ハ」の字に開き、裾部でさらに外反する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、角閃石を含む。色調は黄褐色である。

49号竪穴住居（第39図）

373　椀である。丸底の底部から、内弯してやや立ち上がり気味に口縁部に達する。調整は口縁部ヨコナデ、外面下方ヘラ削り、その他ナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、角閃石を含む。色調は外面茶褐色、内面灰黄褐色を呈する。口径12.3cm、器高5.2cmを測る。

374　椀である。丸底の底部から、内弯してやや立ち上がり気味に口縁部に達し、端部は若干つまみ上げる。調整は口縁部ヨコナデ、外面下方ヘラ削り、その他ナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母を含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径14.1cm、器高4.5cmを測る。

375　甑状のものである。直線的に伸びる胴部が口縁部辺で若干外反する。胴部から下方は欠失している。調整は胴部外面ハケ調整、内面ヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径19.2cmを測る。

376　複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもつがやや内傾気味である。頸部以下を欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。口径22.6cmを測る。

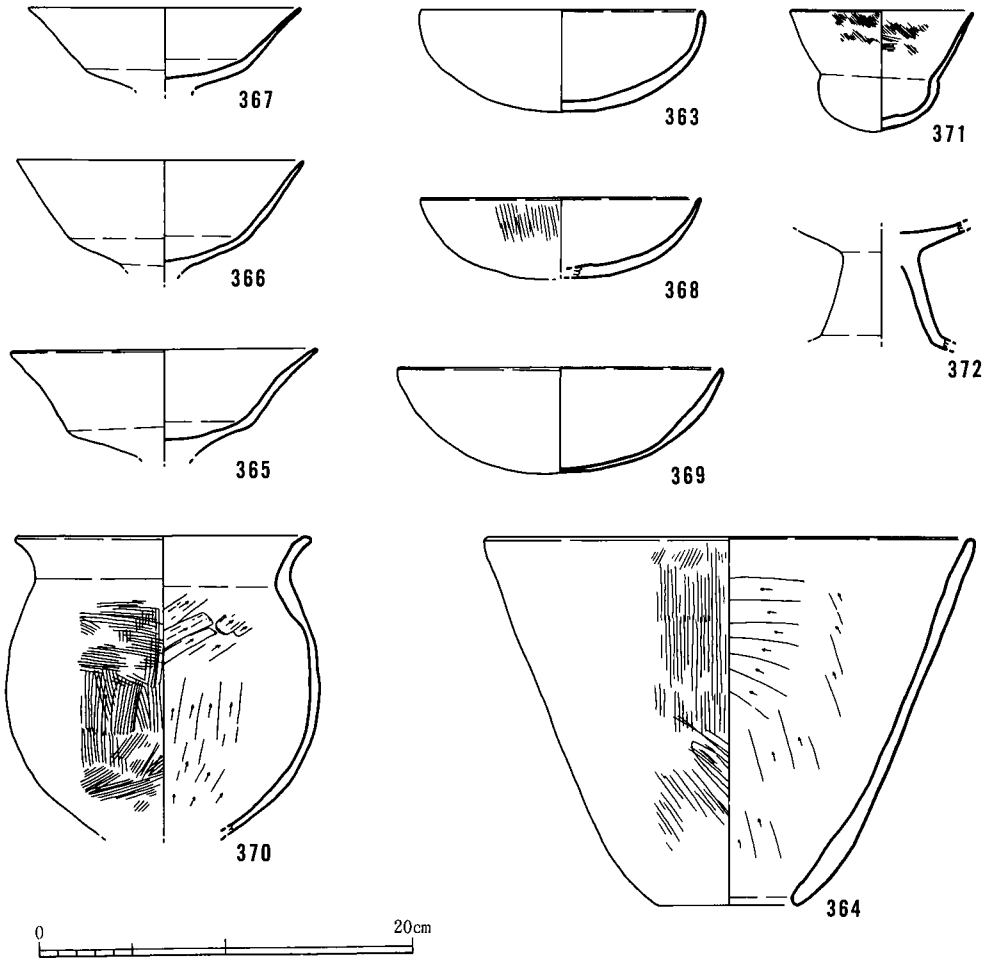
377　甑状のものである。内弯気味に直線的に伸びる胴部がそのまま口縁部に達する。胴部から

下方は欠失している。調整は剝落が著しく不明である。。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は黄褐色を呈する。復元口径35.6cmを測る。

50号竪穴住居（第39図）

378　椀である。丸底の底部から内弯して、その後やや外反して口縁部に達し、端部は若干つまみ上げる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石を含む。色調は橙褐色を呈する。復元口径16.2cmを測る。

379　「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕である。肩部から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散



第 40 図　48号、54号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

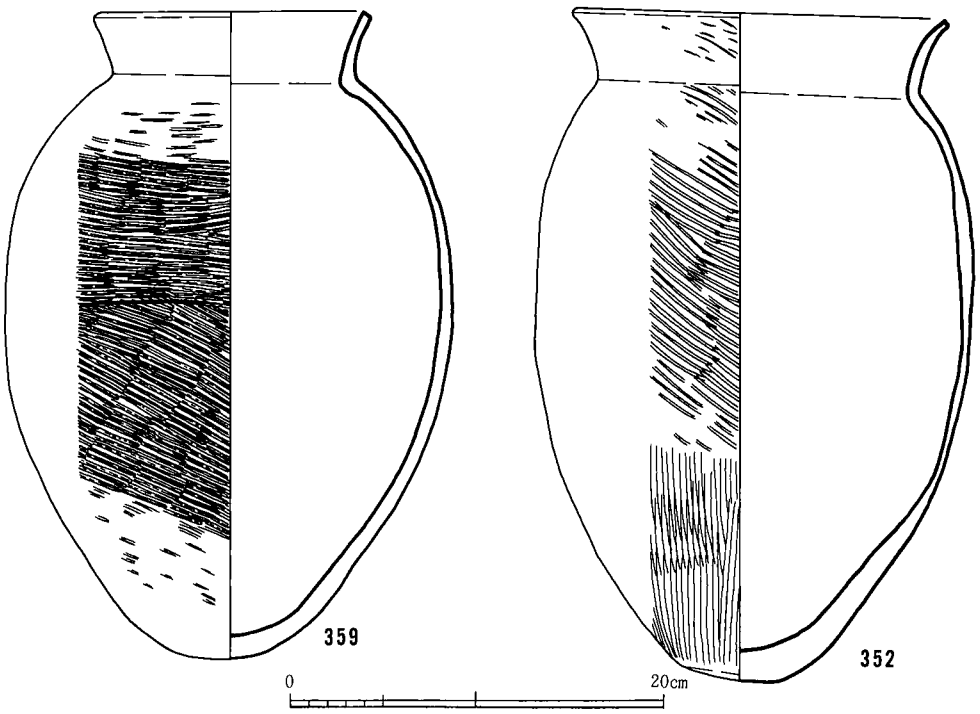
見される。色調は明茶褐色を呈する。口径19.1cmを測る。

380　「く」の字状に緩やかに外反する口縁部をもつ甕である。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。口径16.6cmを測る。

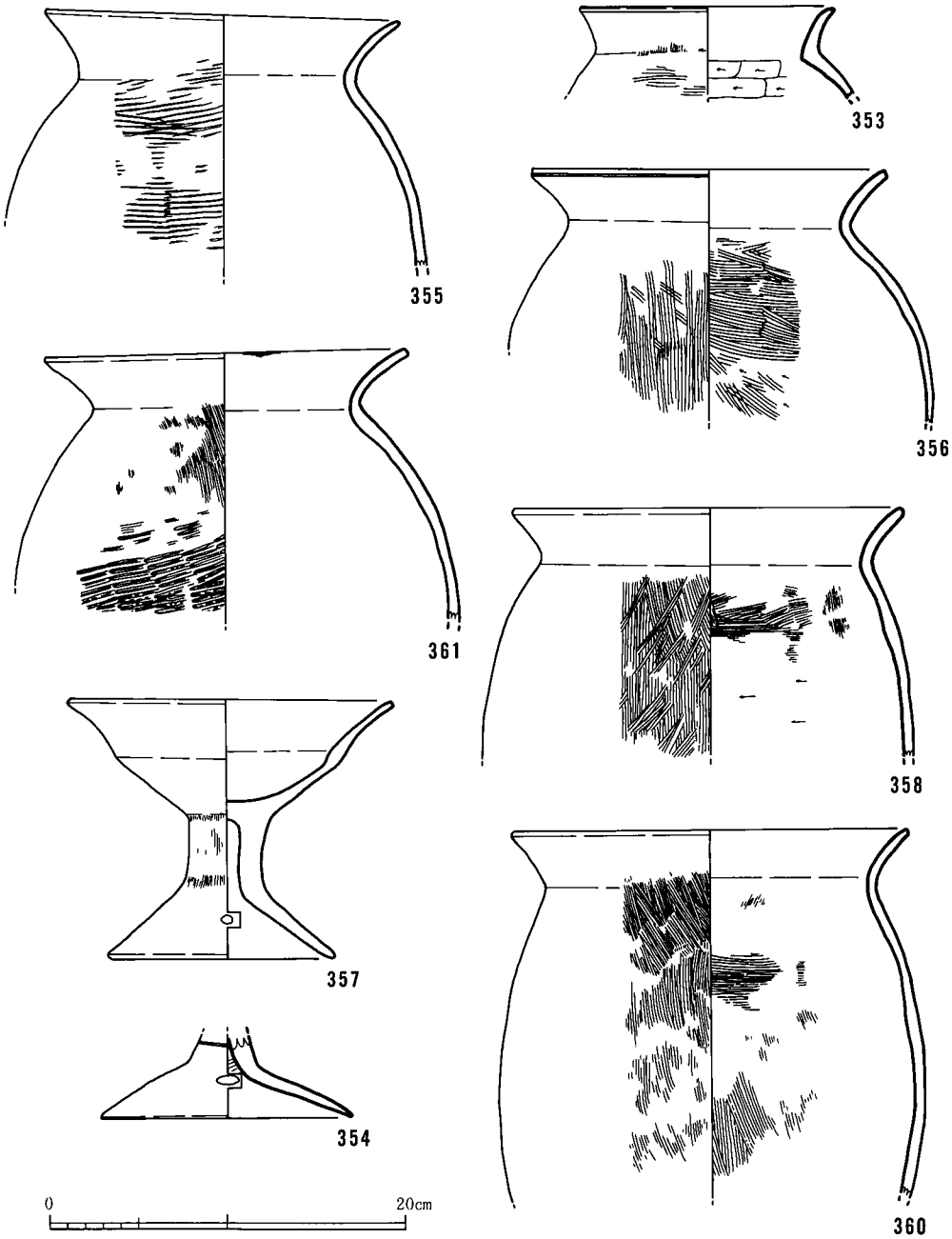
52号竪穴住居（図版13、第41図）

352　長胴の甕である。「く」の字状に緩やかに外反する口縁部、丸底の底部、ラグビーボール状の胴部をもつ。調整は外面胴部上方で斜め方向のハケ調整、胴部下方でタテ方向のハケ調整、内面では剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胴部中央には二次加熱のため黒斑が見られる。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガン、角閃石が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。復元口径19.9cm、器高35.6cmを測る。

353　「く」の字状に短く外反する口縁部片である。調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ調整、内面ヘラ削りである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石、金雲母が散見される。色調は橙褐色を呈する。口径14.1cmを測る。



第 41 図　52号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）



第 42 図　52号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

354　高杯の脚部である。「ハ」の字に大きく広がる低い脚部である。脚中央部には2個の円形の穿孔が残る。調整は外面ヘラ削り、内面では剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は橙褐色を呈する。底径13.6cmを測る。

355　「く」の字状に緩やかに外反する口縁部を持つ甕である。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ナデ、外面胴部ハケ調整、内面では剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。口径19.6cmを測る。

356　「く」の字状に緩やかに外反する口縁部を持つ甕である。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ナデ、内外面胴部ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。口径19.7cmを測る。

357　高杯である。杯部は底部から短く開き、その後大きく外反して口縁部に達する。脚部は柱部が短く、裾部は「ハ」の字に広がる。裾中央部に2個の円孔が残存するが、1個は穿孔を途中でやめている。内外面では剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石、金雲母が散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径18.2cm、裾底径11.6cm、器高14.3cmを測る。

358　「く」の字状に緩やかに外反する口縁部を持つ甕である。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ナデ、内外面胴部ハケ調整、内面下方では擦過痕が見られる。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は白黄褐色を呈する。口径21.8cmを測る。

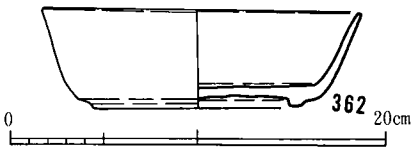
359　長胴の甕である。「く」の字状にやや立ち気味に外反する口縁部、丸底の底部、ラグビーボール状の胴部をもつ。調整は外面胴部上方で横方向の叩き、胴部下方で斜め方向の叩き調整、内面では剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胴部中央には二次加熱のため黒斑が見られる。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄灰褐色を呈する。復元口径14.6cm、器高34.4cmを測る。

360　「く」の字状に緩やかに外反する口縁部を持つ甕である。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ナデ、内外面胴部ハケ調整が見られる。。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は白黄褐色を呈する。口径22.3cmを測る。

361　「く」の字状に緩やかに外反する口縁部を持つ甕である。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ナデ、外面胴部上方ハケ調整、下方斜め方向の叩き、内面では剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。口径20.1cmを測る。

53号竪穴住居（図版14、第43図）

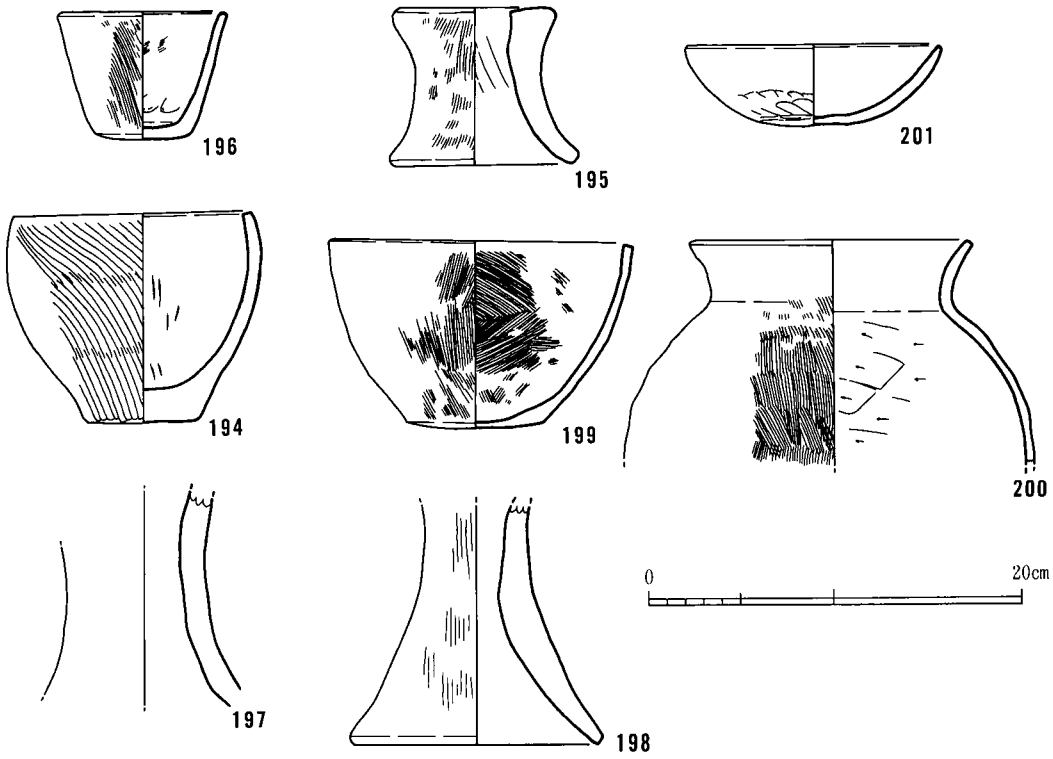
362　杯身である、体部は直線的に立上り、端部は丸い。外底端の内側に高台を貼付する。焼成は堅固である。胎土は精良である、色調は灰青色である。口径17cm、底径11cm、器高5.2cmを測る。



第 43 図
53号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

54号竪穴住居（第40図）

363　椀である。丸底の底部からやや立上り気味に口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。胎土は細砂粒が多く含む。色調は褐色である。口径15cm、器高5.4cm

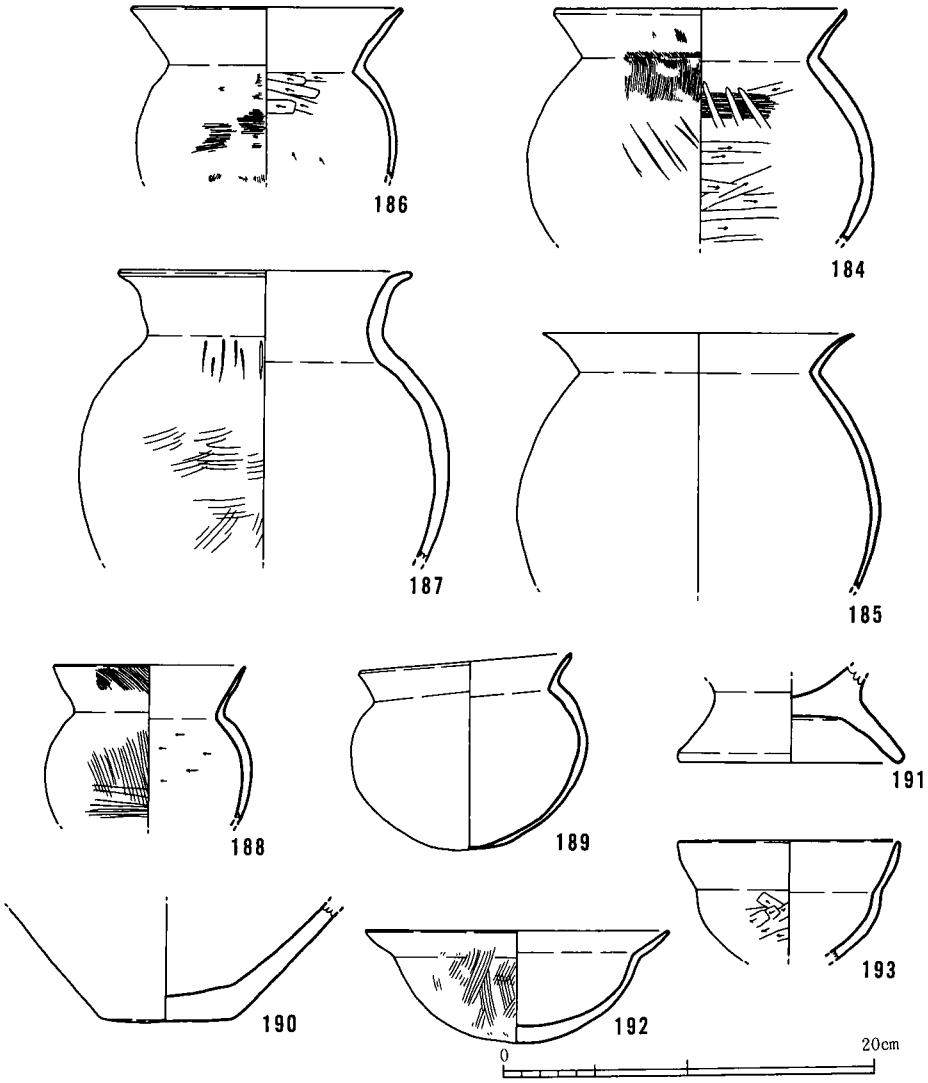


第 44 図　58号、61号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

を測る。

58号竪穴住居（第44図）

200　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部は球状に張り出す。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ調整、内面ヘラ削りである。また焼



第 45 図 59号、60号、69号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径14.2cmを測る。

201　椀である。平坦な底部からやや丸みをもって口縁部に達する。調整は口縁部ヨコナデ、外面底部辺ヘラ削り、内面ナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径13.3cm、器高4.3cmを測る。

59号竪穴住居（図版15、第45図）

190　底部片である。底部はやや丸みを帯びるものの、平坦である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径7.2cmを測る。

60号竪穴住居（第45図）

191　脚部片である。「ハ」の字に低く広がる脚部である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径11.2cmを測る。

192　鉢である。丸底の底部から内弯気味に立ち上がり、口縁部辺で外方に広がる。調整は外面ハケ調整、内面剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径16cm、器高6cmを測る。

193　小型丸底壺である。底部を欠失している。口縁部は短くやや内弯気味になる。調整は外面底部辺へら削り、その他ヨコナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径11.7cmを測る。

61号竪穴住居（第44図）

194　ミニチュア土器である。椀状をなす。底部は平坦である。調整は外面ハケ調整、外面ナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径12.4cm、器高11.1cmを測る。

195　ミニチュア土器である。鼓状の器台である。胴最小径は胴部中央にある。調整は口縁部内外面がヨコナデ、外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は外面黄褐色、内面橙褐色を呈する。復元口径7.8cm、底径9.1cm、器高8.4cmを測る。

196　ミニチュア土器である。鉢状をなす。底部はやや丸みを帯びる。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径8.4cm、器高6.8cmを測る。

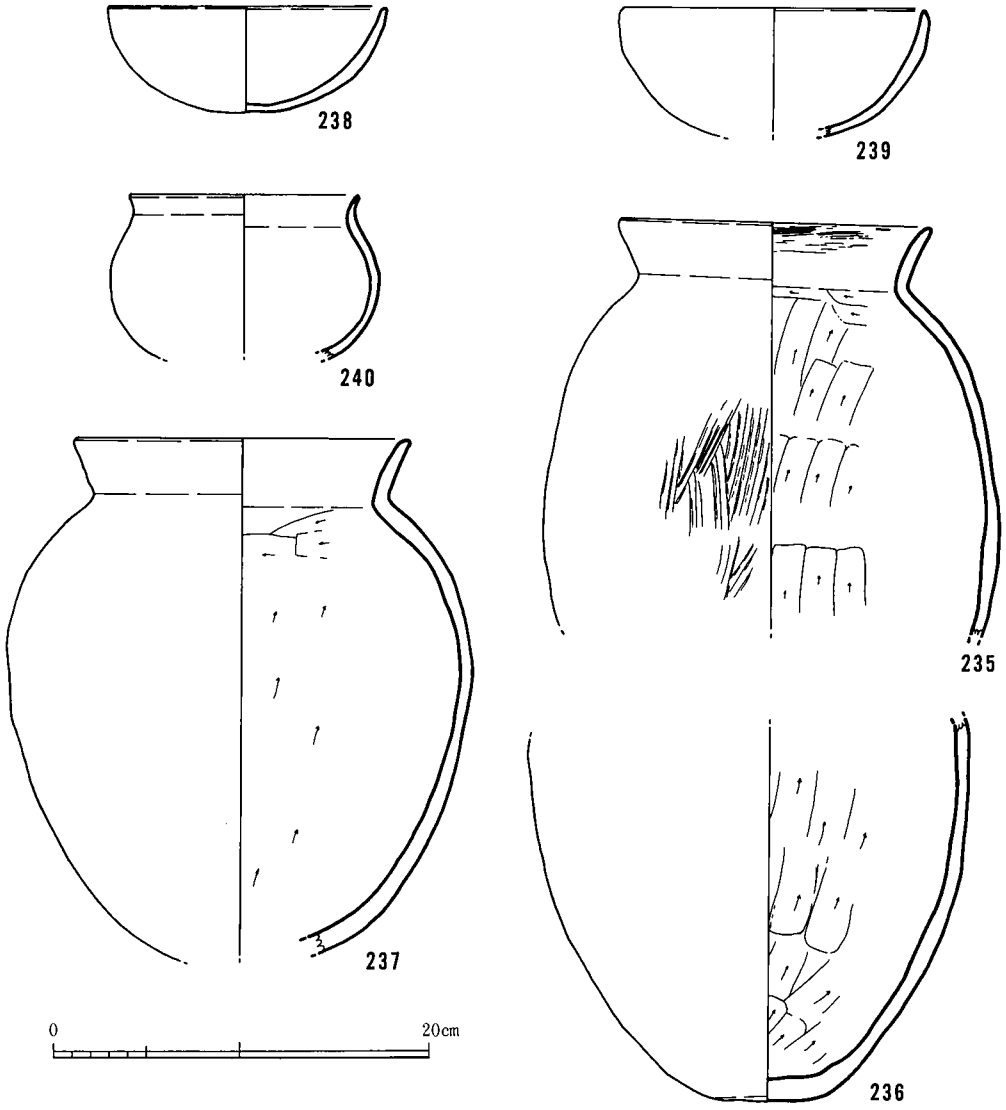
197、198　鼓状の器台である。197は上下辺を欠失している。198は上半部を欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。197は胴最小径8.2cmを測る。198は胴最小径5.6cm、底径12.8cmを測る。

199　鉢である。やや丸みを帯びる底部から若干内椀気味に口縁部へ立ち上がる。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見され

る。色調は黄褐色を呈する。復元口径15cm、器高10cmを測る。

62号竪穴住居（第46図）

235　「く」の字状に外反する口縁部を持つ甕である。胴部はやや張り出す。胴部下半から底部



第 46 図　62号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。内外面とも部分的に黒変し、煤が付着する部分あり。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径16.2cmを測る。

236　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明であるが、内面にへら削りが残る。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色から茶褐色を呈する。底径5.2cmを測る。

237　「く」の字状に外反する口縁部を持つ甕である。胴部はやや張り出す。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。内外面とも部分的に黒変し、煤が付着する部分あり。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色から茶褐色を呈する。口径17.3cmを測る。

238　椀である。丸底で内弯して、外開きに立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多い。色調は淡橙褐色を呈する。口径14.5cm、器高5.6cmを測る。

239　椀である。丸底の底部は欠失するが、内弯してそのまま立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多い。色調は橙褐色を呈する。復元口径16cmを測る。

240　坩である。底部を欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多い。色調は橙褐色を呈する。復元口径11.9cmを測る。

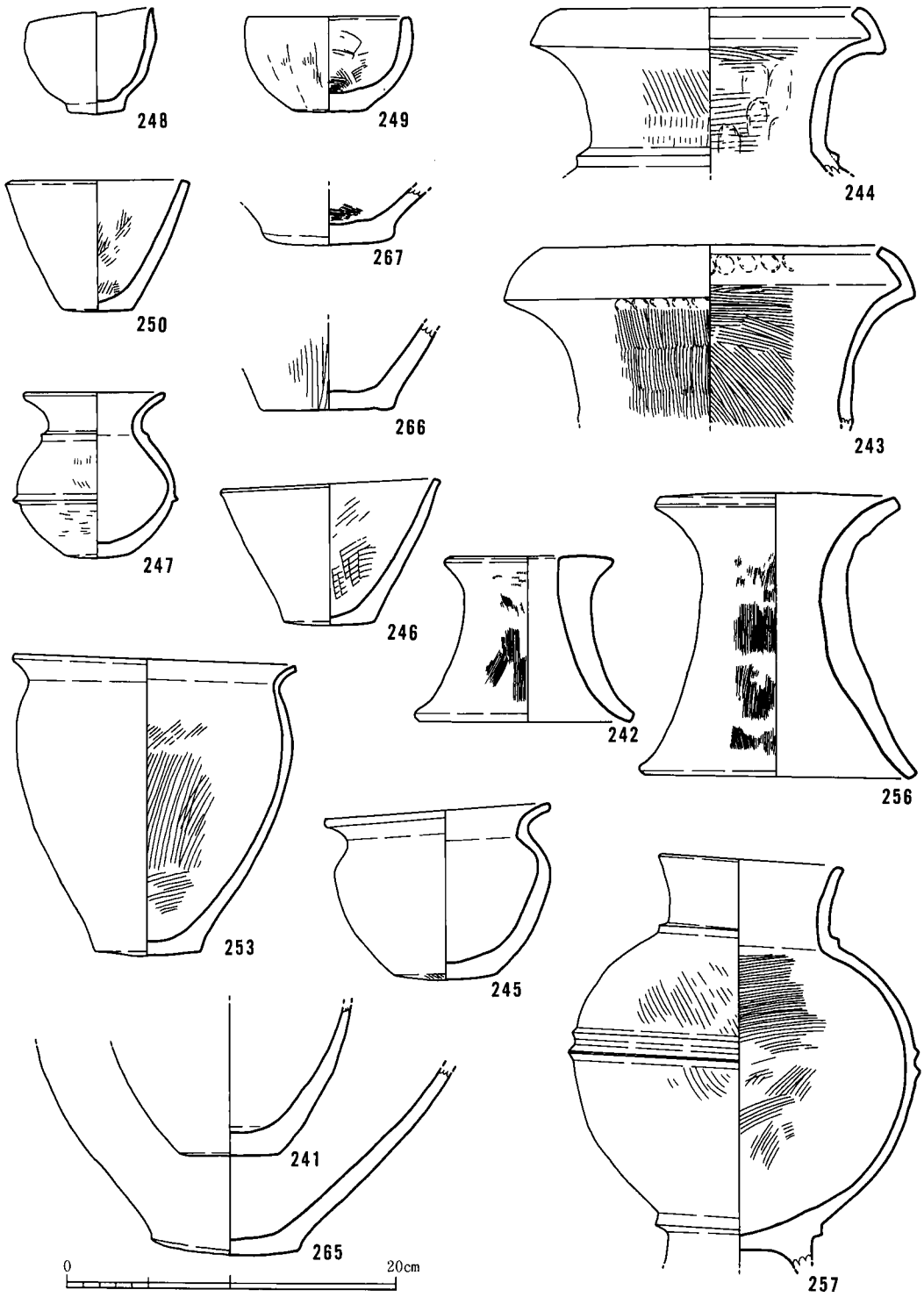
63号竪穴住居（第47～50図）

241　底部片である。底部は平坦である。調整は内外面とも剝離が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は白黄褐色から淡橙褐色を呈する。底径5.2cmを測る。

242　台形状の器台である。調整は剝離が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄褐色を呈する。口径９cm、底部12.6cm、器高10cmを測る。

243　頸部から口縁部を残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもつ。調整は口縁部ナデ、内外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガン、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。復元口径20.3cmを測る。

244　頸部から口縁部を残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもつ。頸部と肩部の境には断面三角凸帯を貼付する。調整は口縁部ナデ、内外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガン、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径17.5cm測る。



第 47 図　63号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

245　「く」の字状に外反する口縁を持つ小型甕である。底部は丸みを帯びる。調整は内外面とも剝離が著しく不明であるが、口縁部ヨコナデが残る。また焼成は良好である。底部及び内面一体は真っ黒く変色している。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は淡黄褐色を呈する。口径13.5cm、底径6.4cm、器高10.3cmを測る。

246　やや丸みを帯びた底部の鉢である。底部から口縁部にかけて直線的に外反する。調整は内外面とも剝離が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガン、金雲母が散見される。色調は茶褐色から燈褐色を呈する。口径12.4cm底部5.6cm、器高8.6cm測る。

247　小型壺である。やや丸みを帯びる底部から球状の胴部に立ち上がり、その後緩やかに「く」の字状に外反して口縁部に達する。頸部と肩部の境及び胴最大径部よりやや下に、断面三角凸帯を貼付する。調整は口縁内外面ともナデ、胴部外面ハケ調整、内面ナデ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が混在し、マンガンが散見される。色調は淡黄褐色である。口径8.2cm、底部４cm、器高10.1cmを測る。

248　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。椀状をなす。底部はやや突出する。調整は内外面とも剝離が著しく不明である。焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は淡燈褐色を呈する。口径7.5cm、器高5.6～6.5cmを測る。

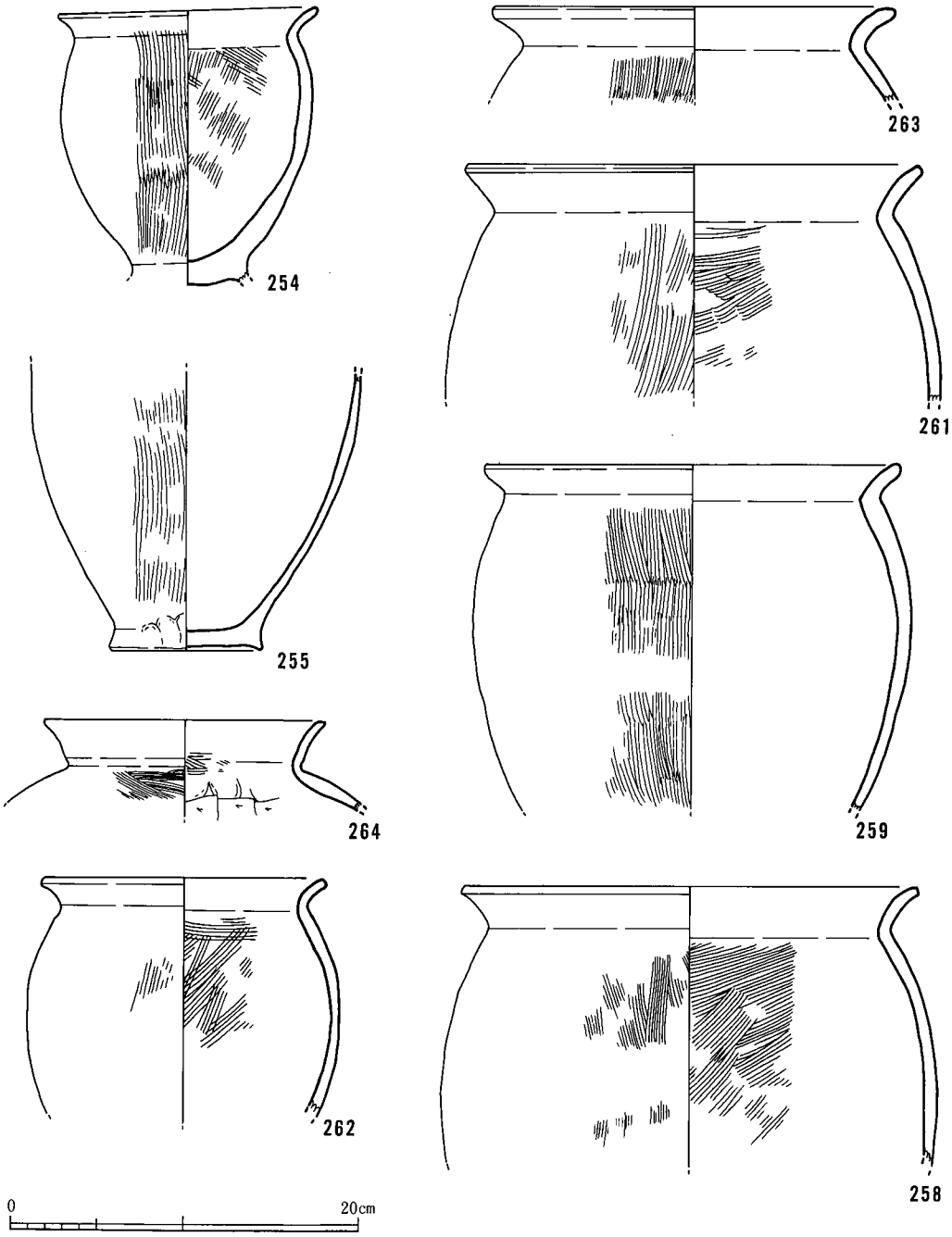
249　ミニチュア土器である。手捏ねである。椀状をなす。底部は平坦である。調整は内外面とも剝離が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は淡燈褐色を呈する。復元口径9.5cm、器高5.8cmを測る。

250　やや丸みを帯びた底部の鉢である。底部から口縁部にかけて直線的に外反する。調整は内外面とも剝離が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガン、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径10.2cm、底径4.2cm、器高８cmを測る。

251　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。底部は平坦である。調整は内外面とも剝離が著しく不明であるが、外面にハケ調整が残る。また焼成は良好である。内面底部は真っ黒く変色している。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄褐色～燈褐色を呈する。口径22.1cm、底径８cm、器高31.5～34.5cmを測る。

252　複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもつがやや立ち上がり気味である。頸部は緩やかに「ハ」の字に外反する。肩部と頸部の境、胴最大径部の２ケ所に断面三角凸帯を貼付する。底部はやや丸みを帯びる。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガン、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径16.4cm、器高52.5cmを測る。

253　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。底部はやや丸みをを帯びる。調整は内外面とも剝離が著しく不明であるが、内面にハケ調整が残る。また焼成は良好である。外面には黒



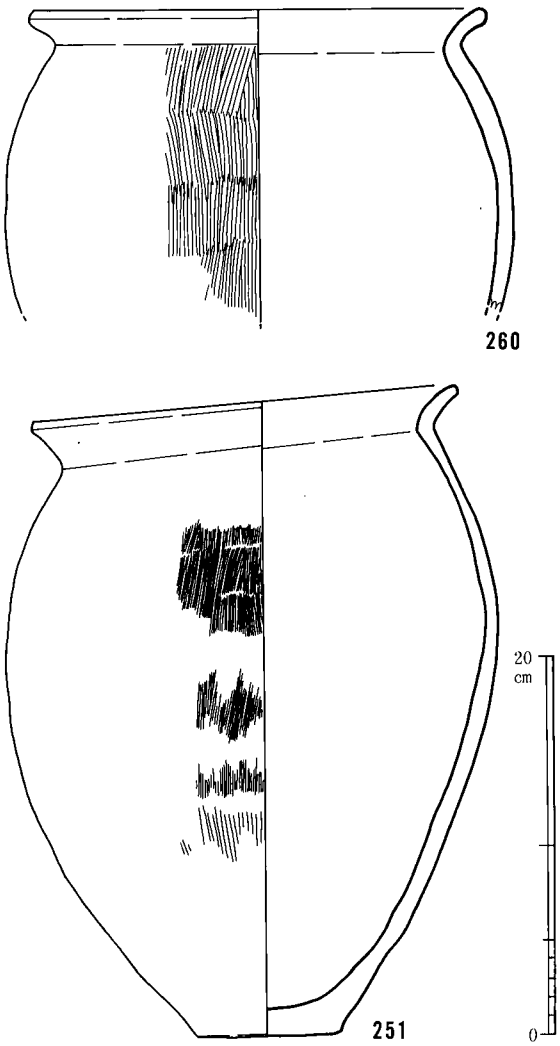
第 48 図 63号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

斑が見られる。胎土は細砂粒が多く、金雲母、マンガン、角閃石が散見される。色調は茶褐色～赤褐色を呈する。口径16.8cm、底径6.6cm、器高18cmを測る。

254　脚台付きの甕である。脚端部は欠失している。脚部は「ハ」の字状に短く広がる。甕は「く」の字状口縁を持つ。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、石英、角閃石が散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径14.4cmを測る。

255　上げ底の甕である。甕部は胴部中央から口縁部辺を欠失している。底部はつまみ出すように若干外方に伸びる。調整は剥離が著しく不明である。また焼成は良好である。二次加熱のため黒変するところがある。胎土は細砂粒が多く、石英、角閃石が散見される。色調は外面黄褐色から赤褐色、内面灰黄褐色を呈する。底径8.6cmを測る。

256　鼓状の器台である。胴最小径は胴部中央より下にある。調整は口縁部内外面がヨコナデ、外面がハケ調整、内面がナデである。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含み、石英、角閃石、マンガンも散見される。色調は黄褐色を呈する。口径16cm、底径14cm、器高17.2cmを測る。



第 49 図　63号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

257　脚台付きである。球状に張り出す胴部に、やや斜め外方に立ち上がる口縁部と直立気味の脚台をつける。胴部中央に二条の断面三角凸帯、そして肩部と頸部の境及び胴部と脚台の境には一条の断面三角凸帯が貼付される。胎土は細砂粒が多く、石英、角閃石が散見される。色調は灰黄褐色を呈する。復元口径11cm、胴最大径20.6cmを測る。

258　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部内外面には二次加熱のため黒変が見られる。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガン、角閃石が散見される。色調は外面灰黄褐色、内面黄褐色～燈褐色を呈する。口径26cm、胴最大径28.6cmを測る。

259　「く」の字状に緩やか外反する口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。体部内外面には二次加熱のため黒変が見られる。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガン、角閃石が散見される。色調は外面灰燈褐色、内面黄褐色を呈する。口径23.6cm、胴最大径25.2cmを測る。

260　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガン、角閃石が散見される。色調は外面灰燈褐色、内面燈褐色を呈する。口径23.8cm、胴最大径27cmを測る。

261　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。胴部最大径は口径に比べ大きい。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガン、金雲母、角閃石が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径26cm、胴最大径28.4cmを測る。

262　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。胴部最大口径に比べ大きい。胴部下方から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガン、角閃石が散見される。色調は黄褐色～燈褐色を呈する。口径15.8cm、胴最大径18cmを測る。

263　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は外面が黄褐色を呈する。口径22.8cmを測る。

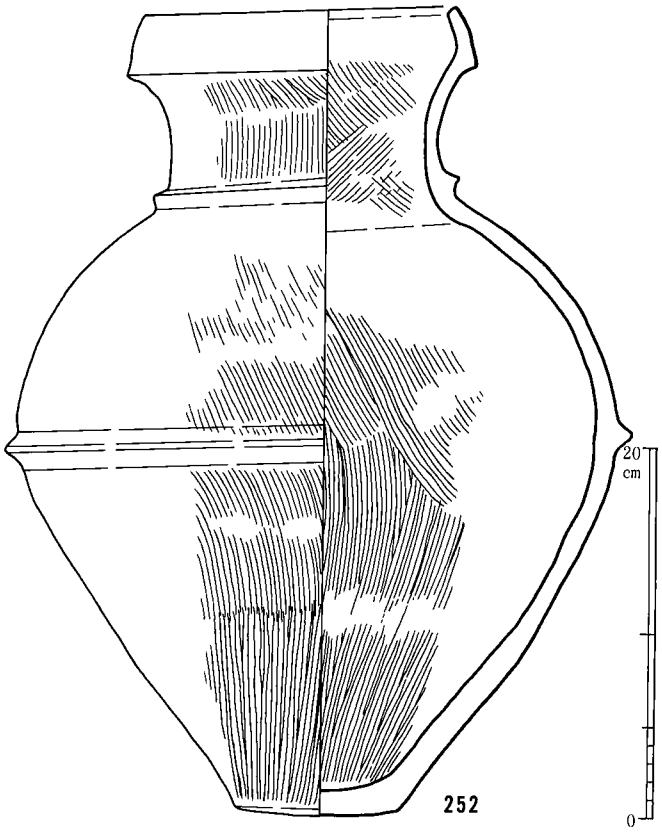
264　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ短頸壺である。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ調整、内面擦過痕が見られる。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、石英、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。口径16cmを測る。

265　底部片である。底部はやや丸みを帯び、胴部へ大きく外反する。調整は剝離が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、石英、角閃石が散見される。色調は外面が黄褐色～燈褐色、内面が黄灰褐色を呈する。底径8.5cmを測る。

266　底部片である。底部は平坦である。調整は剝離が著しく不明である。また焼成は良好であ

る。胎土は細・粗砂粒を多く含み、石英、角閃石が散見される。色調は外面が赤褐色、内面が黄褐色を呈する。底径7.8cmを測る。

267　底部片である。底部はやや丸みを帯び、突出している。調整は剝離が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、石英、角閃石、金雲母、マンガンが散見される。色調は茶褐色を呈する。底径9cmを測る。



第 50 図　63号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

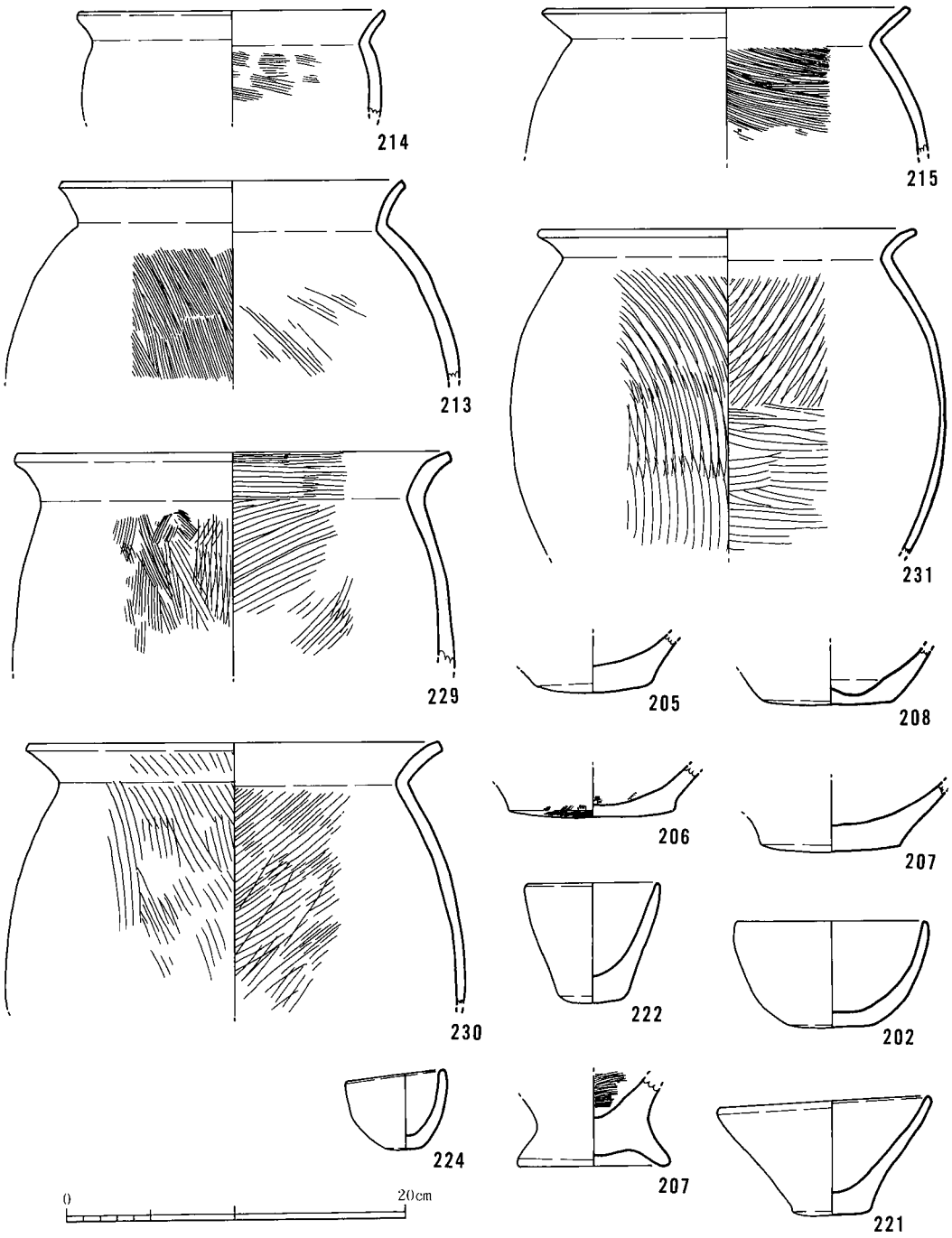
67号竪穴住居（第51図）

202　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。椀状をなす。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面ともナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径11.1cm、器高6.3cmを測る。

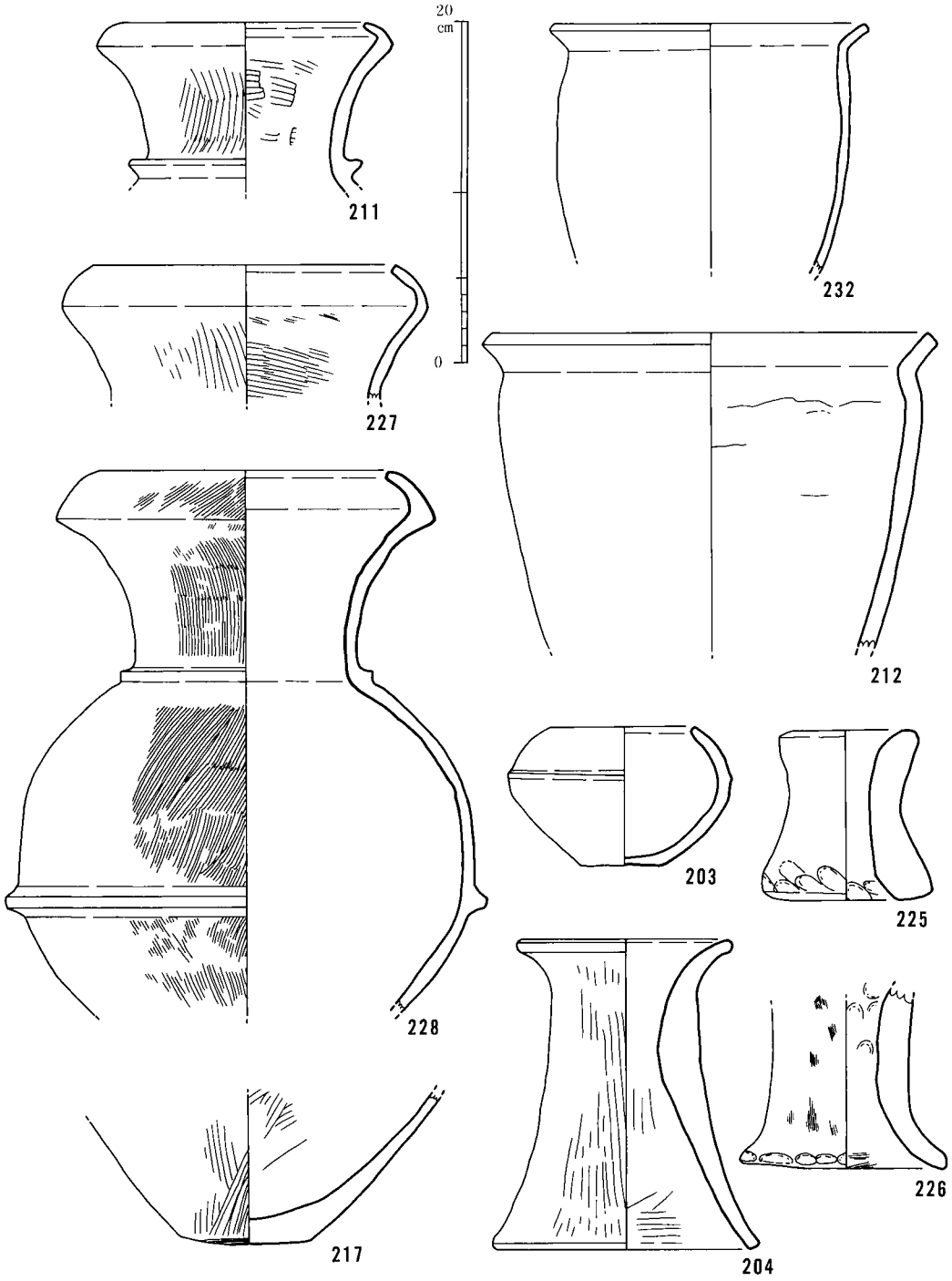
203　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。無頸壺状をなす。底部は平坦である。胴部中央に三角凸帯が巡る。調整は内外面剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胴部下半には黒斑がみられる。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は茶褐色を呈する。復元口径8.2cm、器高8.1cmを測る。

204　鼓状の器台である。胴最小径は胴部中央よりやや上にある。調整は口縁部内外面がヨコナデ、外面がハケ調整、内面がナデで、中央部には絞り痕がある。また焼成は良好である。胎土は緻密で、細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径12cm、底径14.4cm、器高18.2cmを測る。

205　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄橙褐色を呈する。底径



第 51 図　67号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）



第 52 図 67号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

6.2cmを測る。

206　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径9.6cmを測る。

207　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄橙褐色を呈する。底径6.2cmを測る。

208　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄橙褐色を呈する。底径7.2cmを測る。

209　脚台付き底部片である。底部には外方に短く低く広がる脚台が付く。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄橙褐色を呈する。底径8.8cmを測る。

210　底部片である。底部は平坦である。調整は外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径8.4cmを測る。

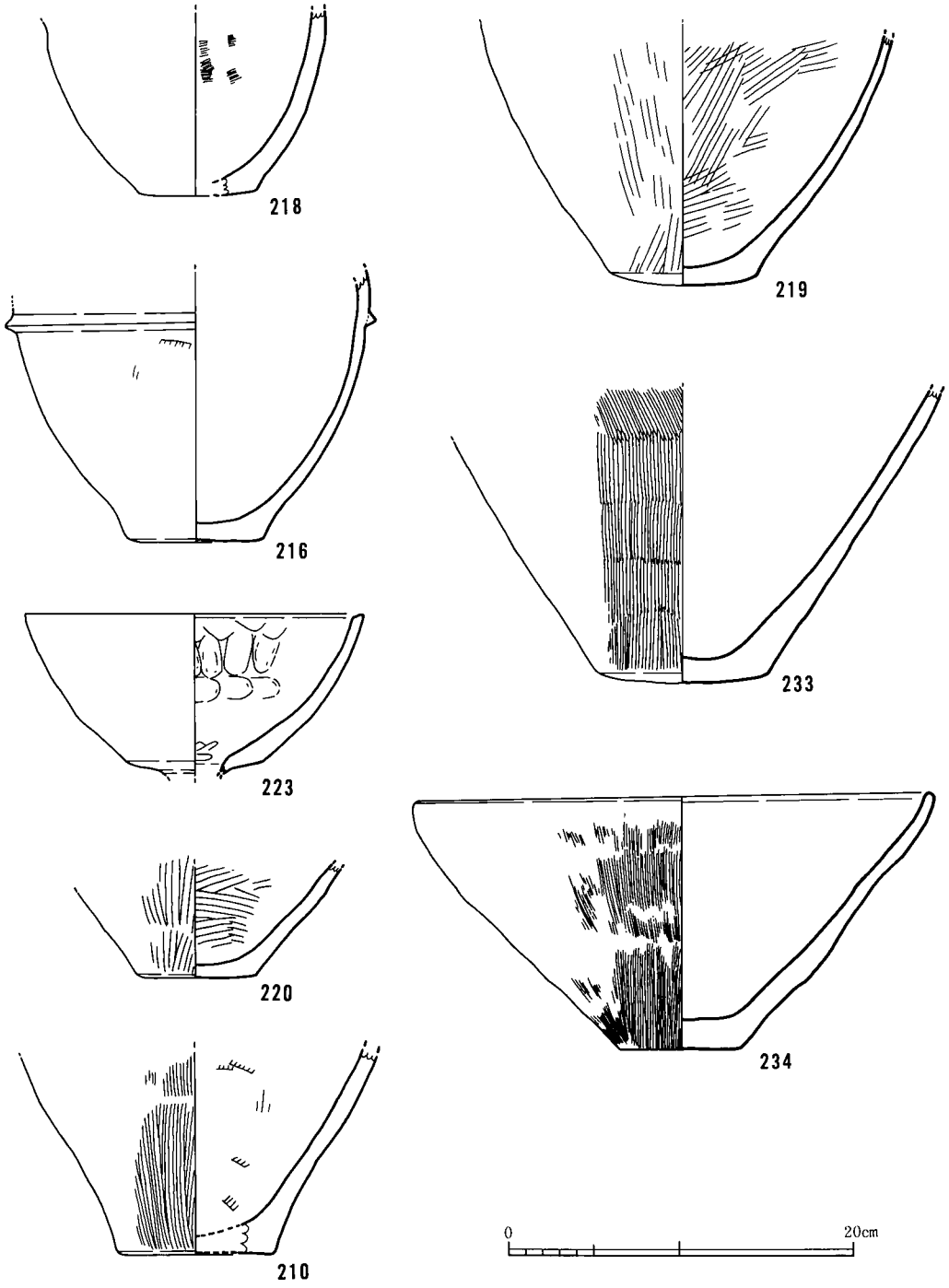
211　口縁部のみを残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもたない。肩部と頸部の境に凸帯を巡らす。調整は剝落が著しく不明であるが口縁部ナデ、内外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径13.8cmを測る。

212　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部はあまり張らず、直線的に下方へのびる。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径25.4cmを測る。

213　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部は球状に張り出し、胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は外面灰茶褐色、内面黄褐色を呈する。復元口径20cmを測る。

214　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部はあまり張らず、胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は外面灰茶褐色、内面黄褐色を呈する。復元口径20cmを測る。

215　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部はやや張り出し、胴部中央から底部に



第 53 図　67号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

かけて欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明であるが、内面ハケ調整が残る。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径20.8cmを測る。

216　底部片である。底部は平坦で、胴部中央辺まで残存する。胴部中央には断面三角凸帯が貼付される。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。底径7.6cmを測る。

217　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面がハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。底径７cmを測る。

218　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は外面黄褐色から赤褐色、内面灰黄褐色を呈する。底径７cmを測る。

219　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガン、金雲母が散見される。色調は外面黄褐色から橙褐色、内面灰黄褐色を呈する。底径8.6cmを測る。

220　底部片である。底部は平坦である。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。底径6.8cmを測る。

221　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。鉢状をなす。底部はやや突出し、丸みを帯びる。調整は内外面ともナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。外面が黒変している。復元口径12.1cm、器高6.8cmを測る。

222　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。鉢状をなす。底部はやや突出する。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。復元口径7.6cm、器高7.1cmを測る。

223　脚部を欠失している高杯である。杯部は底部からやや内椀しながら外反し口縁部に達する。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。復元口径1.4cmを測る。

224　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。椀状をなす。底部は平坦である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径5.4cm、器高4.5cmを測る。

225　鼓状の器台である。形状はシャープさがなく、ずんぐりしている。胴最小径は胴部中央にある。調整は剝落が著しく不明である。内面中央には絞り痕が残る。また焼成は良好である。

胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。口径７cm、底径８cm、器高9.8cmを測る。

226　鼓状の器台である。形状はシャープさがない。胴部上半が欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンも散見される。色調は黄褐色を呈する。底径12cmを測る。

227　口縁部のみを残存する複合口縁壺である。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもたずに丸くなる。調整は剝落が著しく不明であるが、内外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径17.4cmを測る。

228　複合口縁壺である。胴部下半から底部にかけて欠失している。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもつ。頸部は「ハ」の字に外反する。肩部と頸部の境、胴最大径よりやや下の２カ所に断面三角凸帯を貼付する。調整は剝落が著しく不明であるが、外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を混在し、マンガンが散見される。色調は茶褐色を呈する。復元口径16.6cmを測る。

229　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部はあまり張り出さない。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整が残る。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は灰褐色を呈する。復元口径25.4cmを測る。

230　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部はやや張り出し、胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は内外面ともハケ調整が残る。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガン、金雲母が散見される。色調は灰黄褐色を呈する。復元口径24cmを測る。

231　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部はやや張り出し、胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は内外面とも粗いハケ調整が残る。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。復元口径21.8cmを測る。

232　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部はあまり張り出さず、胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径17.9cmを測る。

233　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は黄褐色から灰黄褐色を呈する。底径10cmを測る。

234　鉢である。平坦な底部から直線的に口縁部へのび、端部はやや立ち上がる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。口径29.3cm、底径6.6cm、器高14.5cmを測る。

68号竪穴住居（第54図）

169　椀である。丸底で、やや内弯気味に立ち上がり口縁部に達する。底部は肥厚する。調整は剝落が著しく不明であるが、口縁部ナデ調整で、指頭圧痕を残す。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は内面灰黄褐色、外面二次加熱のため黒色を呈する。口径13cm、器高5.3cmを測る。

170　椀である。丸底で、やや直線的にに立ち上がり口縁部に達する。調整は口縁部ヨコナデ、内外面細かなへら削りを施す。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は内外面二次加熱のため黒色を呈する。口径12.4cm、器高4.3cmを測る。

171　椀である。丸底で、やや内弯気味に立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は内面白黄褐色、外面黄褐色から橙褐色を呈する。口径10.6cm、器高3.3cmを測る。

172　小型丸底壺である。胴部は椀状をなす。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径13.4cm、器高７cmを測る。

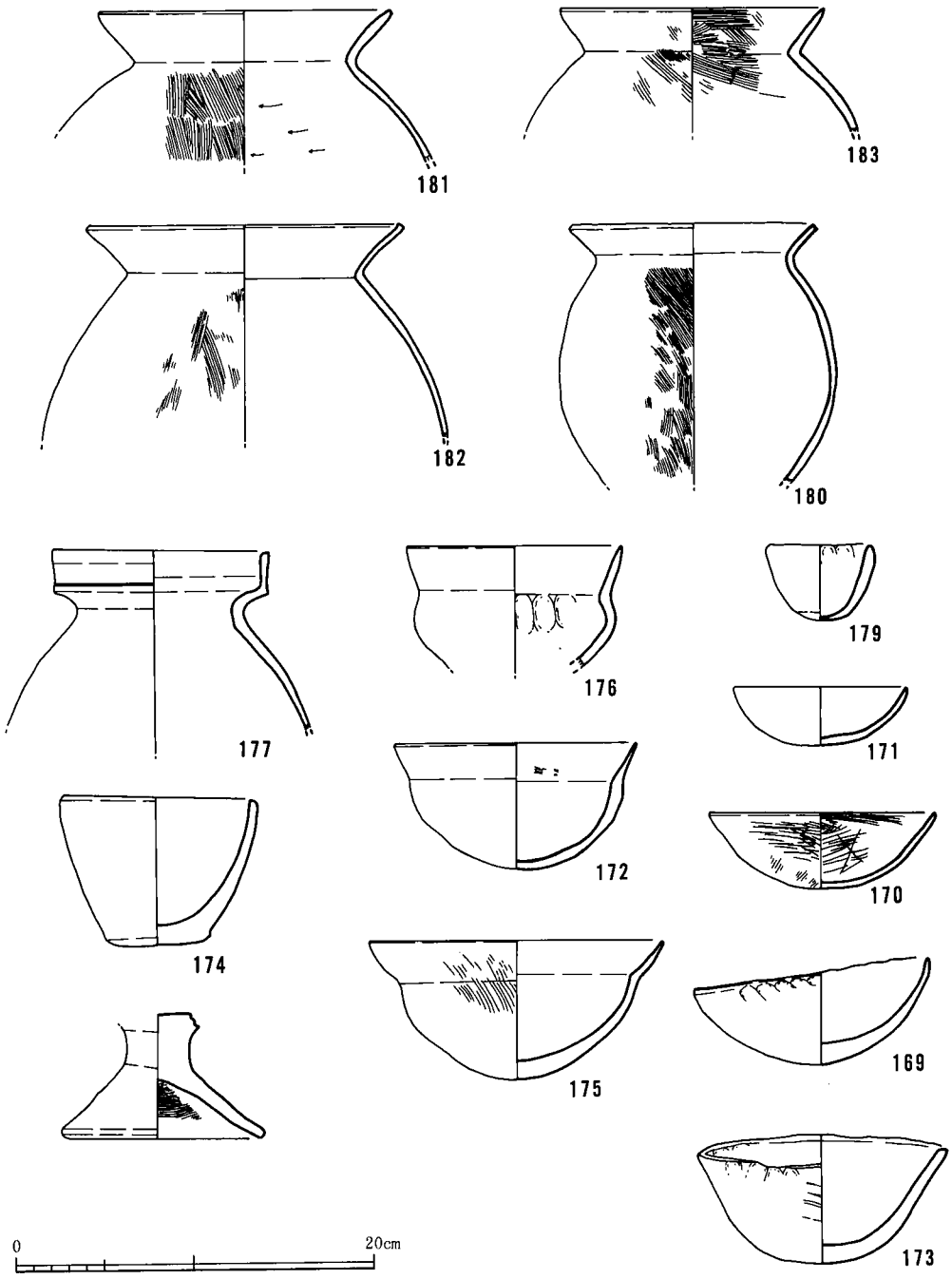
173　椀である。やや歪むが、丸底で、外開きに立ち上がり口縁部に達する。口縁部に指頭圧痕が残る。調整は口縁部ヨコなで、外面が板状の工具で削った後、ナデ調整、内面が擦過痕を残している。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガン、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。口径13.9cm、器高6.2cmを測る。

174　鉢である。平坦な底部からやや内弯気味に口縁部へのび、端部はやや内側に伸びる。底部は外側に膨らむ。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。口径10.3cm、底径5.2cm、器高8.2cmを測る。

175　小型丸底壺である。胴部は椀状をなす。器壁がやや厚く、頸部の稜線は不明瞭である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径16.4cm、器高7.8cmを測る。

176　小型丸底壺である。胴部は椀状をなす。器壁がやや厚く、頸部の稜線は不明瞭である。口縁部はやや立ち上がり気味である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径11.8cmを測る。

177　複合口縁壺である。胴部中央から底部にかけて欠失している。口縁部は短く、屈折部は明瞭に稜線をもつ。頸部は「ハ」の字に外反する。調整は剝落が著しく不明であるが、外面ハケ調整、口縁部ナデ調整のようである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガン、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径12cmを測る。



第 54 図　68号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

178　高杯の脚部である。柱部は太く、脚部は「ハ」の字状に広がる。調整は剝落が著しく不明であるが、脚部内面はハケ調整のようである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガン、金雲母が散見される。色調は淡黄褐色を呈する。脚裾部は二次加熱のため黒変している。復元底径10.2cmを測る。

179　ミニチュア土器である。手捏ねのため歪んでいる。椀状をなす。底部は丸くなる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、マンガンが散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径5.5cm、器高4.3cmを測る。

180　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部は球状をなす。底部辺を欠失している。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。調整は口縁部ヨコなで、外面が細かいハケ調整、内面不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母、マンガンが散見される。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。復元口径13.5cmを測る。

181　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴上半部から下を欠失している。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。口縁部がやや長めである。調整は口縁部ヨコなで、外面が細かいハケ調整、内面擦過痕がみられる。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径16.3cmを測る。

182　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部は球状をなす。胴中央部から下を欠失している。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。口縁部がやや長めである。調整は口縁部ヨコなで、外面が細かいハケ調整、内面不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母、マンガンが散見される。色調は灰黄色を呈する。復元口径17.2cmを測る。

183　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部は球状をなす。胴中央部から下を欠失している。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。口縁部がやや立ち気味である。内外面とも黒変している。調整は口縁部が細かいハケ調整、外面が細かいハケ調整、内面擦過痕がみられる。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含まれる。色調は灰黄褐色を呈する。復元口径14.5cmを測る。

69号竪穴住居（第45図）

185　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部は球状をなす。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径16.6cmを測る。

186　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。口縁部はやや長く伸びる。胴部は球状をなす。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明であるが、外面ハケ調整、内面へら削りが残る。また焼成は良好

である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径14cmを測る。

187　「く」の字状に短く外反する口縁を持つ壺である。胴部は球状に張り出す。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は明茶褐色を呈する。復元口径25.4cmを測る。　時期少し疑問あり

188　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部は球状をなす。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は外面がハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径10cmを測る。

189　小型丸底壺である。胴部は球状をなす。器壁が薄く、頸部の稜線が明瞭である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンが散見される。色調は白黄褐色を呈する。復元口径11cm、器高10cmを測る。

71号竪穴住居（第55図）

268　甑状のものである。底部辺を欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面粗いハケ調整、内面擦過痕が見られる。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く混在し、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径24.6cmを測る。

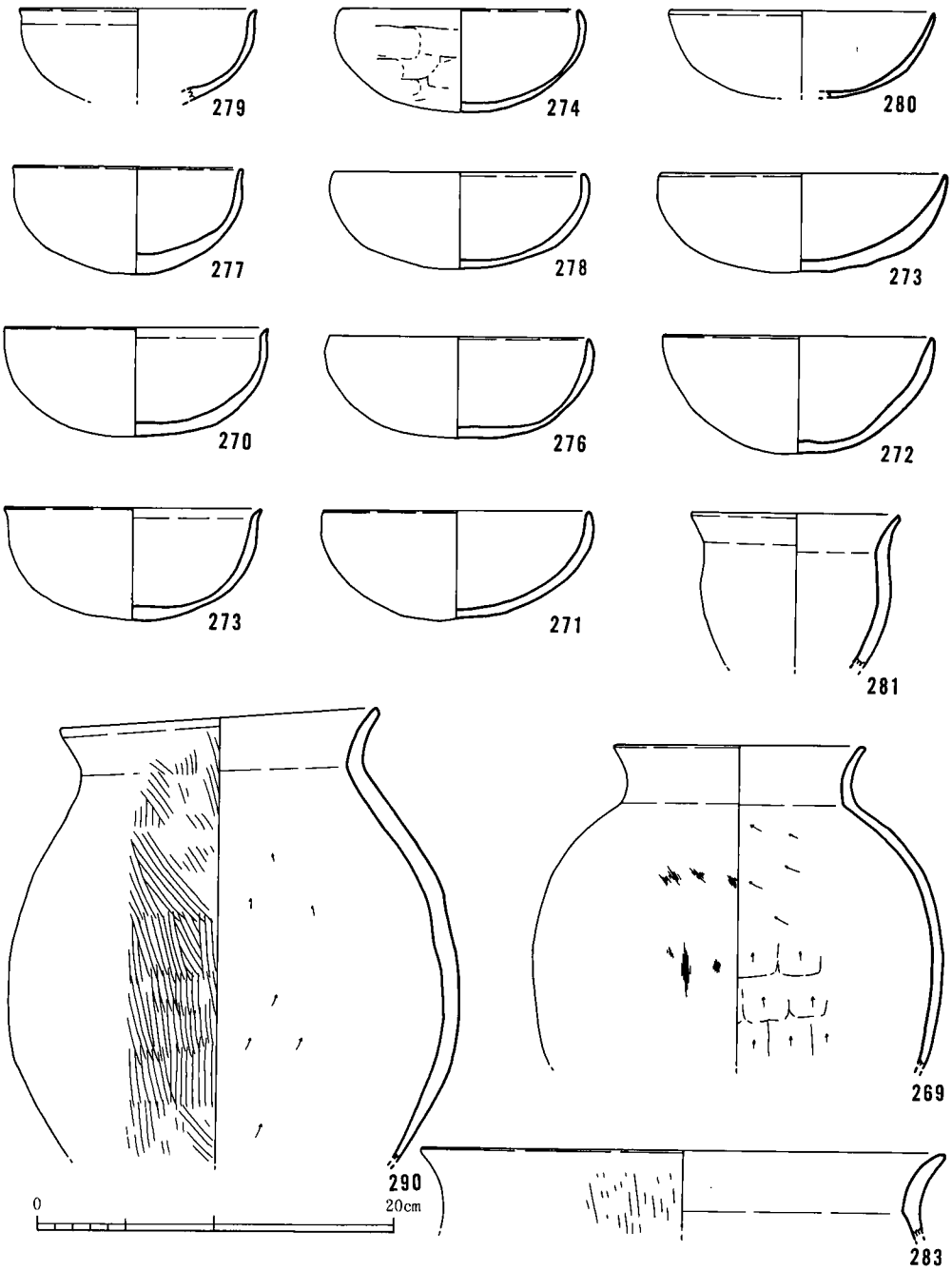
269　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ調整、内面擦過痕が見られる。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く混在する。色調は黄褐色を呈する。口径14cmを測る。

270　椀である。丸底の底部から、内弯して外開きに立ち上がり口縁部に達する。口縁端部はやや外反する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多い。色調は橙褐色を呈する。復元口径14.6cm、器高6.1cmを測る。

271　椀である。丸底の底部から、内弯してそのまま立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石、マンガンが散見される。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。復元口径14.8cm、器高6.1cmを測る。

272　椀である。丸底の底部から、内弯してそのまま立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は燈褐色を呈する。復元口径15.1cm、器高6.6cmを測る。

273　椀である。丸底の底部から、内弯してそのまま立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。口径16cm、器高5.5cmを測る。



第 55 図　71号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

274　椀である。丸底の底部から、内弯してそのまま立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、マンガン、角閃石が散見される。色調は黄褐色から茶褐色を呈する。復元口径13cm、器高5.8cmを測る。

275　椀である。丸底の底部から、内弯して外開きに立ち上がり口縁部に達する。口縁裾部はやや外反する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、マンガンが散見される。色調は橙褐色を呈する。復元口径14.3cm、器高6.4cmを測る。

276　椀である。丸底の底部から、内弯してそのまま立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄灰褐色から淡橙褐色を呈する。復元口径14.3cm、器高5.7cmを測る。

277　椀である。丸底の底部から、内弯して立ち上がり口縁部に達する。口縁部辺でやや直立して端部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、マンガンが散見される。色調は灰色を呈する。復元口径12.7cm、器高6cmを測る。

278　椀である。丸底の底部から、内弯してそのまま立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。復元口径13.8cm、器高5.5cmを測る。

279　椀である。丸底の底部は欠失するが、内弯して立ち上がり、口縁部辺でやや直立して端部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄茶褐色を呈する。復元口径13.1cmを測る。

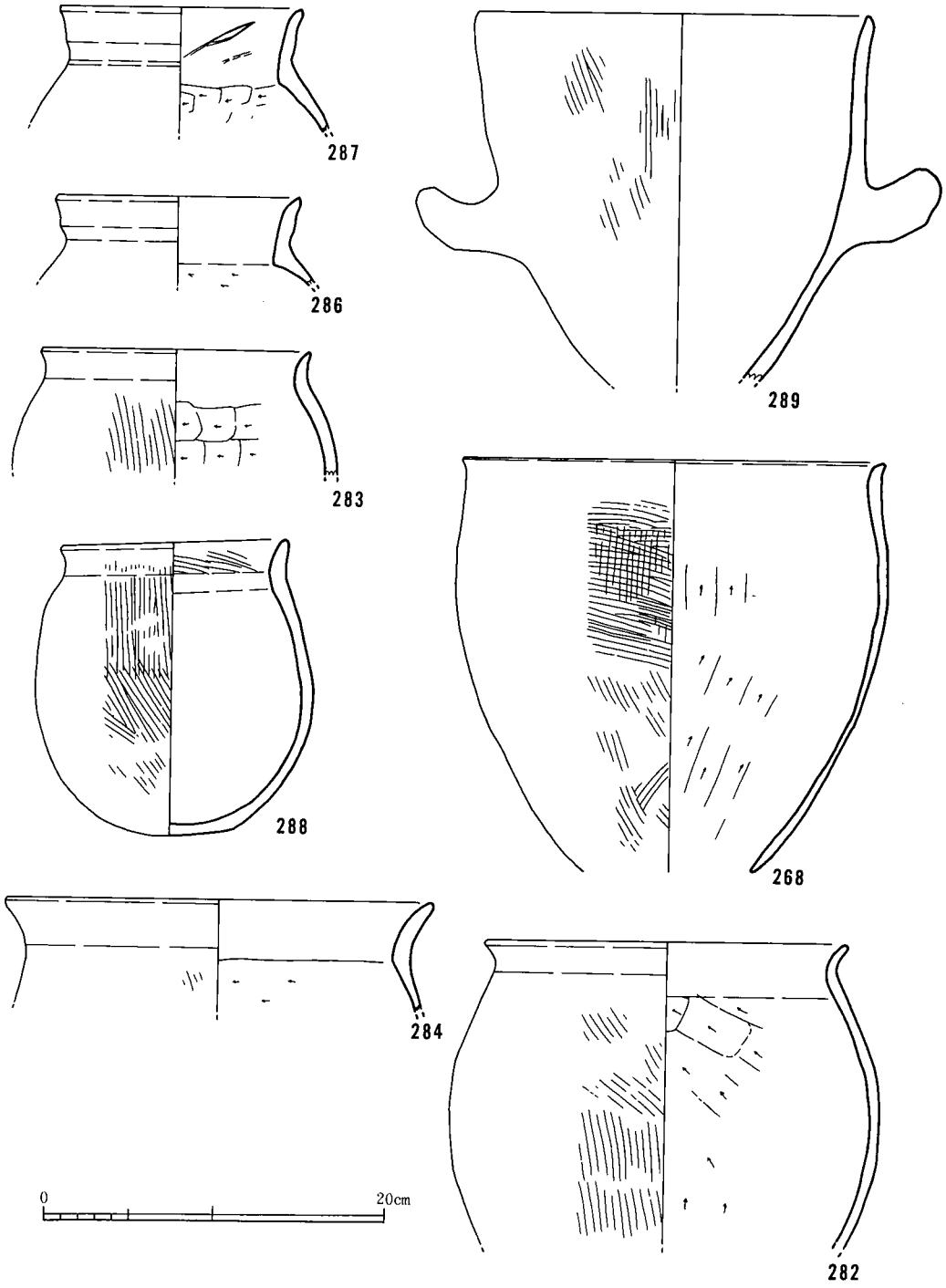
280　椀である。丸底の底部は欠失するが、内弯して外開きに立ち上がり口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多い。色調は白黄褐色から橙褐色を呈する。復元口径14.8cmを測る。

281　「く」の字状に緩やかに短く外反する口縁を持つ小型甕である。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガン、金雲母が散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径11.6cmを測る。

282　「く」の字状に緩やかに短く外反する口縁を持つ甕である。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面がハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は茶褐色を呈する。口径21cmを測る。

283　「く」の字状に緩やかに短く外反する口縁を持つ甕である。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面がハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。二次加熱のため煤の付着がみられる。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は赤褐色を呈する。口径15.7cmを測る。

284　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。胴部上半から底部にかけて欠失し



第 56 図　71号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

ている。調整は口縁部ヨコナデ、外面がハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。口径24.8cmを測る。

285　「く」の字状に緩やかに外反する口縁を持つ甕である。口縁部にのみ残存する。調整は調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母、マンガンが散見される。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。口径24.8cmを測る。

286　「く」の字状に緩やかに立ち上がり気味に外反する口縁を持つ甕である。口縁部のみ残存する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、マンガンが散見される。色調は黄褐色から燈橙色を呈する。復元口径14.3cmを測る。

287　「く」の字状に緩やかに立ち上がり気味に外反する口縁を持つ甕である。口縁部のみ残存する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、マンガンが散見される。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。復元口径14cmを測る。

288　「く」の字状に緩やかに短く外反する口縁を持つ甕である。調整は口縁部ヨコナデ、外面がハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。二次加熱のため煤の付着がみられる。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。復元口径13.2cm、器高17.1cmを測る。

289　「く」の字状に緩やかに短く外反する口縁を持つ甕である。調整は口縁部ヨコナデ、外面がハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。二次加熱のため黒斑がみられる。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は黄茶褐色を呈する。復元口径17.8cmを測る。

290　甑である。大きくずんぐりとした把手が付く。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。二次加熱のため黒変している。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は赤褐色を呈する。復元口径22.7cmを測る。

72号竪穴住居（第57図）

291　「く」の字状に短く外反する口縁を持つ甕である。胴部は球状に張り出す。底部は欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、体部剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。二次加熱のため黒斑がみられる。胎土は細砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は黄赤褐色を呈する。復元口径13cmを測る。

292　椀である。丸底の底部から、内弯してそのまま立ち上がり口縁部に達する。調整は口縁部ヨコナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径12.1cm、器高4.4cmを測る。

293　「く」の字状に短く外反する口縁を持つ甕である。胴部上半から底部にかけて欠失してい

る。調整は口縁部ヨコナデ、体部剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は外面淡橙褐色から灰茶褐色、内面淡黄褐色を呈する。復元口径19cmを測る。

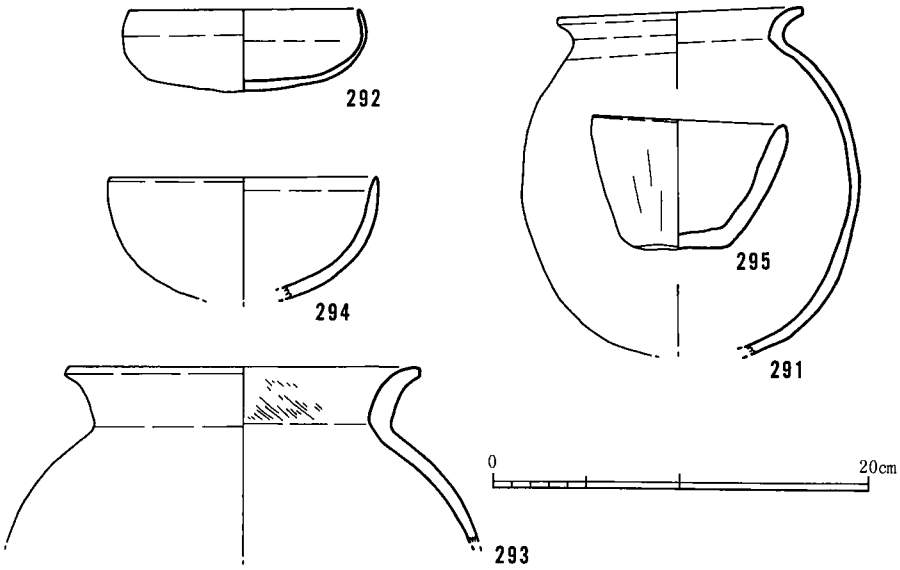
294　椀である。丸底の底部から、内弯してやや直立気味に立ち上がり口縁部に達する。底部は欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径14.3cmを測る。

73号竪穴住居（図版16、第57図）

295　ミニチュア土器である。鉢状をなす。調整は外面へら削り、内面ナデである。また焼成は良好である。内外面とも二次加熱のため黒変が著しい。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石、金雲母を含む。色調は黄灰色を呈する。口径10.1cm、底径4.8cm、器高5.7～7.3cmを測る。

74号竪穴住居（図版16、第58図）

315　椀である。丸底で、外開きに立ち上がり口縁部に達する。調整は内外面ともヨコなでである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は白黄褐色を呈する。復元口径15cm、器高4.6cmを測る。



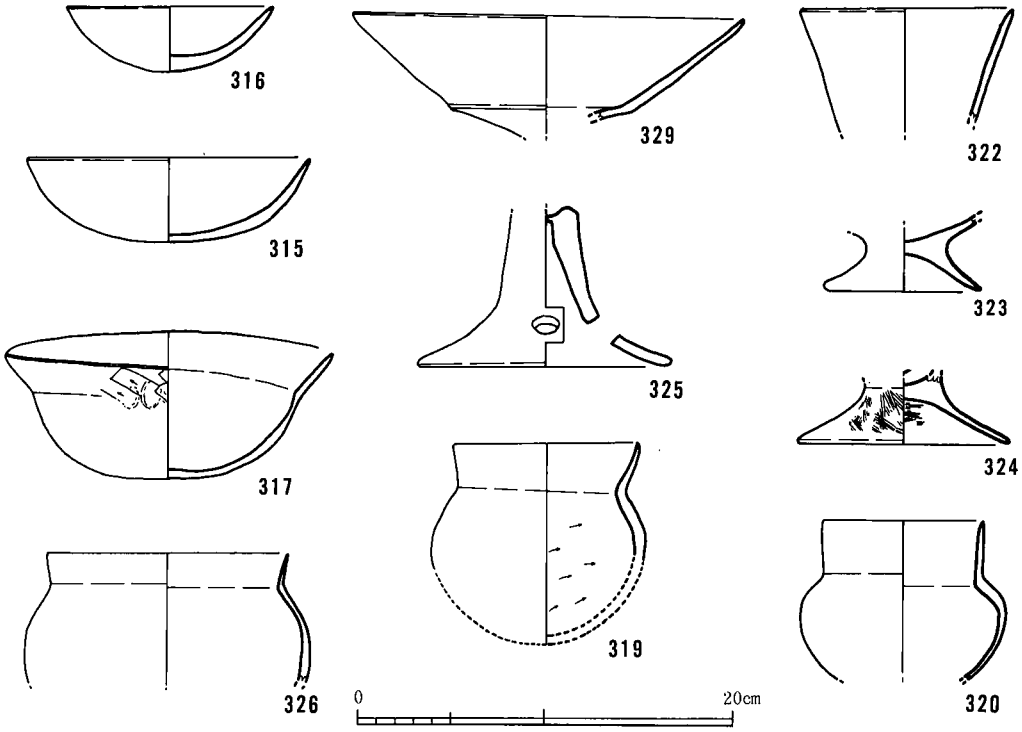
第 57 図　72号、73号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

316　椀である。丸底で、外開きに立ち上がり口縁部に達する。底部は肥厚する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は白黄褐色を呈する。口径10.9cm、器高3.5cmを測る。

317　小型丸底壺である。かなり歪んでいる。胴部は椀状をなす。器壁が薄く、頸部の稜線は不明瞭である。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は内外面とも二次加熱のため黒変している。口径17.3cm、器高5.9～7.8cmを測る。

318　「く」の字状に短く外反する口縁を持つ甕である。頸部は明瞭な稜線をもつ。胴部は球状に張り出す。底部は丸底である。調整は剝落が著しく不明であるが、外面には細かなハケ調整を残す。また焼成は良好である。二次加熱のため底部辺に黒斑がみられる。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は白黄褐色を呈する。口径10.2cm、器高13.5cmを測る。

319　小型丸底壺である。胴部は球状をなす。器壁が薄く、頸部の稜線は明瞭である。口縁端部



第 58 図　74号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

はやや内側につまみ上げる。底部を欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石、金雲母が散見される。色調は内外面とも二次加熱のため黒変している。口径10cmを測る。

320　小型丸底壺である。口縁部は直立する。胴部は椀状をなす。器壁が薄く、頸部の稜線は明瞭である。底部を欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石、金雲母が散見される。灰色を呈する。復元口径8.6cmを測る。

321　底部片である。胴部は球状で、底部は丸底になる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含む。色調は淡黄褐色を呈する。胴最大径14.6cmを測る。

322　長頸壺の頸部片である。直線的に伸びた頸部は、口縁部でやや外反する。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。口径11.3cmを測る。

323　高杯の脚部である。杯部外周端から直接脚部は「ハ」の字状に広がる。調整は剝落が著しく不明であるが、脚部内面はハケ調整のようである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母が散見される。色調は橙褐色を呈する。復元底径８cmを測る。

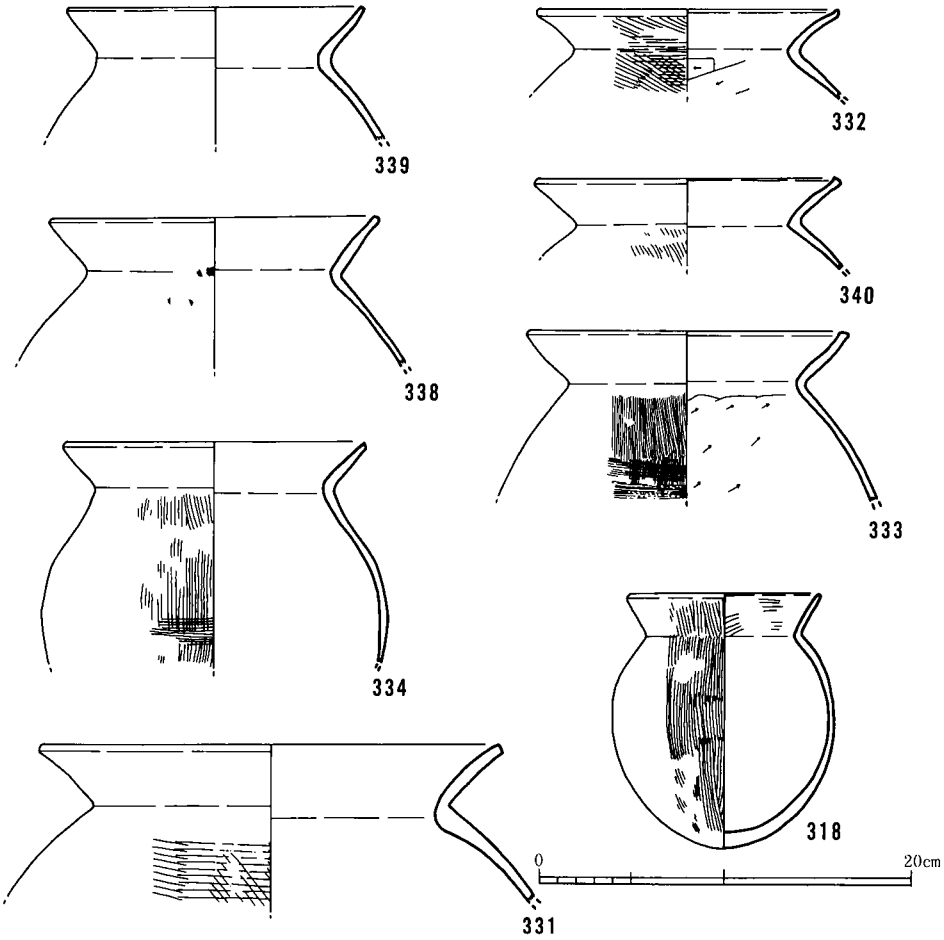
324　高杯の脚部である。脚部は大きく「ハ」の字状に広がる。調整は脚端部ナデ、内外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、角閃石が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。復元底径11.3cmを測る。

325　高杯の脚部である。脚部はやや外反する柱部に続いて、大きく「ハ」の字状に広がる脚裾部を有する。脚裾部には４箇所に穿孔がある。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。底径13.6cmを測る。

326　短頸壺である。やや外反して短い頸部をもつ。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母、角閃石を含む。色調は黄褐色から赤褐色を呈する。復元口径12.8cmを測る。

329　脚部を欠失している高杯である。杯部は底部から短く外反し、そこで内側に屈曲してから直線的に口縁部に達する。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径20.7cmを測る。

330　脚部を欠失している高杯である。杯部は底部から外反し、そこで内側に屈曲してから短く外弯して口縁部に達する。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径20cmを測る。



第 59 図　74号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

331　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明であるが、外面にはハケ調整を残す。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径24.8cmを測る。

332　「く」の字状に強く外反する口縁を持つ甕である。口縁端部はややつまみ上げる。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ調整、内面擦過痕を残す。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径16cmを測る。

333　「く」の字状に強く外反する口縁を持つ甕である。口縁端部はややつまみ上げる。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面細かなハケ調整、内面擦過痕

を残す。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径17.1cmを測る。

334　「く」の字状に強く外反する口縁を持つ甕である。口縁端部は面をもつ。胴部下半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明であるが外面ハケ調整、内面擦過痕を残す。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。復元口径16.2cmを測る。

336　短頸壺である。直立して短い頸部をもつ。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石を含む。色調は灰白色から黄白色を呈する。復元口径13.4cmを測る。

337　二重口縁壺である。直立する頸部から短く外反し、そこで屈曲して外弯気味に口縁端部に達する。頸部以下を欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は淡黄褐色を呈する。復元口径22.1cmを測る。

338　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。口縁端部は面をもつ。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は灰黄褐色を呈する。口径17.4cmを測る。

339　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。口縁端部は面をもつ。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母、角閃石が散見される。色調は淡黄褐色を呈する。口径15.7cmを測る。

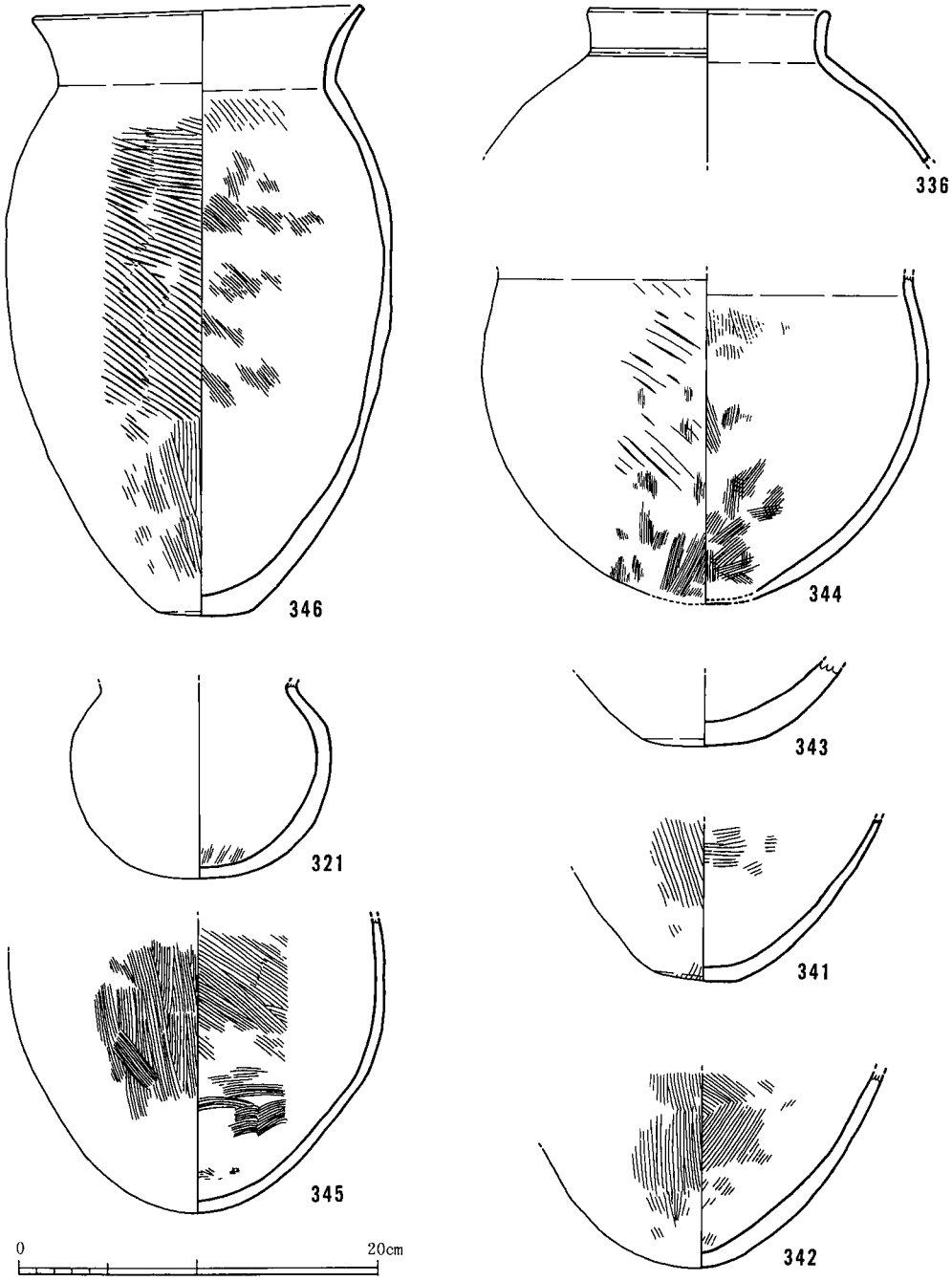
340　「く」の字状に外反する口縁を持つ甕である。口縁端部はややつまみ上げる。胴部上半から底部にかけて欠失している。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母が散見される。色調は淡黄褐色を呈する。口径16.1cmを測る。

341　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、角閃石が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。二次加熱のため内外面とも黒変している。

342　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、金雲母が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。二次加熱のため内外面とも黒変している。

343　底部片である。底部はやや丸みを帯びる。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、角閃石、金雲母が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。二次加熱のため内外面とも黒変している。

344　胴部片である。胴部は球状に張り出す。底部はやや丸みを帯びるが、頂部を欠失している。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒を多く含み、角閃石が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。二次加熱のため内外面とも黒変してい



第 60 図　74号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

る。胴最大径は25cmを測る。

345　底部片である。底部は丸みを帯びる。調整は内外面ともハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒を多く含み、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。二次加熱のため内外面とも黒変している箇所がある。

346　「く」の字状に緩やかに外反する口縁部を持つ甕である。口縁部は面をもつ。胴部はラグビーボール状をなす。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ハケ調整、内面底部片には擦過痕を残す。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄褐色を呈する。外面に黒変箇所が見られる。口径18.2cm、器高33.8cmを測る。

347　二重口縁壺である。胴部からやや内傾した頸部につながり、そこから短く外反し、屈曲して外弯気味に口縁端部に達する。口縁端部は面をもつ。胴部上半部以下を欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、内外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く含まれる。色調は黄褐色を呈する。復元口径34.7cmを測る。

348　二重口縁壺である。屈曲して外弯気味に口縁端部に達する。屈曲部には連続して半折竹管文が施される。口縁端部は面をもつ。口縁上半部を残すのみである。調整は内外面とも剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガン、角閃石、金雲母が含まれる。色調は黄褐色を呈する。復元口径40.4cmを測る。

349　二重口縁壺である。外弯する頸部から屈曲して、直線的に伸びて口縁端部に達する。端部は面をもつ。調整剝落が著しく不明である。また胎土は緻密である。色調は黄褐色を呈する。復元口径は28.3cmを測る。

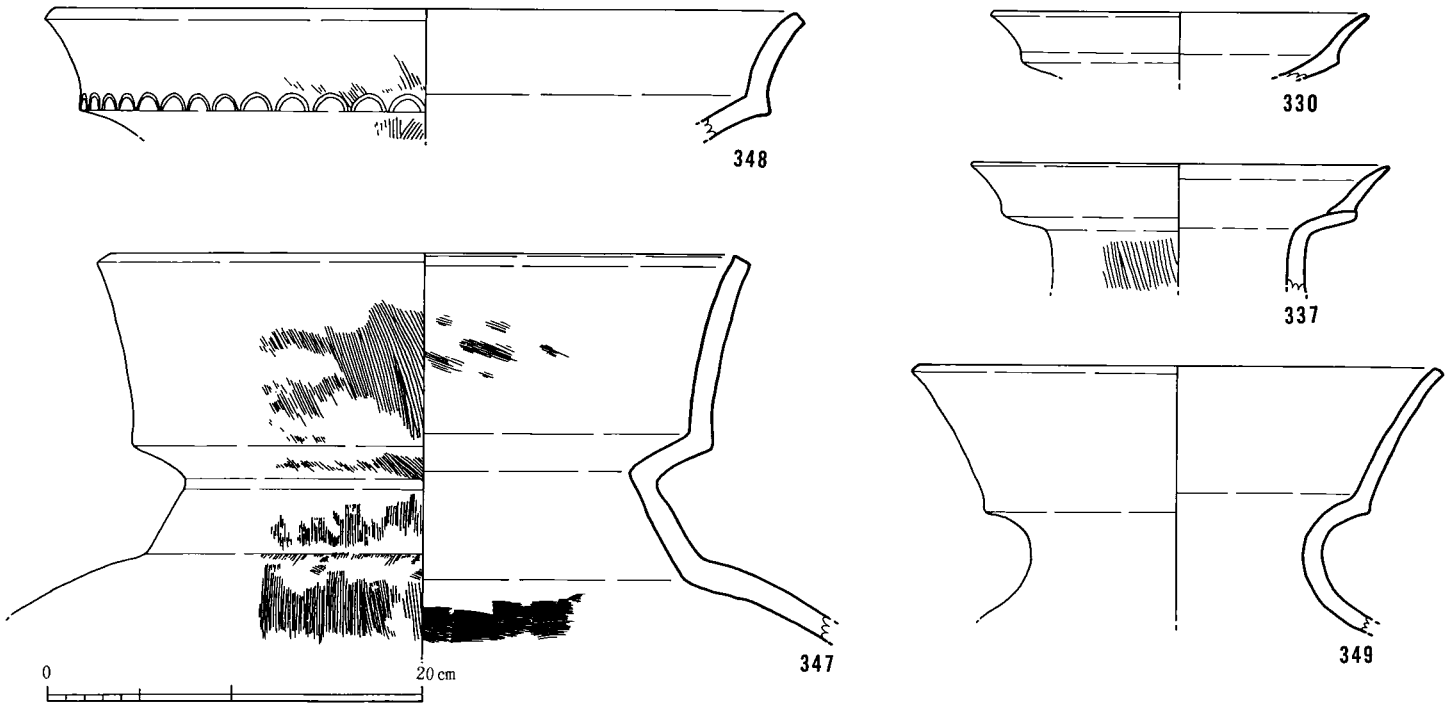
75号竪穴住居（図版17、第62図）

300　「く」の字状に緩やかにやや長く外反する口縁を持つ甕である。胴部中央から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面ハケ調整である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、緻密である。色調は灰色を呈する。口径14.4cmを測る。

301　器台状のものである。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石を含む。色調は黄褐色から橙褐色を呈する。底径10cmを測る。

302　高杯である。杯部は底部より内弯気味に外反し、そのまま口縁部に達する。脚部は「ハ」の字状に広がり、端部はやや外方に張り出す。調整は内外面ともに剝落が著しく不明であるが、脚部外面ではへら削りが見られる。また焼成は良好である。胎土は緻密で、金雲母が含まれる。色調は灰黄褐色を呈する。口径14.5cm、底径9.2cm、器高10.3cmを測る。

303　高杯である。杯部は底部より内弯し、そのまま口縁部に達し、端部はやや外方に広がる。脚部は「ハ」の字状に広がり、端部は外方に張り出す。調整は内外面ともに剝落が著しく不明であるが、杯部内外面ではナデが見られる。また焼成は良好である。胎土は緻密で、金雲母が



第 61 図　74号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

含まれる。色調は橙褐色を呈する。口径13.6cm、底径9.2cm、器高10.8cmを測る。

304　高杯である。杯部は底部より内弯し、そのまま口縁部に達し、端部はやや外方に広がる。脚部は「ハ」の字状に広がり、そのまま端部に達する。調整は内外面ともに剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は緻密で、金雲母が含まれる。色調は橙褐色を呈する。口径14cm、底径８cm、器高9.9cmを測る。

305　椀である。丸底の底部から内弯してそのまま口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母を含む。色調は赤褐色から橙褐色を呈する。復元口径14.5cm、器高4.6cmを測る。

306　椀である。丸底の底部を欠失しているが、内弯して口縁部辺で若干立ち上がる。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、マンガンを含む。色調は橙褐色を呈する。復元口径14.2cmを測る。

307　椀である。丸底の底部から、内弯してそのまま口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母を含む。色調は橙褐色を呈する。復元口径12.1cm、器高6.7cmを測る。

308　椀である。丸底の底部を欠失しているが、内弯してそのまま口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、金雲母を含む。色調は橙褐色を呈する。復元口径14cmを測る。

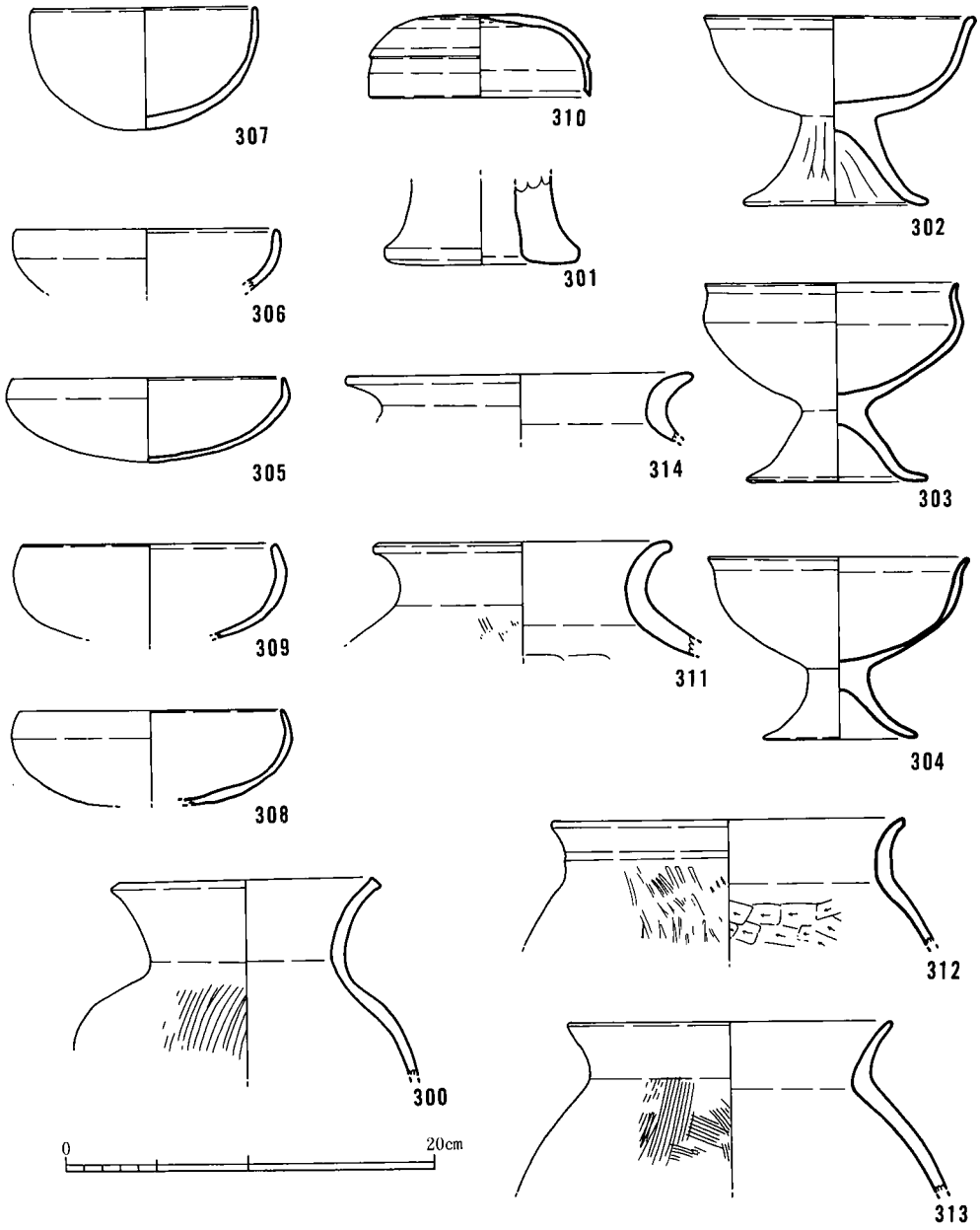
309　椀である。丸底の底部を欠失しているが、内弯してそのまま口縁部に達する。調整は剝落が著しく不明である。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含む。色調は灰黄褐色を呈する。復元口径13.6cmを測る。

310　須恵質の杯蓋である。天井部はあまり丸みをもたない。天井部と口頸部の境に凹線がはしる。口縁端部はややつまみ上げる。天井部にはへら記号がある。調整は天井部回転へら削り、その他ヨコナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く含む。色調は灰色を呈する。復元口径12cm、器高4.5cmを測る。

311　「く」の字状に緩やかに短く外反する口縁を持つ甕である。肩部から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石を多く含む。色調は黄茶褐色を呈する。復元口径16cmを測る。

312　「く」の字状に緩やかに短く外反する口縁を持つ甕である。肩部から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面粗いハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。胎土は細・粗砂粒が多く含む。色調は茶褐色を呈する。復元口径19cmを測る。

313　「く」の字状にやや長く外反する口縁を持つ甕である。胴中央部から底部にかけて欠失している。調整は口縁部ヨコナデ、外面粗いハケ調整、内面へら削りである。また焼成は良好である。外面は黒変している。胎土は細・粗砂粒が多く、角閃石、金雲母を含む。色調は茶褐色



第 62 図　75号 竪穴住居出土土器実測図（S＝1／4）

を呈する。復元口径17.5cmを測る。

314　「く」の字状に緩やかに短く外反する口縁部である。調整は口縁部ヨコナデである。また焼成は良好である。胎土は細砂粒が多く、角閃石が散見される。色調は黄橙褐色を呈する。口径18.5cmを測る。

2　各遺構出土のその他遺物

石器

536　半折の石包丁である。60、61号竪穴住居混入出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長7.6cm、最大幅6.2cm、厚さ0.5cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は75ｇを測る。

537　半折の石包丁である。64号竪穴住居出土。両面共に擦痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長9.2cm、最大幅5.6cm、厚さ0.5cmを測る。石材は粘板岩系である。現存重量は82ｇを測る。

538　半折の石包丁である。64号竪穴住居出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。紐穴は両面からあけられる。紐ズレが見られる。現存長7.5cm、最大幅４cm、厚さ0.5cm、紐孔中央間距離２cmを測る。石材は片岩系である。現存重量は25ｇを測る。

539　未製品の石包丁である。包含層出土。両面共に磨研痕が縦横に走る。長さ10.2cm、最大幅６cm、厚さ0.5cmを測る。石材は片岩系である。現存重量は73ｇを測る。

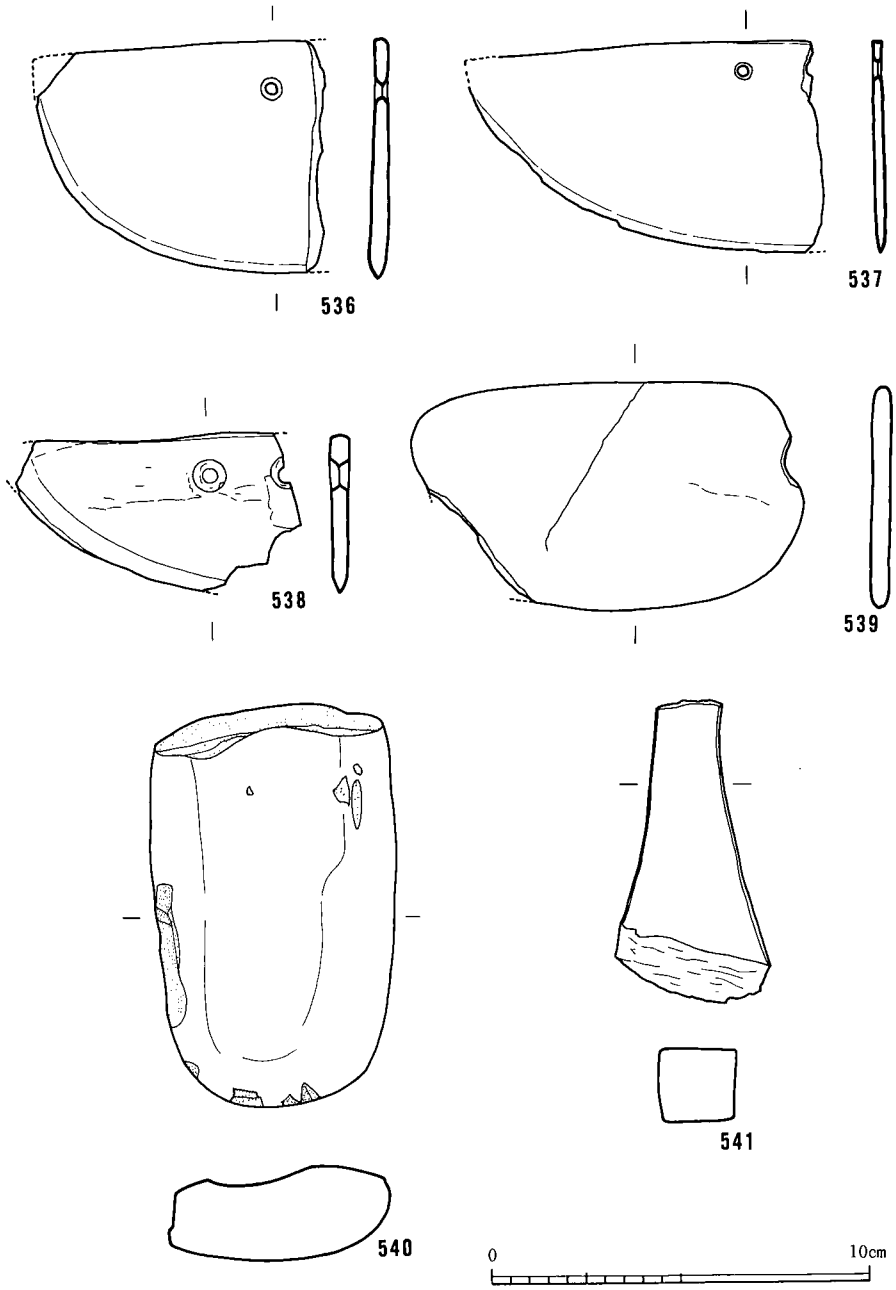
540　太型蛤刃石斧である。47号竪穴住居出土。両面共に磨研が丁寧に施される。基部を欠失している。表裏面刃部側に剥離痕による窪みがある。現存長10.4cm、最大幅6.2cm、厚さ2.5cmを測る。石材は輝緑片岩系である。現存重量は328ｇを測る。

541　砥石である。53号竪穴住居出土。不整４角形状を呈していて、長さ8.2cm、幅3.8～1.9cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は４面で、各面は中央部が窪んでいる。現存重量は122ｇを測る。

542　砥石である。57号竪穴住居出土。不整４角形状を呈していて、長さ9.2cm、幅7.4cm、厚さ１cmを測る。石材は砂岩で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。砥面は３面で、各面は平坦である。現存重量は135ｇを測る。

543　砥石である。64号竪穴住居出土。不整４角形状を呈していて、長さ6.9cm、幅7.7cm、厚さ3.8cmを測る。石材は砂岩で、粒子は粗粒であることから荒砥になると思われる。砥面は4面で、各面は平坦である。現存重量は418ｇを測る。

544　砥石である。57号竪穴住居出土。不整５角形状を呈していて、長さ11.3cmを測る。石材は玄武岩系で、粒子は粗粒であることから荒砥になると思われる。砥面は４面で、各面はかなり使い込んでいる。現存重量は215ｇを測る。



第 63 図　各遺構出土石器実測図（S＝1／2）

545　砥石である。47号竪穴住居出土。破面が多く、砥面は主として2面である。最大長10.1cm、最大幅8.3cm、最大厚1.9cmを測る。石材は砂岩系で、粒子は極細粒であることから精砥になると思われる。部分的にべったりと炭化物が付着する。現存重量は196ｇを測る。

鉄器

609　装着式の鋤先状を呈する。57号竪穴住居出土。刃部幅4.1cm、現存重量47.5ｇを測る。

第3節　小結

東部地区の調査では、約5500㎡を発掘し、竪穴住居33軒、ピット等が検出され、上記のような遺物の出土をみた。

33軒の竪穴住居は、2区同様に遺構の密度は高いが、分散的に配置されている。

33軒の内、そのプランを確認し得るものが19軒ある。それらは、以下の4つのタイプに区分される。

・Ａタイプ；長方形プランを有し、ベット状遺構、屋内土坑を備えるもの。また、主柱穴は、中央の炉跡を挟んで2本柱になるもの。張り出し部はない。
例）58号、59号、61号、63号、67号、68号、69号、73号、74号竪穴住居。

長方形プランの大きさ、ベットの付設位置などは以下のようである。

58号竪穴住居　長軸5.15M×短軸4.06M、ベット状遺構不明。

59号竪穴住居　長軸4.17M以上×短軸4.01M、ベット状遺構不明。

62号竪穴住居　長軸5.84M×短軸5.18M、ベット状遺構不明。

63号竪穴住居　長軸5.8M×短軸3.98M以上、東側短壁にベット状遺構。

67号竪穴住居　長軸7.48M×短軸4.32M、ベット状遺構不明。

68号竪穴住居　長軸4.96M×短軸3.85M、ベット状遺構不明。

69号竪穴住居　長軸4.94M×短軸4.25M、ベット状遺構全周。

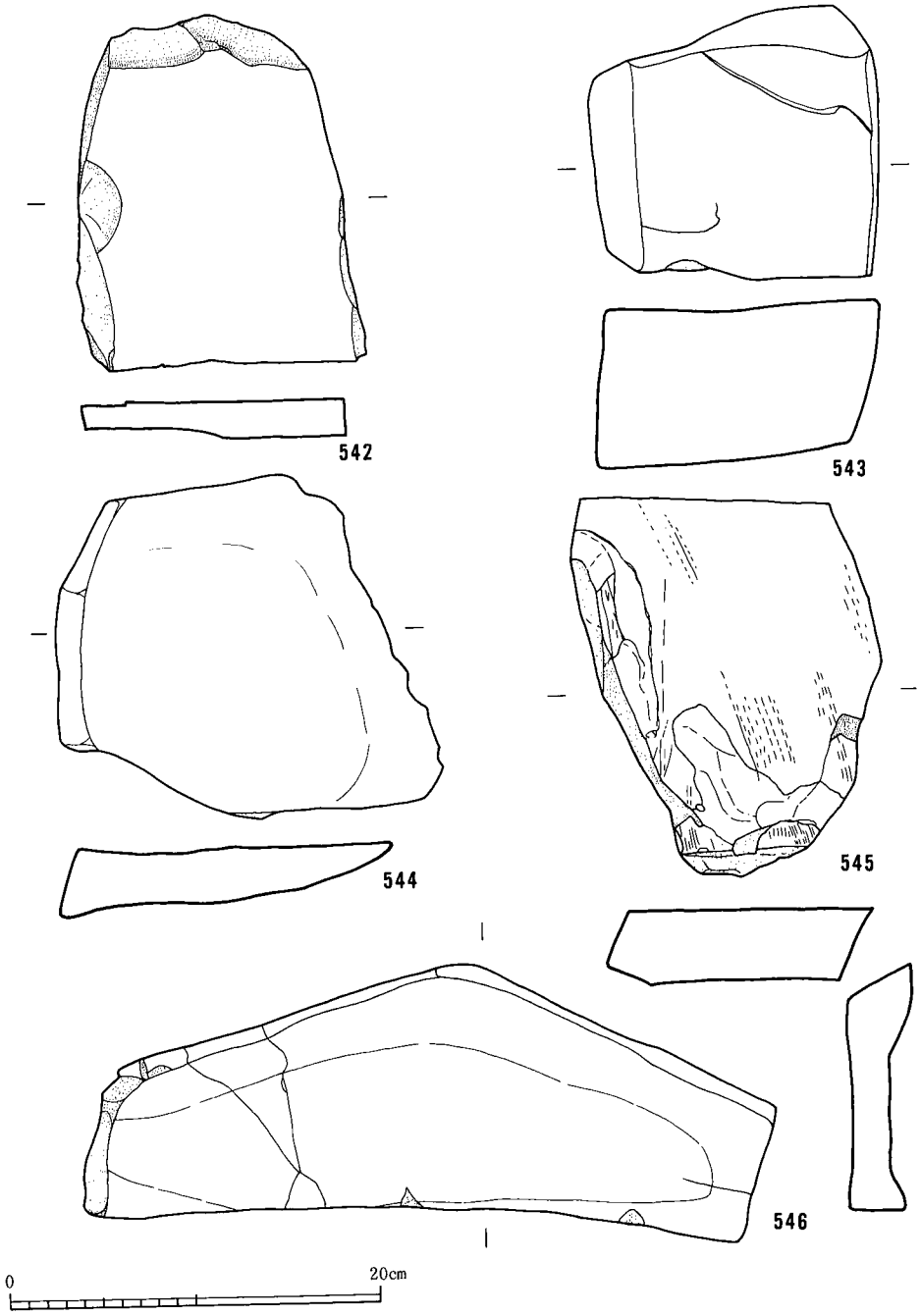
73号竪穴住居　長軸5.8M×短軸4.48M、東側短壁、南側に寄ってベット状遺構。

74号竪穴住居　長軸6.05M×短軸4.89M、ベット状遺構不明。

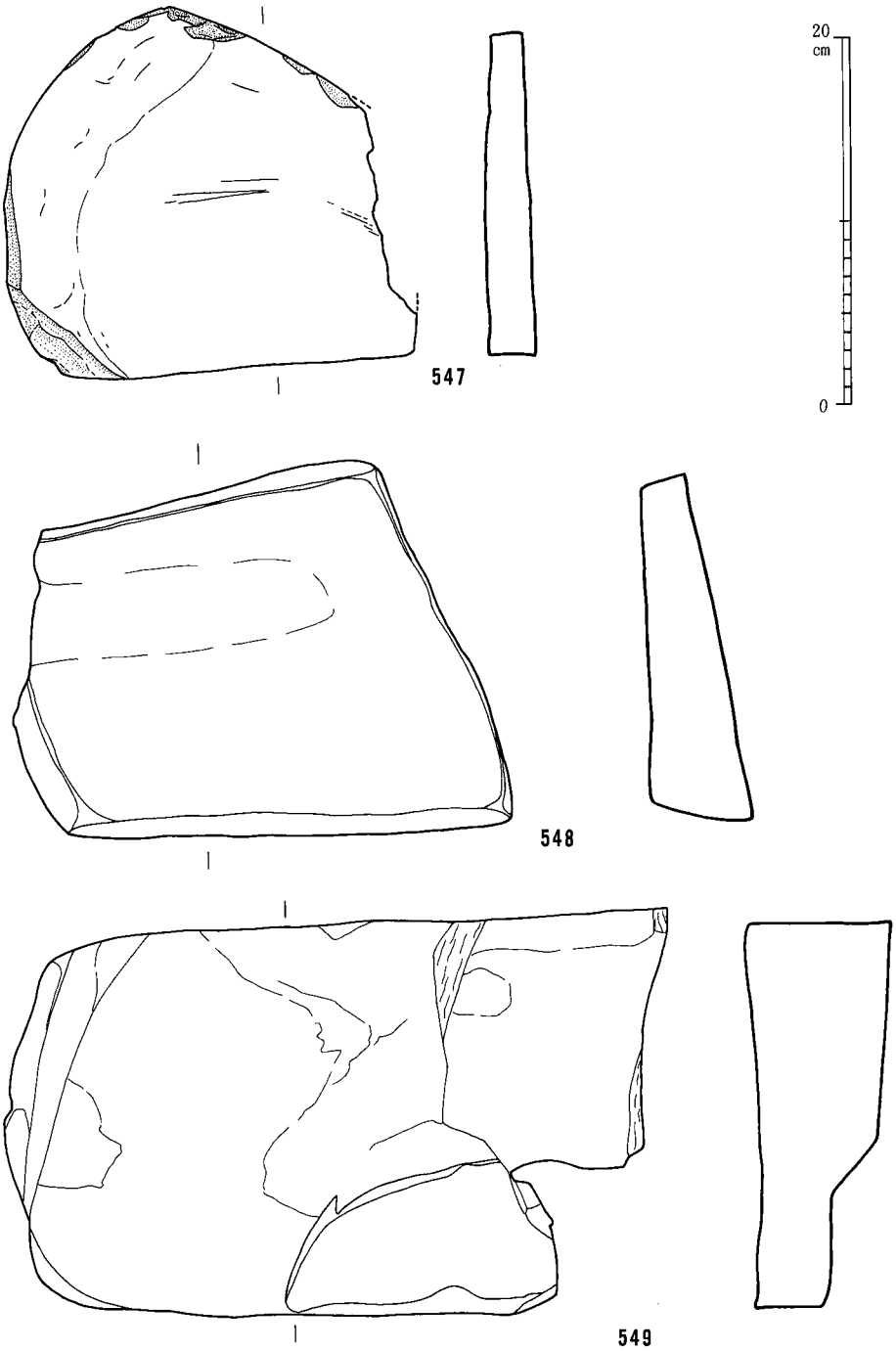
・Ｂタイプ；長方形プランを有し、ベット状遺構、屋内土坑を備えるもの。また、主柱穴は、4本柱になるもの。
例）52号竪穴住居。

長方形プランの大きさ、ベットの付設位置などは以下のようである。

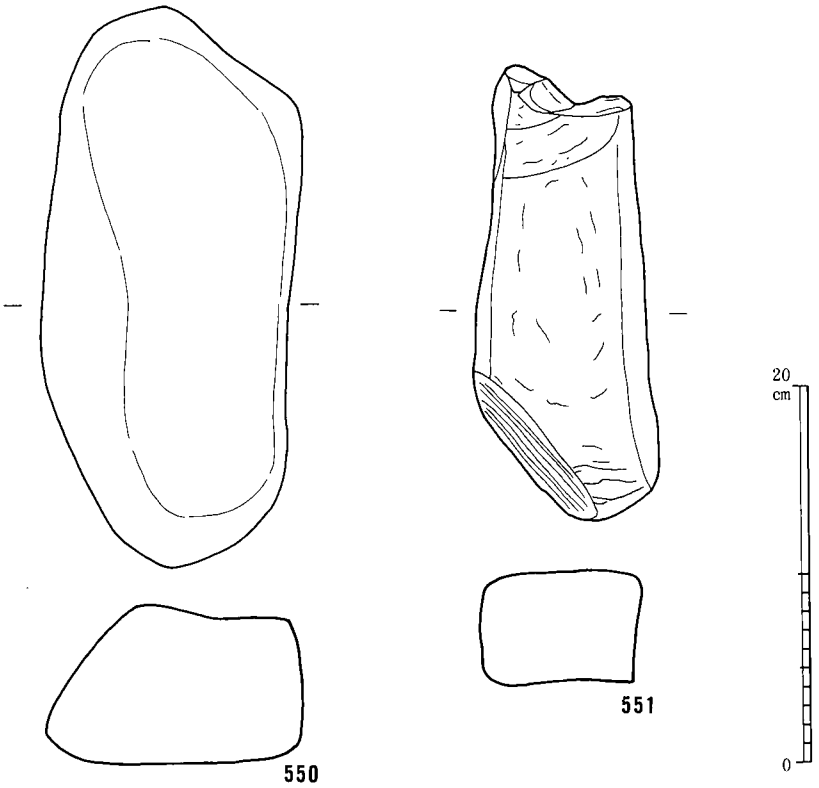
52号竪穴住居　長軸7.35M×短軸6.2M、屋内土坑及び東側壁体中央部を除いてベット状遺構が



第 64 図　各遺構出土石器実測図（S＝1／2）



第 65 図　各遺構出土石器実測図（S＝1／2）



第 66 図　各遺構出土石器実測図（S＝1／2）

巡る。

・Cタイプ；正方形プランカマド有する。主柱穴は4本柱である。

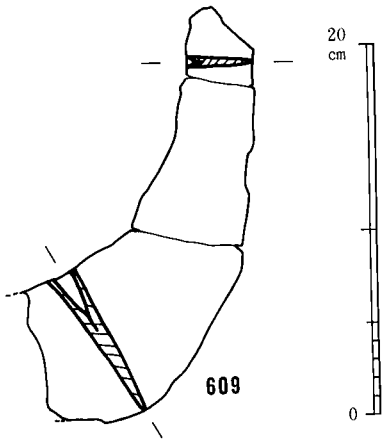
例）49号、54号、57号、64号、71号、72号、75号竪穴住居。

正方形プランの大きさ、カマドの付設位置などは以下のようである。

49号竪穴住居　5.25M×5.67M、北側にカマド（造りつけ型）あり。

53号竪穴住居　3.61M×3.23M、北側にカマド（突出型）あり。

54号竪穴住居　3.31M×3.77M、北側にカマド（造り



第 67 図
57号竪穴住居出土鉄器実測図（S＝1／2）

つけ型）あり。

57号竪穴住居　2.98以上M×2.75M以上、北側にカマド（突出型）あり。

64号竪穴住居　4.03M×4.02M、北側にカマド（造りつけ型）あり。

71号竪穴住居　4.21M×4.1M、北側にカマド（突出型）あり。

72号竪穴住居　4.1M×3.68M、北側にカマド（突出型）あり。

75号竪穴住居　4.97M×4.96M、北側にカマド（突出型）あり。

なお、カマドの形態により２タイプに細分される（Ｃ－１、２タイプ）。

こうして検出された33軒の竪穴住居等の先後関係は以下のようになる。

（古）44号竪穴住居＞45号竪穴住居＞46号竪穴住居（新）

（古）47号竪穴住居＞48号竪穴住居（新）；（古）49号竪穴住居＞50号竪穴住居（新）

（古）54号竪穴住居＞53号竪穴住居（新）；（古）56号竪穴住居＞55号竪穴住居（新）

（古）62号竪穴住居＞61号竪穴住居（新）；（古）63号竪穴住居＞64号竪穴住居（新）

（古）65号竪穴住居＞66号竪穴住居＞64号竪穴住居（新）

（古）59号竪穴住居＞69号竪穴住居（新）；（古）70号竪穴住居＞71号竪穴住居（新）

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、石包丁、砥石、鉄鏃、支脚石等があり、弥生時代後期中葉～後葉、古墳時代後期、奈良時代頃のものである。

出土土器の器種構成をまとめてみると、以下のようになる。

43号竪穴住居；ミニチュア土器（壺形、鉢形、脚台形）、底部やや丸みを持つ。

44号竪穴住居；椀（土師器）。

48号竪穴住居；甑、高杯、椀、「く」の字状口縁を持つ甕、小型丸底壺（土師器）。

49号竪穴住居；複合口縁壺（弥生土器）、椀、甑（土師器）。

50号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、椀（土師器）。

52号竪穴住居；長胴甕、「く」の字状口縁を持つ甕、高杯（土師器）。

53号竪穴住居；杯身。

58号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、椀。

59号竪穴住居；底部はやや丸みを帯びる。

60号竪穴住居；高杯脚部、鉢、小型丸底壺。

61号竪穴住居；ミニチュア土器（鉢状、椀状、器台状）、鉢、器台。

62号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、椀、坩、底部は丸みを持つ。

63号竪穴住居；複合口縁壺、脚台付き壺、小型丸底壺、器台、「く」の字状口縁を持つ甕、脚台付き甕、鉢、ミニチュア土器(椀状)、底部は平坦、上げ底、やや丸みを持つの３タイプがある。

67号竪穴住居；複合口縁壺、ミニチュア土器(無頸壺状、鉢状、椀状)、高杯、器台、脚台、「く」

の字状口縁を持つ甕、底部は平坦、丸みを持つの2タイプがある。

68号竪穴住居；複合口縁壺、小型丸底壺、高杯、椀、鉢、「く」の字状口縁を持つ甕、ミニチュア土器（椀状）、底部は丸みを持つ。

69号竪穴住居；小型丸底壺、「く」の字状口縁を持つ甕。

71号竪穴住居；甑、椀、「く」の字状口縁を持つ甕。

72号竪穴住居；椀、ミニチュア土器（鉢状）、「く」の字状口縁を持つ甕。

74号竪穴住居；長頸壺、短頸壺、二重口縁壺、小型丸底壺、椀、「く」の字状口縁を持つ甕、高杯。

75号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、椀、器台、高杯、須恵器の杯蓋。

第７章

おわりに

第１節　集落の変遷について

第２節　日永遺跡出土土器について

第３節　広形銅矛・広形銅戈について

第7章　おわりに

日永遺跡では、各調査区で以下のような検出遺構があった。

0区の調査では、約4000m²を発掘し、竪穴住居10軒、土坑3基、ピット等を検出した。

2区の調査では、約2400m²を発掘し、竪穴住居25軒、掘立柱建物10棟、土坑5基、溝1条、馬蹄形周溝1基、土壙墓2基、落とし穴状遺構1基、ピット等を検出した。

3区の調査では、約1200m²を発掘し、竪穴住居3軒、掘立柱建物10棟、土坑1基、溝5条、銅矛・銅　埋納遺構1基、ピット等を検出した。

4区の調査では、約1700m²を発掘し、竪穴住居3軒、掘立柱建物2棟、土坑1基、溝1条、ピット等を検出した。

東部地区の調査では、約5500m²を発掘し、竪穴住居33軒、ピット等を検出した。

従って、それらを総計すれば、日永遺跡の調査では、竪穴住居76軒、掘立柱建物22棟、土坑10基、溝7条、土壙墓2基、落とし穴状遺構1基、馬蹄形周溝1条、銅矛・銅戈埋納遺構1基、ピット多数を検出したことになる。

第1節　集落の変遷について

76軒の竪穴住居の内、住居の構造が確認できるものは、以下の4つのタイプに区分される。

・Aタイプ；長方形プランで屋内土坑を有し、ベッド状遺構、張り出し部を備えるものもある。
また、主柱穴は、中央の炉跡を挟んで2本柱になるもの。
例）1号、5号～7号、16号、30号、32号、37号、41号、58号、59号、62号、63号、67号、68号、69号、73号、74号竪穴住居。

長方形プランの大きさ、ベットの付設位置などは以下のようである。

1号竪穴住居；長軸6.2M×短軸4.6M、西側短壁にベッド状遺構、東側短壁に張り出し部。

5号竪穴住居；長軸6.4M×短軸4.8M、東側短壁にベッド状遺構。

6号竪穴住居；長軸5.4M×短軸4M、西側短壁にベッド状遺構。

7号竪穴住居；長軸5.2M×短軸4.2M、西側短壁にベッド状遺構。

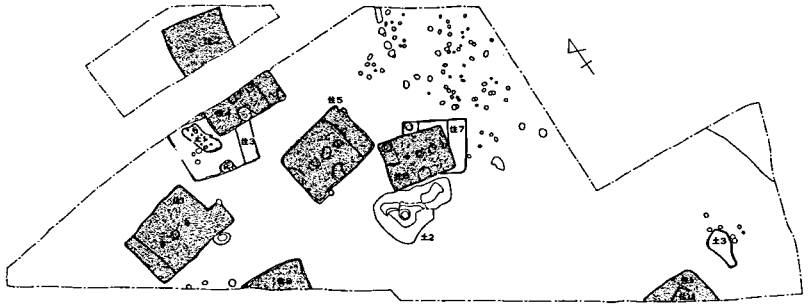
16号竪穴住居；長軸6.82M×短軸4.47M、北側長壁及び東側短壁にベッド状遺構、西側短壁に張り出し部。

30号竪穴住居；長軸4.28M×短軸3.26M、北側短壁にベッド状遺構、東側長壁に張り出し部。

32号竪穴住居；長軸5.88M×短軸3.92M、東西側短壁、北側に寄ってベッド状遺構（共に張り出し部を持つ）。

東部地区

0区

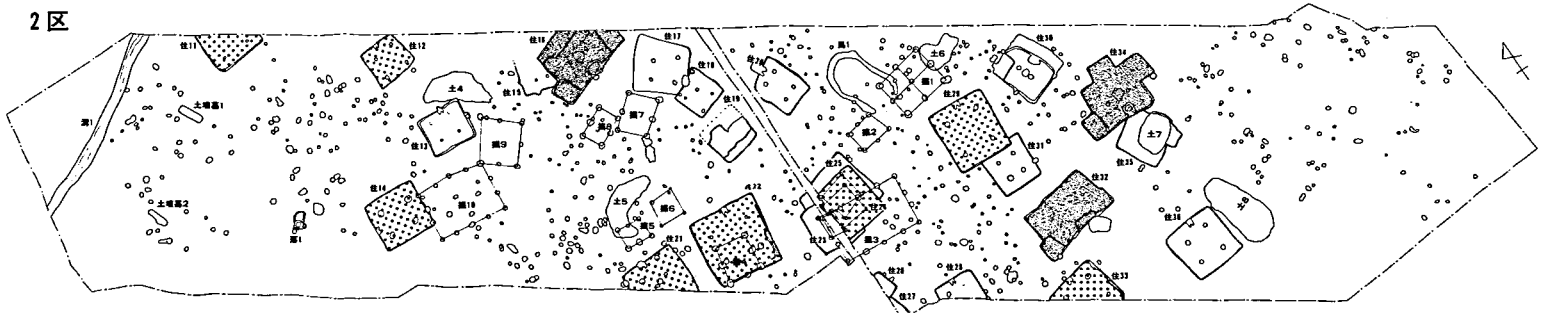


凡例

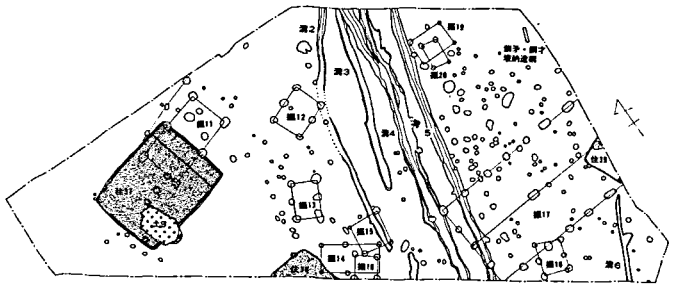
- 弥生時代後期中葉
- 古墳時代初頭
- 古墳時代前期
- 古墳時代後期

第 68 図　日永遺跡集落変遷図（S＝1／600）

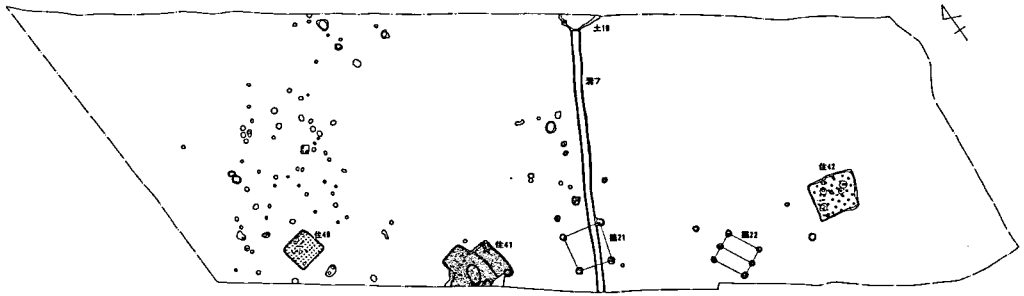
2区



3区



4区



第 69 図　日永遺跡集落変遷図（S＝1／600）

37号竪穴住居；長軸8.65M×短軸6.9M、東側短壁にベッド状遺構。

41号竪穴住居；長軸4.9M×短軸3.5M、長方形プラン、東側短壁にベッド状遺構、屋内土坑、北側長壁に張り出し部。

58号竪穴住居；長軸5.15M×短軸4.06M、ベッド状遺構不明。

59号竪穴住居；長軸4.17M×短軸4.01M、ベッド状遺構不明。

62号竪穴住居；長軸5.84M×短軸5.81M、ベッド状遺構不明。

63号竪穴住居；長軸5.8M×短軸3.98M以上、東側短壁にベッド状遺構。

67号竪穴住居；長軸7.48M×短軸4.32M、ベッド状遺構不明。

68号竪穴住居；長軸4.96M×短軸3.85M、ベッド状遺構不明。

69号竪穴住居；長軸4.94M×短軸4.25M、ベッド状遺構不明。

73号竪穴住居；長軸5.8M×短軸4.48M、東側短壁、南側に寄ってベッド状遺構。

74号竪穴住居；長軸6.05M×短軸4.89M、ベッド状遺構不明。

・Bタイプ；正方形プランを有し、ベッド状遺構、屋内土坑、張り出し部を備えるもの。また、主柱穴は、中央の炉跡を挟んで2本柱になるもの。

例）34号竪穴住居。

正方形プランの大きさ、ベッドの付設位置などは以下のようである。

34号竪穴住居；長軸4.65M×短軸4.04M、西側短壁にベッド状遺構(張り出し部でもある)、北側、東側壁に張り出し部、平面プランは花弁状になる。

・Cタイプ；長方形プランを有し、ベッド状遺構、屋内土坑を備えるもの。また、主柱穴は、4本柱になるもの。

例）52号竪穴住居。

長方形プランの大きさ、ベッドの付設位置などは以下のようである。

52号竪穴住居；長軸7.35M×短軸6.2M、屋内土広及び東側壁体中央部を除いてベッド状遺構が巡る。

・Dタイプ：長方形プランでカマドを有する。主柱穴は4本柱である。

例）20号、21号竪穴住居。

長方形プランの大きさ、カマドの付設位置などは以下のようである。

20号竪穴住居；長軸4.27M×短軸3M、北側短壁にカマド（突出型）あり。

21号竪穴住居；長軸4.5M以上×短軸4.5M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

なお、カマドの形態により2タイプに細分できる（D－1、2タイプ)。

・Eタイプ；正方形プランでカマドを有する。主柱穴は4本柱である。

例）11号、12号、13号、14号、15号、17号、18号、19号、22号、23号、24号、25号、26号、27号、28号、29号、31号、33号、35号、36号、49号、54号、57号、

64号、71号、72号、75号竪穴住居。

正方形プランの大きさ、カマドの付設位置などは以下のようである。

11号竪穴住居；4.25M×3.85M以上、カマド不明。

12号竪穴住居；3.48M×3.3M、北側短壁にカマド（突出型）あり。

13号竪穴住居；3.85M×3.32M、北側短壁にカマド（突出型）あり。

14号竪穴住居；4.15M×4.42M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

15号竪穴住居；南壁4.3M、カマド不明。

17号竪穴住居；4.65M×4.24M、西側壁にカマド痕跡あり。

18号竪穴住居；3.2M×3.01M、北側短壁にカマド（突出型）あり。

19号竪穴住居；南壁3.3M、北側壁にカマド痕跡あり。

22号竪穴住居；5.7M×6.01M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

23号竪穴住居；3.7M×3.98M、カマド不明。

24号竪穴住居；東壁4.63M、カマド不明。

25号竪穴住居；5.03M×4.99M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

28号竪穴住居；北がべ3.26M、北側短壁にカマド（突出型）あり。

29号竪穴住居；5.36M×4.86M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

31号竪穴住居；3.42M×3.88M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

33号竪穴住居；4.52M×4.42M、カマド不明。

35号竪穴住居；3.76M×3.68M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

36号竪穴住居；4.59M×4.45M、北側短壁にカマド（造りつけ型）あり。

49号竪穴住居；5.25M×5.67M、北側にカマド（造りつけ型）あり。

53号竪穴住居；3.61M×3.23M、北側にカマド（突出型）あり。

54号竪穴住居；3.31M×3.77M、北側にカマド（造りつけ型）あり。

57号竪穴住居；2.98以上M×2.75M以上、北側にカマド（突出型）あり。

64号竪穴住居；4.03M×4.02M、北側にカマド（造りつけ型）あり。

71号竪穴住居；4.21M×4.1M、北側にカマド（突出型）あり。

72号竪穴住居；4.1M×3.68M、北側にカマド（突出型）あり。

75号竪穴住居；4.97M×4.96M、北側にカマド（突出型）あり。

なお、カマドの形態（造りつけ、突出型）により２タイプに細分される（Ｅ－１、２タイプ）。

また、22棟の掘立柱建物の配置関係は、以下のようである。

（１間×１間）５号、15号、19号、20号、21号掘立柱建物

（１間×１間以上）16号掘立柱建物

（１間×２間）２号、４号、５号、７号、８号、11号、12号、13号、14号、18号、22号掘立柱

建物

（2間×2間）1号、9号掘立柱建物；（3間×4間）3号、10号掘立柱建物

（4間×7間以上）17号掘立柱建物

第2節　日永遺跡出土土器について

出土土器については、各調査区から大量に検出された。しかし、調査が3ヵ月という短期間で進められたため、重複関係にある竪穴住居、土坑からの土器の抽出に当たって、かなり混入してしまっているものが多く、従って、ここでは、各調査区毎の出土土器を、時期、器種構成から分類してみる（第70、71図）。

0区

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、石包丁、砥石、鉄鏃、打製石斧等があり、弥生時代後期中葉、古墳時代後期頃のものである。

まず、出土土器の器種構成をまとめてみると、以下のようになる。

弥生時代後期中葉

1号竪穴住居；無頸壺、「く」の字状口縁を持つ甕、「く」の字状口縁を持つ脚台付き甕、鉢、脚台付き鉢、ミニチュア土器（鉢形）。底部はやや丸みを持つ。

2号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕。

4号竪穴住居；球形壺、「く」の字状口縁を持つ甕、鉢。

5号竪穴住居；複合口縁壺、小型壺、「く」の字状口縁をもつ甕、小型甕、ワイングラス状の杯部を持つ高杯、ミニチュア土器（鉢形）。底部はほぼ平坦である。

6号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、丸底鉢、脚台付き鉢、器台。

8号竪穴住居；やや丸みをもつ底部。

9号竪穴住居；球形壺。やや丸みをもつ底部。

古墳時代後期

3号竪穴住居；杯身（須恵器、ヘラ記号あり）、椀（土師器）、小型甕（土師器）

2区

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、石包丁、砥石、鉄鏃、支脚石等があり、弥生時代後期中葉、古墳時代後期頃のものである。

まず、出土土器を時期、器種構成でまとめてみると、以下のようになる。

弥生時代後期中葉

16号竪穴住居；複合口縁壺、長頸壺、朝顔型口縁壺、「く」の字状口縁を持つ甕、鉢、手捏ねの支脚。底部はやや丸みを持つ。

32号竪穴住居；長頸壺、球形壺、無頸壺、複合口縁壺、「く」の字状口縁を持つ甕、鉢、器台。底部は平坦、やや丸みを持つ、上げ底の3タイプがある。

34号竪穴住居；長頸壺、複合口縁壺、無頸壺、「く」の字状口縁を持つ甕、鉢、器台、底部は小さく丸みを持つ、平坦の2タイプがある。

古墳時代後期

10号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）、杯蓋（須恵器）

12号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）、杯蓋（須恵器）

14号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）、杯身（須恵器）

21号竪穴住居；甑（土師器）　22号竪穴住居；杯身（須恵器）、高杯（須恵器）

24号竪穴住居；高杯、鉢、「く」の字状口縁を持つ甕（共に土師器）

29号竪穴住居；鉢、「く」の字状口縁を持つ甕（共に土師器）

33号竪穴住居；坩（土師器）　36号竪穴住居；皿、高杯（共に土師器）、杯蓋（須恵器）

4号土坑；杯身（須恵器）、高杯（土師器）　9号土坑；杯身（須恵器）

5号土坑；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）

6号土坑；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）

8号土坑；「く」の字状口縁を持つ甕（土師器）、杯身（須恵器）

3区

出土遺物には、弥生土器、土師器、砥石、打製石斧、青銅製武器形祭器等があり、弥生時代後期中葉、古墳時代後期のものである。

ここで、出土土器を時期、器種構成でまとめてみると、以下のようになる。

弥生時代後期中葉

37号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、鉢。底部はやや丸みを持つ。

38号竪穴住居；ミニチュア土器（壺形）。

古墳時代後期（6世紀後半）

9号土坑；甕（土師器）

4区

出土遺物には、弥生土器、古式土師器、砥石、叩き石、鉄鏃等があり、弥生時代後期前葉、古墳時代前期、古墳時代後期頃のものである。

ここで、出土土器の器種構成をまとめてみると、以下のようになる。

弥生時代後期中葉

41号竪穴住居；複合口縁壺、「く」の字状口縁を持つ甕、脚台。底部は平底である。

古墳時代前期

40号竪穴住居；坩。底部は丸みを持つ。

古墳時代後期

42号竪穴住居；皿。

東部地区

出土遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、石包丁、砥石、支脚石等があり、弥生時代後期中葉～後葉、古墳時代初頭、古墳時代前期、古墳時代後期頃のものである。

まず、出土土器を時期、器種構成でまとめてみると、以下のようになる。

弥生時代後期中葉

59号竪穴住居；底部はやや丸みをもつ。

61号竪穴住居；ミニチュア土器（鉢状、椀状、器台状）、鉢、器台

63号竪穴住居；複合口縁壺、脚台付き壺、小型丸底壺、器台、「く」の字状口縁を持つ甕、脚台付き甕、鉢、ミニチュア土器(椀状)、底部は平坦、上げ底、やや丸みを持つの3タイプがある。

67号竪穴住居；複合口縁壺、ミニチュア土器（無頸壺状、鉢状、椀状）、高杯、器台、脚台、「く」の字状口縁を持つ甕、底部は平坦、丸みを持つの2タイプがある。

73号竪穴住居；ミニチュア土器（鉢形）

古墳時代初頭

43号竪穴住居；ミニチュア土器（壺形、鉢形、脚台形）、甕、底部はやや丸みを持つ。

52号竪穴住居；長胴甕、「く」の字状口縁を持つ甕、高杯（土師器）

69号竪穴住居；小型丸底壺、「く」の字状口縁を持つ甕。

74号竪穴住居；長頸壺、短頸壺、二重口縁壺、小型丸底壺、椀、「く」の字状口縁を持つ甕、高杯。

古墳時代前期

44号竪穴住居；椀（土師器）

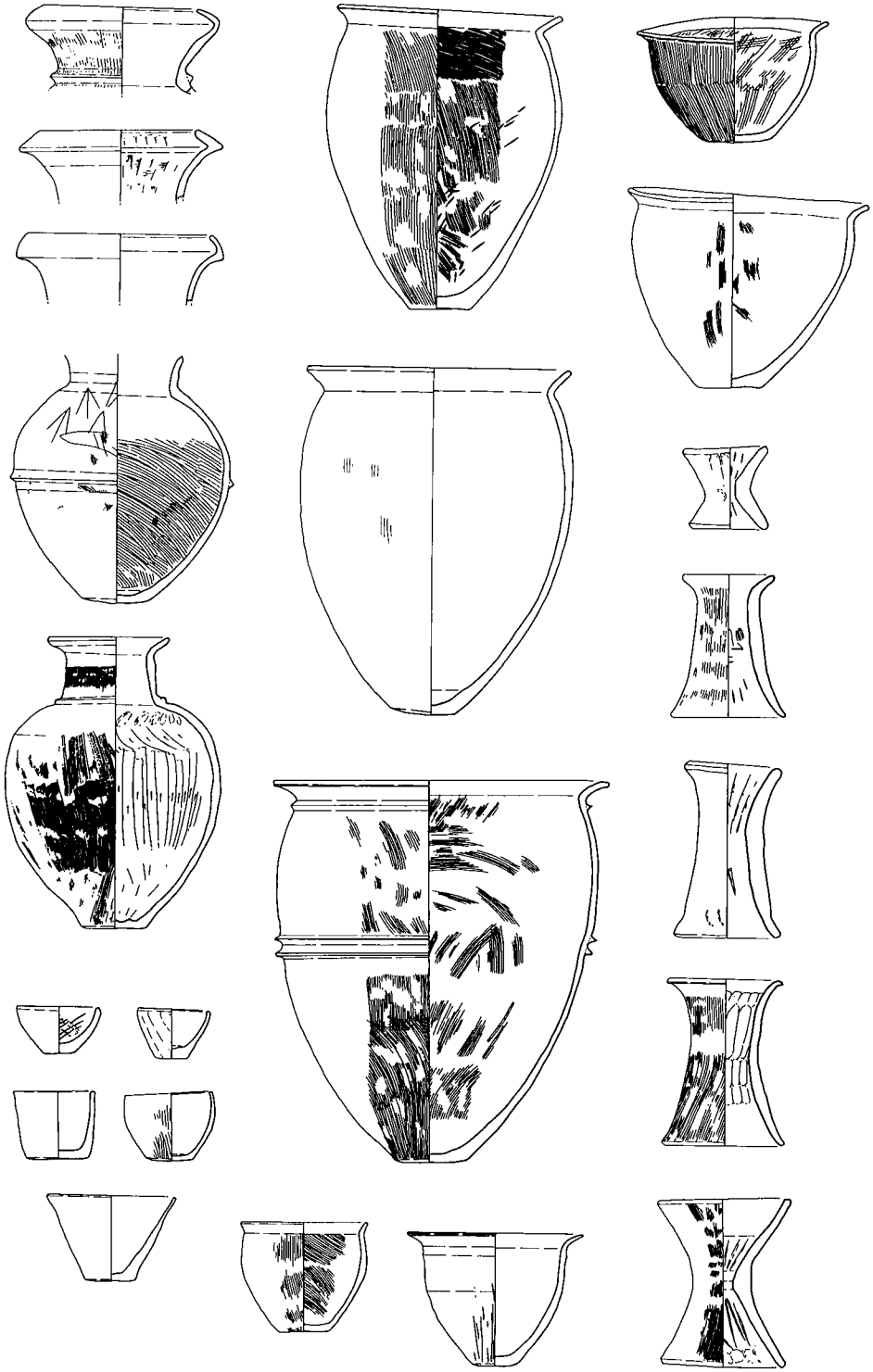
48号竪穴住居；甑、高杯、椀、「く」の字状口縁を持つ甕、小型丸底壺（土師器）

49号竪穴住居；複合口縁壺（弥生土器）、椀、甑（土師器）。

50号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、椀（土師器）。

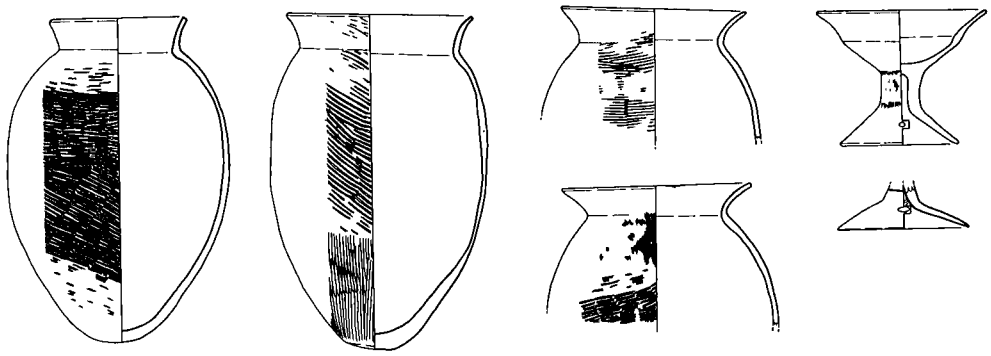
54号竪穴住居；甑、甕、高杯、椀、小型丸底壺。

58号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、椀。

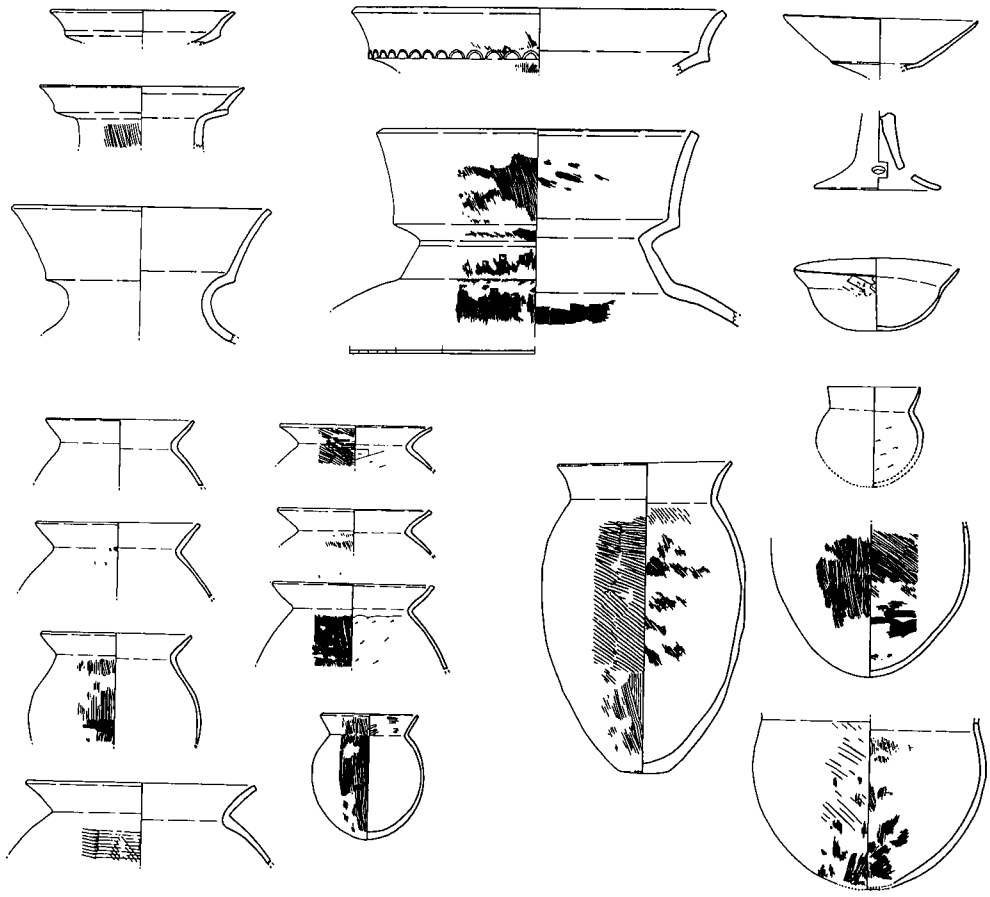


32号竪穴住居

第 70 図　日永遺跡出土一括土器（S＝1／8）



52号竪穴住居



74号竪穴住居

第 71 図　日永遺跡出土一括土器（S＝1／8）

60号竪穴住居；高杯脚部、鉢、小型丸底壺。

62号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、椀、坩、底部は丸みを持つ。

68号竪穴住居；二重口縁壺、小型丸底壺、高杯、椀、鉢、「く」の字状口縁を持つ甕、ミニチュア土器（椀状）、底部は丸みを持つ。

71号竪穴住居；甑、椀、「く」の字状口縁を持つ甕。

古墳時代後期（6世紀後半～7世紀）

53号竪穴住居；杯身（須恵器）

72号竪穴住居；椀、ミニチュア土器（鉢状）、「く」の字状口縁を持つ甕。

75号竪穴住居；「く」の字状口縁を持つ甕、椀、器台、高杯、須恵器の杯蓋

ここで先述した集落構成と土器の時期を比較してみると、

弥生時代後期中葉では、A、Bタイプの竪穴住居が存在する。

古墳時代初頭では、A、Cタイプの竪穴住居が存在する。

古墳時代前期では、A、Eタイプの竪穴住居が存在する。

古墳時代後期では、D、Eタイプの竪穴住居が存在する。

である。

第3節　広形銅矛・広形銅戈について

1）広形銅矛・広形銅戈という弥生時代後期の青銅武器形祭器が二本セットで、埋納遺構という出土状況の明確な遺構から発掘されたことは初出例であり、極めて貴重な成果であった。さらに、それらが土層断面図などから木箱に入れられていたことも推定されたことも併せて意義深いことである。

2）広形銅矛の製品は、九州で見ると、福岡県で48本、長崎県で82本、大分県で34本、佐賀県で4本、熊本県で2本出土している。浮羽郡内からは初出例である。

さて、福岡県内の広形銅矛の分布は、第1表に見るように那珂川流域（福岡市、春日市、那珂川町）の福岡平野に集中する傾向にある。これは鋳型の分布がこの地域に限定されてくることからも首肯できることである。

日永遺跡出土の広形銅矛は、福岡平野を中心とした青銅武器形祭器の生産を掌握していた勢力との結びつきを示す資料であり、当時の社会構造の復元（福岡平野とその外縁部の諸勢力との結びつき）にとって貴重な資料となる。

なお、広形銅矛の前段階の中広銅矛は、浮羽郡内では、浮羽町小塩東藤ヶ谷、吉井町つるかけから1本ずつ出土している。

3）広形銅戈の製品は、日永遺跡で発見される以前、大分県豊後高田市美和雷遺跡の箱式石棺

から出土していたが、身幅が狭く、樋に綾杉文をもつことが、従来発見の広形銅戈鋳型例と異なるため、これを広形銅戈と見ることを疑問視する意見もあった。

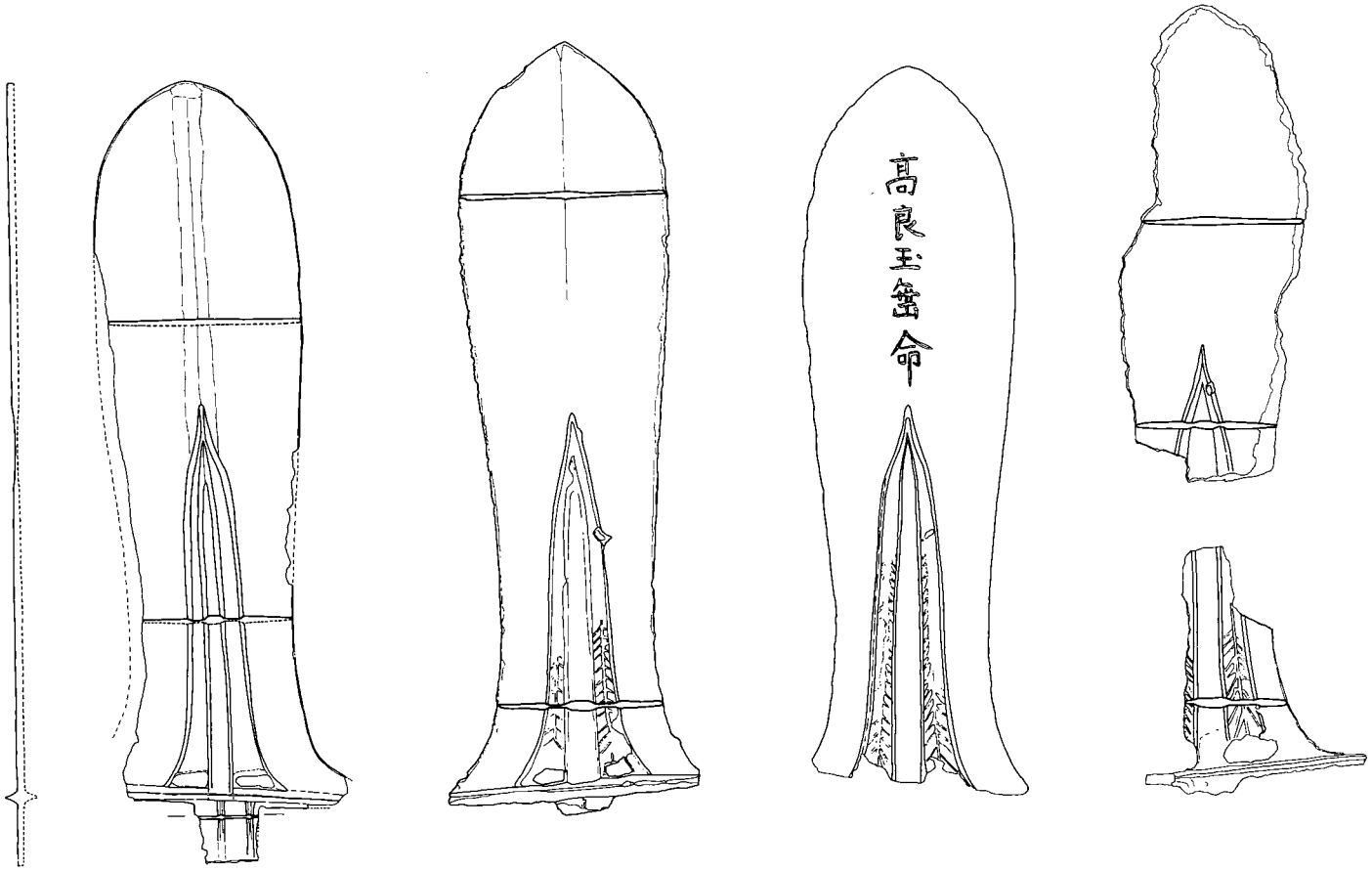
そのため、広形銅戈は、製作されても祭器として使用された後は、広形銅矛など他の製品に鋳直されてしまったという意見さえも出ていた。こうしたことからも、日永遺跡出土の広形銅

第1表　広形銅矛及び鋳型出土一覧表(福岡県内)

No.	出　土　地	数　量	遺　　構	備　考
1	糸島郡前原町三雲川端	2		鋳型
2	福岡市西区唐泊後浜	1	海底	
3	〃　南区高宮	4		
4	〃　〃　井尻熊野権現	2		鋳型
5	〃　〃　五十川	1		
6	〃　博多区板付	1	G－26トレンチ	
7	春日市岡本辻	9		
8	〃　岡本皇后峰	1		鋳型
9	〃　上白水門田	1		
10	〃　赤井手	1	C－3区	鋳型
11	筑紫郡那珂川町安徳原田	12	埋納	
12	久留米市荒木町鬼木	1		
13	八女市吉田野間	13		中広か広形
14	宗像市釣川川床	1		
15	遠賀川流域	1		
16	北九州市冷水	2	単独	
17	〃　関	1	包含層	
18	〃　上長野	2		
19	行橋市天生田大将軍	1		
20	(伝)行橋市周辺	2		
21	築上郡椎田町湊	1		

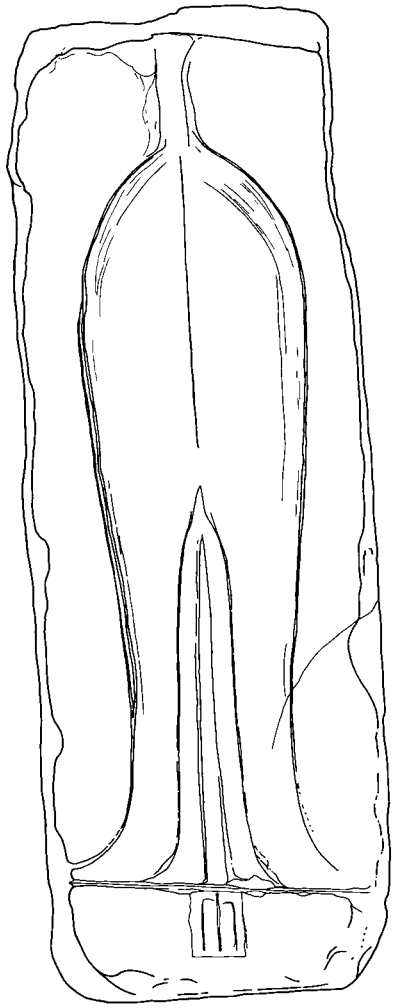
第2表　日永遺跡出土広形銅戈と鋳型の比較表　〔単位cm、＋は以上、＊は内が鋳型外へ通じるもの〕

資　料	鋳　型			戈　型								
	全長	最大幅	最大厚	身部				脊基部幅	樋		胡長	内
				全長	最大幅	最小幅	基部幅		基部幅	長		長×幅
高宮1号	31.9＋	22.6	8.4	23.9＋	11.6＋	9.0	15.3	2.5	8.8	21.8	21.0	3.8　×3.9
三雲屋敷田	52.6	18.4	9.6	39.5	11.8	8.4	15.6	1.4	7.4	21.0	16.5	3.8　×2.8
多田羅大牟田	50.4	20.3	11.3	38.8	12.3	8.8	16.0	1.9	7.0	21.9	18.0	4.5＊×3.5
小倉大南	47.9	21.8	10.5	40.4	12.0	8.9	16.9	2.0	7.2	21.1	19.4	3.8＊×3.7
江島	21.2＋	21.5	12.6	14.2＋	9.3＋	8.9	13.5＋	2.2	7.3	14.2＋	16.2＋	3.1＊×3.5
日永				39.4	11.3	8.3	12.0	1.3	6.9	21.1	11.7	3.4　×3.5



日永遺跡　　神戸市立博物館蔵品　　鐘ヶ江天満神社蔵品　　美和雷遺跡

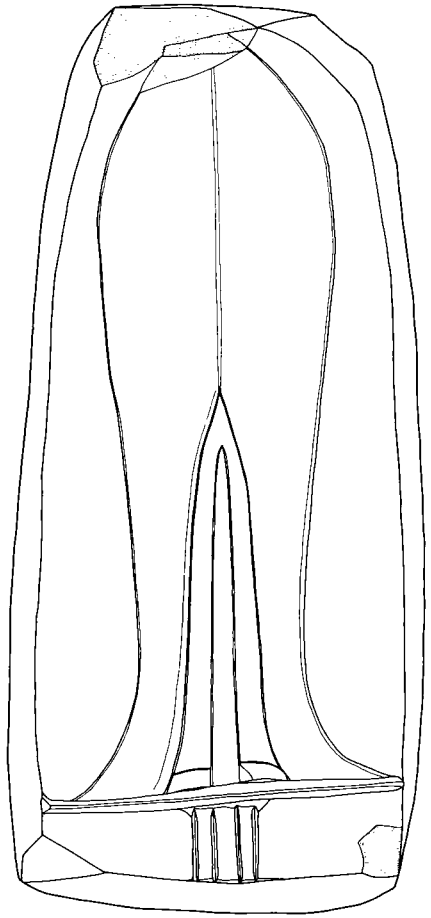
第 72 図　広形銅戈実測図（S＝1／4）



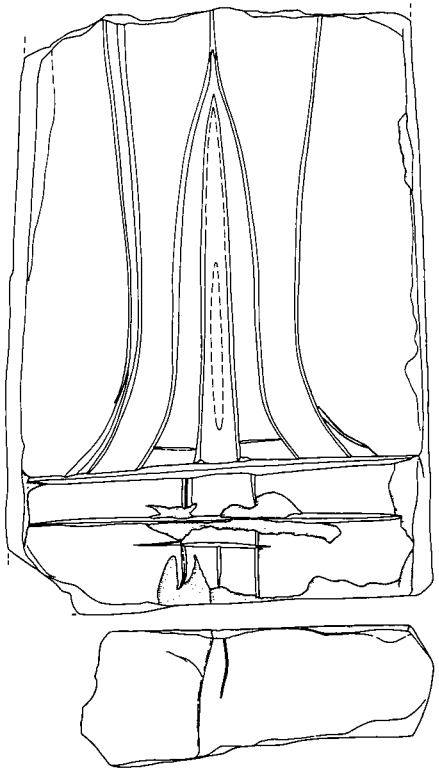
三雲屋敷田出土

多々羅大牟田出土

第 73 図　広形銅戈鋳型実測図（S＝1／4）



小倉大南出土



高宮八幡宮蔵品

第 74 図　広形銅戈鋳型実測図（S＝1／4）

戈は、鋳型例と比較しても間違いなく広形と認められる型式のものであり、その初出例を鋳型が出土している福岡・糸島平野さらには最近とみに鋳型の出土例が増えてきている鳥栖市周辺の筑後平野以外で得られたことは意義深いことである。

さて、日永遺跡から広形銅戈が検出されて以後、2例の広形銅戈が発見されている。共に、遺構から検出されたものでなく、伝世品である。1点は、福岡県大川市鐘ヶ江天満神社所蔵品で、御神体として伝世するものである。また他の1点は、現在、神戸市立博物館の蔵品で、伝福岡県出土と言われるものである。

これらについて、以下若干説明を加える。

・福岡県大川市鐘ヶ江天満神社蔵品（第72図）

完形品ではない。胡の縁にある2ヵ所の穿の所で折損しているため、胡及び内がない。

残存している部分で計測してみると、最大身幅11.6cm、鋒から穿の鋒側縁までの長さ37.5cm前後、鋒から18.4cmの所で樋の先端が交わる。全長は42～44cmで前後と推測される。また、樋には綾杉文が鋳出される。さらに、援部には「高良玉垂命」という文字が刻まれている。この銅戈は、久留米市にある高良大社から分与されたものと言われる。

・神戸市立博物館蔵品　伝福岡出土。（第72図）

全長41.7cm、最大身幅11.1cm、最小身幅8.3、残存胡長13.4cm、樋部長19.9cm、内長0.9cm、内幅3.1cm、樋部分には、綾杉文がみられる。また、茎部には、一条の突線が鋳出している。

共に、型式、大きさなどから広形銅戈に分類できるものであるが、樋部分に、大分県豊後高田市の美和雷遺跡のものと同じように、綾杉文を鋳出していることから、日永遺跡のものとは形態を異にしており、さらに現在まで検出されている広形銅戈の鋳型と比較しても、樋部分に綾杉文を彫り込んでいるものはなく、型式分類の上で、新たな要素を付加することになったと思われる。

ところで、広形銅戈の鋳型は、現在まで、5ヵ所で検出されている。

それらは、福岡市南区高宮八幡宮蔵品例、福岡市東区多田羅大牟田出土例、春日市小倉大南出土例、前原市三雲屋敷田出土例、佐賀県鳥栖市江島出土例である。どれも石材は砂岩である。高宮八幡宮例及び江島出土例以外は、完形である。日永遺跡出土例と比較することができる。

まず、各出土例の法量及びその特徴を以下に説明してみる。

・高宮八幡宮1号鋳型（第74図）

背部以下内部まで残存している。

最小身幅9.0cm、樋部長21.8cm、胡部長21.0cm、茎長3.8cm、茎幅3.9cmを測る。樋には文様はない。また茎部にも、文様はない。

・三雲屋敷田出土例（第73図）

完形品である。全長39.5cm、最大身幅11.8cm、最小身幅8.4cm、樋部長21.8cm、胡部長16.5cm、

内長3.8cm、内幅2.8cmを測る。樋部には文様がないが、内には直線で蕨手文が刻まれる。

・多田羅大牟田出土例（第73図）

完形品である。全長38.8cm、最大身幅12.3cm、最小身幅8.8cm、樋部長21.9cm、胡部長18.0cm、内長4.5cm、内幅3.5cmを測る。樋部には文様がなく、内にも文様が見られない。

・小倉大南出土例（第74図）

完形品である。全長40.4cm、最大身幅12.0cm、最小身幅8.9cm、樋部長21.1cm、胡部19.4cm、内長3.8cm、内幅3.7cmを測る。樋部には文様がないが、内には4本の直線が刻まれる。

・江島出土例

欠失箇所があるため、その全容は不明であるが、計測可能な数値をあげると、最小身幅8.9cm、内長3.1cm、内幅3.5cm、樋部には文様がないが、内には重弧文が刻まれる。

石材は、高宮八幡宮蔵品と江島出土例は焼けておらず溶銅等の流し込みがなく、製造には使用されなかったようだ。

このように、現在まで確認されている広形銅戈の製品５点(日永遺跡１点、美和雷遺跡２点、鐘ヶ江天満神社蔵品１点、神戸市立博物館蔵品１点）と鋳型５点（三雲屋敷田出土例、多田羅大牟田出土例、小倉大南出土例、高宮八幡宮蔵品、江島出土例）を比較検討してみて、日永遺跡出土例の位置づけを考えるためにまず取り上げられることは、内の文様と樋の文様である。

１）内の文様

・日永遺跡　１条の直線文　　・美和雷遺跡不明

・鐘ヶ江天満神社蔵品　不明　　・神戸市立博物館蔵品　不明

・高宮八幡宮蔵品　なし　　・三雲屋敷田出土例　１条の直線文とその両脇に蕨手文

・多田羅大牟田出土例　なし　　・小倉大南出土例　４条の直線文

・江島出土例　重弧文

以上のように、日永遺跡と同様の内の文様をもつものは見られない。

２）樋の文様

・美和雷遺跡出土例、鐘ヶ江天満神社蔵品、神戸市立博物館蔵品で綾杉文が見られる。しかし、文様事体、後世の磨滅等もあるが、中細形式でみられた綾杉文に比べあまりシャープなものではない。日永遺跡出土例をはじめ、それ以外の製品、鋳型には文様はない。特に鋳型ではすべて文様が見られない。

また、日永遺跡との法量比較では、胡から上の身部の長さで39.4cmあり、三雲屋敷田出土例(39.5cm)に近い。身の最大幅・最小幅では、それぞれ11.3cm、8.3cmで、やはり三雲屋敷田出土例(11.8cm、8.4cm)に近い。さらに樋の長さでは21.1cmで、これも三雲屋敷田出土例に近い。その他、内の長・幅では3.4cm×3.5cmで、これは、高宮八幡宮蔵品（3.8cm×3.9cm）や小倉大南出土例（3.8cm×3.7cm）に近い。

このように、日永遺跡の出土例の法量及び内の文様的特徴をみた場合、法量比較では、三雲屋敷田出土例に近いものの、細部で異なる点がある。また、内の文様では四条の直線文を鋳出すことは他のものでは見られないことからも、現状では、日永遺跡出土例の鋳型は検出されていないと言わざるを得ない。

また、広形銅戈の型式分類をみた場合、広形銅戈か疑問視されていた美和雷遺跡出土例も、法量比較から、広形に分類できる鐘ヶ江天満神社蔵品及び神戸市立博物館蔵品が確認されたため、樋に綾杉文を残すという中細形段階の要素をもつ広形銅戈として細分可能と思われる。したがって、広形銅戈は、樋部での文様の有無から以下の2形式に細分できる。

・広形銅戈a類　大分県豊後高田市美和雷遺跡出土例、大川市鐘ヶ江天満神社蔵品、神戸市立博物館蔵品

・広形銅戈b類　日永遺跡出土例、三雲屋敷田出土例、多田羅大牟田出土例、江島出土例、高宮八満宮蔵品

a類、b類の時期差については、中広形段階の綾杉文で継承するa類が先行する形式になると推測される。

さて、次にa類、b類の分布状況をみてみるならば、a類は、神戸市立博物館蔵品が「伝福岡出土」ということであり、他の2口で考えてみる。

鐘ヶ江八幡神社蔵品については、高良大社から分与されたものであるため、その出土地は、高良山周辺とされている。また、美和雷遺跡出土品は箱式石棺墓から検出されている。従って、a類は現在のところ、筑後川下流域の筑後平野及び周防灘沿岸、国東半島北側つけ根部に分布していることになり、北部九州の中心地帯の福岡平野から外れたところに所在している。

b類は、糸島平野の三雲屋敷田出土例、福岡平野の多田羅大牟田出土例、小倉大南出土例、高宮八幡宮蔵品、筑後平野の江島出土例、日永遺跡出土例となる。この分布状況は、従来言われていた広形段階における青銅器生産の福岡平野への収れん、終焉とやや異にする傾向をみせるものである。但し、日永遺跡の位置関係をみるならば福岡平野、筑後平野を臨むトライアングルの頂点、扇の要にあることから、北部九州の懐を抱く勢力の存在が推定できるようである。

4）広形銅矛、広形銅戈が出土した埋納遺構からは、共伴土器など時期決定可能な資料が出土していない。しかし、埋納遺構が、弥生時代後期中葉を下限とする包含層を切り込んで作られていることから、この遺構の上限は弥生時代後期中葉と推定できる。また、下限年代については、従来の研究から古墳時代初頭としておく。

さて、広形銅矛・広形銅戈埋納遺構は、3区内において、北東隅に単独で存在している。長さ110cm、幅25cm、深さ15cmの長楕円形の遺構の周囲には覆屋施設となるような柱穴などは見られない。しかし、3区西側の遺構で、同時期のものは、37号竪穴住居があげられ、以下のような状況を示す。

37号竪穴住居は長軸8.65ｍ×短幅6.9ｍ、東側短壁にベッド状遺構が付設される。出土遺物には、「く」の字状の口縁をもつ甕、鉢があり、底部はやや丸味をもつ。この竪穴住居は、弥生時代後期中葉のものと推定されるもので、日永遺跡の竪穴住居の中で、大型のものである。この竪穴住居は、広形銅矛・広形銅戈遺構と直接的な関連をもつかについては、判断しかねる。それは、両遺構間の距離が30ｍも離れ、さらに、４条の溝が南北に走り、両者を分離するようにも思えるからである。何分、バイパス建設道路幅の内での調査であり、広形銅矛・広形銅戈埋納遺構の位置づけについては即断しかねる。但し、周辺には密接した関連遺構がなく、単独で存在して、集落と同一平面上で埋納された青銅武器祭器である広形銅矛・広形銅戈は、集落全体の祭祀品として穀物の豊作を祈るため地霊を祀る祭具として使用されたのであろう。

こうして、青銅武器形祭器である広形銅矛・広形銅戈が集落と密接な関係をもって検出できたことは、本遺跡の最大の収穫と言えよう。

本稿を成すにあたっては、以下の方々から、さまざまな御教示、御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

小田富士雄、下条信行、岩永省三、平田定幸、片岡宏二、佐藤力、柳田康雄、井上裕弘、横田義章、石丸洋、児玉真一、佐々木隆彦、馬田弘稔、小田和利、日高正幸、佐土原逸男、向田雅彦、山本幸一、矢野朝子、橋本勝利、佐藤信介、岩熊真実。

図　　版

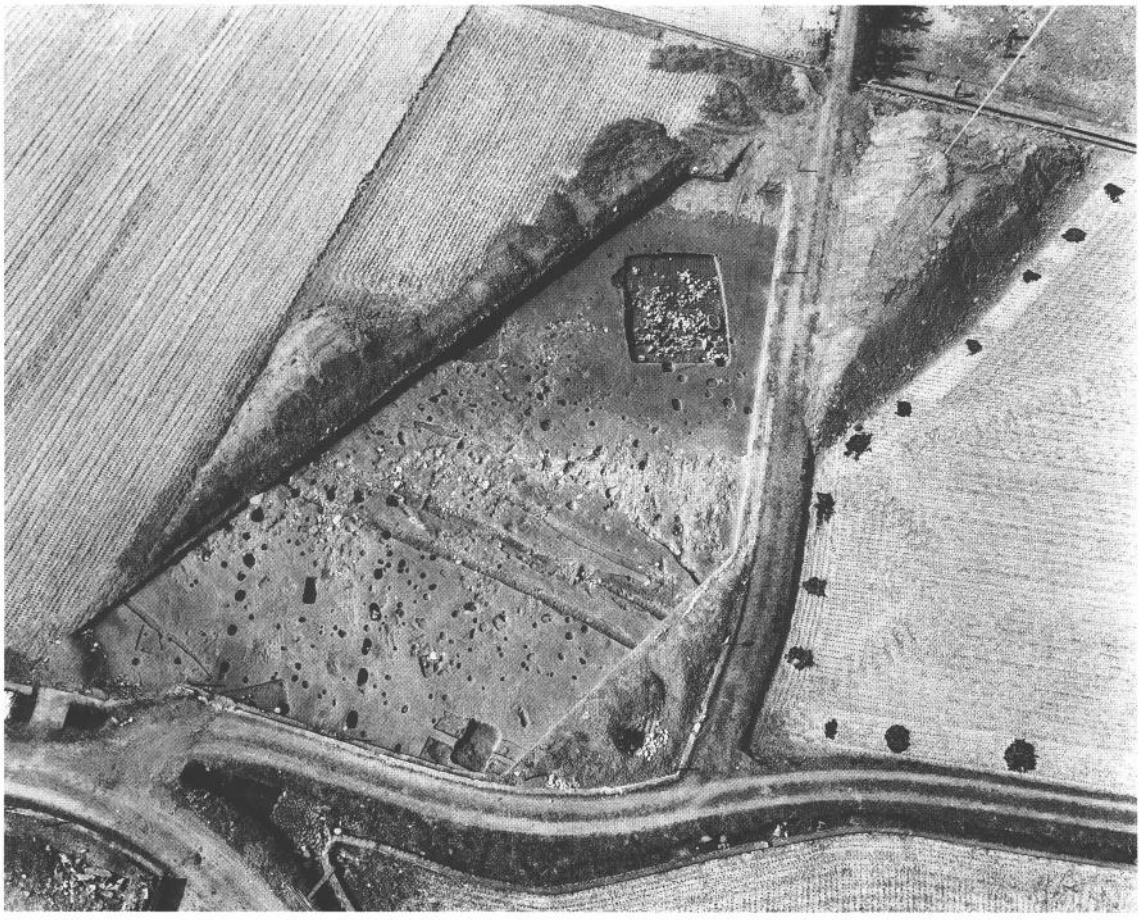
2区から4区を見る

4区から東部を見る

0区全景（気球写真）

1） 2区北半部全景（気球写真）

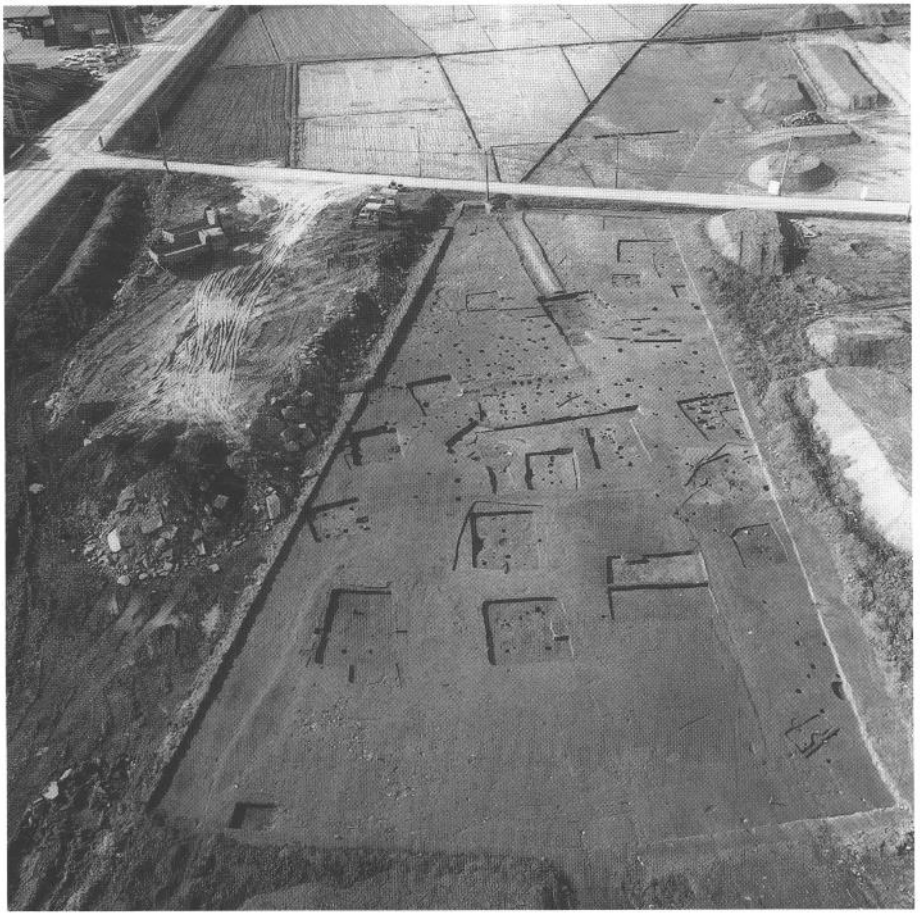
2） 2区南半部全景（気球写真）



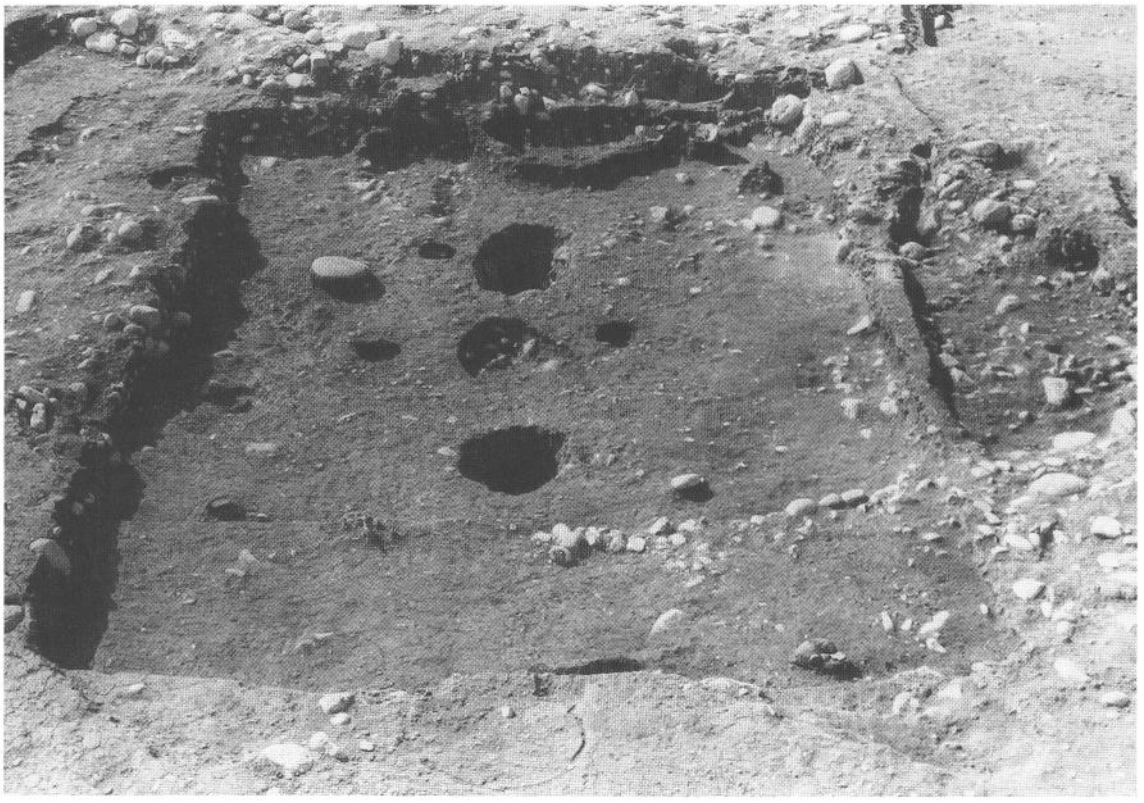
3区全景（気球写真）

4区全景（気球写真）

1）東部地区全景（気球写真）

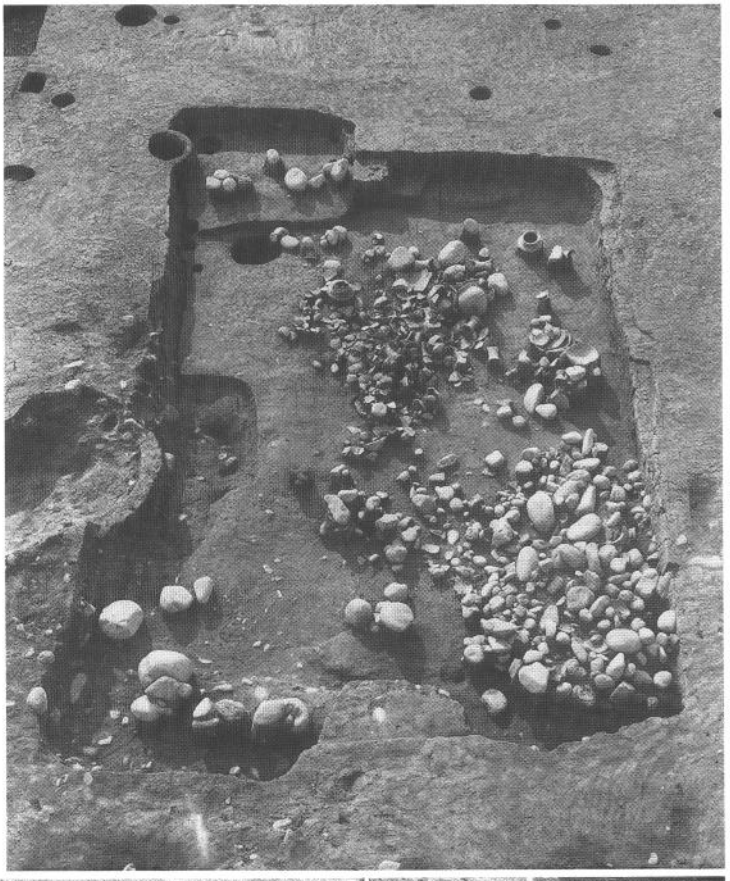


2）東部地区全景（気球写真）

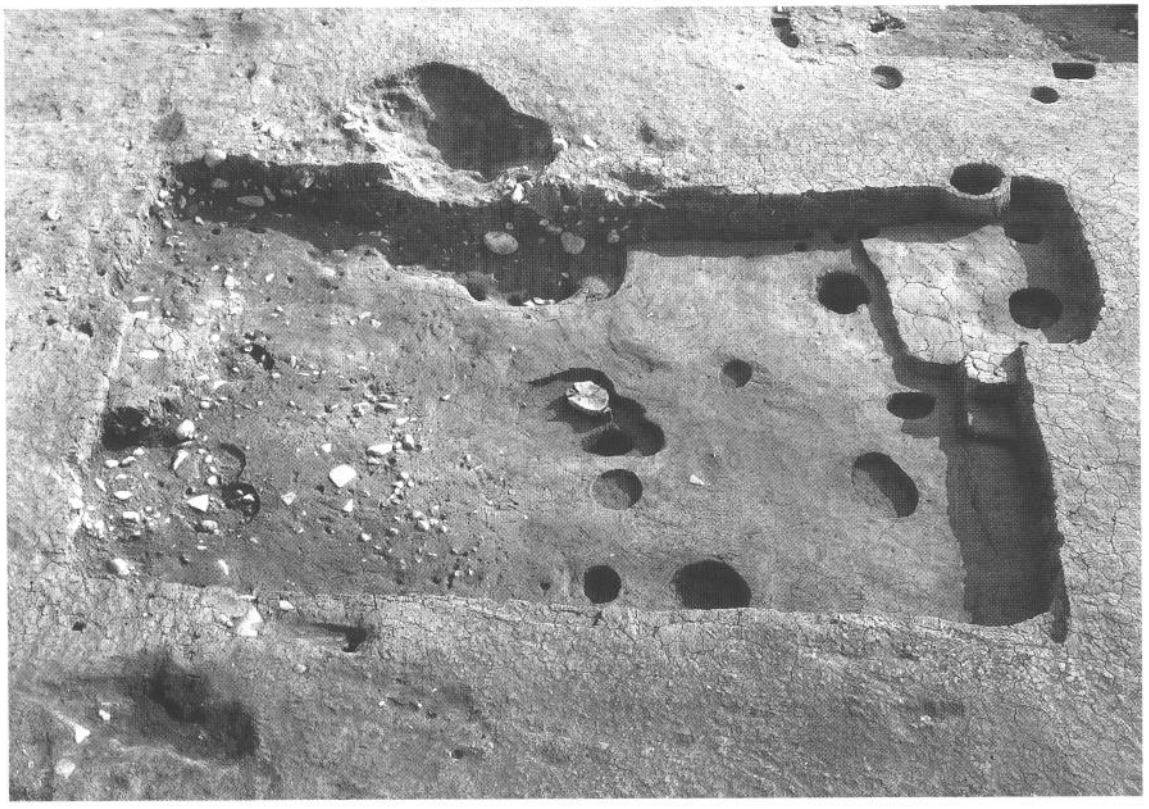


1） 5号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Aタイプ）

2） 6、7号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Aタイプ）

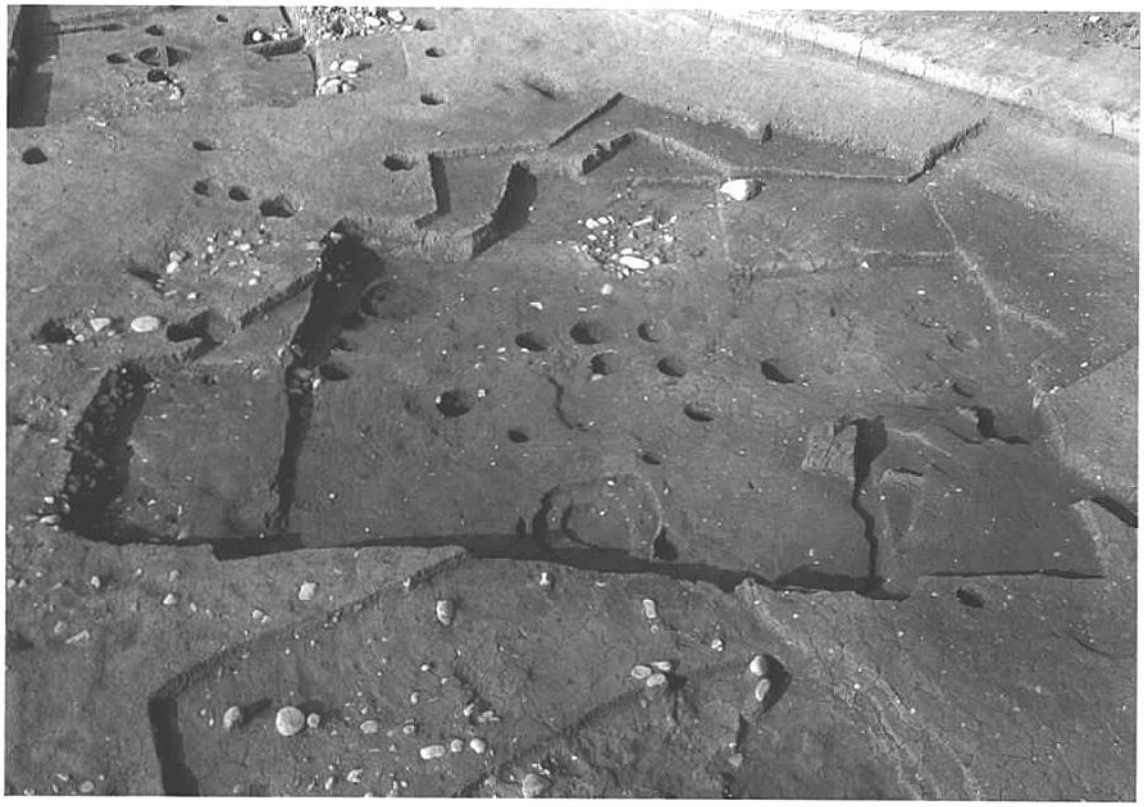


1）32号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Aタイプ）



2）32号竪穴住居（土器、礫石除去後）

1）34号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Aタイプ）

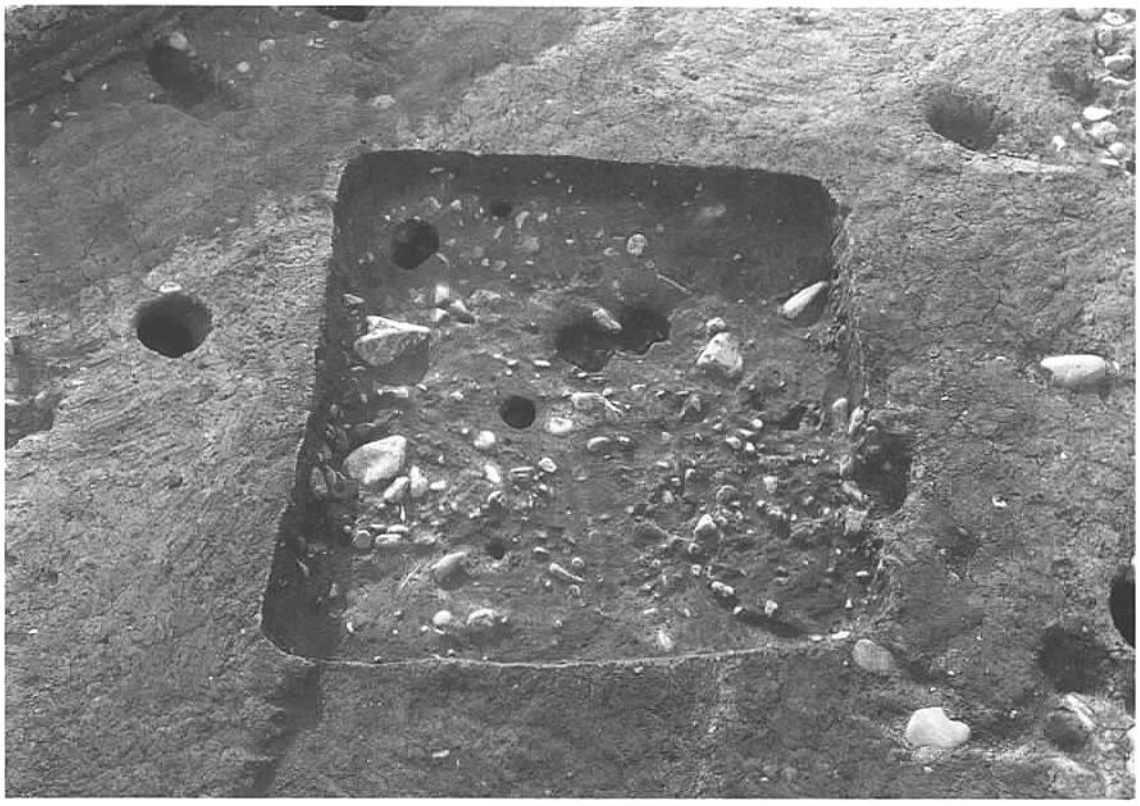


2）34号竪穴住居（土器、礫石除去後）

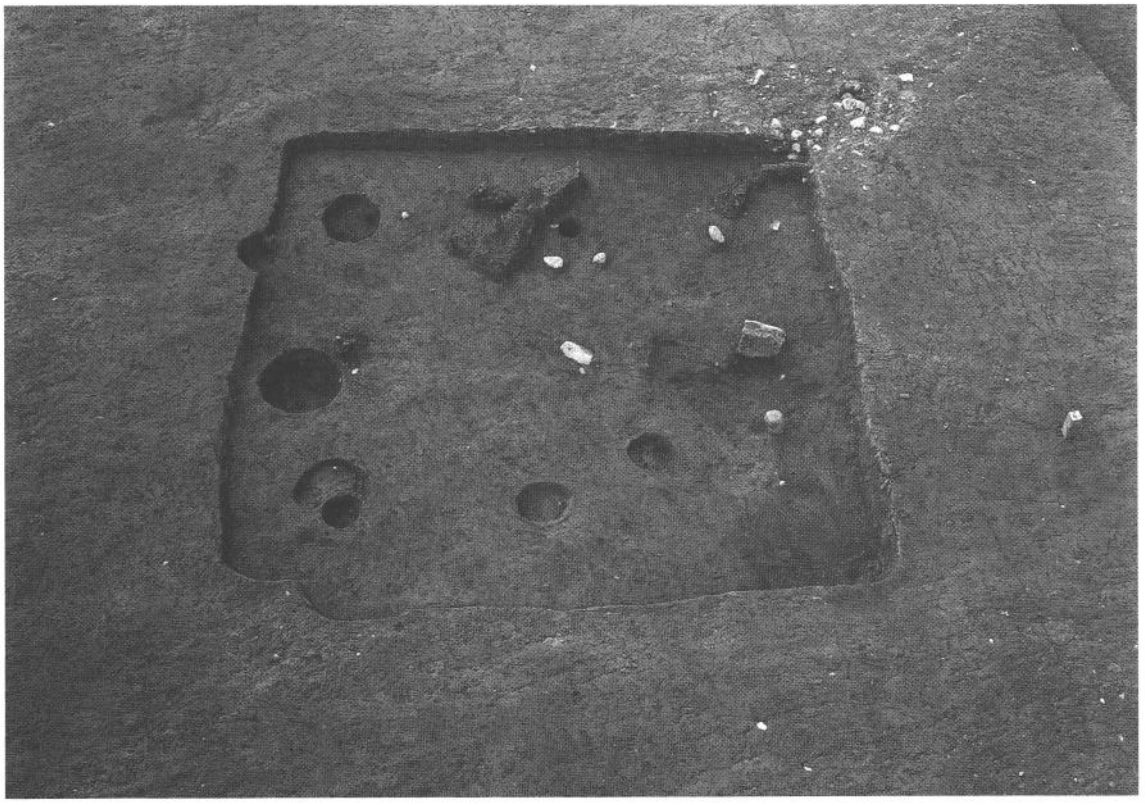
1）36号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Aタイプ）

2）36号竪穴住居（土器、礫石除去後）

1）40号竪穴住居（古墳時代初頭）

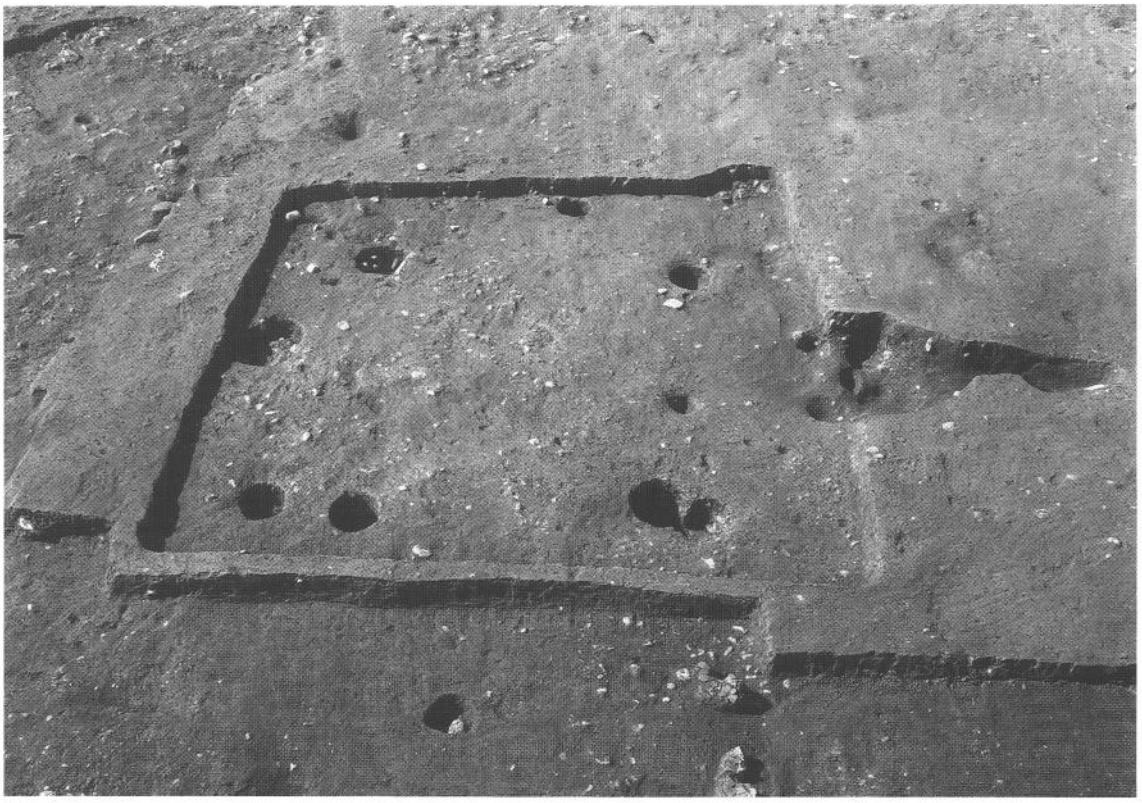


2）40号竪穴住居（土器、礫石除去後）

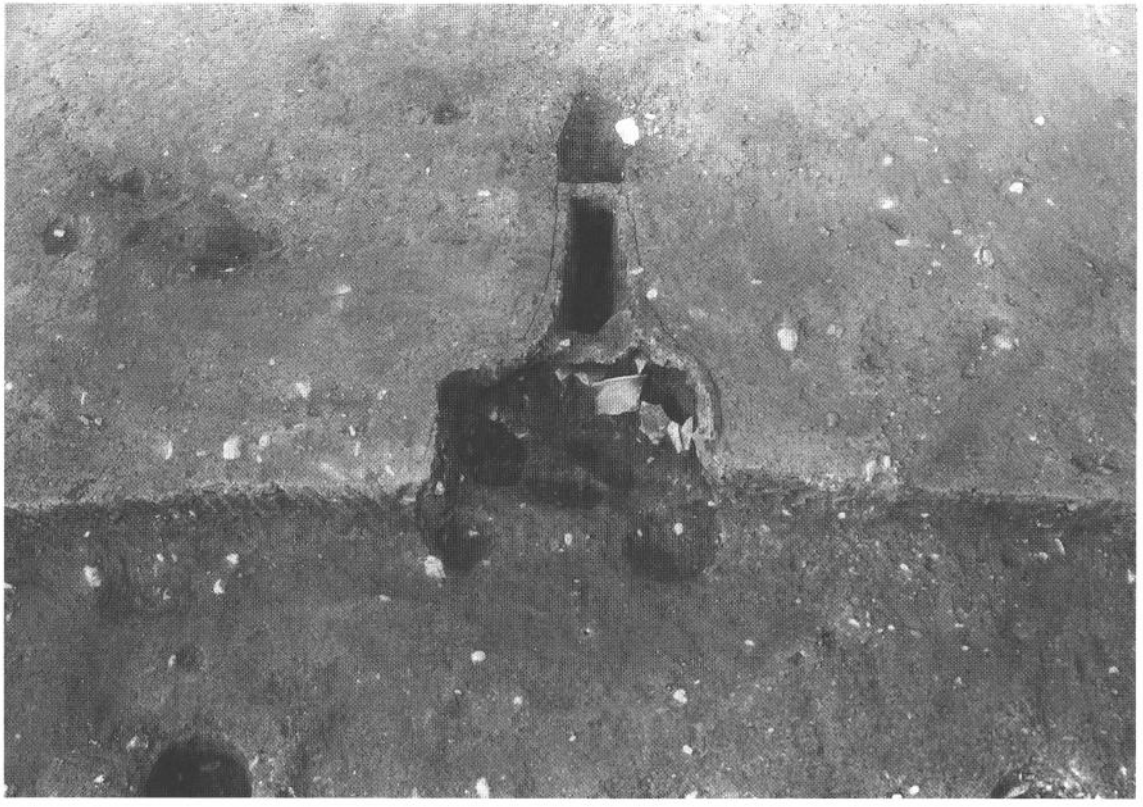


1）51号竪穴住居（古墳時代初頭）

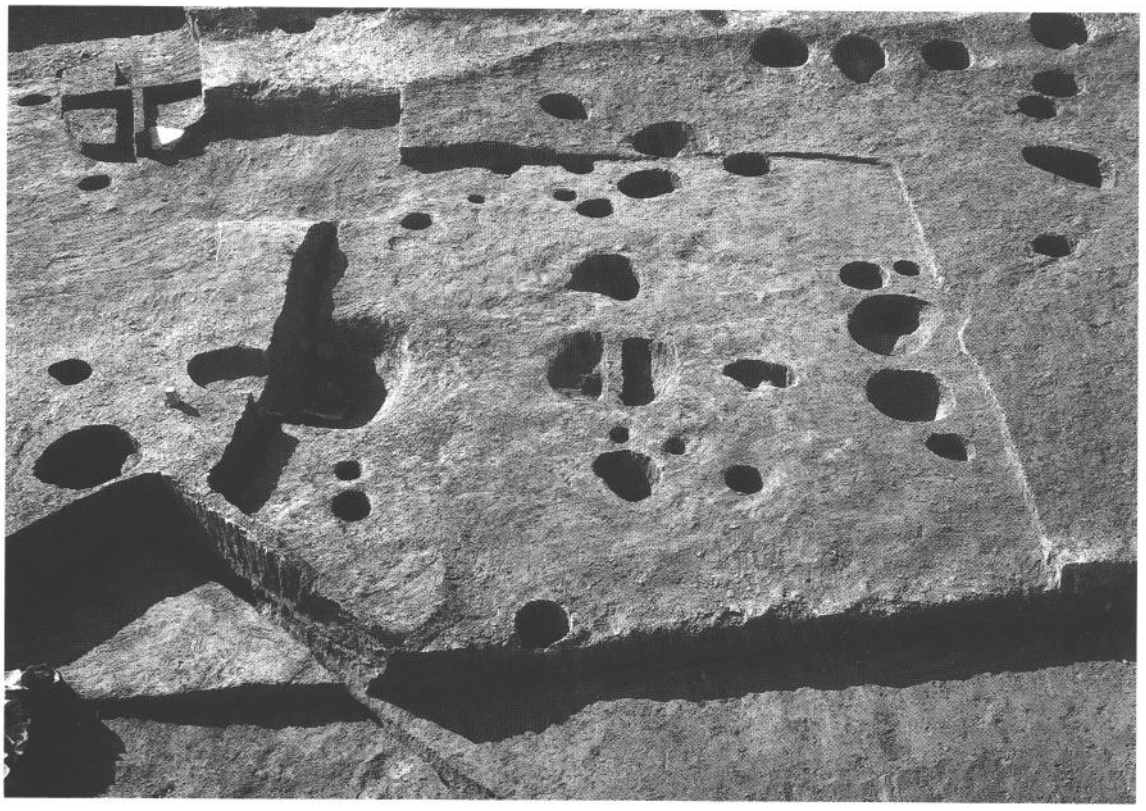
2）52号竪穴住居（古墳時代初頭、Cタイプ）



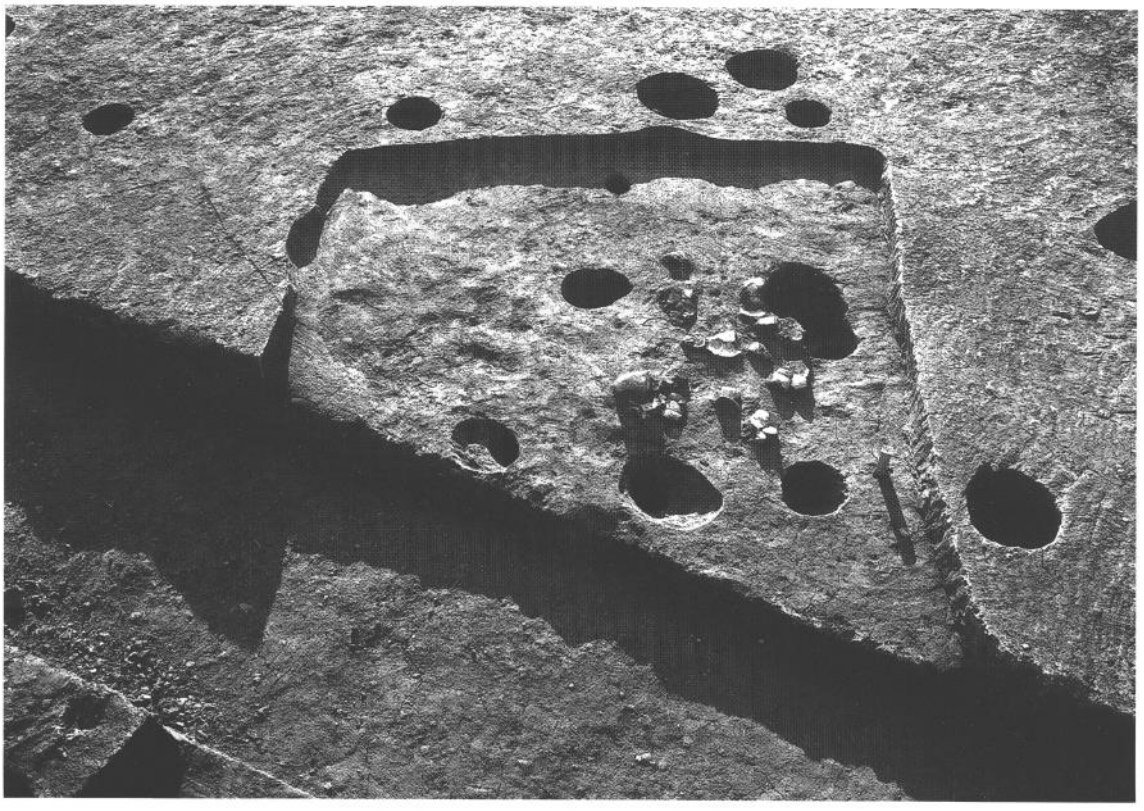
1）53号竪穴住居（古墳時代後期、Eタイプ）



2）53号竪穴住居（カマド突出型タイプ）

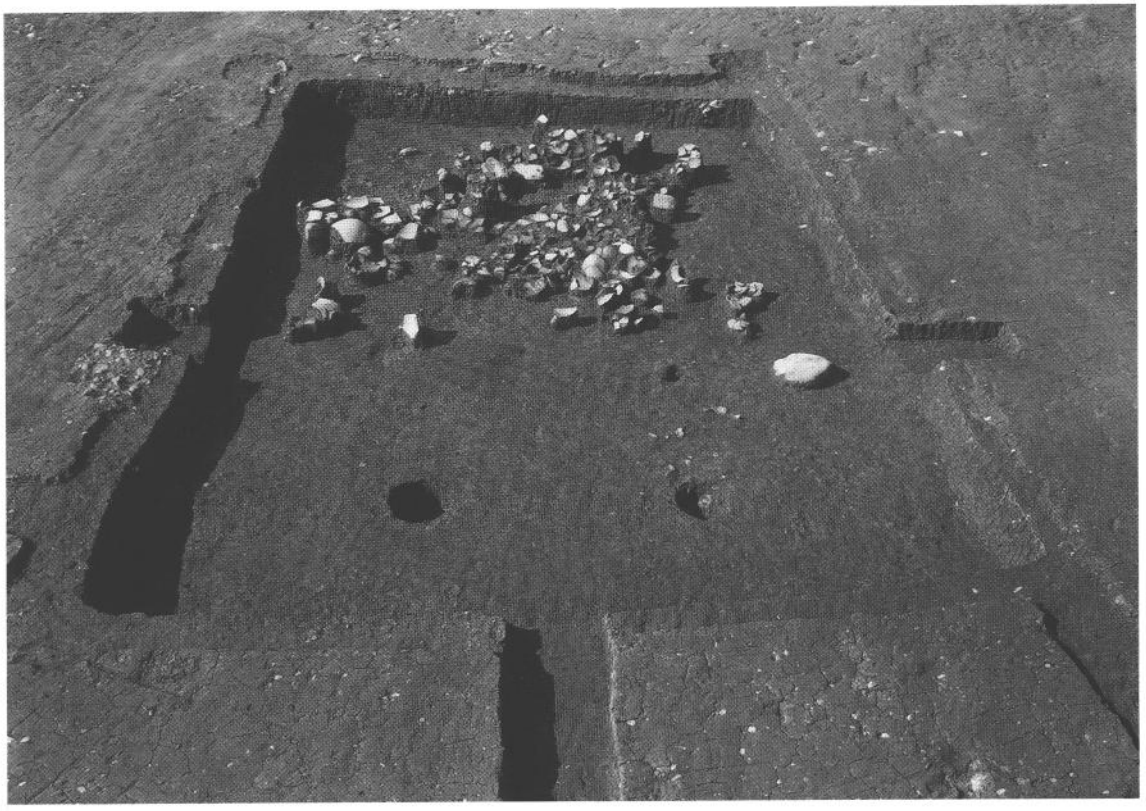


1）59号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Aタイプ）



2）60号竪穴住居（古墳時代前期）

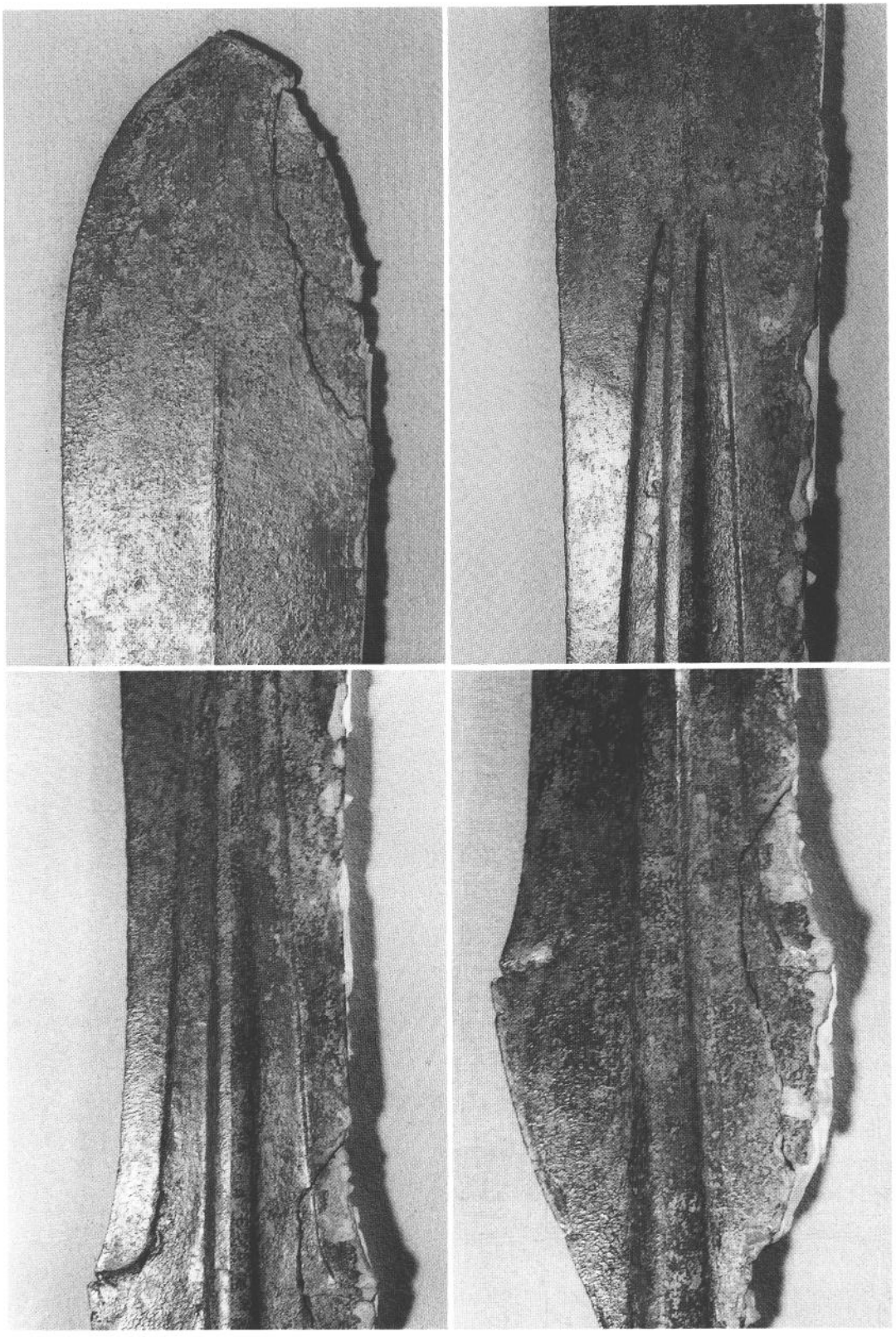
1）73号竪穴住居（弥生時代後期中葉、Aタイプ）



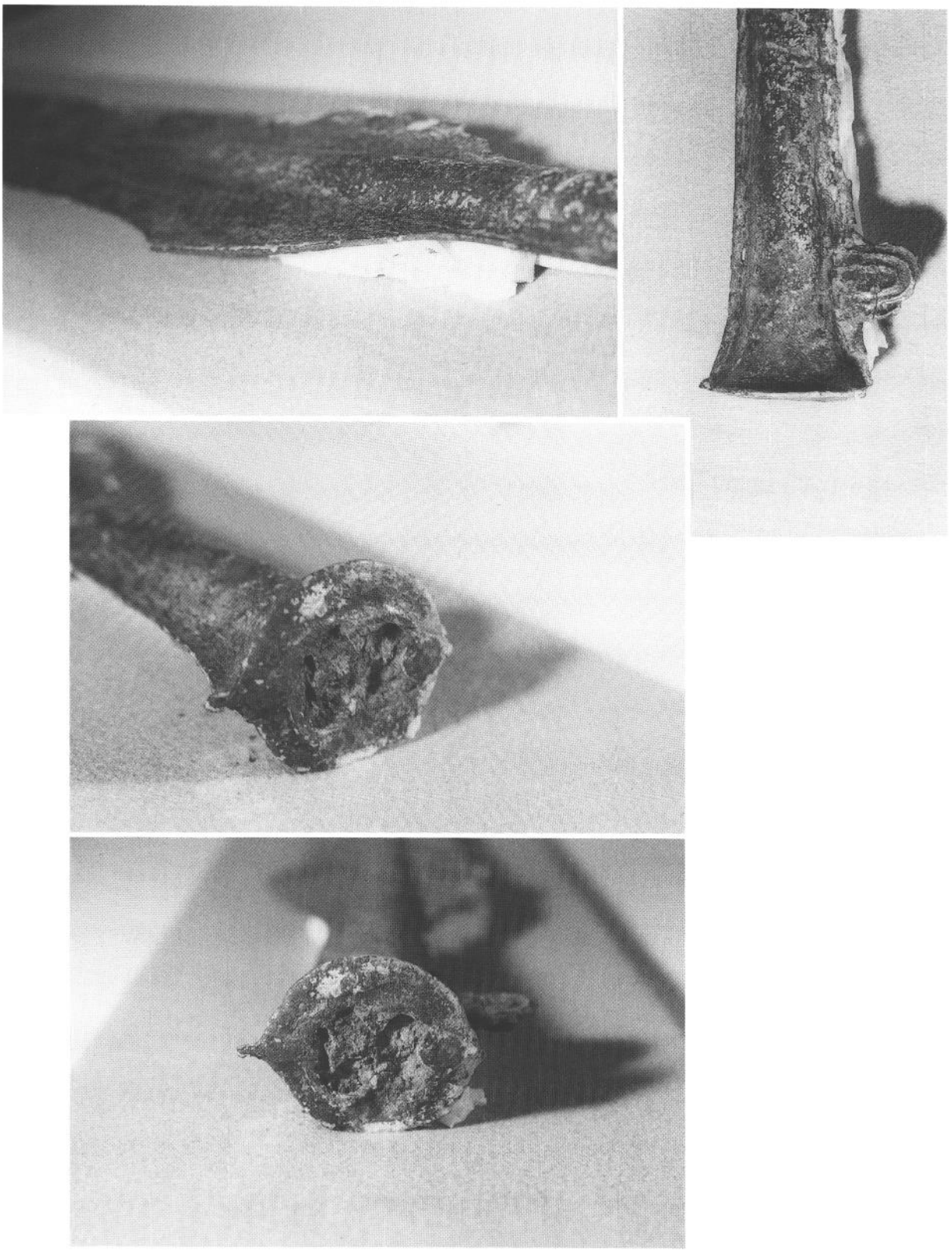
2）74号竪穴住居（古墳時代初頭、Aタイプ）

1）75号竪穴住居（古墳時代前期、Eタイプ）

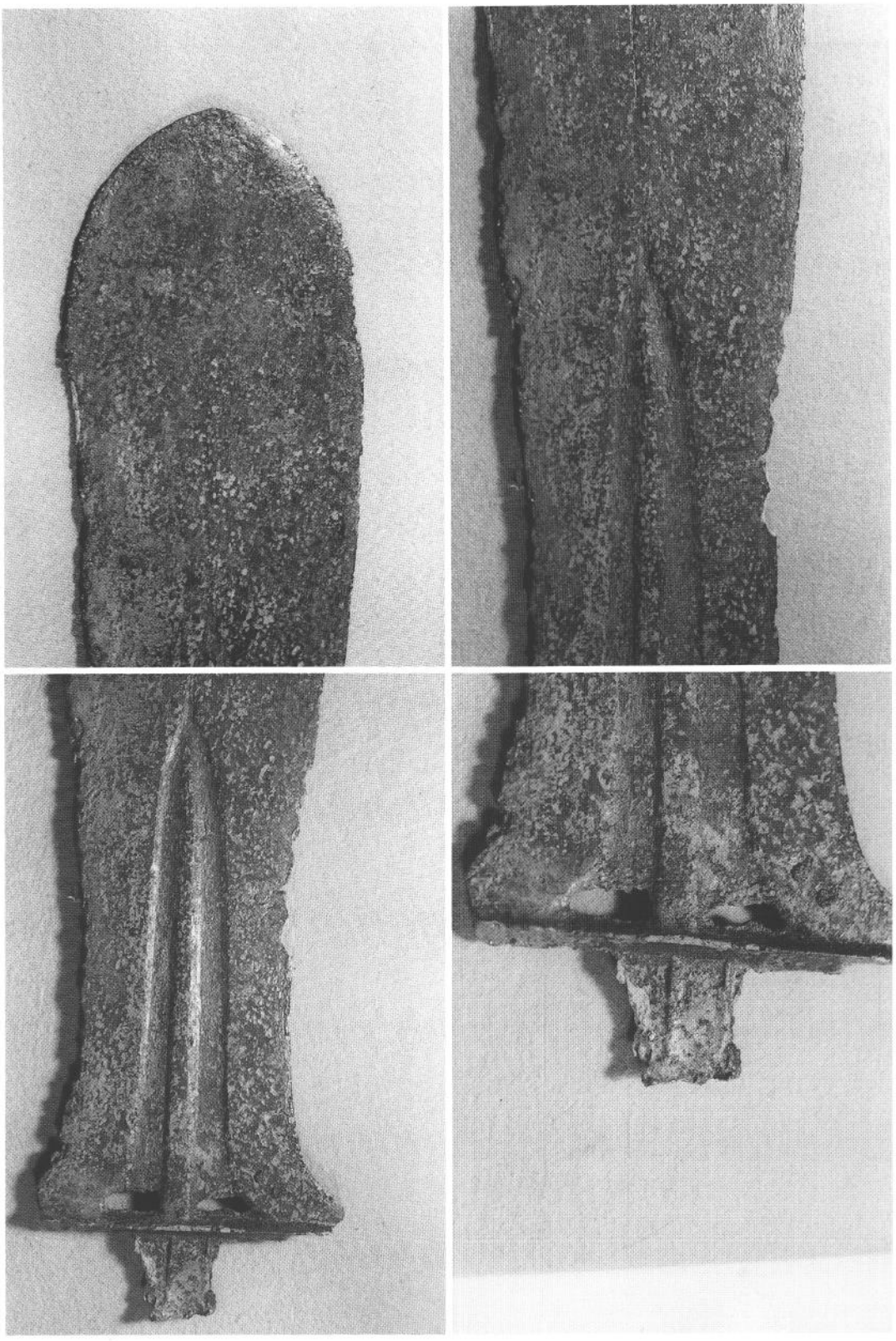
2）75号竪穴住居（カマド突出型タイプ）



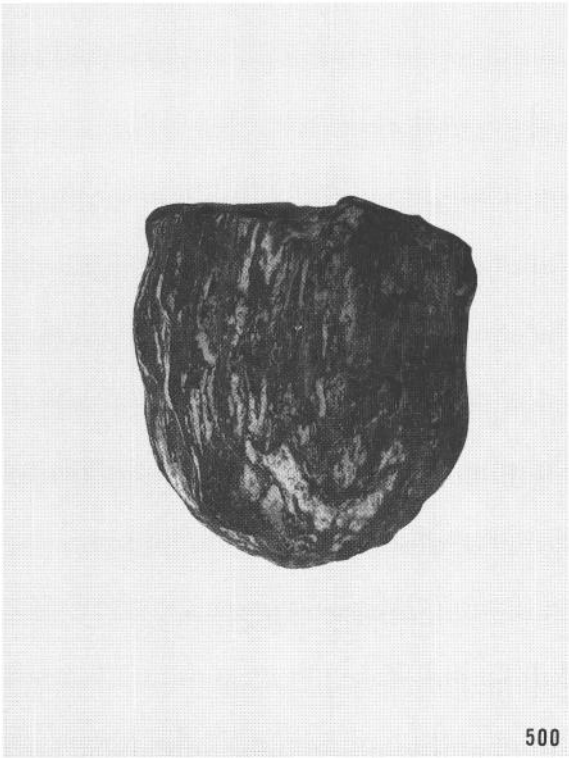
広形銅矛細部撮影

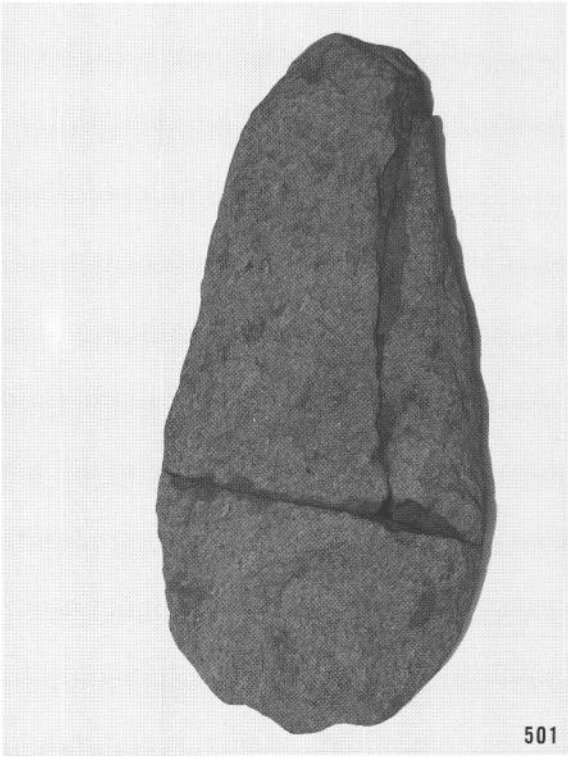


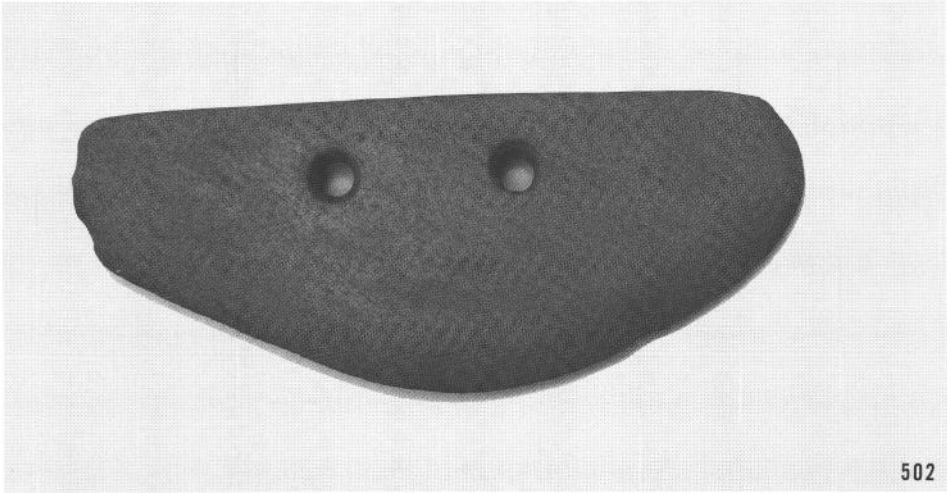
広形銅矛細部撮影

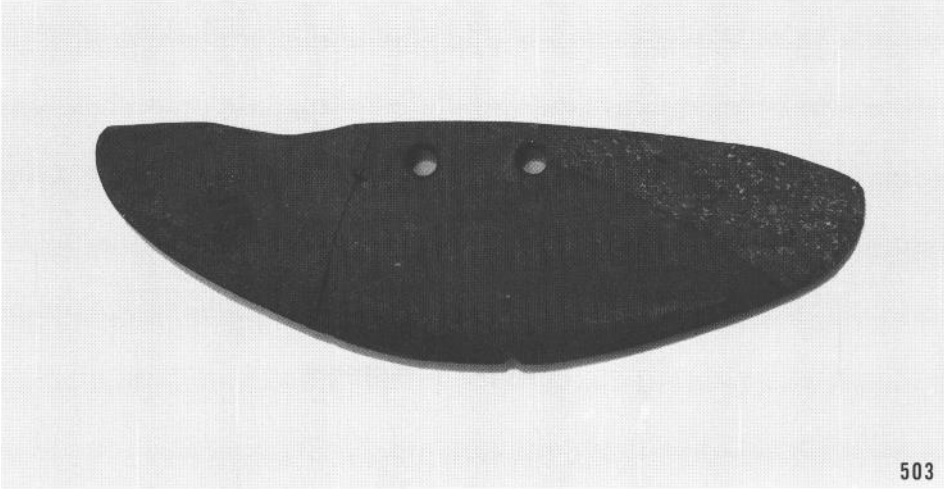


広形銅戈細部撮影

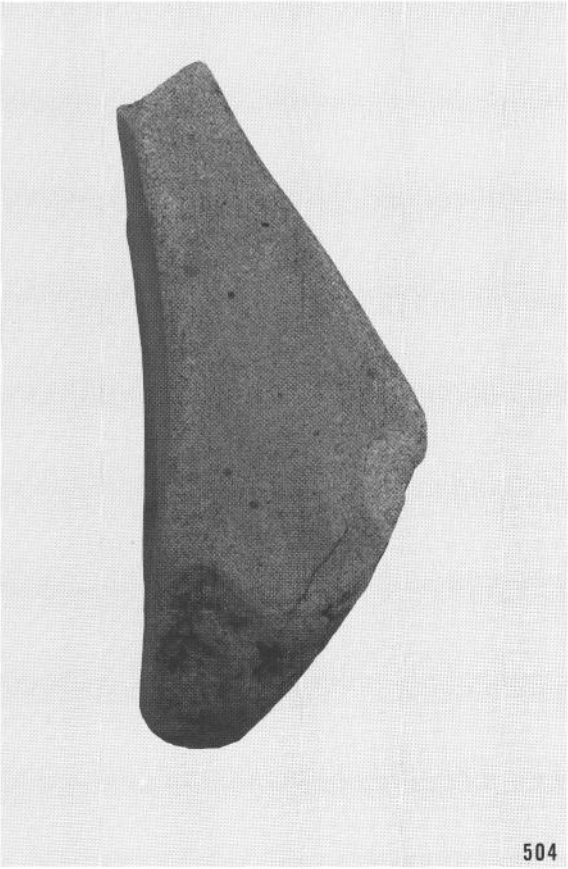

500

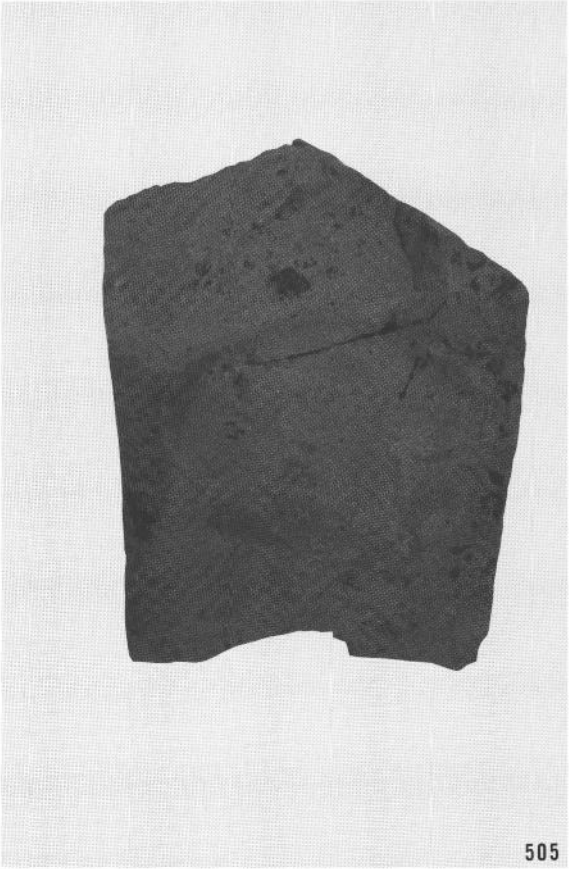

501

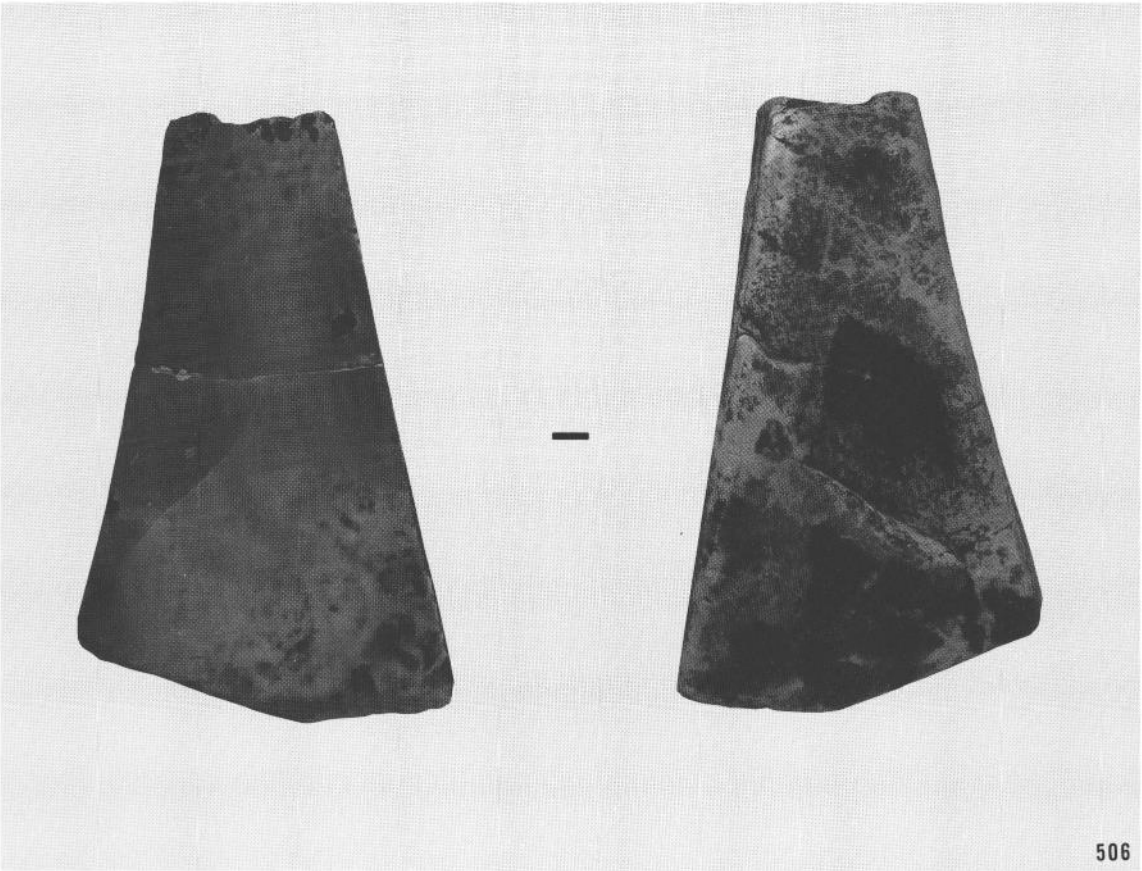

502


503

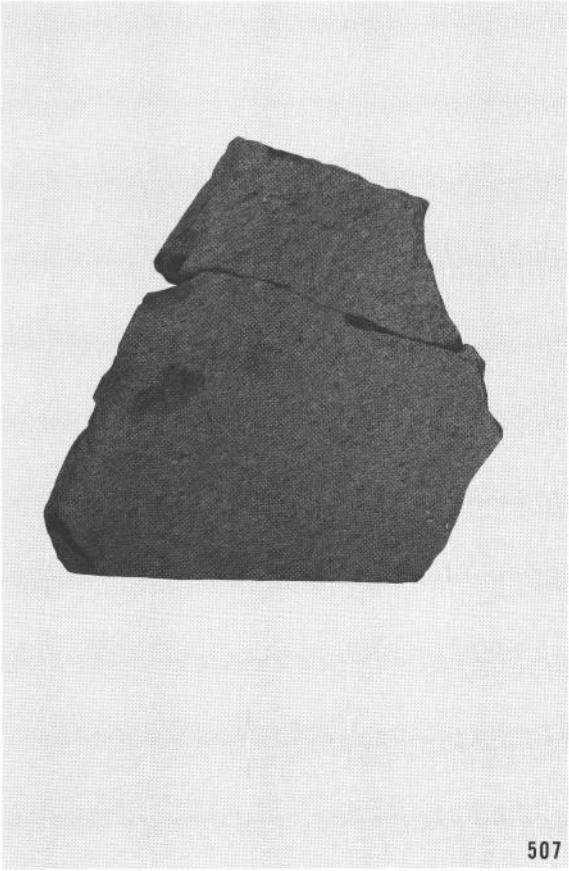
0区出土石器①

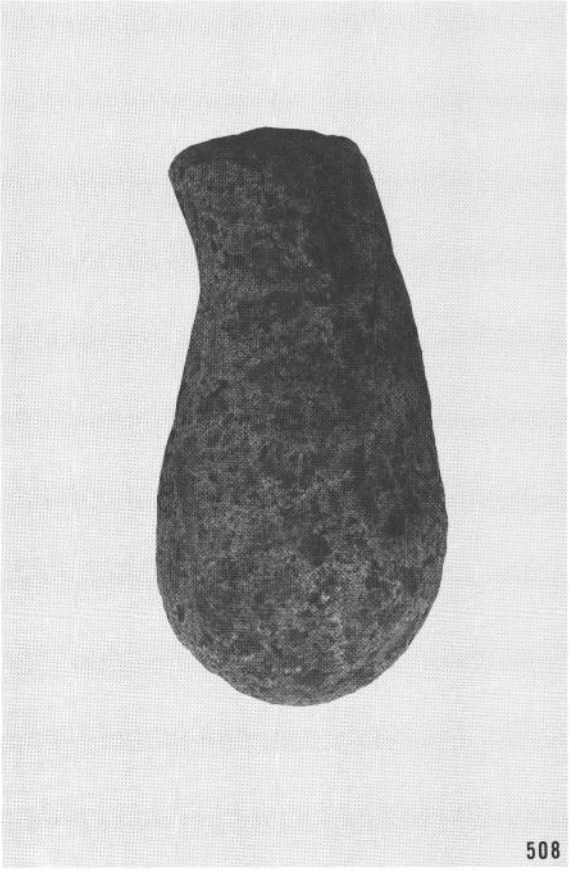


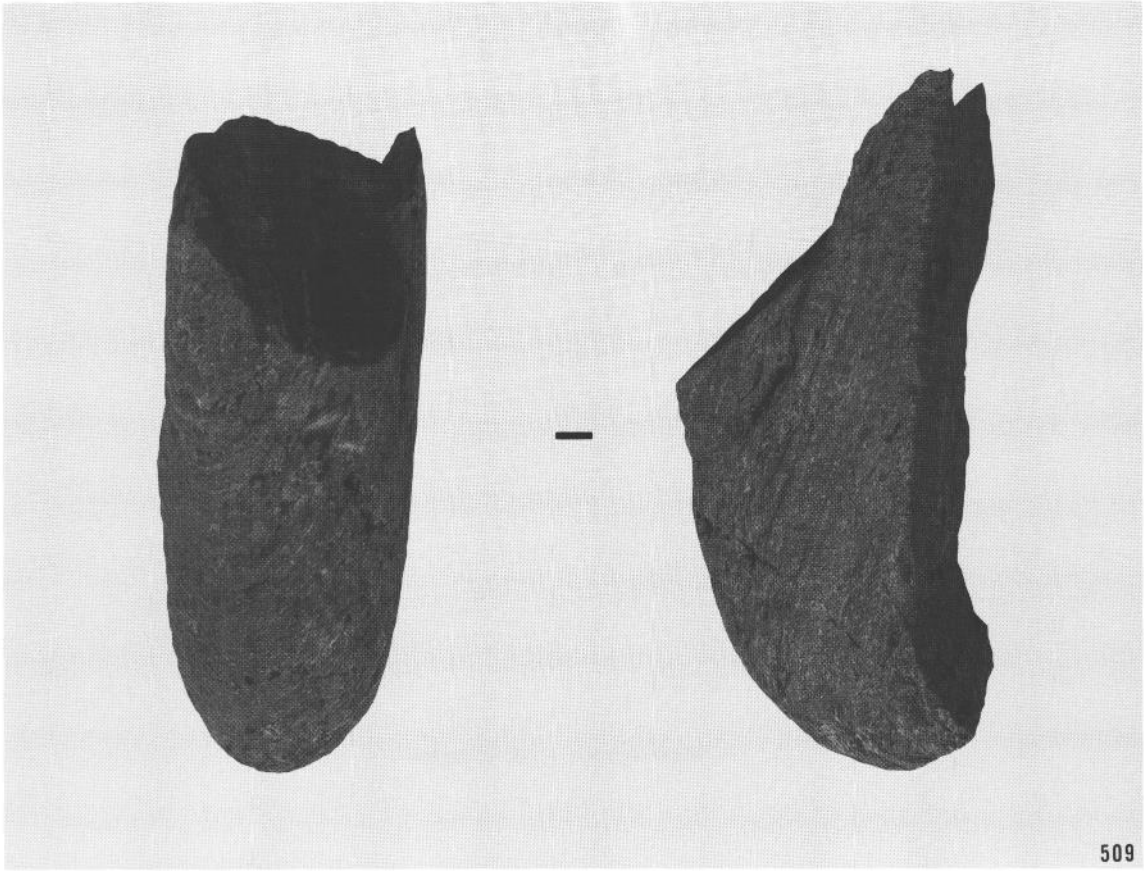




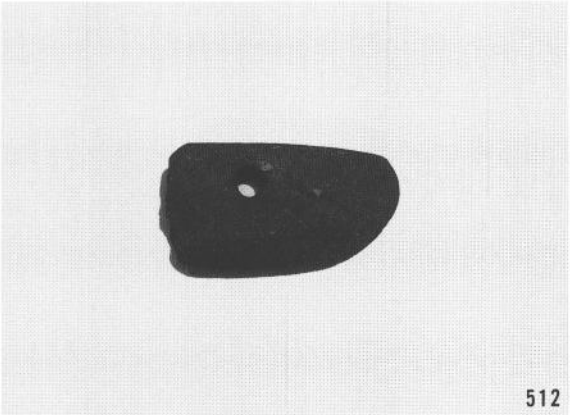
0区出土石器②

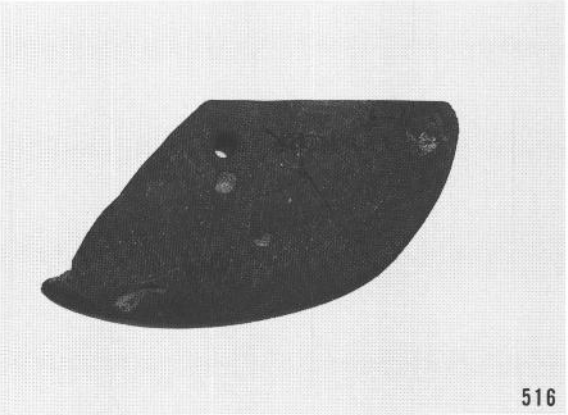


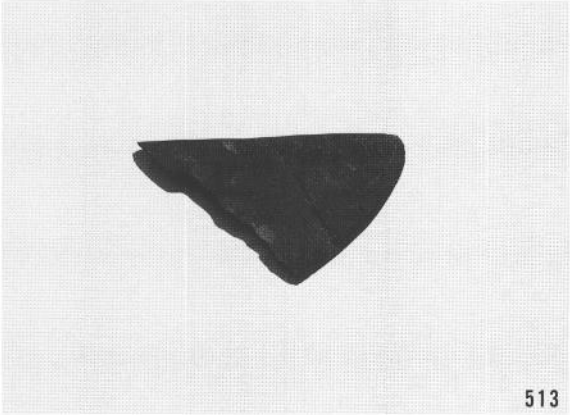


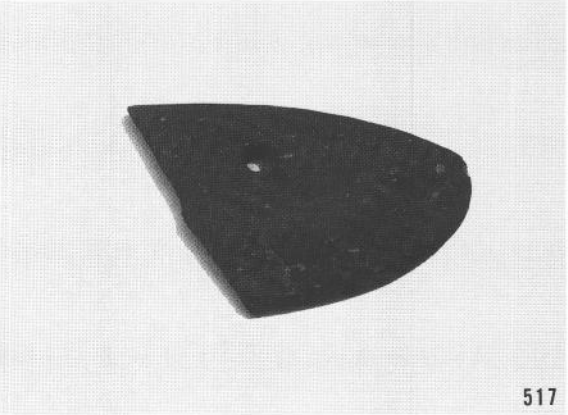


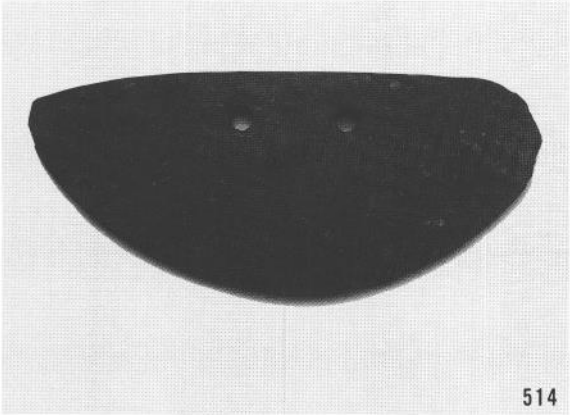
0区出土石器③

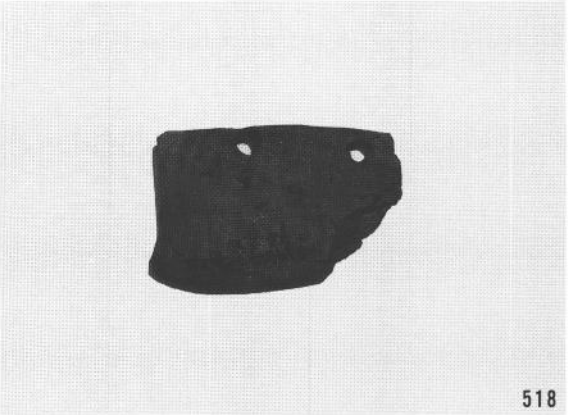


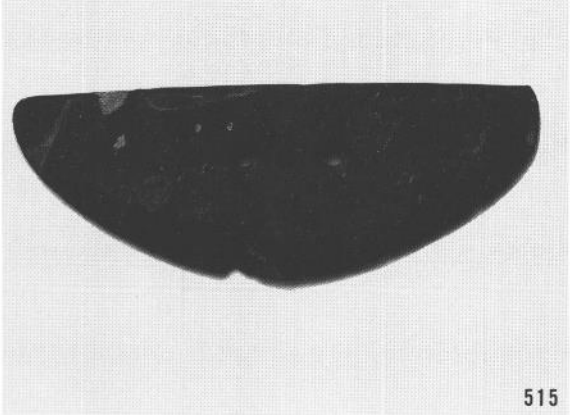


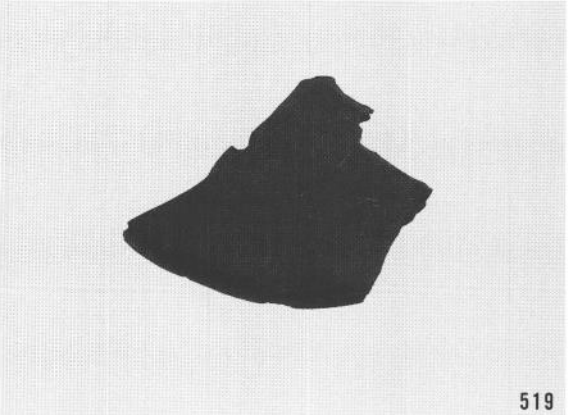




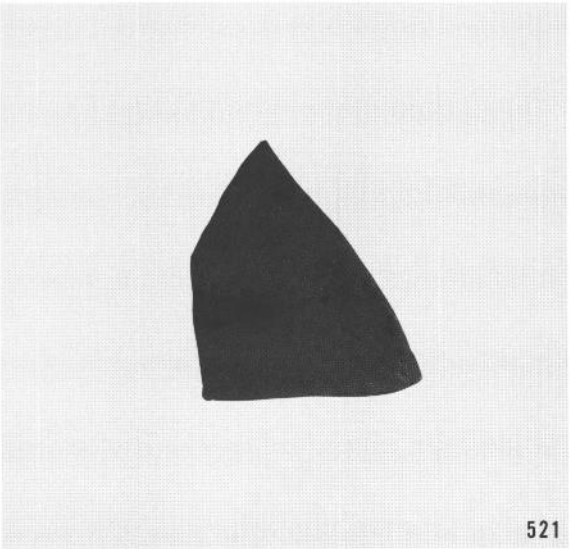


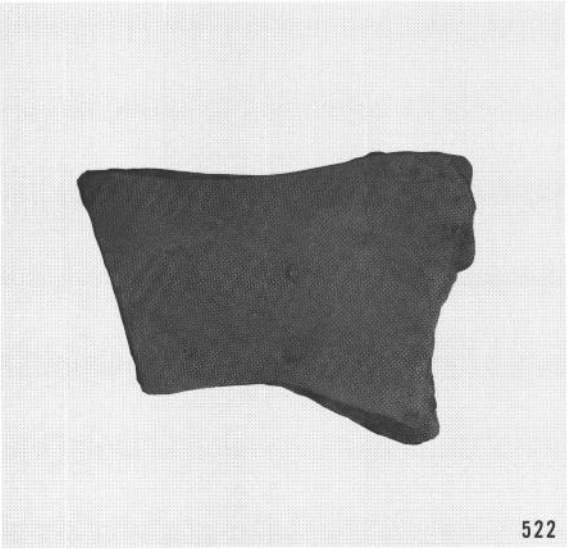


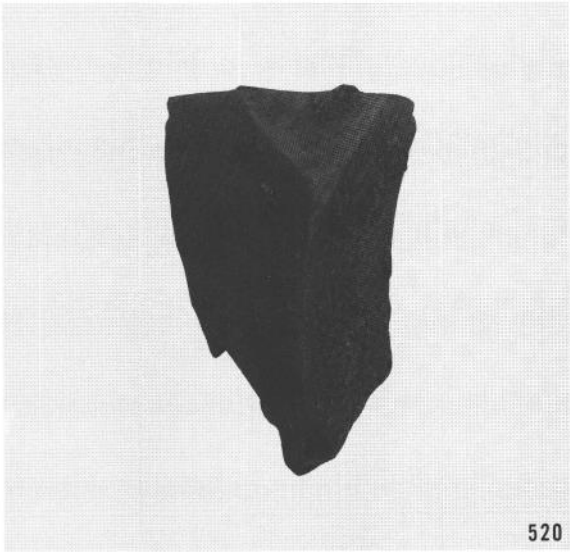


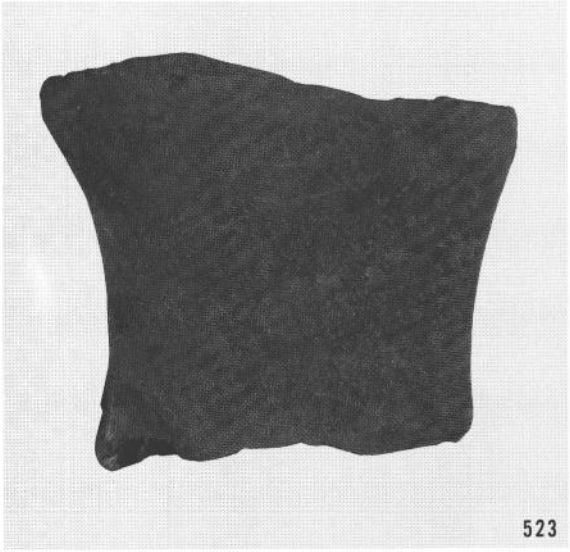


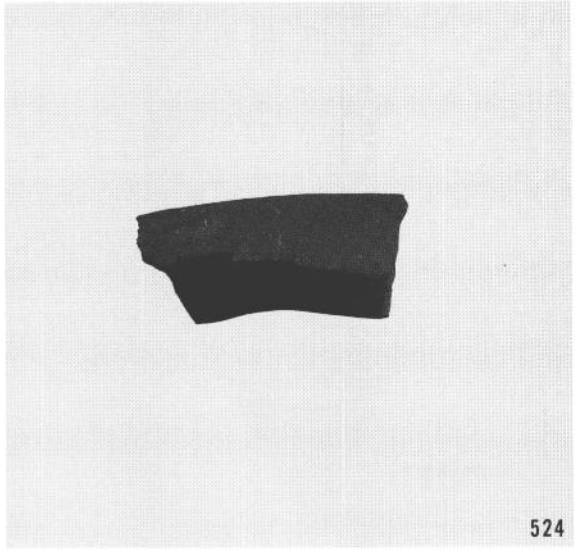
2 区出土石器①

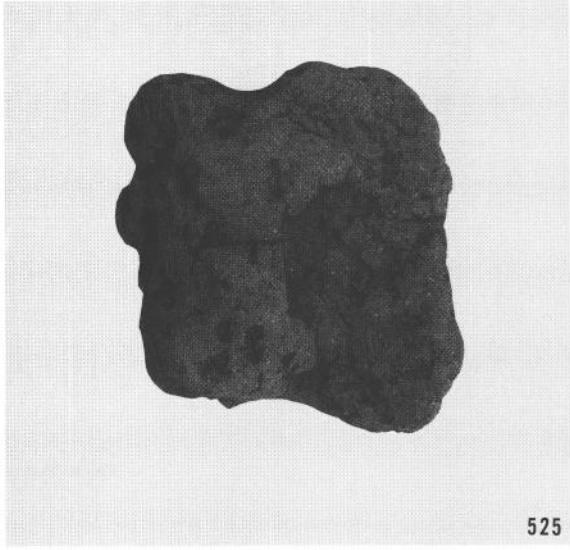




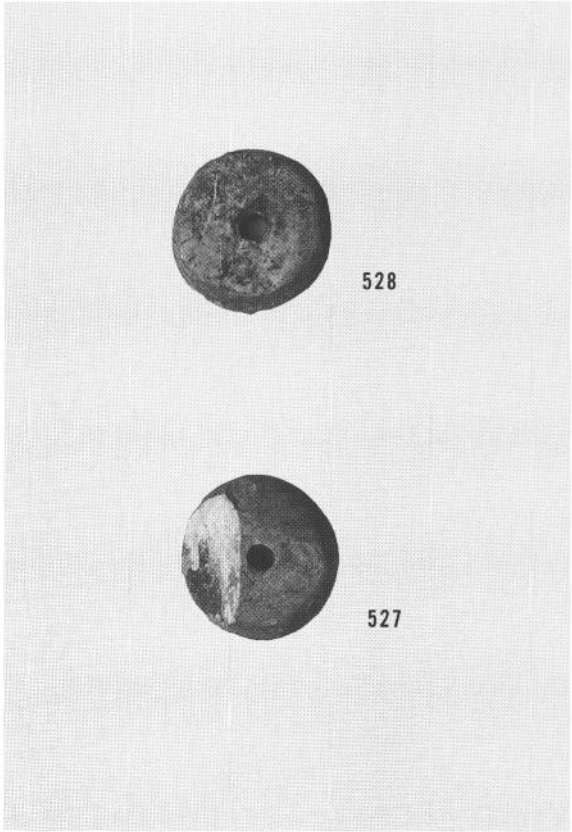


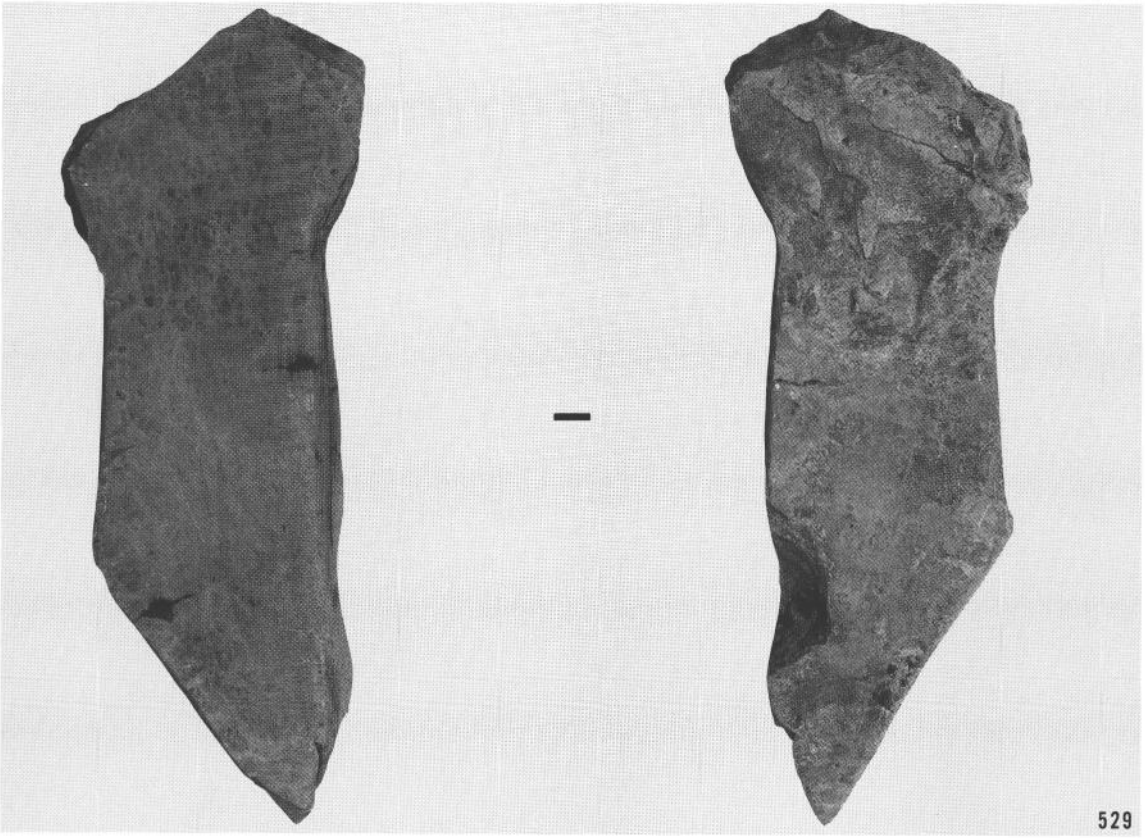




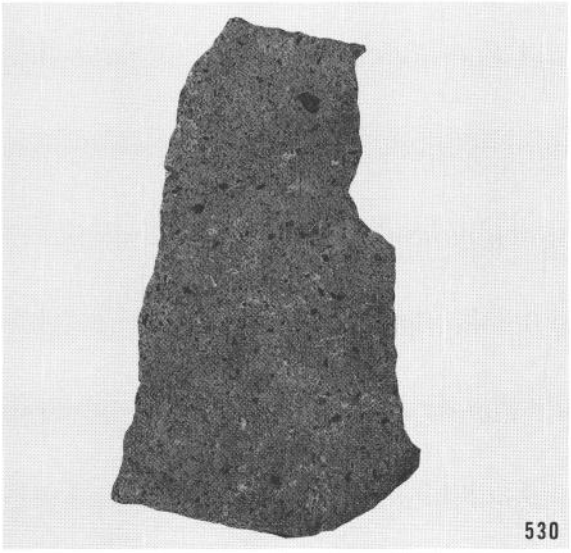


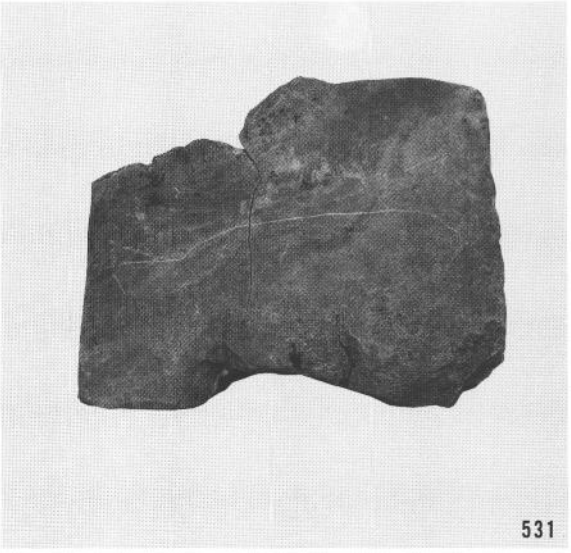
2 区出土石器②

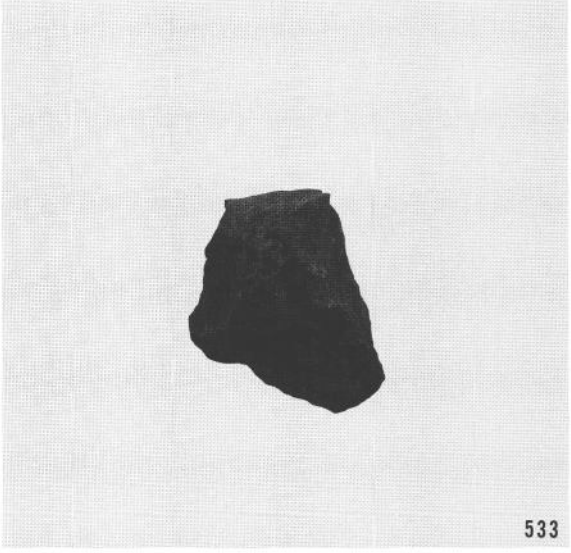


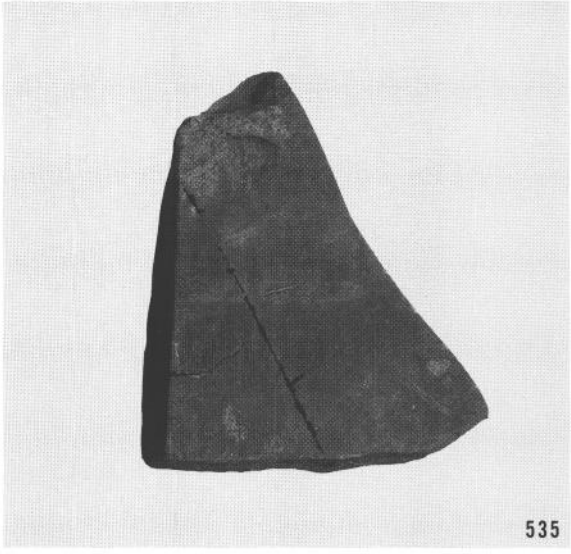


2区出土石器③・3区出土石器①

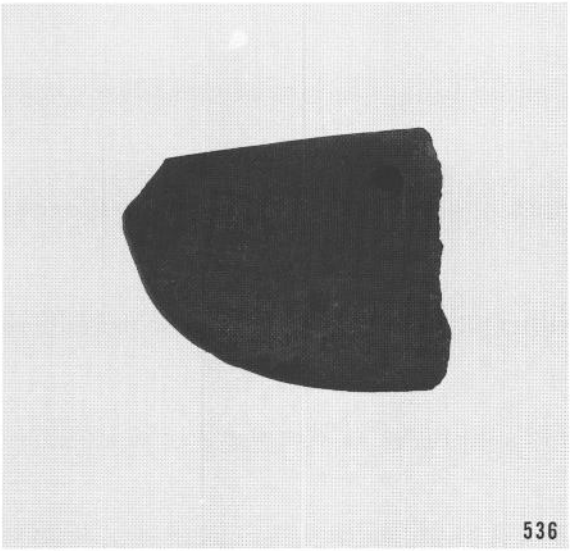


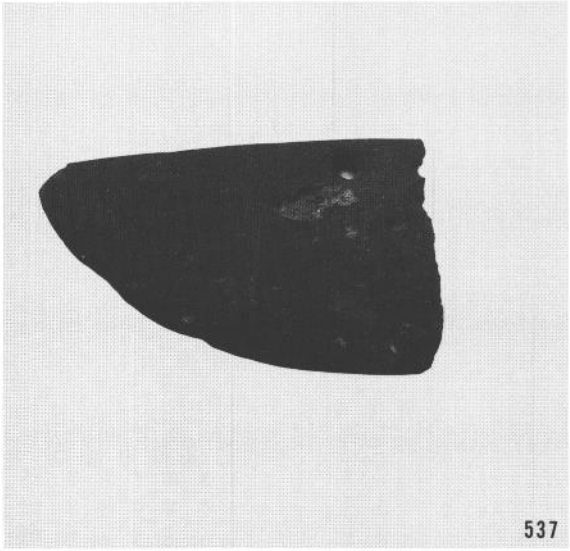


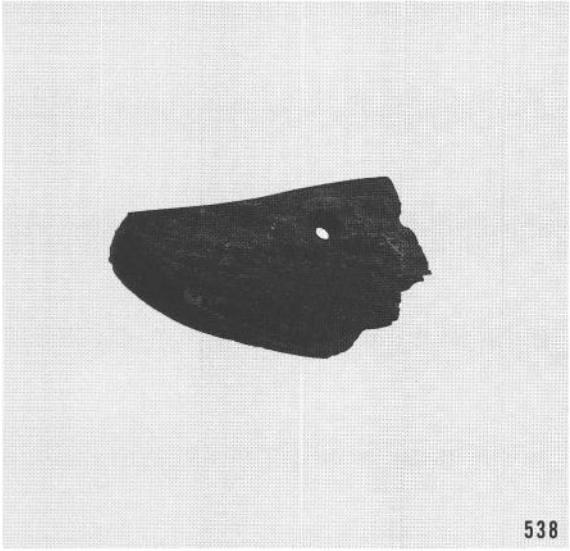


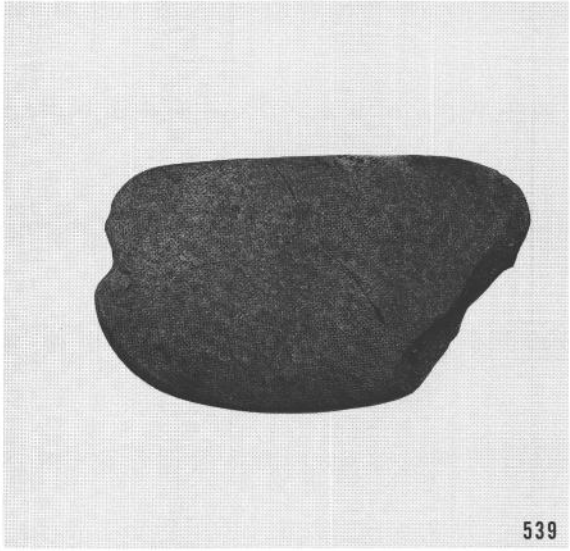


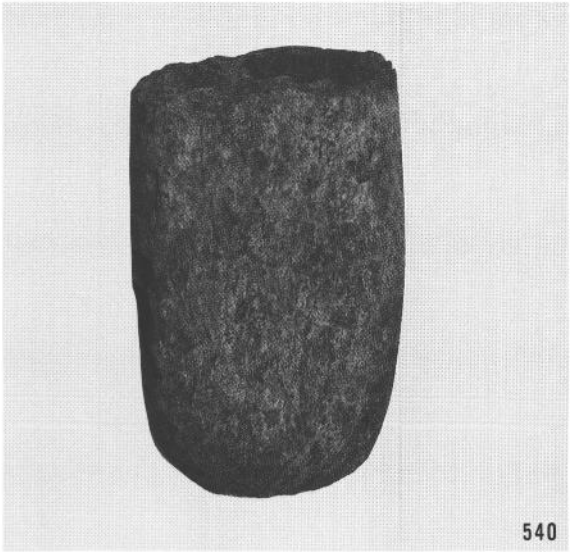
3区出土石器②・4区出土石器①

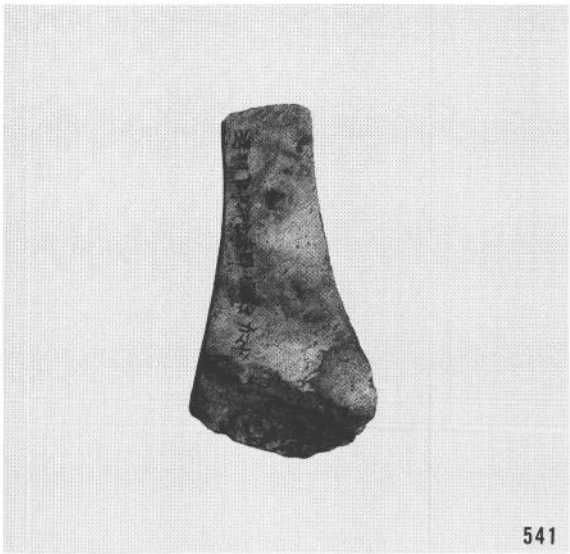

536


537


538

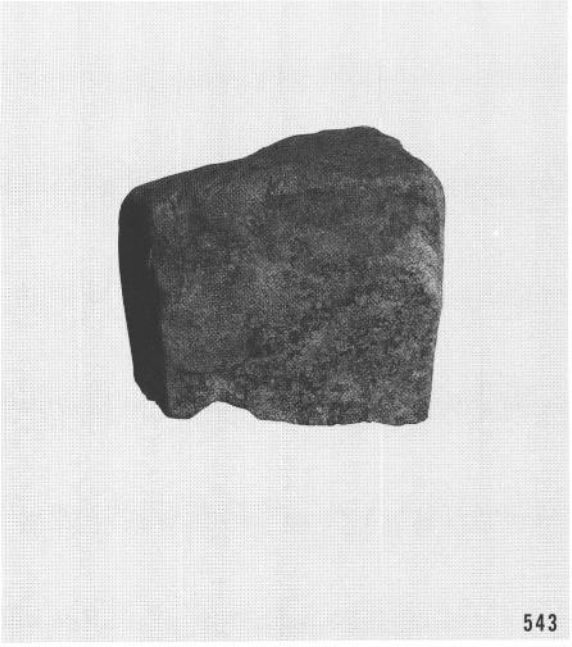

539


540

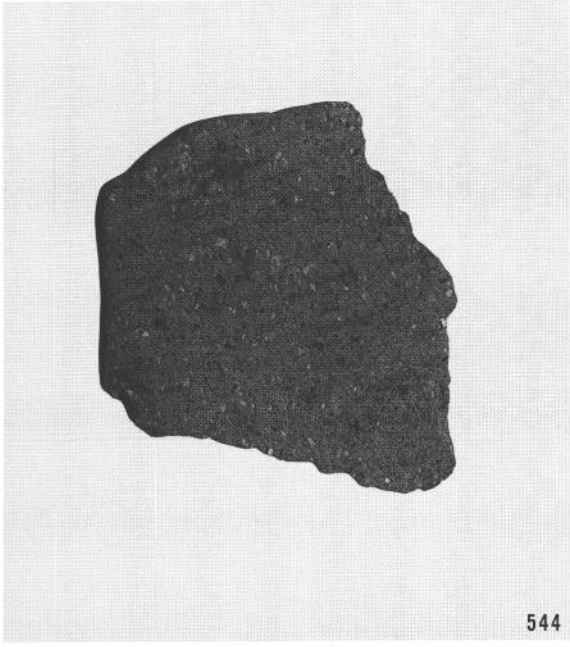

541

東部出土石器①

542

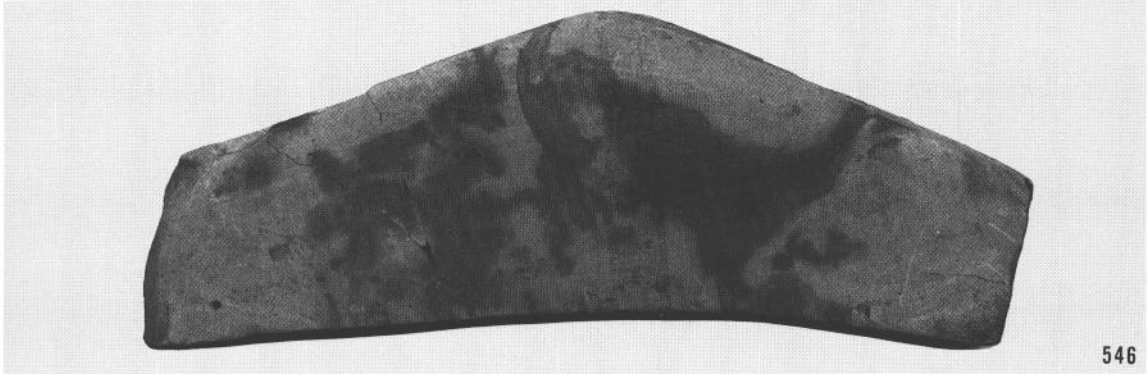


543

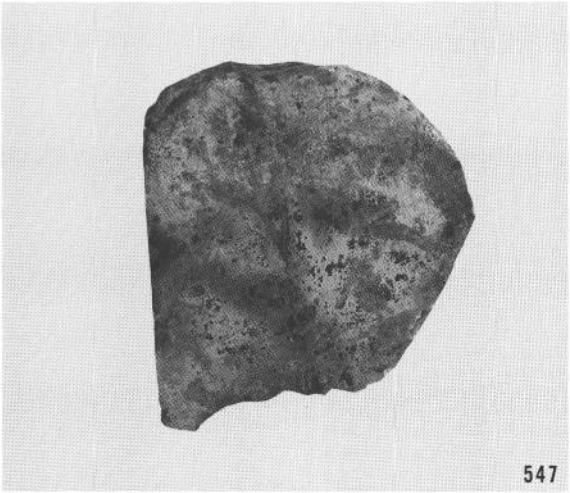


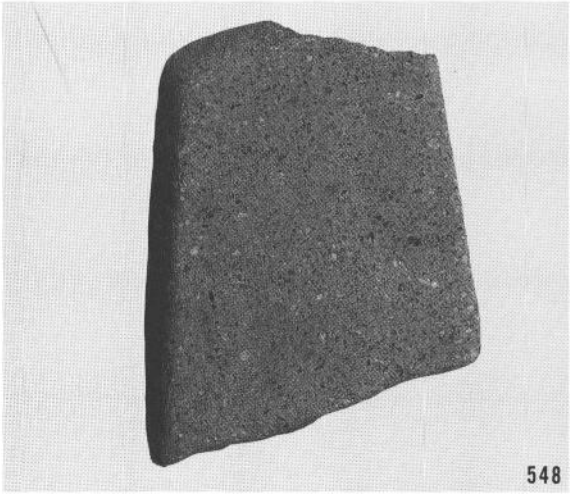
544

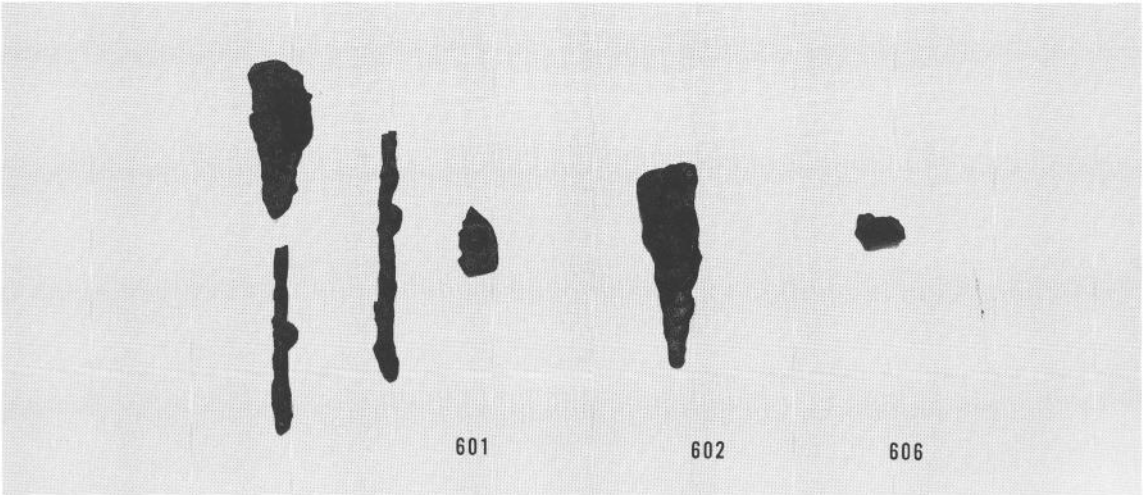
545



546







東部出土石器③・各地区出土鉄器

フリガナ	ヒナガイセキ
書名	日永遺跡II
副書名	福岡県浮羽郡浮羽町所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第7集
編集者名	緒方 泉
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒810 福岡市博多区東公園7-7
発行年月日	西暦1994年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
日永遺跡 (ヒナガイセキ)	浮羽郡 (ウキハグン) 浮羽町大字 (ウキハマチオオアザ) 日永他 (ヒナガ)					1986 09 ｜ 1986 11	15,000	バイパス 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日永遺跡		弥生～奈良	竪穴住居 掘立柱建物 土壙墓 落とし穴状遺構 銅矛・銅戈埋納遺構	弥生土器 須恵器 土師器 石器・鉄器 青銅器	広形銅矛 広形銅戈の セット埋納 遺構検出

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第7集

日永遺跡 II

1994年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　㈱チューエツ福岡工場
福岡市博多区東比恵2丁目9-1

一般国道210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告

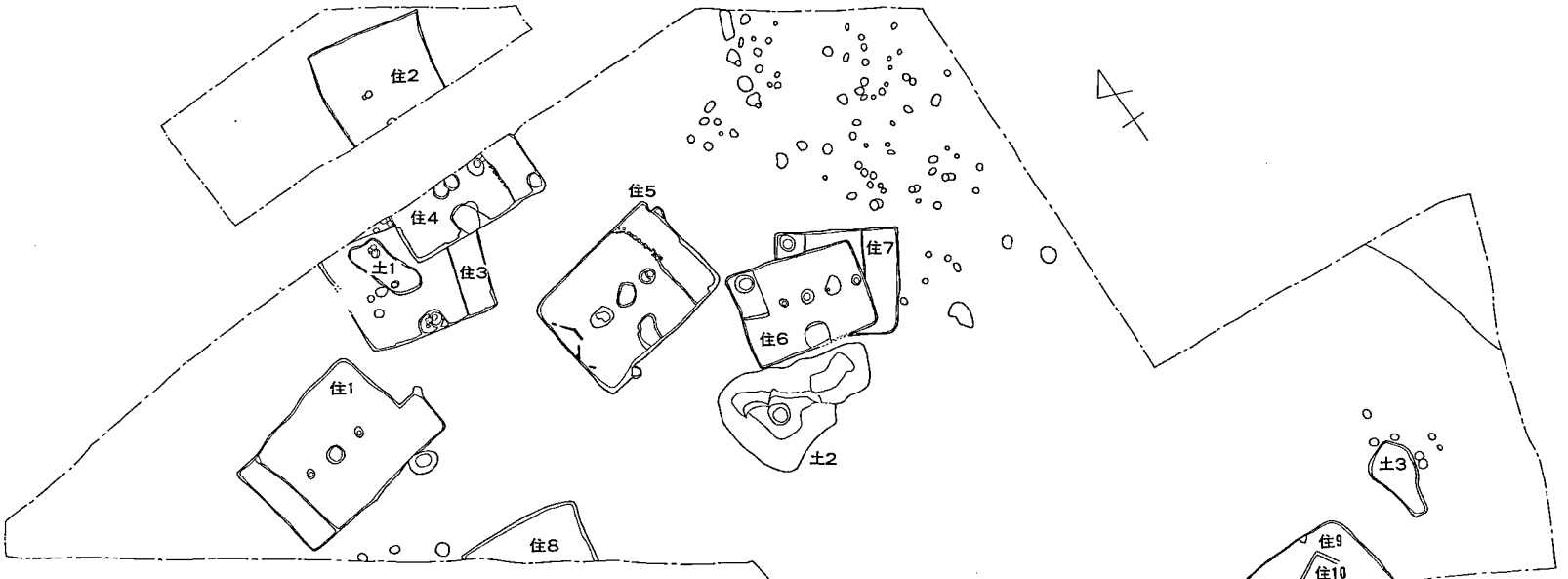
第 7 集

日　永　遺　跡　II

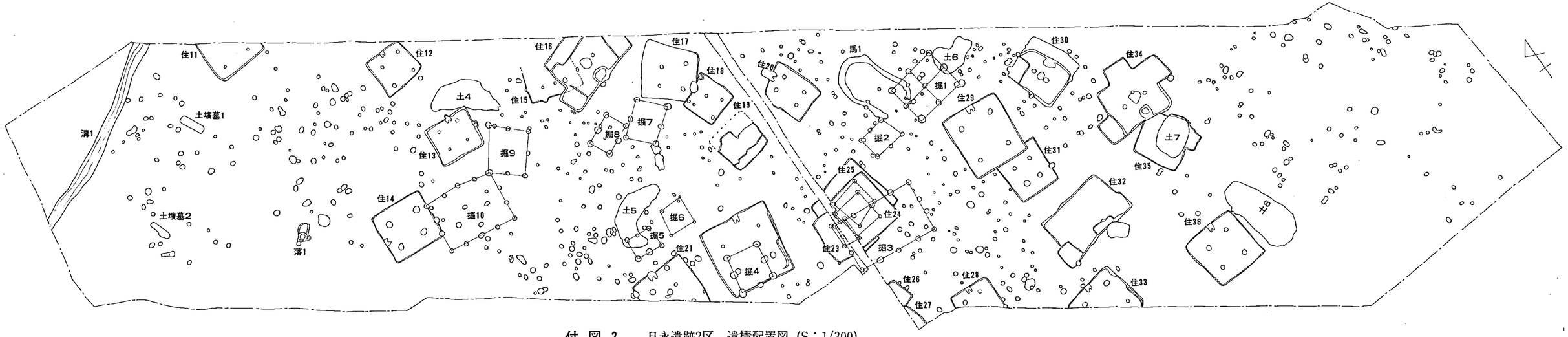
福岡県浮羽郡浮羽町所在遺跡の調査

付　図

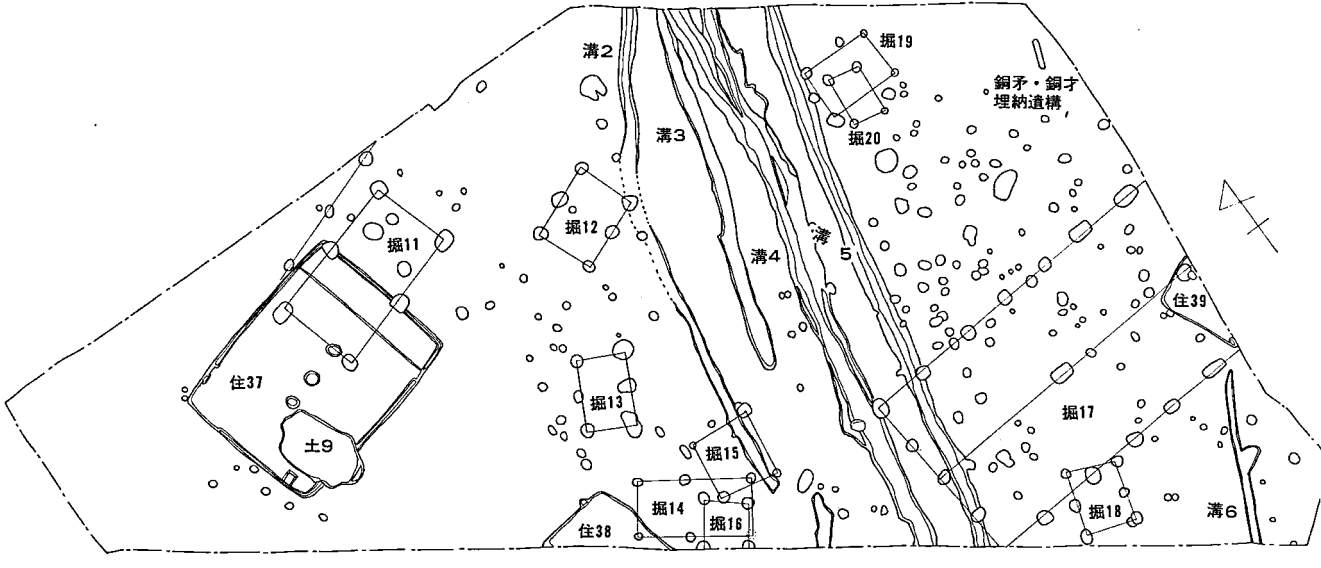
付図 1　日永遺跡 0 区遺構配置図（1/300）
付図 2　日永遺跡 2 区遺構配置図（1/300）
付図 3　日永遺跡 3 区遺構配置図（1/300）
付図 4　日永遺跡 4 区遺構配置図（1/300）
付図 5　日永遺跡東部地区遺構配置図（1/300）



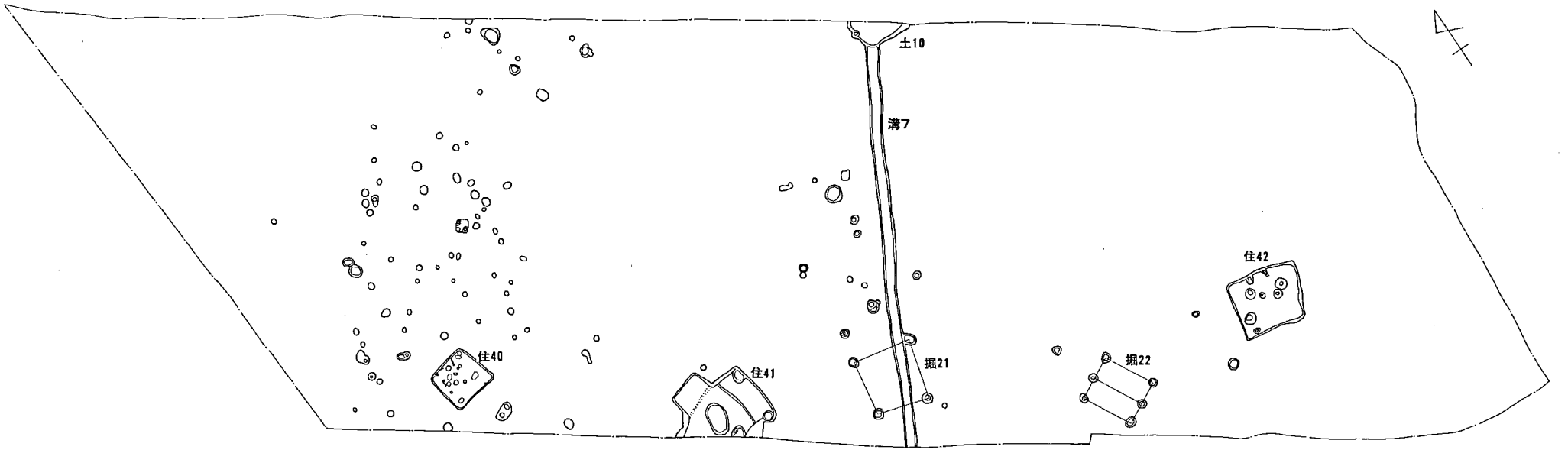
付 図 1　　日永遺跡0区　遺構配置図（S：1/300）



付 図 2　日永遺跡2区　遺構配置図（S：1/300）



付 図 3　　日永遺跡3区　遺構配置図（S：1/300）



付 図 4　　日永遺跡4区　遺構配置図（S：1/300）

付 図 5　日永遺跡　東部地区　遺構配置図（S：1/300）